

---

# 東方風神記

風月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方風神記

### 【Nコード】

N4148P

### 【作者名】

風月

### 【あらすじ】

テンプレで転生した男は弥生時代に飛ばされる。さらに妖怪と化した彼がその名の通り縦横無尽にかけまわる。

ハーレムのオリ主強キャラです。

## プロローグ（前書き）

駄作ですがよろしく願います。

## プロローグ

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

有名な小説に見られる文章の一文であるが、「眼が覚めたらそこは森の中であった」という一文も有名な話である。

転生然り、神様の不手際も然り、交通事故にあつたら何時の間にか別世界へ。

テンプレであるがよく用意される一文であるが馬鹿にはいけない。何せ自分も、今この状況に陥っているからである。

俺はここに来る前は（この場合前世というべきでなのだろうか）交通事故によって死んでいる。

それは間違いない。断言しよう。

何せ目の前にロードローラーがあつたのである。何故ロードローラーが？と思うかもしれないが俺だってなんで道路を爆走しているのかはわからない。

ただ、結果として客観的に見て自分は間違いなくしんだ。足からペツたんこ。めちゃくちゃ痛かったです。

こうして笑い話のように振舞ってはいるが冷静に考えると吐き気がしてきた。

せめて即死がよかった。

さて、それではなぜ俺は生きているのだろうかと考えた場合冒頭に戻る。

つまり、あれだ。よくある『転生』という奴なのだろう。しかも肉体記憶持ち。この状況を冷静に考えたらそう思うしかない。というかそう結論付ける終えない。

……………。

なんてこつたい。

軽くめまい。そして頭痛。こうして転生というものを味わう感動よりも「やっちまったな」という感覚のほうが強い。

盛大に溜息を吐いて周りを見渡す。

兎に角、ここは森であつておそらく別世界。この状況を生き抜くにはやはり移動して情報を集めるしかないだろう。

立ち上がり俺はその足に力を込めた。

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！急に転生したかと思っ  
たらなんと弥生時代だった！何を言っているかわけがわからねえと思  
うが俺にもさっぱりだ！タイムスリップとかそんなモンじゃねえ、  
もつと凄まじいものを味わったぜ……。

……。

え？なに？本当に弥生時代？ナンテコッタイ。

………やべ、本格的に死にたくなってきた。

あれから一日歩いて集めた情報はここが弥生時代であること、そ  
して自分が『人外』ということくらいだ。

死にたいです、安西先生……。

いや、ね？なんかこう記憶というか頭の中に浮かんできたのよ。

『あらゆる風を操る程度の能力』

なにこれ？超能力？そして強く焼き付けるように頭に残る二文字。

『妖怪』

なにこれ、ふざけてるの？ねえ、神様！これってどういふこと？  
教えて偉い人！

気が狂いそうだ……。

頭が激しく痛む。ええい！くそ、どうしたらいいって言っただ！

俺は取り敢えず考えることにした。

よし、坐禅だ！

……………。

うん、わかんネ。

取り敢えずなんか自殺しても死にそうにないので諦めて生きることにした。そんなもって丸3日考えた結果、俺が妖怪だろうとなんだろうと関係なく生き抜こうと、という結論に至った。

しかしながらなんだか精神的にやられてしまいそうなので取り敢えず『馬鹿』になることにした。

流れに身を任せて、深く考えずダラダラと生きて行こうと、そういうわけだ。

何かが起こったら取り敢えず笑う。そして馬鹿になる。

うん、人生何事も臨機応変、そして諦めが肝心だよね！

しかしながら、暇なので当分は能力使って遊ぶことにする。

気が付いたら1000年くらい経ってました。



1話「かぐや姫」(前書き)

修正しました

## 1話「かくや姫」

やあ俺の名前は風間大介。弥生時代、妖怪としてタイムスリップしちゃったお茶目な元高校生！

馬鹿になって笑いながら能力使って遊んだり、狩りしたりしたりしてなんか1000年くらい経っちゃった！

人間の環境適応能力ってスゴイね、1000年もよく気が狂わずに生きていけたよ。俺、誰か褒めて。

あ、俺は妖怪か。何の妖怪かしらんが。

さて、時は平成……ではなく奈良。710の平城の都に今はいます。

いやーここ最近では低能の人間ばかりで話もできないからさ、舞いちやってたからね。やっぱり会話できるって素晴らしいね。

弥生時代なんてひたすら壁に向かって話しかけてたりしたからさ、ハッハハ……。

……よく気が狂わずに居られたな、俺。

さてさて、都の中に居る俺だが陽気に買い物中である。ついでに都の見物。

せっかくタイムスリップしたのだから歴史というものを味わっておかないとさ、損であるし。

ああ、後伊達に1000年生きたわけではなく、なんか妖力？っていうの？『気』みたいな力が1年過ぎるたびにでかくなっていくものだからなんか陰陽師って奴らに退治されかけた。

軽くひねり潰したけど。

でもどうにも妖力放出され続けるとすぐに陰陽師が飛んでくるものだから妖力を押さえて生活することにした。

今も押さえています。

後、俺の能力も自由自在に扱えるようになった。『あらゆる風を操る程度の能力』ってやつ。

なんか、これすごい便利で凡用性がある能力で『風』と付く物は大抵操れる。勿論、風然り、嵐然り、後ちよつと特殊で『風邪』とか『神風』とか『風の噂』とかも操れる。

うん、便利すぎ。

特に風の噂は便利だ。

風と共に色々な情報が飛んでくる。まあ、『噂』だから欲しい情報とは限らないのだが、まあ便利だ。

例えば最近では病が多いとか、鬼が活発的になってきているとか。

後、風の噂では妖怪の気配とか位置とかも頑張れば特定できる。かなり狭い範囲の特定は『噂』なのでできないがまあ、感知できればすぐに逃げられるし、ラッキーだね。

そうして生きてきたわけだが、どうにも最近、暇でしようがない。

つい先月までは『風の脚』で山の中を縦横無尽に奇声を上げながら走りまわるといふストレス発散兼、暇つぶしを行っていたのだがなんか周りの妖怪たちや人間がめっちゃ警戒するようになって自重したばかりのものだから俺は今、暇でしようがない。

あ、いい忘れていたがなんか身体能力も向上しているみたい。うん、すごいね妖怪。

平城京というものは大変賑わっているようで。

あ、都の中には化け物クラスの陰陽師がいるので俺の妖力は完全に押さえている。

触れて探りを入れない限りちょっとやさっとじゃバレないだろう。

ふっ、これに5年も費やしたんだからな。バレたら死にたくなるぜ。

さて、先ほど賑わっているとかいいう風に言ったが商売等の市場が盛り上がっているわけではない。

世間を騒がすほどの美人さんがいるとかいいうのだ。

かぐや姫ですね、わかります。

取り敢えず、観に行こうと思う。

かぐや姫がどんな美人さんなのかこの目で確かめなくては。

そう思い、道びとにかぐや姫の住まいに行くところあらびっくり。人が大勢。

奈良というものはそれこそ物静かな時代である。こうして人がたくさんに集まること自体珍しい。

「ちよいと、失礼」

列を作っている最後尾に居る男に話しかけた。

「なにかな？」

「これは一体何事なのでしょうか？」

「おや、アンタ知らないのか？かぐや姫のこと」

「ええ、自分は田舎から上京した田舎者ですから……して、これは？」

「求婚だよ。この都で一番美しいと言われるかぐや姫様に皆、求婚を申し込んでいるのさ」

「はあ、それにしてもすごい数ですね、これ皆さん全員ですか？」

「まさか、これは皆主人たちの従者さ。私もその1人なのだが」

「主人？貴族の方で？」

「ああ、そうさ。最前列から阿部御主人様、大伴御行様、石上麻呂様、石作皇子様だ」

なんか、スゴイ人たちっばいですね。名前からして。

「ほえ、すごい方々がおらっしゃったものですね」

「そうだろう。それほどまでにかくや姫様が美しいというわけでもあるがな」

そんなに綺麗なのだろうか。やっぱり会いたいなー。

「私も一度謁見したいものです」

「何を、かぐや姫様は高貴なる貴族しか会わないのだ。それに貢物も必要だしな、お前のような田舎者では門前払いされるだろう」

と、豪快に笑ったので俺もおなじく頷いて笑う。

でもな、一度は見てみたいんだよ！

と、言うわけがかぐや姫のお屋敷です。

はい、思いつきり不法侵入です。だが、大丈夫。バレなければ問題がない。なにせ見られないのだから。

ふふっ完璧な作戦だぜ。某諜報員御用達の『素晴らしい紙箱』はさすがになかったが代わりにツボを用意しておいた。

自分の才能が恐ろしい……。

きちんと穴も開けたし、ここからかぐや姫をみるぜ！

コソコソ、コソコソ。

「HQQHQ、こちら風間。今屋敷に侵入した。これより偵察を行う」  
コソコソ、コソコソ。

裏門から飛んで入り、そして素早くツボをかぶった後に屋敷に侵入。そして現在渡り廊下。そして姫様の場所判らず。

「!?!」

や、やば、なんかやってきた！警備の人かな？これは壺になりきるしかない。

「俺は壺俺は壺俺は壺俺は壺……ブツブツ」

「くせ者！くせ者じゃー!」

なぜバレたし。



やっぱり時代が時代だからな！今はやっぱり忍者しょ！

ふふっ、3日間で創り上げたこの忍者服。ふっ、自分の才能が恐ろしいぜ……。

忍者服を着ていざ如何！

再びかくやの屋敷に侵入。今度は夜だ。あの時は昼に侵入したからな、それにダンボールじゃなかったし、だからバレたんだ。

屋根の上を音を立てずに歩き、そして屋敷内に侵入。

……………。

未だ誰にも気づかれず、『風の音』で足音とかもろもろ消しているのがバレはしない。バレたらバレたですぐ逃げられるしね。

やべ、本当に俺、忍者になれるんじゃね。

さて、肝心なかくや姫であるが俺としてはちょっと見られればいいので別に会うつもりなんてさらさらない。

ちょっと見てすぐ帰ろう。

そうして見つけたかくや姫。

部屋の障子は開いてぼんやりと月を見ている。

やべーよ、あれやべーよ。マジで美人過ぎるのではないか？

彼女自身もそうであるが、なんといっても秀囲気がすごい。魔性の魅力を感じるといっつか、彼女一つ一つの動作が綺麗に見える。

なるほど、平城京が騒ぐほどの綺麗さである。

眼福を味わっていると、彼女がそつとため息を吐いた。

なにか悩みごとかな？と首をかしげると何か呟いている様子。風に乗せてそつと音をこちらに送り込む。

「まったく、毎度毎度あのエロ爺共の相手は辛いわねー。早く昇天してくれないかしら」

おいー！かくや姫！

思わずズルリとひっくり返る。木の上から見ていたために盛大に転ぶとそのまま地に伏した。

痛みに顔を歪ませるがそれどころじゃない。

「誰!？」

おびえるような、また威嚇するような張り詰めた声に思わず俺は

叫びたくなる。

バレた！い、いやまだ姿は見られてないはずだ！

このままだとバレるので古風から伝わるあの秘術を使う。

「にゃー」

まるつきり裏声。されど猫の鳴き声に懸命に似せた声は風に乗せてかぐやの元へはつきりと伝えた。

「なんだ、猫か……」

嘆息するように声に出すかぐや姫。俺は冷や汗を掻いてそれを拭う。

危ない危ない。もう少しでバレる

「それにしても、変な猫の鳴き声ね。まるで男が一生懸命それに似せたような音みたいだったわ」

ズルリ。

………………。バレてんじゃん。

「くせ者！くせ者よー！」

再び絶叫。されどその声は高い。ええい！こつなればもう逃げるしかないだろう！

俺はすかさず反転、風の脚で思いつきり跳躍しようと試みた。しかし、それよりも先に矢が飛んでくる。前回の侵入でめっぽう警戒されていたのか、何十人という警備兵が集まり、そして矢を放ってくる。

しかも相当な腕だ。

しかし、矢自体は風を交えればすぐにその機能を失うから大したことは。

「!?!」

なっ、こいつら風を切ってきたがった!どんだけ腕がなんだよ。

いや、まて、退魔の匂いが……。

おそらくは陰陽に通じるものがあるのか、それにあれか『噂』は本当であったか。どうやらこいつらは帝直々の兵士らしい。

腕が立つし陰陽師もいるし、ああー面倒くさい。

風の脚で一気に跳躍。屋敷の外へ出ようと試みる。

「け、結界!?!」

対応早すぎだろ、マジで。

なんだしかも、この退魔戦用の札は!?!なんでこんなにも準備がいいんだよ。

今は妖力を抑えているのでちょっと力を出せばすぐにでも出られるだろう。だが、ここは幾つも妖力が流れる森や山ではない。竹に囲まれると言っても都の近くだ。

こんな所で強めの妖力だしてみろ、何十、何百という陰陽師が妖力察知してやってくる。負けはしないが果てしなく面倒だし、なによりもう都に遊びにいけない。

仕方無しに俺は地に降りた。幸い、黒装束の忍者衣装なので目以外は覆われている。顔はバレる心配はない。

こういう類の結界は術者を気絶させれば一発だ。如何に弓矢の名手や退魔に通ずる陰陽師が何人いようとこれくらいの妖力でもすぐに倒すことができる。

伊達に1000年生きてはいない。

あ、言うておくけど、俺は人は殺めないよ？そりゃガチでやれば殺っちゃうけど曲がりなりにも元人間ですから。妖怪は人を食べるものだが、食いたくもないし。

「放てー！」

一斉発射。すぐさまに風の脚。そいつらの懐に飛び込んでCCC。

妖力の扱いだけでは無く、知り合いにちょっとした体術を教えてもらったのでそれも極めた。

後はゲームのパクリとかね。実際応用性高いよ。

モノのの3分も経たずに殲滅完了。あ、殺めてないよ。気絶させただけだよ。

陰陽師とか接近戦に至ってはカカシも同然だからな、楽勝だったよ。帝の兵も弓矢装備だったからな、剣を抜けさずにあっさりと。

「さて」

ゆらりと振り返る。

そこには呆然と立つかぐや姫。そして、その視線が俺に向けられた時、ハツと我に返ると護衛用の短刀を抜いて構えた。意外だな、逃げるかと思っただが。

「わ、私をどうする気、さ、攫うの？妖怪」

「鬼じゃあるまいし、別にそんなことはしないさ」

クルリと踵を返して壁を確認、ふむ、まだ結界は取れてないな。なんでだろう。

「じゃ、どうするのよ……ま、まさか私を食べる気じゃ」

「まさか」

瞬時にかぐやの後ろに移動する。かぐや姫が過剰に反応して間合いをとった。だが、焦ってその身に包む服に脚を取られて転ぶ。

「上がらせて貰っぜ」

「ちよ、ちよつと！」

ふむ、札自体は陰陽師を倒せばいけると思ったがどうにも触媒で動かすタイプらしいな。札と術式を組んで念じるだけで遠隔操作できるタイプだ。

最近、安倍派の陰陽師が創り上げた代物だと聞いている。もちろん『噂』である。

すると厄介だな。術式自体はその術者が気絶してもある一定の間であれば発動し続けるし、それに妖怪は完全に閉じ込められる。人間は通れるが。

妖力偽って靈力をだせばな、結界自体を騙せるんだが……。まあ、そんなことは当然無理なわけで。第一、そんなことしても騙せるわけがないか。

「ふーむ、無いなー」

「な、何よ。金目の物ならここには無いわよ」

「いやいや、それも興味ないから」

普通に狩りしていれば空腹を満たされるし、それを売れば結構な金にはなる。正直金に困ることなどない。

「それにしても、やっぱり質素な部屋だな」

正直、なんかスゴイ疑われているとか、怖がられているので場をなごますために俺は声を陽気にさせて言う。と、言うかそんなに怖

いなら逃げればいいのに。

そんな声に唾然としたのか、かぐや姫が言葉を詰まらせる。

ふむ、まあいいや。世間話をしに来たわけじゃないし。

「ここにはないかー。なんか匂うんだけどなー」

結界の霊力使ってきたがどうにもこの部屋にはない。

探していないのは下着入れとか服入れとかだが流石にそこは手がつけられない。

「な、なに探してるの……？」

暫くの沈黙後に、かぐや姫がそう尋ねてきた。

「お札。術式組んで結界張るタイプのやつ。それを崩せば出られる」  
言いながら、風の噂を聞く。今の妖力なんて普通の人間が持つ微量の霊力ぐらだからな安倍清明が飛んでくることは心配ないのだが、一応。

ふむ、なんか爺さんと婆さんがこっちに向かってきてるな。大方心配してきてきているのだろう。お優しい方だ。

増援の心配なし、ふむ。だが困った。術式なんてモノすぐに見つかる。。

「……まてよ」



振り返ってかぐや姫を見る。突然の視線に身を強ばらせたがそんなの気にしない。

「匂っな」

「え、え？」

「動くなよ」

言の葉を風に乗せる。1000年も生きていると言霊の類も操れるようになった。言の葉を妖力の風に乗せて直接脳に聞かせるものだが。

「！」

ビクッと身体を硬直させる。だんだんとその顔が蒼白になっていた。元から白いが。

そうつと割れ物でも扱うかのようにかぐや姫に手を伸ばす。だが、触れる直前に弾かれた。

「ちっ」

「え、え、え？」

軽く舌打ち。「面倒だな。」

「おい、かぐや姫」

「な、なによ」

「脱げ」

かぐや姫の顔が青く、そして白くなった。

今日一番に蒼白となるかぐや姫。

「い、いや！嫌よ！嫌！だ、誰か！誰か助けてー！」

……。

あ、俺、言い方ってもんがあるじゃん！つい、あまりの面倒くささにイラついてぶっきらぼうになっちゃった！

変態か、俺は変態なのか。

「かぐや！」

そこへ颯爽と現れる爺さんと婆さん。ああ、ややこしいことに…

「お爺様！お婆様！」

泣き面を見せるかぐや姫におろおると、だが優しく包みこむ2人。そして爺さんが顔を上げて慈悲の声を上げた。

「どうか妖怪様！金目の物はすべて差し上げます！差し上げますから！どうか、どうかそれだけはご勘弁を！」

あーまる聞こえだったのね。

深々とため息を吐いて、俺は顔を歪める。ナンテコッタイ。これ、完璧誤解されてるよ。

いや、まあ誤解されるような事を言ったのだけれども。

「いや、あの、だからね」

「嫌よ嫌！お爺様！助けて！」

「どうか、どうかご勘弁を！ご慈悲を！」

話にもならん。

取り敢えず、取り乱して話を聞き入れてもらえないために俺は3人を黙らせることにした。

「黙れ」

風を乗せて放つ言葉は威圧。強硬手段になるし、下手したらもつとややこしくなるケド聞き入れてもらえないんじゃ、ね。どうにもならん。

ピタリと声が止みガクガクと震える3人。

うん、ご免ね。

「俺は、言っておくが別にかぐや姫を取って食うとか、床を共にさせるとか、そういうのは一切ない！おーけー？」

「……」

あ、少し震えが止まった。

「あ、あの、それじゃ」

「金目の物は一切要らない。ただ順を追って説明すると斯く斯く云々なの。だから、その札がかぐや姫のその服に組み込まれているのではないかと思ってるわけ。それで、『今』の俺じゃ触れることもできないから、かぐや姫に脱いでもらおうと思ったの！」

一気に捲くし立てるが、当然風を乗せることも怠らない。

暫くの沈黙の後に3人が脱力して、ゆっくりと安堵のため息を漏

らした。

「で、いい？脱いでもらっても」

「え、ええいいわ」

「よろしくね、俺はあっち向いてるから！」

クルリと後ろを向く。そんな俺の様子にかぐや姫はクスリと笑った。

「ほい、これでよし。サンキューな」

衣服に張り付いていた札を取ると周りを覆っていた結界も消える。

一旦かぐやから札が離れればかぐやの周りに張ってある結界も取れる。後はすぐ剥がせばいいだけだ。

しかしながらかなり手だれた陰陽師もいるものだな。

しかも展開のはやさ。術式結界なんて予め術式組んでいてもそう易々と張れるものじゃ。

「おい」

「は、はいなんでしょう」

「ここ最近妖怪とか来たりしたか？」

「え、ええ。鬼であったり天狗であったりかぐやを攫い嫁にしよう  
と……」

軽くため息。

だからか、そりゃ、何回も妖怪が来てればその対応が早くなるわけだ。

さてさて、長居は無用である。気絶させただけなのでいつ目が覚ますかわかったものじゃないし、それに陰陽師が来ても厄介だ。

「じゃ、俺はそろそろ帰らせてもらっぜ。……色々すまなかった」

いや、ホントマジでゴメン。

何か言いたそうにしていたが二度頷いた。

「本当はかぐや姫を一目見ようと思っていただけだったんだがな……」

「え？」

「いや、なんでもない」

トントンと、足を鳴らして軽く風を纏う。

「それじゃ、達者でなかぐや姫」

俺はその場から離れ、そして軽く手を上げた。

## 2話「月人襲来」

かぐや姫の家に侵入者が入り、帝の直の兵士たちが無力化されたことに腹を立て、さらに心配した帝がさらなる警備を送ったことにより平城京はちょっとした騒ぎになっていた。

陰陽師の証言により、妖怪ということになってはいるがそれがどのような形、顔であったかは未だ明かされていない。

まあ、バレないように頑張ったんだけどね。

さてさて、噂では見事に玉砕した5人の貴族様たちの話で持ちきりである。帝も断られたというし、やはりあれか。月に帰るからとかかな？

まあ、当時のかぐや姫の気持ちなんてわかりはしないし、それにとってもいい話である。

……と、思っていたんだがな！。

如何せん、かぐや姫とは何かと縁があるらしく。



「月が綺麗ですねー」

「……」

何故か、どうして、かぐや姫と月見酒を飲んでいるのか。

キツカケは他愛もないことからである。

5人を振ったと聞かやいなや、俺はすぐにかぐや姫の所へ飛んだ。  
理由は簡単、暇だから。

こちらら1000年も生き抜くためには兎に角命云々よりも如何に暇を潰せるかが大事になってくるのだ。

暇は最大の毒とは良く言ったもので、もうだいたいぶ妖力を自由に扱うことに長けるようになった俺は暇を潰す物ならなんだってやる。

退屈で死にそうなのだ。

「やあ」

「きゃ」

叫び声を風の音で消し去り、慌てて人差し指を立てる。

「な、何しに来たのよ」

「おまえさん、5人の偉い貴族を振ったそうじゃないか。噂では無理難題を押し付けたそうで」

「別にどうでもいいじゃない」

「いやあ、ね。貴族様の求婚だぜ？外から見てみれば都の女たちに喧嘩売っているようなもんだぜ？」

この時代はどうにも玉の輿を狙っている女性が多い。純粹に純愛を望む乙女も居るのだろうが、ただ、時代の風習というか流れというか。貴族社会だからどうしても金や地位を取りたがる人のほうが圧倒的に多い。

ひもじい思いをする人が多いからな。顔が立てばすぐに都に飛ぶくらいだ。

この時代、かぐや姫みたいに厚化粧もしないでその神秘さを纏い、そして純白な肌や整った顔立ちが珍しい。

俺が居た頃と比べたらえらく味付けも薄いし肉もあまり食べない。

山菜、魚。もしくは粟などを食す傾向にあるために痩せほけている女性や、ましてや風呂の習慣もないために小汚いのが多い。

貴族なんかよく風呂には入るが一般人が風呂なんて当時は贅沢物だったからな。

水風呂で済ませるのが大概だ。

この時代からも肌に対する美容の薬やパック？なんかもあったが果たして実用性があるかどうかすら妖しい。

それは兎に角。

かくや姫はおそらくこの時代で一番美しい。それは認める。

だが、一方でその存在がああ帝さえも手駒にするという『噂』が絶えない。

それは5人を振ったのは事実であるし、無理難題を押し付けて、恥を掻かせたのも事実。

『噂』ではあの藤原が自殺したらしい。

そういったことも含めて、俺は再び何故振ったのかと聞いた。

「実際、お前さんは帝が夢中になっているから石は飛ばんが野次は飛んでる。男は『いとうつくし』で通るかもしれんが、女から見たらそれはもう、憎悪の対象にしかならないってことだ。5人の中で

誰かを受け入れていけば、違ったかもしれないが。お前さんは今、そういう目で見られているんだぜ？」

少々説教じみたことかもしれないが、これは単に世間話として受け取ってくれ、と後で言葉にすると、かぐや姫は月を見ながらぼんやりとつぶやいた。

「私は……月人なのよ」

知っています。なにせかぐや姫ですから。

「ふむ……それで？あ、俺も頂くぜ」

お酒を拝借。

チラリと俺を見る。月人について何も言わなかったのが何か触ったのだろうか？

「……私はもうすぐ月に帰るの　いえ連行されるわ」

「連行、とな？」

「私は罪人。蓬莱の薬を飲んで不老不死になり、地上の穢れに触れたからこつちに落とされたの。その罪の期間が終われば月に返還よ」

「……月人云々を置いておいて、だ。罪の一環として落とされた理由はなんだ？」

「此処がひどく穢れた場所だから、要はあれね。地獄みたいなのころって感じているのよ。あっちの人々は」

「酷い言いようだな。……まあ、いい。して『連行』とは？お前さんも、向こうには帰りたいんだろ？」

そう言つと静かに俯きその綺麗な両手で酒を包んだ。

「いやよ。向こうには帰りたくない。私は、此処が好きなの。お爺さんも好きだし、お婆さんも好き。こつちじゃ求婚、求婚つて変な輩がよってくるけど。私、ここまで優しく温かい場所なんて知らなかったから……ここが凄く気持ちいいの」

そつと静かに心境を話すかぐや姫は、それはそれは美しかった。

「私、ずっと親や周りの人々から言いなりにされて、それこそ人形みたいに生きてきた。でも、お爺さんとお婆さんはとっても優しく、ちよつと意地悪に我儘言つてもすぐに答えてくれた。すつごく、2人には感謝しているわ」

此処は温かかったの。私が思うよりも。

そう言葉を繋げて優しく微笑む。それはもう天使のようで一瞬、ほんの一瞬だが1000年の間腐りかけていた理性が反応した。

可愛らしい、綺麗だ。

思わず惚れてしまいそうであは思わず笑つた。誤魔化すように笑う俺に怪訝そうな顔をした後にぶっきらぼつに口にする。

「私つたら馬鹿みたいね。あんたみたいない妖怪に話したつてなんにも起きやしないのに」

拳句には馬鹿にされた。

プイッと頬をふくらませる。かぐや姫。

いやあ、悪い悪い。

「その月人って奴の拒否することは？私は一生ここに暮らします！  
って」

「無理よ。きつと私は拘束具を着せられて船で連れて行かれるわ。

……それに、こんな話誰も信じないわよ」

「おや、さてそいつはどうだろうか？」

俺は立ち上がり、そして振り向いてかぐや姫を見た。

「さつきみたいに切実に、キチンと話しをすれば信じてもらえるぜ。  
少なくとも、俺はお前のことを信じる」

一瞬、驚いたような顔を見せて、すぐにかぐや姫の顔に笑顔が宿  
る。

「……あんたって本当に変な妖怪よね」

「なんだと、変に事書いて変とはなんだ」

「そこまで言っていないわよ……ま、話しては見るわ。……どつせ、  
無駄だろうと思うけれど」

最後の言葉はむしろ眩きで、俺は怪訝そうに顔を歪めた。

「おいおい、ちょっとは信じてやれよ」

「そうじゃ、ないわ。うん、あの2人なら信じて貰えるし、帝だつて信じるわよ」

なにせ、私が言った言葉なんだからね。

「それじゃ」

「きつと帝は何百という自分の兵を出して私を守らせる。でもね、月人の前では無力だわ」

「……そんなに強いのかい。月人って奴らは」

「次元が違いすぎるのよ。文明の発達なんて比べ物にもならないわ。貴方、空を飛ぶ船や、一瞬で鉛が何十発も出て相手の生命を奪い取る兵器や、まばゆく光線をだして肉を断ち切る兵器を想像できる？」

……どこの未来兵器だ。

てか、月人って俺らレベル……いや、それ以上の文明を持っているのか？恐るべし。

「……ちよいと、想像できないな」

うん、できそうにない。

「でしょうね。弓なんてあれに比べたら玩具同然よ……そんな兵器

を持った奴らと戦おうと言つたよ。無理に決まっているわ」

「へえ、そうかい」

言ってから俺は天を仰ぐ。そして、軽く辺りを見渡しして風を送り込む。

ふむ、そろそろマズイな。

「へえ、そうかいって……アンタね……」

「まあ、同じ酒を飲んだ仲だ。アンタが残りたいって言うなら協力はするがね」

言いながら足に風を送り込んで形成する。

「ま、何かあったら言いなさいな。すぐに風は飛んでくるから。人が来そうなもんでね。そろそろお暇させてもらつよ」

「あつ、ちよつと！」

かぐや姫が何か言いたそうだったが、流石に長居しすぎた。人の気配も来るのもそうだが、同じ場所に留まり続けるのはマズイ。いくら微量の妖力だと言っても同じ場所に留まり続けた場合妖力が貯まりやすい。

そうした後を陰陽師に辿られるのは面倒なものがある。

一気に風の脚でその場を離れた。



そうして、風間が去った月明かりの下。かぐや姫がそっと呟く。

「あんたが思っておるほど月人は強いのよ」

それに、あんた妖力少ないじゃない。

その後、様子を見に来たお爺さんとお婆さんにかぐや姫は月に帰らなければならぬことを告げた。

眺めるのは一種の異常の光景。それを現実と思うことすら困難な話であろう。しかしながら、これは事実。

ま、妖怪云々自体、相当なもんだけどもね。

俺は遠くから光りを照らす空飛ぶ車？を見ながら嘆息した。

その光の下には帝の兵たち。特殊な光に心奪われたかのように動かない。やがて、月人と呼ばれる異世界人が屋敷の中に入り、かぐや姫を連れてくる。

なるほど、まさしく連行ですな。

何やら一言二言爺さんと話して、何かの薬を預ける。恐らくは不死の薬。

天の羽衣と噂される拘束具を着せられて車に乗るかぐや姫。

「結局かいな……」

こちらら完全の部外者……でもなくはないがなにせあいつの一言がないと動けんしな。

まあ、最後まで見届けてやろうかね。

脱力し、次第に気すらも墮とした兵たちを尻目に、木の上に出て空を見上げる。

あ、そうそう。どうでもいいかもしれないけど、俺、飛べるようになりました。

妖怪ってスゴイよねー。

ってそんな場合じゃなく。

尚、光を照らしながら飛翔していく車を見ながら俺は何もつぶやくことなくそっと見送る　　箒だった。

「え……？」

呟いて、俺は目を丸くする。飛翔した箒の車が速度を落としていくではないか。なにか、なんか忘れ物か？

だが、明らかな蛇足運転。終には地上に墜落してしまった。

「おいおい、冗談じゃねえぞ」

何事なのか、と俺は風を送るがよく判らない。

別に千里眼ってわけじゃないので、たまにこつこつ判らないこともあるし、見えないときもある。

ぼやけているときもあるので期待はしていなかったが……。

(助けて……)

そつと送られてくる弱々しい音。風の音色が美しい。こんな音を奏でるのは彼女しかいないわけで。

俺はニツと笑って一気に空を蹴って空を翔けた。

私の我儘で\*\*が月人を殺して車の主導権を奪ったまではよかった。けれど突如機能が停止されて気がつけば墜落した。

何故か。

人気を感じてみれば\*\*と私の周りに兵士たちが囲むようにしている。

「姫様、八意様。何故このような反逆行為を為さるのです。いくら2人として死刑行為ですぞ」

「……うるさいわね！もう貴方達の人形なんて御免なのよ！」

一斉に銃が構えられる。私は一瞬その威圧故に肩を震わせるがそれでも口を下がらない。\*\*がそつと私の前に出てくれたからこそ言える。

「私はここに住むわ！貴方達が思っているほど地上人は愚かでも穢れてもいない！」

「……姫様。今なら間に合います。ご同行を」

「うっさい！死ねハゲ！」

「……残念な御方だ　構え！」

それが精一杯。やはり、一斉に命を奪う物を向けられて身が竦む。死にはしない。だがやはり痛みもあるし、なにより肉片となったまま連行されるのは嫌だ。

御免ね。\*\*。私の我儘で……。

そう思ったときにふとあいつの顔、言葉が思い出された。

『ま、何かあったら言いなさいな。すぐに風は飛んでくるから』

(助けて……！)

きつと無駄だろうが、あいつなら本当に来そうな気がする。

月人の武器の前ではいくら妖怪でも手も足もでないだろうが、それでも何かやってくれそうで私は願った。

(助けてよ……！)

「やーryーはい。呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！風の大魔王だよ！」なんだ！誰だ！」

そうして願った矢先に、風と共に本当に現れたのだから、私は嬉しく、そして何よりも驚いた。

ふむ。思いつきりピンチですな。

2人の内1人がぐや姫だろう。もう一人は誰かな？知り合い？まあどうでもいいかな。

問題なのはそれを囲む奴らか。

「誰だ！？貴様！？」

「だから、風の大魔王だと……って今回はふざけている場合じゃないか」

ゴホン、と咳をして。今回ばかりはマジメに答えよう。状況が状況だしね。

「俺の名前は風間。ただの千年妖怪さ」

言いながら、俺は風を収束させてる。大気が俺の周りに集まり、風を生み出す。疾風の如く、そして光の速さで集められるのは台風のような風量。瞬時に竜巻を形成させてその目の中心を俺とかぐや姫と女性に合わせる。

これでだいぶ時間は稼げるな。

まさに風の要塞ってわけだ。

「ま、まさか本当に来てくれるなんて……」

「おいおい、言っただろう。一言、言えばすぐに風と共に飛んでくるってな」

そう言うのと、一瞬嬉しそうにしたがすぐに顔を伏せた。

「呼んでおいてなんだけども貴方じゃ勝てないわ。絶対無理よ。月の武器は」

「その美しいお姉さん。名前は？」

「私は八意\*＊　　そうね、貴方達の言葉で言うなら永琳。八意永琳よ。妖怪さん」

言葉を切られたのが何を腹たったのか、かぐや姫はキツと俺を睨んだ。

「月の武器の話は聞いたよ。それよりも、だ。ここから逃げる方法を今から言っぞ」

「に、逃げるって囲まれているのどこから出るのよ」

「空いてるじゃん」

「……まさか、貴方……」

はい、ご名答です。八意さん。

コクリと頷くと、俺はニツと笑う。

「それでは、空の旅をお楽しみください」

「ちよ、ちよっと待ってよ！貴方はどうするのよ！一緒に逃げましよう！貴方も飛んで……」

「すぐに追いつかれますよ。俺はここで足止め」

「だから！月人の武器は　　」

「ええい！黙れ！」



俺は布をかぐや姫の口にいれこむ。

「フゴー！フゴー！」

「空の旅で舌を噛まないように、八意さんも何か噛んでおくといいですよ」

「え、ええ。貴方……本当に大丈夫なの……？」

「これでも、長く妖怪やってますから。人間相手ぐらい楽勝ですよ」

「かぐやも言ったけど月人の武器は」

「俺がどうなるうと、貴方には関係ない。そうでしょう？貴方は自分とかぐや姫の身を心配しておくといいですよ」

少し強めに言うと、八意さんが一瞬、眉をひそめた。だが、すぐに顔をもとに戻し冷静な顔を作って頷く。

「貴方、名前は」

「風間大介。風の妖怪ですよ」

「ありがとう。この恩は忘れないわ」

さて、さて。2人を飛ばし、俺はそつとため息を付いた。

にしても、感謝される筋合いはないんだけどね。

これは俺のエゴだし。それに、飛ばすのは山の奥の方だ。飛ばした後なんて知らない。そこから生きるか死ぬかは2人次第だろう。

あ、姫様は不老不死なんだっけ？

「んじゃ、まあ軽く殺っちゃいますか」

相手は殺す気で掛かってくる。もうここから不殺を通そうなんて甘い考えは良くないな。

あ、でもまあ極力殺さないようにするけどね。

竜巻を散らす。余興で突風が吹き、何人かが吹き飛ぶ。弾薬が落ちていているのを見ると無茶に撃つたらしい。

馬鹿だな。これ、弾くのに。

「かぐや姫と八意が居ないぞ!？」

「こいつに構うな！探しに」

「おいおい。俺を無視するなんて非道いじゃないか」

瞬間、風の刃が月人を襲う。何人かが斬れて悲鳴を上げた。

「くっ！まずこいつを片付けろ！ただの雑魚妖怪だ！」

「おや、誰が雑魚かな？」

そう言っで一気に妖力開放。封じ込めていた妖力は自らの身に纏いきれずに放出されて辺りを揺るがす。それはまるで地震ように感じられるだろう。

「ちょっと久しぶりに妖力出すんだから、楽しませてくれよな？俺は最近暇で仕方ないんだ」

手加減はなしだ。だから、せいぜい死なないでくれよな？

「帰ったら伝えとけ！かぐや姫はここがお好きなんだと！んでもって、今度またきたらぶつ殺すつてな！」

はい、見事に撃退しました！やったね。

腕が切れたりしていたけど、まああれだけの文明があるのなら治療できるだろう。まあ、死んだやつもいるが。

宇宙船らしき物に乗って帰ってゆく月人たち。それを最後まで見届けた後に俺は振り返る

引き裂かれた身体。えぐれたように吹っ飛んだ胴体。勿論、俺がやった。

だが、胸糞悪いことに罪悪感とか、恐怖感とか。そんなものは一切なかった。まるで最初から理性の中に組み込まれていないようなそんな感覚だった。

まるで物を見るような目でいつも間にか自分が観ているのに気が付き、俺は眉をひそめた。

妖怪になって1000年のもの間は人間の理性を奪うには十分な時間だったらしい。

人を初めて殺めた罪悪感すら無いというのに俺はどこか楽観的だった。

「……」

ため息を盛大にぶちまけると、静かにその場を去る。墓を作る義理もない。妖怪が処理してくれるだろう。

「恨むなら、こんなところにこさせた上司を恨むんだな」

吐くように言い捨てて俺は頭を掻いて天を仰いだ。

「腹へったな」

満月の夜。星空に満天の星が散る中で、こんな時にらーめんが食べたいと、不思議に思った。

2話「月人襲来」(後書き)

感想とかくれたらうれしいです。

### 3話「安部晴明」(前書き)

この安部晴明は正史とは異なる完全な二次創作物として扱っております。ご注意ください

### 3話「安部晴明」

月人を撃退して幾らか時が経った。相変わらず暇を潰す生活を送っていく俺だが、ちよいとした危機に陥っている。1000年強生きてきた中で、恐らくは最も一番にピンチだ。

え？なんでだつて？

居るのですよ。目の前に。あの安倍晴明様が！

……どうしようか、マジで。

目の前に居る奴の威圧を受け流しながら、俺は晴明さんと会うまでのことを他人ごとのように思い出していった。



時は平安。794の平安である。かぐや姫に会ってから200年近く過ぎた頃に俺は山の中を放浪していた。単に食料探である。都には最近洒落にならない奴が住んでいるので比較的入りづらい。

んで、仕方無しに食料を見つけに山に入ったら。

「また、お前らか」

「フン、生意気ナ弱小妖怪ガ。今度トイウ今度ハハツ裂キニシテクレル！」

『シテクレル！』

過去、だいたい50年くらい前に会った妖怪共です。人の形を成した、一応中級クラスの妖怪なんだけども、面倒だからって逃げたら案の定目の敵にされたのだ。

……。さすがに殺ってしまおうか？

そう思い、そして首を振る。ここは山と言っても京都の都に近い。ここでドンパチやったらアイツに気づかれる。

俺は別に暴力でなんでも解決しようとも思わないし、なにより面

倒なんのは嫌だ。大体、安倍晴明なんて化物相手にしたいわけがない。

そうと決まればまた逃げようと風の脚を形成する。だが、丁度その時。目の前に居た妖怪どもが一瞬で消し飛んだ。

「え」

驚きのあまりに呟いて、すぐさま直感的にその場から離れる。俺の判断は正しかったようで俺の居た場所はクレーターが出来上がっていた。

「ほう、今のを避けるか」

声がして、瞬間に俺はつい苦笑いを零した。

「できれば、会いたくなかったんだけどな……」

安倍晴明である。

「こんな山になんの用かな？安倍晴明」

目の前に居る青年にそう話けると扇を広げて微小を浮かべながら言った

「なに、ちよいと散歩に出かけたら殺気じみた妖力を感じたのでお。暴れられてもこまるので、滅しておいたのじゃ」

一見すれば身体が細く、美形の青年であるが、靈力がハンパじゃない。俺といい勝負ではないだろうか？軽く靈圧で木々とか軋んでるもん。

「それにしても、よくあの一撃を避け切れたものじゃ。割と本気だったのがのう」

「そりゃどうも」

言いながら、一歩下がる。こちとらまともにヤル気はない。逃げられるならすぐに逃げる。

だが、なんだか背中を見せた途端に殺られそうだ。俺は軽いため息を吐く。

「ふむ……。完璧な人の型を取っておる……随分と妖力を抑えているのを見るに大した妖怪のようじゃ。お主はなんじゃ？天狗か？鬼か？」

「生憎、これが原型だっ」

てか、妖力抑えてるのよくわかったな。

「新種か……。まあ、良い。では最近山で奇声を上げながら神速で走り回るのはお前か」

「……」

はい。俺です！それ俺です。

畜生、どうしようか。逃げるのもいいがやはり背中を見せたらだめだな。こう云った類は後ろより前に出たほうがいい。俺はすつと構えて一歩踏み出す。

「……俺はまだ人なんて食ったこともないししょうもない妖怪だぜ。見逃してはくれないか？」

「悪いが、それは出来ない相談じゃ。見逃して欲しいなら我に勝ってみれば良い」

「ハハハ……。やっぱりね」

仕方ない。久しぶりにちょい本気をだそう。

息を吐く。ずっと神経を立てせて目線を清明から外さない。息と共に、抑えていた妖力を久しぶりに開放する。ズツと開放された妖力が放出されて辺りを圧する。

「ほう……久方振りに楽しめそうじゃ」

てか、俺。さらに妖力でかくなっただんじゃないか？なんか前より増えてるし。

まあ、いいや。

開放した妖力をスツと引かせて内に収める。ただのデカイで圧倒的に制圧させる以外は基本、俺は内に溜める。

デカイ妖力振り回すのもいいが、それだけじゃ、多分こいつには

敵わない。力的にはこっちが上だが相手は陰陽師。近接戦闘インファイトで攻めれば恐らくは大丈夫だろう。

風の脚を形成。妖力での身体の向上。一気に地を蹴り、晴明の前に移動する。相手には恐らく風と共に俺の身体が消えたように映るだろう。

クロスカウンターが怖いのでその場に止まり、右の拳を振り抜いた。

「っ!？」

よ、避けやがった!

拳が空を切って衝撃波を生み出すも澄ました顔で晴明は動かない。奴の目の前で拳が弾かれた。スツと奴の手が動く。嫌な感じがして俺は動く。

「破道『不知火』」

一閃。初動は一本の線。続いて現れる白く燃えるレーザーのような攻撃。狙いが外れたレーザーは木々をなぎ倒し、地を剗らせていた。

動いて距離を取っていた俺は叫ばずにはいられなかった。

「ちょ、おいコラ!印も組まずにその威力かよ!」

「我もまさか避けられるとは思ってなかったの」

こっちのほうにショックでかいわ！

なんだよ、陰陽道って印組んで戦うんじゃないのよ！

印も組まず、詠唱もせず、ましてやお札も使わずにこの威力。どんなバケモンだ。

俺はちよつと掻いた冷や汗をぬぐって呼吸を整える。

「破道『怪奇破滅六芒星』」

今度は六芒星が晴明の周りに3個ほど浮かんできた。慌てて俺は防御体制を取る。

「風よ」

集め、そして圧縮させて盾とする。六芒星からまたもやレーザーが出てきて衝突する。互いが噛み合い相殺して爆散するのを気に俺は一気に近づいた。

こうなればとことん近接戦闘だ。インファイト

一蹴。弾かれて反転。またもや弾かれる。結界でも張っているのか、一向に弾かれる。

拳を前に突き出す。それなりにスピードと威力をだしたのだが、弾かれる。

さすがに近接予防はしてあるか。

「鬼道『紅蓮滅罪』」

衝撃波と共に吹き飛ばされて、続けて唱える鬼道系陰陽道。赤く尖った針みたいなのがいつぱい飛んでてきた。しかもクソ速い。

ギリギリで避けたり、風で軌道をずらしたりするが、何発か辺り。身体を貫いた。

いずれもかすりキズだが如何せん貫通力が高い。これはヤバイな。

やれっばなしもあれなので、俺は風を圧縮させて刃を形成させた。鎌鼬のごとく飛ぶ刃は晴明の前で散った。なにあれ、さっきから。常置結界ですか。なんてセコイ。

「鬼道『六星破滅気功滅碎陣』」

地面が光ったので見てみれば術式が組んだ六星。やばいと思い、俺は妖力を最大限まで放出する。

「神道『天威神光』」

ちよ、同時はセコイって！

こんな間髪入れずに最高位の陰陽道とか、かるく死ねる。てか、アイツマジじゃね？

上下、挟むようは攻撃がやってきて、俺は身を風と妖力で無理やり包んだ。即興の防御術だがやらないことには越したことはない。

瞬間、1秒も経たぬ内にももの凄い衝撃と音がやってきた。



体中が痛い。なんとか耐え切ってみせたが正直辛いです。

身体はボロボロ。内臓系も骨にも異常はないが疲労と打撲等非道い。

周りを見てみればクレーターになつとる。

どんだけだよ。

「今ので決めるつもりだったのじゃが……本当にお主、何者じゃ」

「だたの風の妖怪だよ」

驚いたようにこちらを見る清明に俺は言っ  
て内心舌打ちする。

あれだけのモノ放っておいてまだそんな  
靈力残すとかどんな化物だよ。

このままじゃ平行線だな。アイツのあの  
結界。あれをどうにかしないと……。

……あれ、やってみるか。

俺は立ち上がり、周りに竜巻を形成させ  
て防御風を作る。最大限まで引き伸ば  
したんだ。これなら10秒くらい時間は稼  
げる。

すぐに妖力と風をかき集める。掌に風の  
圧縮させる。

嵐のような暴風を妖力で圧縮させてさら  
に力を加える。

そうして出来上がったと同時に竜巻が爆  
散する。

よし、間に合った。

形成されたのは掌で激しく渦巻く嵐を球  
体にして圧縮した物。閉じ込めきれずに  
風が四方に放出される。

その名も

「螺旋丸」  
ほむまのま

「がん」じゃないよ「まる」だよ！

某忍者漫画の業をパクったものだが、これすごく強いんですよ。試しに使ったら相当ヤバかった。

妖怪相手にやったら10匹くらい3メートル前後の獣型の妖怪が挟まれて爆ぜて吹き飛んだ。

すぐさま、風の脚。一気に移動して右手を突き出す。

「っ！」

奴の結界と螺旋丸らせいんまるが衝突し、その力が辺りの地面を砕く。地に足をめり込めさせているので足場が崩れようが関係ない。

晴明が慌てて結界の濃度を上げて全神経を結界に向けているようだが、どうやら螺旋丸のほうがうわてのようだった。

風を操っている俺でさえ息苦しくなるような風の衝撃と共に晴明の身体が木々を投げ倒し、数十メートルほど吹き飛んだ。



3話「安部晴明」(後書き)

感想とかくれるとか嬉しいです。

#### 4話「清明その後」

目が覚めると、そこは家の中だった。身体を起こそうとして全身痛むのに気が付き、清明は顔をしかめる。

辺りを見渡してみると、家というより小屋のほうが正しいようなきがした。それは自分が屋敷に住んでいるからなのかと思うが一般の家にも入ったことがあるのでそれは違うだとうと思う。

「気がついたか」

声がして見ればあの風の妖怪がそこに立っていた。

手にお盆を持ってそれを清明の横に置いた。

「何故、殺さなかった」

清明は陰陽師だ。妖怪を退治し、時には占い、都を支えてきた。その中でいつ殺されても可笑しくない状況下にあることは自覚していた。

あの、風の妖怪が放った一撃。仕込んでおいた結界を破り、さらに自分の即興で精度が低かったとは云え、2重結界さえも破られた時、てっきり自分は死ぬのかと思った。

しかし、生きている。妖怪の手によって。

それに憤りを感じて晴明は気がつけば霊圧を出しながらそう問うていた。

それなのに、奴は肩を竦めた。

「元々殺る気なんてなかったし。それに、あんたも本気じゃなかったら」

晴明は思わず言葉をつまらせた。

確かに、本気ではなかった。ただの妖怪だと、そう思ってお札も詠唱も使用しなかったし、さらに自分自身本気の霊力を出しきっていない。

本気で殺ればこの妖怪なんてすぐに　。

……いや、勝てる、だろうか？この妖怪に。

晴明とて伊達に長く陰陽師をやってはいない。幼少の頃からその才能を輝き始めた晴明は成人になる前（15歳で成人とされる）からも多くの妖怪と戦ってきた。

だが、こいつは今まで数多に戦ってきた妖怪とは違う。

まだ、こいつは力を秘めている。

本気をださなかったのはこいつも同じだ。

だが、あの強さで、あれで　あれで本気ではなかった、と？

「お主、本当に何者じゃ」

「だから言つたる。俺はただの風の妖怪さ」

持ってきた酒を一杯のみ、風の妖怪はそういう。

「骨は異常はなかった。激しい打ち身と打撲。腕が内出血を起こしているが、まあ大丈夫だろう。一応、それなりの手当はしておいた」

無言で、飯を進めて風の妖怪はまたもや酒を煽る。

「食べる時に食べとけ。食べればよくなる」

晴明は一度風の妖怪を見た後に隣にあった白米と山菜、それと魚を食べ始めた。

「味が濃いのが……」

「あー悪い。俺、味が濃いほうが好きなんだわ」

「いや、いい。それよりもじゃ、お主名前はあるのじゃろう？名はなんと申す」

「……俺の名前聞いて都に呼びかける気か？」

「そんなことはせん、ただ興味が湧いたのじゃよ。お主に」



それは本当のことであつた。風の妖怪。こいつには本当に興味が湧く。自分の倒すほどの力を持ちながらも、極力危害を加えないようにする。言えば人を食べたことがないらしい。それに、手負いの自分を助けるほどだ。どれだけお人好しであり、人間らしい妖怪なんだと。

「風間。風間大介」

「風間大介か。我は知つておると思つが安倍晴明と言つ。都一の陰陽師じゃ」

自分で言うかそれ、と風間は笑顔を見せた。

晴明が怪我をして、風間に看病されて10日が経つた。さすがに

キズは完治したので都に帰ることにした。

晴明にとってこの10日はあつという間であり、とても有意義な時間であった。風間は妖怪と言うのに、本当に人間らしく。そしていきいきとしていた。

小屋の前で風間が小さく頷いて言った。

「じゃ、達者でな」

「ふむ。お主もな。今度は我が家に遊びに来るといい」

「ははっ、安倍家だろ？ばれるっつーの」

「ホレ、怪我の礼じゃ」

そうして渡したのは一つの玉。糸を通しており、首に掛けられる物だ。

「これを付けておれば他の者たちにはれるまい。それを付ければ人間じゃぞ」

「いいのかよ？」

「ああ、お主はどうやらイイ奴らしいからの。この10日間であろうわかった。それに、お主とはまた酒でも飲みながら談笑でもしたいの。ここまで気さくに話せる人間はそうおらんのじゃ。皆、我にペコペコ下げるばかりでの」

実際、風間という妖怪の存在はこの10日間で大きい者となって

いた。清明は陰陽師であり、魑魅魍魎のこの時代、陰陽師というのは大変丁寧に扱われる。権力を持った貴族までも陰陽師が通ればその道を譲るほどである。

陰陽師は力を持っている。それは間違いない。だが、中にはやはりその力で持つて威圧するような陰陽師も少なくないのだ。

貴族の中に例え権力を持っていても、一言貴方は呪われているので屋敷から出ないほうがいいと言えば絶対に出られない。

そんな世に清明は陰陽師の中で飛び抜けて力を持っていた。退治した妖怪はいざ知れず。占えば百発百中。

妖怪だけでなく霊といった存在も彼にかかればなんのその。

そういった存在であるがゆえに誰も近づかないし、だれもこういつた気さくに酒を飲みながら騒ぎ、談笑することはなかった。

だから清明にとって風間との10日はすごく有意義で楽しいものだったのだ。

「都最強の陰陽師様も大変だな。……でもよ、怪我させたの俺だけ？」

「構わん。我はお主と会えてよかったのじゃ。いつでも遊びにくるといい」

今度はとっておきの酒を飲ませよう。そう心に決めて清明は小屋を後にした。



#### 4話「晴明その後」(後書き)

ちよつと実家に帰るので更新は来年になるかも

## 5話「玉藻前」

時は平安末。都で晴明の仕事の手伝いをしていた俺はある噂を聞いて興味が湧いた。

『絶世の美女』が居ると。

またかと思うかもしれないが、これまたすごいんだと。

上皇に従える女は玉藻前と呼ばれているそうで、その姿は魔性のごとく美しいとか。

晴明と俺が会ってからは、晴明の要請もあつて晴明とともに仕事をすることになっている。妖力は抑えているので近接格闘のみだが如何せんこれが俺の得意分野なのでそこら辺にいる妖怪には負けはしなかった。

都では晴明と共に「神速の風」と呼ばれるのだがまあ、どうでもいいので、ここらへんは割合する。

こちらら妖怪なわけであるし、そんな陰陽師とかに敬意の目で見られても嬉しくないし。

まあそれは置いておいてだ。

玉藻前である。絶世の美女である。

男なら会わずに何が男か。

育ちが低いにも関わらず、その美貌で上皇と契をを交わしたのなら、相当ものだと。

あ、でもかぐや姫とどっちが綺麗だろ？

気になるところなので人に聞いてみた。

「玉藻前？ああ、都で噂の。は？どこにいるかと？それならあそこの屋敷に　　って上皇様の屋敷に入れるわけがなかるう」

ふふふ……俺を甘くみないほうがいい。それを言われてかぐや姫の屋敷に入った俺だぜ？

遂に、長らく封印していたあの衣装を着るしか無いな。

ふふつ、待っているよ玉藻前！

そうして侵入した屋敷。今回はすぐに目的を見つけられた。

「こいつは……」

何故こんなにも早く見つけられたのか。風を使用してもかぐや姫は見つけるのに少し時間が掛かったがこいつは本当にすぐ見つけられた。

理由はあの妖力である。

化けているかしらんがそれを差し置いて自分で意識しないほどに妖力が漏れている。妖力を持つ俺だから、妖力に敏感になっている俺だからそれがわかった。

つまり、都一美しいと呼ばれた玉藻前の正体は妖怪なのである。

都に居た時は感じなかったために近くにいかないと感じられないのだろう。それにしただって上皇が契を交わした相手が妖怪だなんて

人に化け、妖力さえも化かすなんて相当の手馴れか化物クラスの妖怪だぞ。

晴明に話すか……？

俺は思いながらも屋敷を静かに歩く。

いや、まずは会ってみよう。何も全部が全部悪い妖怪だなんて考えられないし、純粹に都で人間のように暮らしたいかもしれない。

取り敢えずは会って話す。その後はどうするかは晴明に委ねよう。



あいつならいつか気付くかもやしれない。

「ほっ……」

思わず声を漏らして俺はその姿に見とれた。

玉藻前。

彼女は都一と呼ばれるにふさわしいほどに美しく、そして可憐であつた。金髪のショートカットの髪、スラリと伸びた脚と豊富な胸。

引き締まった体型は細く、そして白い肌は輝く。

なるほど、かぐや姫も相当なものだと思つていたが、なるほど。

かぐや姫はどちらかと言えば綺麗であつてもまだ幼さを感じられた。それは不老不死の薬を飲んだからなのだろう。若くして飲めば

成長も止まる。

だが、彼女はえらく大人びていた。

俺はどちらかというと玉藻前のほうが好みだなあ……。

大人の女性というのは男の子のあこがれなのです。

さて、早速接触しますか。

部屋に静かに気配を殺して入ると、玉藻前は机の上でなにやらぼつとしているようで俺はちょいちょいと肩を指でつついた。

「!?!」

「おおと」

叫びそつになったのを慌てて口をふさいで音を消す。

「静かにしてくれよ」

「お前は何者だ……!」

手を振り払い、玉藻前はそう聞いてくる。予想外に強い腕力に俺は驚きながらも答えた。

「それはアンタが一番わかるんじゃないか？」

「何を、馬鹿なことを　!?!」

石を外すと少しだけ漏れる妖力。風が俺を包んで久しぶりにだしたためかちよつと俺の風が喜んでいる。

風を操る程度の能力と言うものの、実は妖力で威力を高めたりできるわけだが、どうも性質がら体内に妖力の風が溜まる傾向があった。

それらが溜まりすぎるとそのうち抑えきれなくなって爆散するか定期的に晴明と組合をしたりするのだが、最近やってなかったからな。

「よ、妖怪」

「そうだ、アンタと同じ妖怪だ」

「っ」

妖怪と言い当てられて玉藻前は唇を噛む。そうしてそちらも化かしていた妖力を出して威圧してきた。

「何のようだ。まさか、私の正体をバラしに」

「んや、まあそれはいつかバレるかもしれないんが俺は少なくともバラそうとはしないぜ。ただ、都一美しいと呼ばれた人が同じ同僚だったもんでね。ちよいと話しがしたかったのさ」

てか、なんでいつも綺麗な人にはこう、ややこしい事情があるのだろうか。

「ふん、同僚？私を知っているのか？妖怪」

「ん？いや、詳しくは知らんが」

「私は九尾。妖獣の最高位だぞ」

少し、ニヒルな笑顔ですらりと九本の尾を出す。ズルリと、妖力が増えてこの部屋が軋んだ。

何を得意下になっているのか、玉藻前は満足そうに目を細めた。

「ちょ、馬鹿か！」

まさかこれほどまでの妖力当てて臆するどころか怒鳴られるとは思ってなかっただろう。驚いたように肩を上げた。

「こんな都のど真ん中でそんな妖力出したら……！ああ！もう！」

まさか、ここまでするとは思ってなかったので俺は慌てて俺自身の妖力を開放した。そして、玉藻前の手を握る。

「なっ……！！」

玉藻前以上に濃い濃度の妖力が解放されてその場がまるで地震のごとく揺らす。風と共に玉藻前の妖力に干渉して玉藻前の妖力を包んだ。

妖力抑えて そのまま散らす。

特定される前に散らさないと奴が飛んでくるからな。早めに散らさないよ。

それにしたって他人の妖力に干渉するなんて疲れるってレベルじゃねーぞ。正直これは、危ないな。

妖力一気に持つてかれるし。まあ寝れば治るのだけれども。

「お前は、……アホか。アホなんだな……」

荒くなった息を整えながら俺はそうつぶやく。

「こんな都のど真ん中で妖力馬鹿みたいに垂れ流しやがって……はあ……はあ……」

「……はあ、はあ……誰が、馬鹿だ。……私は九尾だぞ……」

互いが妖力を散らされたので精神的にヤバイ。精神と身体は直列しているので当然疲れる。互いが荒くなって「ハアハア」いいながら背中を預けた。

ちよつと玉藻前の息がエロイです。

「……はあ……はあ……お前、なんであんな妖力を……」

「こちとら、もう千年以上生きてんだ。お前さんとは年季が違うよ」

「はあ、はあそれにしては精神年齢が低いな……まるで子供だぞ……」

「……はあ……はあ……よく、言われる」

しばらく経って風を送って周囲を警戒したが何が起こったのかわかってないようだ。

「おい、九尾」

「なんだ、妖怪」

「俺の妖力送るからせめてここの屋敷に居る奴だけでも化かせ」

「……」

ダルそうに頷いて玉藻前が静かに妖力を出す。俺もまず屋敷全体を軽く遮断系結界の風で囲んでその後握った手から俺の妖力を送る。

「んっ」

「おい、変な声出すな」

「う、うるさい！少し黙れ。集中できんだろっがっ！」

俺の妖力と玉藻前の妖力で創り上げた『化かし』は小さな光が無数に空間に広がりやがてそれぞれ散っていった。

「これでいいだろう」

「ああ、ま、これなら他の奴にはバレる心配はないが　あいつがなー」

「アイツ？」

「俺の親友。安倍せ　じゃなくて、安倍泰成だよ」

「お前、妖怪だろう。何故親友に陰陽師がいるのだ」

「ちょっとした出会いが会ってね」

まあ、その時の話はいつかな。

俺は立ち上がってその場を離れようとする。

「……おい」

「なんだ」

「手、離せよ」

「　っ。悪い」

どうにも気づいていなかったらしいな。すぐにパッと手をはなす玉藻前。ここで名残惜しそうに離すならまだ可愛げがあるもの。

「じゃ、達者でな。いつかまた会ったら」

そう言っつてその場を離れようと風の脚を纏った所、引き止められた。

「なんだよ」

「名前、お前の名前は聞いていなかったな。それにお前私を上回る

その妖力。一体何者なんだ？」

「風間大介。ただの風の妖怪だよ。長生きのね」

俺は笑ってみせてその場を颯爽と離れた。



## 6話「フラワーマスター」

「旅にでよつと思つんだ」

「旅？」

「うん、1年くらいもしかしたら2年くらいかも」

俺がそう言い出したのは九尾と会って1日くらい経ってからだった。

「ほら、俺都で馬鹿やつただろ？だから、しばらくここらを離れて大人しくしようと思つんだよ」

都で妖力だしたことは妖力調整の失敗だと清明に語った。別に九尾を構うわけでもないが、なんとなく。おなじ同僚の好みというかそう言った気まぐれだが、この際なのでしばらく都を離れようと思ったのだ。

最近では都で清明の仕事の手伝いをしたりと山に行くのは妖怪退治くらいだから此処いらでもう一度伸び伸びとしたい。

「ふむ。それは良いがの……1年か、長いう。寂しくなるのう」

「1年だぜ？すぐだって」

「お主の時間感覚とは違うのじゃよ」

そういえばもう5年近くこいつと一緒になんだよなー。

「まあ、すぐに帰ってくるさ。それまで待ってるよ親友」

俺がそう言つと晴明は何処か嬉しそうに顔を緩ませて頷いた。

そうして旅に出発したわけだが、放浪の旅というのは何処か気の抜けないところもあるので一応晴明からはお札をもらった。

転移用のお札らしくこの世でこれを作るのは晴明だけだとか。

「少々扱いにくいが、まあ大丈夫であろう」

そう言ってくれた後にボソリと「試作品じゃがの」と呟いたのは聞き逃さなかった。でもまああの晴明である。信頼はできるだろう。

「おや……」

山に出発してから2日ばかり。妖怪の身であるので別に食わなくても死なないが一応腹はすくので弁当でも食べようかと思った矢先、

ある光景が目に入った。

どこまでも続く花畑。太陽に照らされて輝くのは金色の花。精一杯その身体を太陽に向けるその花の名前は向日葵。

「……へえ、こんな所に向日葵が。珍しいな」

時期が時期であるが、それにしただって向日葵がこんなに綺麗にたくさん咲くなんて本当に珍しい。

「……ん？向日葵？」

花に付いてはフラワーショップにバイトしたこともあり人並みには花を知っているが、確か幾つか興味があつて調べたこともあるのだが向日葵というものは確か17世紀の日本で伝来したのではなかったのでは？

向日葵という名前自体も後の名称に過ぎず、別名で呼ばれていた筈だ。

「……今、繋がりがあるのは中国、朝鮮のみだ。スペインでの伝来はもっと先……なら何故ここに向日葵がある……？」

「あら、ここにこの花が在って可笑しいのかしら？」

振り返り、そして迫る拳をいなす。大概の直線運動といものは受け流し、つまり円の動きに弱い。真正面から受けてその力のインパクトが出せる正拳および直線運動攻撃は横からの流しにその力が分散される。

ので、攻まる右ストレートを右腕で円を描くように流して擦らせる。頬が鋭い拳圧で少し切れるがすぐに腕を絡ませて脚を捌く。体制を崩したところをそのまま持つて宙へ流れのままに放り投げる。

「っつと」

フワリと、浮いて地面に着地されて俺は初めて今襲ってきた奴を見た。

おおよそこの平安には考えられないような、服装をした緑髪の女の子であった。長いスカート？それにシャツだ。日傘はかなり西洋である。

俺が居た現代の服装に俺は目を開いた。

俺もこっちに来たときは向こうでの服装だった。今もあるが長らく使っていない。

「アンタ、何者だ？」

「あら、人に名前を尋ねる時は自分からまず名前を名乗るものじゃない？」

英国紳士じゃあるまいに。

「それに私を知らないなんて、貴方どこの田舎妖怪よ」

「……」

なに、そんなにこの人は有名なのか……？

ん？待てよ。

一面の花畑。緑髪の妖怪……。

「フラワーマスターか……」

「？」名答」

軽く舌打ちしそうになる。

都の陰陽師たちの噂。山の中の何処かに一面に咲く金色の花がある。そこに一匹の妖怪がいる。その姿は大変美しいがその中身は残酷な妖怪で妖怪、人問わずその花畑を荒らした者には死を贈るとい  
う。

フラワーマスター 風見幽香かみみゆうか

「貴方の名前は何かしら？いや、やっぱりいいわ。どうせ死ぬもの。名前なんか要らないはね」

「マテ、マテ。俺は別にこの花畑をどうこうするなんてことは」

「ええ、そうでしょうね。でもごめんなさい。私、今どうしても戦いたくて仕方がないので。ノコノコとこんな所に着た事を恨んで頂戴」

……そんな殺生な。

俺と風見の居た場所から花が動いた。まるでモーゼの海の如く別

れてあつという間に半径2キロ近くの円が出来上がった。まるでそれは闘技場のよう。

「私の拳を避けるのくらいだもの。少しは楽しませて頂戴よね？」

笑顔でそう言つと風見が動いた。

まったく、いつも俺つて厄介ごとに巻き込まれるよな。

深くため息を吐いて覚悟を決めて腰をスツと下ろして構えを取つた。

真昼の闘争が始まった。

先手は風見。鋭い拳が空気を裂いて襲いかかる。それをまたイナして今度は懐に入る。

「っつ」

入る前に二撃。左足の一蹴に耐えて動く。

「はっ！」

どうやら近接型のパワータイプらしい。完全に軸足を捨てて今度は右足の二段構え。

右の一撃は受けると同時にそれをつかんだ。

「!?!」

掴まれると思ってなかったのだろう。その驚愕な顔が面白くて思わず俺は笑った。そのまま掌底。

妖力の用いた内気功での攻撃だ。防御貫通で内側から衝撃を与えるので内臓系にダメージを与える。

「ぐっ……」

今なら並の奴は確実に吐血でもしてるのだが、どうやらそう簡単にはいかないらしい。うつむいていた顔を上げてキツと睨む風見。

おお怖い。

すぐに跳躍。怒涛の勢いの突進に風を操って減速。だが、直前で地面を蹴られて突如に加速した。

見るからに妖力を纏った拳に一步下がって紙一重で避ける。だがそこで終わらずそこから上下足技も入れた攻撃。

確かに速いし威力高いけど、こちらもう千年以上の近接格闘者だぜ？拳法じみた業もゲームや漫画からパクったものだけでも実用性高いし使いやすい。それで何百という妖怪を倒したと思ってるんだよ。

俺に近接格闘で勝負を挑むとはね。うん、自殺行為だぜ。

右のストレートを手首を抑えて受け止める。そうしてそれを引き寄せるようにして引つ張ると左で掌底。

クロスカウンター気味の攻撃が入って風見が揺れる。まだだよー。

掌底を叩き込んだ腕を畳んで水月へ肘突き。手首を話してそのまま回転。サマーソルトを打ち込み、顎を狙う。

揺らすのは脳。これで墜ちたら儲けもんだが耐えているようだ。あんまし、女の顔って狙わないようにしているけど、顎でセーフだよね。浮く風見にサマーソルトで一回転した身体を戻して間髪入れずに地を蹴って掌底を叩き込む。

これは吹っ飛んで円の枠ギリギリまで飛んだ。

ちよい手加減したけど、まあこれで墮ちてくれたら　はい、そうですね。続行ですか。



たく、顎打ち抜いたのに気絶してないってどれだけタフなんだ。

「花よ！」

荒くなった息を整えもせず、風見がそう叫ぶと変な触手みたいなのが地面から出てきた。種みたいな妖弾を出したりなんかエロく絡んでくるので風の刃ですべて断ち切った。

「なっ……！……でもこれならどう？」

再び種。だが今度は目の前で爆散して煙をだす。鼻を刺激するよ  
うな匂いとうごめく触手の感覚が襲って俺はすぐに竜巻を形成。

辺りを一掃する。

「終わりよー！」

それが妖力を高めるための時間稼ぎであることに気が付き俺は舌  
打ちしてすぐに掌に風を集める。

「なんだ……？妖力じゃない……！？」

風見から浮かび上がるのは妖力ではないなにか。いや、妖力は使  
っている。まるでそれを触媒にするかのように。その傘に集まる。

いや、言い直そう。あれは傘が触媒となっている！

洒落にならん。

「マスタースパーク！」

瞬間に放たれるのは極太のレーザー。またか。またレーザーなのか。

間に合うか……！？

「螺旋丸！」  
らせんまわ

刹那の速さで撃ちあつた互いの技が爆散した。だが、こつちのほうは上手らしく、余興で駆け抜けた風が風見を包んであまりの暴風に身を丸くしている。

すぐさま余興で残った風を集めて風見の周りに竜巻を形成させる。イメージと感覚で掴みとるように拳を付き出して握る。

すると風見を包んでいた竜巻が圧縮されて包み込んだ。殻に閉じ込めるように丸い球体が出来上がり風見を完全に閉じ込める。

暴風の場合竜巻とかもそうだがまず息があまりできない。竜巻の場合目があるので問題は無いがこれは完全に目もふさいだものだ。

酸素濃度が薄く、さらに身動きもできない状態なのだ。しばらく続けられいくら妖怪と云えども窒息はまぬがれない。

一見して反則的な技であるが実はこれ決定的な弱点がある。

しばらく経つた時風見を包んでいた竜巻が爆散した。

息を荒くして欠けていた酸素を一気に補充する風見。

「やっぱりね……」

これ、実は内側からの攻撃に極端によわいのだ。内から攻撃をすればすぐに爆ぜる。内からの攻撃は外は圧縮するために妖力で覆っているが内は覆っていない。故に内からの攻撃には耐えきれずに爆ぜる。

「ハア…ハア…あんた…一体……！」

「おや……すぐに死ぬとかどうとか言っていたのだから聞かないのでは？」

俺は少し意地悪にそう返して肩をすくめた。

「前言撤回だわ……ここまで私を苦戦させるなんて……」

悔しそうに唇を噛みながら風見はそついう。

「なら、名乗ろうか。俺の名前は風間大介。ただの風の妖怪さ……」

そついうと風見はたいそう驚いたような顔をした。

7話「フラワーマスター2」(前書き)

もう数分で今年も終わる！

来年はいっぱい更新するぞー！

## 7話「フラワーマスター2」

「風間……大介……」

驚きに満ちた顔。何かをつぶやきながら風見はもう一度こちらを見た。

「貴方が、神速の風？」

「……まあ、巷じゃそう呼ばれているけれども」

俺がそう答えると唇を噛んで風見は妖力を底上げする。

「まさか、喧嘩ふっかけた相手が『あの』神速だったとはね……私も運がいいのだから悪いのだから」

嘆息しながらも膨れ上がる妖力。相手が今以上の力を出してくるのは明確であるが俺は一応尋ねてみる。

「なあ……もういい加減止めようぜ」

「あら、それは勝負を決めにくるということなの？」

「いや、そうじゃなくて、こんな戦い無意味だって」

「残念だけど。貴方が神速の風なら一層のこと引き下がるわけには  
いかないわね」

言うてから、膨れ上がった妖力を身体に集中させて風見は地を蹴  
る。先程の何倍のもスピードで接近されて豪拳が飛ぶ。

受け流し、それを横へ。

だが、予想以上の速さと力で受け流した腕が摩擦で擦り皮膚が剥  
がれる。その痛みに顔を顰めるがすぐに風も加えて摩擦力を少なく  
させる。

今度は蹴り。流れたまま、勢いもつけて回転のハイキック。身体  
を後ろに逸らしてそれを避ける。

「っー」

避けたところに傘を突き刺してきた。それも避けるが今度は傘を  
開く。

「やべっ」

思わず声に漏らす。突き技からの連続は基本中の基本であるがそ  
れは剣での基本である。風見の場合はそこからあのレーザーへとつ  
ながる。

「マスタースパーク！」

溜めなしの直接攻撃をまさかやるとは思っていなかった。

さらに言えばその直前触手が上がって身体に纏わり付いた。

「風よ！」

こつちもノータイムでコレくらいなら相殺ぐらいできる！持てる神経全て総動員して風を圧縮、目の前に形成。

爆風と共に2つが爆ぜる。

「詰めが甘いわよ」

風と共に姿を消した風見の声が後ろから透き通る。何かを突き付けられて俺は乾いた笑いを上げた。

「ははっ……マジでかよ」

「マスタースパーク」

轟音と共に視界が真っ白になった。

風見幽香の戦闘スタイルというものは圧倒的力で相手を押し伏せる『パワータイプ』であった。それは彼女自身が莫大な妖力とその力を持っているからこそ生み出せるスタイルである。だが、彼女の戦闘スタイルは彼 風間との戦闘スタイルとの相性は最悪であった。

受け流し、スピードで勝負を付けて連続で近接格闘を叩き込む彼のスタイルは確実に幽香のペースを崩していった。

まだ、そこにパワーがないのならチマチマと攻撃することに意識を向かずに済んだ。

だが、風間はパワーもケタ違いであった。

まず目立つのはその妖力。基本抑えているようだがいざ戦闘になると無限に浮き出る妖力に思わず舌を巻く位だ。

力自体は幽香の方が上であるが妖力自体は圧倒的に彼の方が上である。

その差に為す術も無く顎を撃ちぬかれ、自分のとっておきを防がれ、竜巻の中に閉じこまれる。

おそらくは【風を操る程度の能力】であるか【風を生み出す程度の能力】であろう。その能力の技量も高い。

ここらの妖怪どもを一瞬で消し飛ばしたという噂は本当なのだろう。



う。

だが、どうにも彼は幽香とは戦いがらなかった。

それはいつもの事なのか。大人しい妖怪であるのかはわからない。だが、これはチャンスだと思った。

彼女が無理やりその戦闘スタイルを変えたのも彼のそこに付け入るためである。

だから、2重3重と技を重ね、一瞬で妖力をかき集めて【魔法】に傘で変換させることをやった。

「驕ったわね……」

誰となくつぶやく。

彼が真剣に、幽香を倒そうと思えば倒せた筈だ。幽香とて、それは認める。それほどまでの相手を負かすには時には罨を貼り、隙を突く。

彼女が最強とまで言われた理由もそこにあった。

「胸糞悪い……」

幽香は戦いを好む性格であった。偶には相手を痛ぶり、弄る。相手が強者だと思いついて入っている所をその圧倒的な力で無様に押し伏せるのが気持ちいいのだ。

だが、この男は途中までその力を幽香に魅せつけた。思わず舌を

巻くほどの技量、そして美しく舞うような拳舞。

どれもが幽香自身、不思議と自分より強いと感じさせるほどだった。

だが、どうだろう？

戦いを辞めたがり、挙げ句の果てには驕って　いや、手加減された。

それが無性に腹が立つのだ。

自分の戦闘スタイルを変えてまで2重3重の策を用いたのにこのザマである。

「もっと楽しませてくれるのかと思ったわ……」

盛大に溜息を吐いた。

本当に、本当に全力で楽しめると思っていたのに。

クルリと背を向ける。

死体を確認するまでもない。私のマスタースパークを直接頭に叩き込んだのですもの。

きつとすべてが塵となっている筈だ。そうでなくても頭は確実に吹き飛んでいる。

そう思って歩みを進める。さて、今日はどうしようかしら？お花

のお手入れを行った後にあいつからもらったお茶を。

「っ！」

威圧。そして同時に感じる風圧。

慌てて傘を広げてそれを防ぐ。見えたのは竜巻。それが直線に幽香の身体を貫かんとしてきた。

「なっ!?!」

竜巻の中に彼が居た。理解するまで1秒。それが差となった。

ズイ、と彼の顔が近づいてくる。黒く光る目と綺麗に整った彼の顔が近づいて思わずたじろぐ。

「……えっ」

次の瞬間、気がつけば幽香は地に仰向けに倒れていた。すべての視界が逆さに転がり彼がこちらを見下ろしているのがわかった。

世界が回ったのだと気が付き、そうして次に自分が地に倒れていることも理解した。

「がっ……!!」

そうして理解した次に襲ってきたのは激しい痛み。動かそうとすればするほどに身体が軋み、激しい激痛が彼女を襲った。

「動かないほうがいいぜ」

彼はそう言いながらも依然といして幽香を見下ろす。

「なに……したの……？」

「ちよつとね」

言いながら掌に風を集めてみせた。

「しばらくは動けないだろうよ」

「……」

何も云えなかった。何故とどめを刺さないのかとか、何故どうやって私を倒したのか。色々と言ってやりたいことも、聞きたいこともあったがどうしてか、不思議と頭の中から消えた。

何故だろう。ここまで清々しく倒されるとかえって気持ちが良い。

「気持ちがイイわね……」

空を仰いで幽香は肩を竦める。

少し清々しいが、それでもやっぱり悔しい。ここまでの力を、技量を身につけるのにそれなりの苦勞をした。2000年近くと生きてきたが彼はどうなのだろうか？

「ねえ……」

尋ねようとして幽香は口を開く。

「……」

だが、何かを言う前に視野が暗くなり、やがて意識を閉じた。

起きたら、色々と彼に聞いてみよう。

少し前まで殺しあつた敵だというのに、不思議とそんな事を思った。

7話「フラワーマスター2」(後書き)

それでは皆さん、良いお年を

## 8話「妹紅 and 八雲紫」

ボンヤリした意識が徐々に覚醒していくのを感じながら幽香は上体を起こした。

「……………」

フカフカとした感触に手を触れるとそこはベット。さらに周りを見渡すとそれが自分の部屋であることに気がつく。

「気がついたようね」

声を掛けられてみると八雲紫がそこに居た。優雅に紅茶を飲みながらイスに腰掛けている。

「……………貴方が運んでくれたの？」

「違うわよ。運んでそのキズを治療したのは全部風間大介よ」

その言葉に幽香は眉を顰めた。風間大介。神速の風。

そう、彼に負けたのだった。

「……………覗き見なんて関心しないわね」

「いいじゃない。私たちの仲でしょ？」

その言葉に言っても無駄だろうと思いつながらもため息をつきながら幽香は肩を竦めた。

「親しき仲にも礼儀ありって知ってる？」

「ごめんなさい。私の辞書にはないみたい」

再びため息。今度は嘆息するような息に紫は微笑みながら口を開いた。

「ため息ばかり吐いていると幸せが逃げるわよ？」

「誰のせいだと思っているのよ、誰の」

実際、彼女が幽香と接触し、それなりの仲になった時から幽香彼女の奇天烈な行動や語源に頭を悩ませられていた。

それでも普通に彼女の友人として接している私はなんて寛大なんだろうと思ったりもする。

「……それで、風間は？」

「私の存在に気づいたみたいで妖力出して威圧しながら出ていったわ」

中々やるわね、彼。



眩くような声に幽香は当然よ、と答えた。

「あらあら、随分と彼が気に入ったようじゃない」

妖しい笑みを浮かべて紫は幽香を見た。

「……私を倒した男よ？それぐらいできて当然だと言っているのよ。別に深い意味はないわ」

「ふうん」

「なによ」

少しキツイ目で睨むようにして紫を見ると別に、と扇で口元を隠した。こういうのがムカツクのだ。何か思っているにしても決して安易には口にせず、何かを企むようなこの仕草。他人の思考を簡単に読み取られるように感じられて相手の感情を逆撫でするような、そんな感じ。

幽香もよく紫と付き合い始めて最初の頃は苛立ついたものだ。

だがしかし、悲しきことにもう、慣れた。

幽香は肩を落としてため息を吐く。そんな様子に紫は楽しそうに微笑んだ。

「随分と、やられたものね」

「……」

紫の言葉に幽香は自分を見下ろす。所々包帯が巻かれていた。妖怪の回復力でもまだ時折激痛が走る。

「強い？彼」

「ええ、かなり」

そう言うと満足そうに笑みを浮かべて紫はイスから立ち上がった。

「止めておきなさい。貴方でも勝てるかどうか妖しいわ」

「あら、私に彼を取られるのが気に喰わないのかしら？」

「……アンタって本当に面倒くさいわね」

「大丈夫よ、確かに妖力はデカイかもしれないけど、私には【コレ】があるじゃない」

スッと突如虚空が割れて【スキマ】ができる。そこから覗く目は彼女以上に気味が悪い。

「境界を操る程度の能力、ね」

「知っているでしょ？私は強いのだよ」

楽しそうに笑う彼女に幽香は只々嘆息するしかなかった。

ゾクリ。

え、今なんか寒気がしたんですけど。

あらゆる身体の毛という毛が逆立ち、鳥肌が立って俺は思わず身を縮めた。

何か嫌予感がして歩みを進めた。

なんか最近見られているし、嫌だよね。

取り敢えず、気を間際らそうと深呼吸。鼻を通して香る自然の香りに深い息を吐く。

「ん……？」

濃い殺気の妖力。続いて爆音がして俺は何事かと風を送る。どうやら誰かが戦っているようだ。

「ふむ、少しばかり覗いてみようか」

暇つぶしには丁度いいかもしれない。

「こいつは……」

周りの惨劇。地面がえぐれ、焼き焦げた死体がいくつも重なり、そこからへ転がっている。完全に人の手によるものではない。大体、原型も残らずに焼き殺すって、どんな荒業だよ。

なんとか原型をとどめているやつを見ると、妖獣のようだ。ランク的には中クラスに近い下クラスだな。

それにしても、なんだ。この荒い波長は……。

風に乗せて感じる妖力は荒っぽさを残していた。まるで力まかせに鈍器を振り回したような、そんな使い方だ。

妖力から炎への変換はできている。だが、まだまだ荒い。

大体、自然系列。例えば火とか俺の風とか。そう言ったものを扱うのは能力にもよるが精密に操るは結構難しい。

何が難しいってそりゃ世界の自然を操るわけだからね。

俺の【あらゆる風を操る程度の能力】も操るの簡単そうに見えて実は難しいのよ。操れるやつと操れないものがあるし。最初の頃はこがらし凧程度しか操れなかった。

これが能力によるものなのか、それとも妖力を糧に火を変換させているのかはわからない。だが、云えるとすれば、こいつを使い初めて少ししか経っていないだろう。

「っ」

また爆音。どうやらまだ続いているようだ。

気になって近づいてみれば、完全ではないが人の型を成している妖怪と少女が退治していた。

「クソ！何故死なない！何故シナイ！」

「悪いね。私にはアンタは勝てないさ」

爆音。そして巻き上がる炎風。それらが包みこんで妖怪が焼け焦げた。

なんとまあ、グロイ。

到底お子様には見せられない絵が完成したにも関わらず、少女はケロっとしている。

俺は茂みからそつと伺った。

白髪。珍しい髪色だ。脱色したのだろうか？

それに対して幼さを残す身体。見た目15、6程度でありながら、麻の服を着ている。動きやすいように所々短くしたりしている。

到底この時代、この歳の少女が着るようなものではないな。農民、百姓であっても女性というものは大事な嫁ぎ者であるから大事に扱われる。それこそ家族以外に顔を見せてはいけないという風習があるくらいである。

だが、それ以上に。

「……………遣る瀬無いなー」

あれ、うん。なんかダメだ。

顔が違う。雰囲気が違う。目が違う。

あれはもう人の目じゃない。勿論、理性云々はあるだろう。ちや

んと人らしい暮らしもできるだろう。だが、千年以上生きてきた俺の目は伊達ではないだろう。

あまりも

感情が荒い。

妖力が荒いのもわかる気がする。憤怒かな？哀愁かな？取り敢えず、あの娘は色々と大変なモノを抱えているらしい。

「何かを抱え込んでいる女性は好きだけれども……」

なんだかなー。

俺、尽く女性と絡んで碌な事になった覚えが。

「っ！誰だ！」

「……」

矢っ張り、今回も見つかるとは思わなかったけれど、無理に隠れてはしない。



そつと茂みから出て行く。

「や、やあ……」

「……妖怪か」

警戒されないように抑えているが、なんだか妖しい目で見られている。

「えーと、俺は別に君を襲うつもりはないよ？だから、その威圧するの止めてくれないかな？なんだか息苦しくて」

「……」

威圧するよな妖力が消えて俺はふつとため息を吐く。

結構な妖力だったよな。白髪で少女だろ？聞いたことないよな！。

「っ！」

この少女について思い当たる点を考えていると、一瞬殺気が感じられて、身体を後退させる。

今居た場所は発火されて燃え上がっている。すぐに火は消えた。おそらくは山火事にならぬように火をすぐさま消す。

「ちっ……逃げたか……」

「おい！ちよつと！イキナリなにするんだよ」

「五月蠅い！妖怪！」

あーもう！話を聞きなさいって！

「妖怪の話なんて聞かないわ！」

炎が渦を巻き、辺りに俺を囲むように広がる。そして、それらが包む。

「風よ」

この程度の炎ならいくらでも消せる。辺りを突風で飛ばして火を消す。

「死ねえ！妖怪！」

さらに連なるようにして炎が後を断たずに連続して降り注ぐ。地面と接触するたびに爆炎が辺りを包み地を焦がす。

やっている方は気持ちがいいのだろうね。

ある程度。そこらにいる妖怪ならばこれで終わっていただろうが

「女の娘がそんな言葉を使っではいけません」

生憎、俺はそんな柔<sup>やわ</sup>じやありませんから。

「なっ！」

後ろへ突如現れたように感じているだろうが、別に風脚は使っていない。攻撃することに集中し過ぎて周りを観ていなかったからな。後ろを取るの簡単だ。

慌てて臨時体制を取って後ろへ下がろうとするが、そこへ風圧を溜め込んだ拳を顔へ近づかせる。

「甘いよ」

拳を開いてデコピンの要領。風圧が弾けて吹き飛ぶ。

「今のは後ろ下がっちゃだめだな。俺なら前へ出る」

「痛っ」

木に背中からぶつかり、肺が圧迫されながらも痛みを言葉にしなから立ち上がった。

「止めておけって」

「なによ！此の位　えっ」

立ち上がって尚も向かって来ようとするが立ちあがった瞬間に膝から崩れ落ちた。

「な、なんで」

「俺の妖力に当てられたんだよ。デコピン当てた時に頭から流し込んだ。ただでさえ妖力の流れが荒いのには別の妖力を当てたんだ。維持していた身体が持たなくなったんだ」

言いながら近づいて、俺はこの娘を見下ろす。

「無茶しやがって……無茶苦茶じゃねえか。妖力で無理やり動かしていたのかよ」

「……くっ」

またも立ち上がろうとするが無駄だと思っ。

「妖力も荒い、感情に流され過ぎ。疲れた身体を休ませようとしな。無理に妖力で維持しようとする。……いつか死ぬぞ。お前」

「ふん……別に死んだっていいわよどうせすぐ生き返るし」

「ん？な、なんだって？」

「だから、すぐ生き返るって言っているのよ！だから私を殺したって無駄なんだからね！」

「すぐ生き返るって……お前さん、そんな不老不死じゃあるまいし」

「不老不死よ。正真正銘のね。なんか文句ある？」

「……え？マジで？」

「本当よ。なんなら試してみればいいじゃない」

「……いや、そんなことはしないけれども。」

俺はため息を吐いた。

「参ったなーまさかかぐや姫と同じ不老不死とは……通りで死を恐れない戦い方を」

「ちょ、ちょっと!」

俺の呟きに少女が吠えるように叫ぶ。

「い、いまかぐや姫って!あいつの事知っているの!?!」

胸ぐらを掴まれ、顔が近くに映る。

おい、近いって。

「くっ……」

「おいおい、何をそんなに興奮してるんだよ」

イキナリ立ち上がり、怒鳴ったせいか、まだ当てられた妖力で掻き乱されていることを忘れていているらしい。すぐに力が出ずに座り込む。

「あいつ……あいつが父上を……私を……」

呟き、ギリギリと歯ぎしりを立てて少女は唸る。

おいおい、かぐや姫よお前矢っ張りだれかに恨まれているらしいぞ。

ん……………？まてよ……………。

「お前さん、名前は……………？」

「……………妹紅」

「苗字だよ苗字」

「……………藤原」

やや間があり、まるでその名を嫌うようにして吐き捨てられた。

藤原……………藤原不比か！

「たしか、藤原不比は自殺したって……………」

え、何。藤原不比がかぐや姫に振られて、自殺して、んでもってその娘が不老不死になってかぐや姫を追って……………？

……………。

ヤヤコシイナー

「父上は……………あいつに惚れていて……………求婚して恥をかかされて自殺したのよ……………ねえ、あいつは何処よ！教えて！すぐに飛んであいつを殺しに行くから！」

「……………い、いや……………そんなことを言われても」

「そうよね……あいつ、月に帰ったものね……」

「いや、あいつは月に帰ってないぞ」

「っ！？そ、それってどういう」

グオオオオオオオオオオオオ！

妹紅の言葉を遮って響き渡る咆哮。それも一つや二つではない。瞬時に周りを警戒して風を送る。帰ってきた風の噂は周りを数十匹の中級の妖怪に囲まれているという知らせだった。

「見つけタぞ！白髪……女……間違いナイ！コイツだ！」

「ウオオオオオオオオ！仲間の敵ヲ！」

『グオオオオオオオオオオ！』

「こいつら……さっきの奴らの仲間！？」

「相当恨まれているな、お前。妖怪が仲間連れて潰しにくるなんて相当だぜ」

ため息を吐いて、意識を引き締める。ふむ。丁度いい。新技の実験台にでもしよう。

「アンタ、逃げなさい……私は死なないから大丈夫よ」

「おいおい。さっきまで俺を殺そうとしていた奴の言うセリフかよ」

「五月蠅いわね……いいから逃げなさいよ。あ、行く前にあいつの

居場所を教えてから逃げなさいね」

……なんとまあ、死なないからって余裕こいているな。

これが、荒い妖力の原因でもあるのだろう。死ぬという概念がないからこそ、粗末に、大雑把に力ですべてを押し切ろうとする。

攻撃は最大の防御というけれども、それでも限度いうものがある。

「……別に殺せなくても心を折らせば向こうの勝ちだぜ」

「ふん、何回も死んでいるのよ私は。今更何回死んだって変わりはないわよ」

「アホだな。だから殺さなくてもいいんだって」

俺の言い回しになにか違和感を感じたのか、妹紅が眉をひそめる。

「何よ」

「簡単だよ。犯せばいいんだ」

言った途端、妹紅が青ざめた。

それはもう顔の血の気が一気に引いて、死んでいるんじゃないかと思うほどだ。

「お、犯すって……」

「おいおい、わかるだろ？向こうさんには多分お前が死なないって



事はバレている。なら、そういう方法でくるってこともあるわけだ。それにお前耐え切れるか？」

女の人にこういうことを言う俺も相当馬鹿だけだな。大体、妖怪にはそういう概念も持った奴なんて少ないだろう。

せいぜい、延々と殺すか、丸呑みして食べるかどうかしか考えられないと思う。

……………多分。

尚も青ざめている妹紅を見て俺は嘆息した。

「そういう事を考えるのは止めた方がいい。いくら死なないからって逃げる時は逃げるよ」

コクリと、小さく頷く。よほど衝撃を受けたのか、さっきから青ざめたままだ。

「ま、今回ばかりは乗りかかった船だ。俺が助けてやるよ」

そう言っつて前へ出る。妹紅が何か言いかけたが気にせず妖怪共の前まで歩いた。

「ナンダお前！邪魔するなら容赦ハシナイゾ！」

「ごめん、相手が悪かったね。これを機にあの娘は諦めなよ」

「何を言ってる！雑魚妖怪！」

「雑魚妖怪　　？ハテ、誰のことかな？」

ちよつと実験台になってもらつよ。

開放した妖力は突風を起こして奴らをひるませる。それに乗じて俺はすぐに風を集めた。

掌に集める風。螺旋丸をイメージしながらもそれに細かな刃を形成。そして今で以上に風力と妖力を高める。

ちょっと難しいな。

圧縮した風の暴れように俺は掌をプルプルさせながらも、形成を完了した。

ふむ。初めてにしては良い出来だ。

俺の妖力の圧力に当てられて身動きできない妖怪共は格好の的だ。

「螺旋丸改」

見た目は荒々しくなった螺旋丸。だが

「喰らえっ」

投げ出した螺旋丸の圧力を妖怪の前で解放する。

怒涛の音と共に螺旋丸改が爆散して妖怪どもを巻き込む。

「え、えげつねえ……」

自分で放っておいてあれだが、凄まじいな。

地面が深く抉れてさらに、余興として周りの木々がなぎ倒されて切られている。妖怪の死体はもはや肉塊となっている。

勿論、この業は某忍者漫画の技のパクリである。

「さて……」

今の技に怯える妖怪どもを見据えて俺はニヒルに笑って言った。

「ちよいと、実験に付き合ってもらおうよ」

ああ、矢っ張り俺ってもう人間じゃねえな。

そんな時によく思う。

「ま、歩きまわってみればその内見つかると思うぜ」

「ま、そうかな……」

俺の言葉に何か地自信がなさそうに頷く。

「それと、あまり自分の命を粗末に考えないほうがいい」

「……わかった」

幾ら生き帰るっと言ってもやはり何度も死ねばそれだけ心に負担がかかる。当然、痛みもあるわけだからな。

「それと、妖力使う時はあまり振り回すように使わないほうがいい。お前の場合感情に身を任せすぎだ」

「……うん。……なんか、アンタイ良い奴ね」

ははっ……ありがとう。

「こんな妖怪も居るのね……」

「ま、全部が全部悪いってわけじゃないさ。んじゃ、元気でやれよ」

妹紅は頷き、振り返ることなく森の奥へと消えて行った。

さて、後は……。

「さっきからなんだよ。用があるならばっきり言ったらどうだ？」

俺は虚空に話しかける。

当然、視野には誰も映らない。だが

「あらあら、矢っ張りバレていますか」

突如、虚空が割れて女性が現れた。スキマみたいな所から出てくる女性。

女性であることは驚いたが、まあ見られていることはわかっていたし。

幽香の家でもそうであった。なぜか首の後ろ部分がチクチクと痛むような視線を感じていた。先程の戦いもそうであった。

「初めまして。私、八雲紫と申しますわ。さっそくですが……風間大介さん、私の式になってくれませんか？」

……なんで俺が会う女性というは皆面倒くさいのだろうか。

式。

陰陽師もしくはそれを下地にした物語の式神は、和紙札の状態（式札と呼ばれる）で、使用時には鳥や獣等へ術師の意志で自在に姿を変えるというように描かれることが多いが、『不動利益縁起』に描かれる式神は、室町時代から江戸時代にまでの、擬人化された鶏や牛の器物（道具）の妖怪と同じものであり、これは荒ぶる神とし



ての式神をあらわしている。

妖怪が固有のしかも、同じ妖怪を式にするということは聞いたことはないが、つまるところ、俺を従いたいということなのだろう。

「断る」

「あら、こんな美人が頼んでいるのに？式になったら何でもしてあげるわよ……？」

「ぐっ……だが断る！」

危うくその妖しい誘惑に引き寄せられそうになったが思いとどまった。

断る理由？

俺が縛られて生きることが嫌う者であるのもそうだが、なにより彼女は妖しいのだ。胡散くさいのだ。

「随分と、溜め込んでいるのでしょうか？……抜いてあげましょうか」

「何が!？」

「ナニが？」

「うがあああああああ！」

ええい！下ネタ禁止！

俺は妖力を開放して、威圧する。それでもまだケロッとしている所をみるとこいつも相当な妖怪らしい。感じ取れる妖力もそうだが。

あーもう、本当に今日は厄日だよ。

なに、風見、妹紅、雑魚妖怪、そして得体の知れない大妖怪？

まさかの4連戦かよ！

まだ、いけるがそれでも妖力は結構使った。瞬時に勝負をつけるか、勝負をつけなくても逃げ切れれば大丈夫だ。いざとなったらあの転移札使えばいいし。

「あら、戦う気満々ね」

「どうせ言っても聞かないだろ……」

そんな気がする。

「よくわかったわね。その通りよ」

「うがあああああああ！」

断言するなよ！

「でも、貴方。私に勝てるかしら？」

「螺旋丸改（らせんまるかい）！」

問答無用。手加減は無しだ。

すぐさま形成。ノータイムでの溜め無しだがそれなりに妖力はつぎ込んだ。不意打ちに近い一撃は八雲の前まで来て爆散　しない！？

「悪いわね」

スツとスキマが開いて螺旋丸がなくなる。

え、なにそれズルイ。

「ほい」

突如、虚空感。地面に立つという感覚がなくなり、見てみればスキマが開いていた。ギロリと幾つもの目が覗いている。

「っ！」

風を形成、自身の身に竜巻を乗せてそこから脱出。

「なんだ、あれ……」

取り合えず捕まったらまずそうだったので脱出したが、彼女の顔を見る限りそれは正解だったようだ。

「【風を操る程度の能力】ね……変哲もない能力だけれども、厄介だわ……」

なにやら呟いている様子。

「なんだか、よく知らんが捕まるのは御免だ！」

風を形成。圧縮。

「螺旋丸（うずま丸）」

風の脚で飛び出して懐に飛び込む。あとはこいつを

「えっ」

「残念ですわ」

か、風が……俺の螺旋丸が消えた……？

八雲に当たる直前、一瞬で俺の掌から螺旋丸が消えた。

どうなってるの……？

「御免なさい。その能力少々弄らせてもらいましたわ」

「え、は？あ、あれ風が……」

その言語に俺が風を集めようとしてそれが本当なことだと確信させられる。

い、弄る……？つまり

「私の能力は【あらゆる境界を操る程度の能力】貴方と風の境界を弄らせてもらいましたの。つまり、貴方は『今』はその能力は使え

「ませんわ」

「はあ！？なにそれ！」

チートじゃ……チート使いがここに居られるぞ……。

え、どうすんのこれ。俺もう一生能力使えないの……？

「……いや、さすがに長くそれを維持することはできないだろう」

「あら、早速バレてしまいましたか。貴方の能力を封じることができるのはせいぜい2時間程度。でも、助かりましたわ。貴方の今の妖力なら式にするのは少々難易でありながらも不可能というわけではないのですもの」

あとは、弱らせばもっと式にし易くなりますわね。

俺はポケ ンか！

畜生、なんだよこの人。

どうしよう。一応脱出方法はある。だが、こいつを一度ギャフンと言わせてやりたい。

「あら、もしかして私をぎゃふんと言わせたいの？」

「……」

「仕方ないわね」

ゴホン、と喉を整える八雲。

「ぎゃふん（棒）」

「ぶっ殺す！」

あームカツク！俺が妖力が大きいだけのただの妖怪だと思っなよ！

妖力を使って、身体の向上。脚に力を入れて一気に蹴り上げる。

これでも能力を余り使わずに晴明の手伝いしてきたんだ、能力

ばっか頼っている輩とは違う。

懐に飛び込む。八雲が見透かしたように体制を取っているが、甘  
いよ俺はそこから2段でうごく。

勢いを利用して左足を八雲の右に踏み込んでそれを軸足に回る。  
クルリと回って背後を取る。そこへ、掌底を打ち込む。

俺の対応に驚いているのを確認した後に風見の家から頂戴した包  
帯を腕から解いてそれを巻きつけた。

八雲腕に取り付けたそれを引つ張り左足で蹴り上げる。腕をク  
スしてその蹴りを防いで八雲が急いで包帯をちぎった。対応が早  
い。体格や容姿から絶対近接格闘は案山子かかしであると思っていたが。

だけど、俺は甘くないよ。

八雲が包帯をちぎった時からもう俺は八雲の更にも上へ移動してい  
る。回転を加えて踵落とし。

だが、これは避けられる。

「ふっ」

空中では円の動きは難しく、さらに八雲の拳が意外と早かったた  
めに真正面からなんとか防いだが吹き飛ばされて地面に叩きこま  
れる。

「ふっ」

いき詰まる間もなくして妖弾が降り注ぎブリッチの要領からバク転で離れる。

だが、離れる暇はナイ。

すぐさま地を蹴って移動。右拳を突き出してから肘を畳む2段打ちから回し蹴りへ。

「甘いわよ」

傘で弾かれてそれを突きつけられる。完全に体制を崩すことを目的とした技にはまり、崩れる。

そこからまたもやレーザーが。

ただ、これは幽香のマスタースパークとは違い、純粹に力だけの妖力だけの当て技だ。

並の奴ならばここらでこれを喰らっていたらだろうか。

「だれが甘いつて？」

あれは下がれば当たっていた。ここからの近接格闘なんだ。下がったら負ける。

近接格闘の極意は前へ出ること。避ける時も選択肢は前へでること。

崩されたところから身体捻って手を付き、前へ押し出す。



回転して体制整えてそのまま脳天へ

「っ!?!?」

踵落とし。

「ぎゃふん!! (素)」

やった! 本当に言いやがった! しかも今マジだったぞ!

なんか声が可愛かったけど気にしたら負けだね。

後は離脱するだけだから、距離を取る。

「お、女の子を蹴るなんて貴方本当に男なのかしら……?」

「今ので気絶しない時点でもう普通の女の子じゃねえよ。てか容姿的にも女の『子』じゃ　ぎゃあ!」

「女性に対して失礼ですわ」

いきなり飛んで来た妖弾に驚いたが、もうこちとら、ぎゃふんと言わせたのだから用はない。

「あら、どうしたの? もう終わり?」

「へへーん。能力使えないのに、そこまで無理しないぜーだ!」

一枚の札を取り出し、それを八雲に見せつけた。

「っ……！？その札は……！？」

「残念だな。八雲紫。これは転移符と言ってこれで都まで転移できるのだ！」

「なっ……くっ、逃がすもんですか！」

「すぐさま、境界を操ろうとするが、遅い！」

「サラダバー！！」

札に妖力をつぎ込む。次に見えるのは慣れた都の あれ？

「……」

「……」

「……え、嘘」

発動しません！

「ふふ……ふふ、ちょっとそれはっ……ふふ」

扇で口元を抑えて笑いをこらえる八雲。

「あの野郎……不良品渡しやがって……」

「くっ……ふふ……貴方にそれを預けた人は相当な阿保なのね」

と、八雲がそう言った途端に突如札が光りだした。

思わぬ光の強さに俺も紫も目をつぶる。

そうして光が途切れた時、そこへある人物が立っていた。

我が友人安倍清明である。

「なっ……貴方は!？」

清明は八雲の姿を見ると「ふむ……」と息を漏らした。

「なにが、ふむだよ!」

俺はそこへ後ろ頭を叩いた。

「痛っ!何をするのじゃ!？」

「阿呆め!なにが轉移符だ馬鹿野郎。お前が轉移されてどうすんじやボケ」

「阿呆とは何事じゃ!この安倍清明。一生涯を生きて初めて言われたぞ!」

うるさい!畜生め。とんだ物を寄越してくれたな!色々と恥ずかしかったんだぞ!

「まあ、兎に角。今はこいつをどうにかしなきゃな」

「あやつか……」

八雲を見据えて俺は頷いた。目的とはだいぶ違っけれどもこれで奴の式にされることはない。

「あいつ、俺を式にしようとしているんだよ」

「なるほど……我もしてみようかの？」

「お断りします」

だから、俺は誰かに縛られて生きていくのは無理なの！

「形成逆転だな！八雲紫！どうだ、相手は安倍晴明だぞさっさと逃げたらどうだ！」

「くっ……なんで安倍晴明が此処に……それも陰陽師でありながら妖怪である風間大介を援護しているなんて変よ……」

「ま、変に映るじゃろうが、生憎と此奴と我は……し、ししし、親友なのでな……（嬉）」

「おいそこ、何故顔を赤くする」

晴明の言葉に八雲は唇を噛み締めて呟く。

「くっ……さすがに分が悪いか……」

「おう、帰れ帰れ」

さっさと帰ってくれ。そんで持って諦めてくれ。

「……今回は退きますわ。でも忘れないでください。貴方を式にするのを諦めたわけじゃないわ」

諦めてください。

「それではご（ry」

「逃がすと思うか？」

突如、八雲を囲むようにして六芒星が計8つ。完全に包囲されていた。あれは確か、俺にもやってきたやつか。ってか数増えてない？前に喰らった時は3つ程度であった筈だが。

「破道『怪奇破滅六芒星』」

光りだす六芒星と続く爆音。地面が抉れておおきなクレーターを残した。やはり、清明はパワー型なのだろう。それにしても

「容赦ねえ……」

つくづくこいつを的にまわしてはいけないと思う俺がそこに居た。

「ちっ……逃がしたか……」

「……」

どうやら逃げおおせたようだ。まあ、あのスキマがあればね。すぐに入ればいいことだし。

「ま、取り敢えず助かったよ、晴明」

「いや、当然じゃよ。わ、我らはし、ししし、親友なのじゃからな  
(嬉)」

「だから、何故顔を赤くする」

八雲紫かー。もうできれば会いたくないなー

## 8話「妹紅 and 八雲紫」(後書き)

螺旋丸改でありますが、風遁・螺旋手裏剣ではなく、別の名前として扱っていききたいと思います。

そこで螺旋丸改の名前を募集したいと思います。

後にスペルカードっぽく使いたいと思うので語呂のよい名前があればぜひ言ってください。

そこで気に入ったのがあればそれを採用したいと思います。

特になければこちらで頑張って考えます。

それでは、今回もご愛読、ありがとうございました。

## 9話「前途多難」(前書き)

この安倍晴明は正史とは違います。この安倍晴明は正史とは違います。

大事なことで2(r y



## 9話「前途多難」

「今更、思うことなのだが……」

「なんじゃ、唐突に」

「お前、今年で齡幾つよ？」

「ふむ、確か120」

「可笑いよね！？120歳がそんな若々しいわけねえだろ！？」

「ん？言つてなかったかの？我はもう人間ではないぞ」

「……え、嘘マジで？」

「ふむ、妖怪から妖力を吸いとつてこの若さと靈力を保つておるのじゃよ」

陰陽師がそんなこととしていいのかよ、確かそれって禁術なんじゃ……。

俺も陰陽師と伊達に組んではない。陰陽道とか使えないのに無駄にこいつに叩き込まれたからな、だが、これがちよいと面白いもので書物とか漁って結構読んでいたりする。確か、その中にそういった術が書かれていた書物があった。不老の術。その書物には荒々しく『禁』と書かれていたものだ。

「禁術とは禁止されている術であるから禁術とは限らない」

あれ、そうなの？

「中にはそういった類があるが、大抵の場合は誰もできないから禁術なのじゃよ。この術もそうじゃ。いや……誰でも皆、怖いものじゃよ」

「怖い？」

「人間を辞めるのが、じゃ。それにどんな反作用があつたものかわからぬしな。ま、最もな難しさはその術よりも妖怪から妖力を吸い取る方であるが。雑魚妖怪程度の妖力じゃ保てないしのお……術式自体は形さえ正確であれば簡単じゃしの」

確かに、安倍晴明程の実力者なら名のある妖怪であっても負けはしないからな……。

ん、ちよつと待てよ。

「もしかして、お前、俺からも妖力を吸いとっているわけじゃ……」

「できるわけないじゃろ、お主程の大妖怪を相手の意志に反して行おうとすれば逆に我が痛手を負うわ」

「そうか……ま、言ってくればいつでも与えるけどよ」

「ふむ、それは助かる」

それにしても、そうかー人間辞めたのか。

「だから、名前も変えたのか」

「ふむ、安倍晴明の子『安倍泰成』としての。じゃが、今更ながらこのことに気がつくとはお主は相当な阿呆であり馬鹿ものじゃの。……だから女に鈍感と言われるのじゃ」

う、うるさい！こちらら、千近く生きているせいもあって内的時間間隔がおかしなことになってるのんだよ！

「まあよい、それよりも上皇の屋敷へ参るぞ」

「上皇？なんでまた」

上皇について呼び捨てなのはさておき、上皇の屋敷でふと思い出す。そういえば、あそこに玉藻前がいるんだよな。

「ふむ、上皇が倒れたという知らせを受けてな、我が招聘しょうへいされたのじゃ」

「なんでまた、医者は？」

「どんな薬を与えても治らんみたいでの、もしかしたら妖あやかしか霊の類しれぬと、陰陽師の招聘が出されたのじゃよ」

「なるほどね。んじゃ、とっとと終わらせようぜ」

ふむ、久方振りにアイツに会えるかもしれないしな。



上皇の屋敷へと入った俺たちは早速上皇の寢床へと案内された。床に伏せている上皇の顔色は悪く、なにかと咳をする容態であった。しかしながら、熱は無く、ましてや吐き気などは起こらないようである。

だが、その顔は蒼白であり、最近では1人でも歩けないようである。

精神的な病気ではないのか？

「上皇様。安倍泰成が来ました」

従者がそつと耳打ちするように声に出す。

「おお……そうか、泰成殿、貴方が今一番と噂の陰陽師か」

「はい、そつでいびいます」

「わざわざご苦労であった」

言いながら咳をする上皇。やはり辛そうである。そうして落とされた視線を元に戻して視線が俺に映る。

「この者は……？」

「せ　ゴホン、泰成様の従者であり、お手伝いであります。名を風間と言ひ、畏れながら『神速の風』という二つ名で呼ばれております」

「おお……噂の、風間一家の子であつたな……」

風間一家　？

あ、そういえば俺も『風間』の子として居るんだっけ。

「泰成殿……早速であるが診断してくれないか。どの医者に見せてもダメなのだ」

「では、失礼致します」

晴明はそつと上皇の元へ膝を付きそつして額に手を添えた。

「ど、どうだ……？」

「……わかりました」

何かが納得したように頷いて晴明は上皇の額から手をどける。

「な、なにがわかつたのだ……？　私は治るのだろうか……？」

「……上皇様、お尋ねしますが最近契を交わされたらしいですね？」

あ、マズイかも、あいつ気がつきやがった。

てか、もしかして、もしかしなくても上皇が病気なのは……。

「その通りであるが」

「恐れいりますがその者をここに呼んでももらえませんか？」

何が、なんだか判らぬままに大人しく上皇は従者にすぐ玉藻前を呼ぶように指示する。

あ、これ確定したな。

「はい、なんでしょう　っ!？」

すぐに玉藻前がやってきてすぐに俺と目があう。見開かれた視線が俺に突き刺さるが、俺は小さく首を振ってその視線を受け流す。玉藻前もそれに気がついて視線を上皇へと移した。

「ふむ、こちらは陰陽師である安倍泰成殿じゃ、お主に用があるらしい」

「ご愁傷さまです。玉藻前。」

「な、なんでしょうか……」

少し、怯えたような表情を見せる玉藻前であるが、反対に晴明の目がスツと細くなり少し笑みを浮かべた。

「隠し通せると思ったか？」

「　　っ!？」

完全に玉藻前は狼狽し、若干腰を引かせてながらも表面上は笑みを浮かべてみせた。

「な、なんの事でしょうか」

「上皇様の病気の原因は貴方にあるのですよ、玉藻前様……いえ、妖怪さん」

途端に玉藻前の姿が狐と化す。その大きさは牛程度。そしてその尾は　　9本。

「逃がすと思うか」

印を組み、結界を張ろうとする晴明であるが俺がすぐさま止めて晴明を弾き飛ばす。その間、晴明の居た場所は炎が立っていた。

「く　　」

その隙にまんまと逃げた玉藻前。俺は立ち上った炎を風で上手く消して息を吐いた。

「逃げられた……」

晴明にしては珍しく舌打ちを打っていた。





その後、玉藻前の正体が化け狐でありその妖気が上皇の身体を蝕んでいたことを知るとそれはもう、暴れる獅子の如く怒り狂った。玉藻前が居なくなつた途端に元気になるものだから、その身を持つてその原因を確かめてますます赤くなり、唾を飛ばしながらすぐに九尾の狐を討伐するように命じる。武士を大勢用意しろだの陰陽師を5千人雇えなど無茶苦茶なことを喚いて兎に角、慌ただしかった。

晴明も晴明でなにやら苛立っている様子であつた。理由を尋ねると

「狐は嫌いじゃ」

と頬を膨らませていた。

狐に何の因果があるか知らんが俺としては玉藻前の方が気になるな。

狐と化して表情は読み取りにくいものであつたが、玉藻前は……少しだけ悲しい顔をして居た。

「まったく、なんでこう、俺が会う女は」

誰も面倒くさく、何かを抱えているのだろうか。

何かを抱えている女性は好きだけれども、限度というものがあり

まして、しかもそういった意味合いは小さな秘密を持っているミス  
テリアスな女性でありまして……八雲紫？あいつは論外だ。

ミステリアスと胡散くさいは全然違うからな。

「しかしながら、壮大だな」

見えるのはたくさんの兵。

この時代、平安とは言えもうすぐ鎌倉である。武士というその存  
在が確立してきているのである。

九尾討伐に三浦介義明・千葉介常胤・上総介広常3人の將軍の導  
入、軍師に晴明が入った。俺といえば將軍3人のお手伝い。

東国の下野しもつけという場所に目撃情報が入ったために森の中を進軍中  
である。

「……」

「なんじゃ、元気ないではないか」

いやねーこつちとしては少し複雑な気分なのですよ。

「同僚の誼よしみか？じゃが、我とお主とで数多の妖怪を退治してきたで  
はないか」

なにを今更、と晴明は言う。

「……いや、そうなんだけどもね」

「……なんじゃ、あやつに惚れたのか？」

「ありえん」

少し、低い声で尋ねてきたのに対して俺は即座に否定した。

「ただ、少しな」

「ふむ、惚れた云々でなければ我としては安心しておるが……気が進まぬなら下がってよいぞ」

「いや、やるよ」

ウダウダ言ってもらえないしな。

「なら良い。お主にはあやつの妖術の対処を任せる」

「別にいいが　あー確かお前、妖術得意じゃなかったな」

「不得意ではない、嫌いなだけじゃ」

実は天下の安倍晴明はあろうことか、妖術といった幻覚、幻聴、幻視という妖術の類が嫌いなのだ。本人曰く、それらを魅せられた場合、対処に手間がかかるという。

幻覚云々の妖術なんて気合でどうにかなるものなんだけどな！。

ま、晴明も人の子不得意、得意というものはあるのだろう。

「しかしさ、言っではなんだがこの人数は些か多すぎやしないか？」

「この人数で戦おうとは思わぬよ、我としてはお主と我で十分と思うがの、上皇が聞かんのじゃ。……ま、捜索用に動員すればよかる」

「將軍3人は？」

「あやつらも誇りがあるからの……些か面倒くさいが立ち会わせるとしよう」

搜索開始から1刻が経ち、偵察に出ていた武士から九尾の発見を受けて晴明と俺は動いた。

「グルルルルル……」

見つけた九尾は全身の毛を逆立ち、威嚇してその濃い妖気を当てるように手向けていた。

「下がれ、此処からは我らが殺る」

九尾の妖気に身を震わす武士たちの前に立ちはだかるように晴明が前に出た。ま、人としてあの妖気はキツイものがあるのだろうよ。

「し、しかし！私らも武士として」

「妖怪に対しての玄人があ言ってるのんだ、下がったほうがいいぜ。……死にたくなければな」

俺の一言にぐうの音も出ずに將軍らは押し黙った。あの妖気に負けじと威圧するように清明の出す靈力を感じ取ったのだろう、大人しく下がり始めた。

「それにしても……」

すごい、修羅だな、此処は。

清明の靈力、九尾の妖力がぶつかり辺りの木々がざわめき、地面が揺れる。

まるでドラゴンボールだな、と思い始める。

俺も清明の横に並んで九尾を見た。

「すごい妖力じゃな」

「まあね、俺程じゃないけど」

「それはそうじゃが……」

尚も威嚇する九尾。

前に一度会った限りではそんなに悪いやつではなかったように思えた。それが偽りであり、上皇を狙って来たものとは考えにくい。俺はそつとため息を吐く。

最初に動いたのは九尾であった。

人間の姿の時は想像できぬほど妖怪らしい咆哮を上げた後に辺り

が一変した。

辺りに狐火が上がり、グニヤリと世界が歪んだ。

「っ  
」

晴明が息を飲むのがわかる。

グニヤリと曲がった世界は廻り、廻り、そして身体に激痛が走る。見ると腕吹っ飛んでいた。腹からは臓器がはみ出てそこから蟲が沸いて出た。

悲鳴が上がり、耳を劈くような女性の声が脳に直接響かせる。

晴明を見ると晴明の身体がまるで溶岩のように赤く変色して溶け始めて、やがて居なくなつた。

ふむ……幻覚、幻聴、幻視に続いて痛覚も操れるのか。手馴れているな。これを習得するのに何百年掛かつたやら。

相変わらず廻る世界で時々見える九尾は動物の姿であるというのに晒わらっていた。

再び激痛。廻る世界に飽きていよいよ気持ち悪くなっているのにまたかと思ひ見ると左肩口からバツサリ斬れていた。そこから蟲がまた出て来る。

その量はハンパでなく腹の臓器から、肩口から覆い隠すような量の蟲が出た。顔に、肌にも口に、耳にそれらが入ってくる。



それらを体験すれば人であるならば発狂するであろう。あの晴明が苦手というのもわかる。精神を殺らればどんな優れている妖怪も、陰陽師も無力だからな。

彼女が強いというのはそこにあるのだろう。

並の奴ならここで終わっているのだろうか

「生憎、俺はちょっと可笑しな妖怪だね」

こう云った類の妖術は経験済みであるのよ。

「齡2千年を舐めるなよ、九尾」

俺は、蟲に埋もれながら、手を動かす。感じるのは蟲の気持ちの悪い感覚ではない。手を翳<sup>かさ</sup>して感じるのは『風』だ。

瞬間、世界が割れた。

視界がさつきまで居た気持ち悪い世界ではなく元の世界だと感じ  
て俺は周囲を見渡す。幻視などの妖術は人それぞれ視えるものが違  
う。反応はさまざま、呆けたように立ち尽くすものも入れば狂った  
ように叫び声を上げるものもある。

俺に対しては殺気混じっていたから少々グロイものであったが晴  
明に関してはそれはもうボロクソ泣いていた。苦しく嗚咽も漏らし  
ガクガクと震えていた。

なんか、ちょっと……。

まさに地獄。將軍三人に至っては完全に壊れかけている。その様  
子をニヤニヤと見る九尾。

流石にマズイと俺は首飾りの玉を外して妖力を開放した。

風に乗せて、全員に俺の妖力を当てて堕ちた意識と心を引っ張る。

所謂ショック用法だ。

晴明には近づき、その頭に手に乗せて送り込んだ。

「っ　！？か、かざまぁ……………」

「大丈夫か、お前」

「わ、『私』は……私は……」

「ああ、もう、天下一の陰陽師が妖術苦手って洒落でもなんでもなかったのかよ……もういい。お前休め」

そう言っただけは立ち上がって九尾を見た。

「な、何故だ何故お前は私の妖術が効かない!？」

「あー悪いね。もう妖術には飽きる程喰らったことあるんだよ。そこから生まれ得る経験というものありましてな」

「け、経験？経験だと!？私以上の妖術を持つ妖怪など、居ない!」

「実はね、居るんですよ」

その人、すごいおっかないのよ。コレが。

「ふん!そんな嘘よくも」

「俺の師匠であり、一番の呪者。『卑弥呼』だよ」

俺もあの時はやんちゃであつたな!。

能力がだいぶ扱えうようになったから調子に乗って色々やっていたら師匠が突如現れてな、一気に退治仕掛けられたのはいい思い出。

何故かその時気に入られて弟子として妖力の扱い方、能力の繊細な扱いと応用を教えられたり、師匠と手合わせしたり。

「ひ、卑弥呼……！？確か……邪馬台国の女王ではないか！？」

あれ、よく知っているね。魏志倭人伝とかしか書いて無いはずだが。

「ま、師匠はそれまたスゴイ人でね。妖術とか呪術とかスゴイんだよ。俺も何回も喰らっているからさ。だから『経験』って言うっているんだよ」

「くっ」

「ま、お喋りはこの辺にしようや」

言いながらスツと構える。

「悪いな、俺も仕事なんだ。願わくば死なないでくれたら助かる」

手加減はできそうにないぜ？

「ふん、舐めるなよ。私とて伊達に九尾を持っていない。妖術が効かずともお前程度に負けはしないっ！」

「そうか、じゃ、手加減はなしだな」

「っ　！？」

瞬時に後ろにまわり、そのまま拳を玉藻前に当てた。後ろへ下がって威力を相殺した身を空中で整えて玉藻前はそのまま尾を槍の如く伸ばして俺に突き刺そうする。

「よっ」

9本の尾が自在に鞭の如くしなり、俺を追尾する。

風を形成して尾を巻き込み、身動きを封じたところを掴んだ。

そのまま投げ出そうとして手を離す。

九尾がその尾を狐火を灯したのだ。如何に俺であっても熱いものは熱いし、痛いものは痛い。ちよつとやそつとの火傷では済まされないであろう温度であっても玉藻前は依然としてその尾に炎を灯したままだ。

尾を振るって狐火を放つ。

見極めて避けようとするが、追尾してきた。

「面倒くさいな！」

突風で廻りを吹き飛ばして、狐火を消すがその間に懐に飛び込まれた。

俺を肉薄して鋭い爪で胴を切り裂いた。

衣服が破けて胸に爪の後が残るが半歩下がったために掠り傷となる。紙一重で避けた後に前へ出ると九尾が下がった。野郎……完全にヒットアンドアウェイ戦法じゃねえか。

玉藻前が咆哮を上げた。妖力を纏った音が俺の耳を通し、脳に直接響いて一時的な麻痺を生み出す。

威圧かなにかだろうと思っていたが、すぐにその考えを訂正する。

妖力が、かき集められて、玉藻前の前に集まる。それはまるで。

「っ！」

慌てて、風の刃を形成して擦り斬るように俺は自身を傷つけた。それにより感じ取れる痛覚で脳の麻痺から無理やり脱出して回避行動へと移る。

神速で動いてみれば、轟音が響いた。

続けて上がる砂煙となぎ倒される木々の音。

見てみれば晴明の不知火以上に大きな溝を産んでいた。

洒落にもならん。

「ギャシャアアアア！」

さらに、二発目。今度は溜めなしのノータイム。短いショットのように飛んでくるそれを前へ飛んで避ける。ノータイム、溜めなしでもあの威力だ。俺の螺旋丸並にあるのではないだろうか？

晴明の不知火こゑひ以上は確実にあるな。

九尾であるのだから、妖力的にも強いとは思っていたが、予想以上に手ごわい。

妖術だけが秀でていたのではなく、総合的に考えて術に無駄がない。

妖力も並行した波を感じられるし密度が濃い。

「くう……!？」

隙間の無い弾幕のような妖弾が襲い、避けきれないとみると俺は風を盾にそれらを防ぐ。だが、一つ一つが重い。やはり、密度が濃いと受ける感覚も違う。

妹紅のような隙間だらけの炎とは異なる九尾特有の狐火も厄介だ。

《追尾》とはよく云ったものでまとわり付くような感じがどうにも厄介。俺は基本、近接格闘で戦うスタイルであるために、こう云った細かい弾幕はどうも苦手である。

近接なら細かく立ち回れる。避けることだって同じことである。フットワークを鍛えているからであるが、玉藻前のように細かく、重たく、追尾機能がある妖弾なんて打てはしない。

こちらが接近しようとするたびに濃い弾幕が飛ぶのだからたまったものじゃない。風の脚で接近しようにもそもそも弾幕が邪魔をする。

「なら　　!」

ここは一気に決着けっしょうを着ける！

濃い弾幕をも凌駕するスピードを　　！

「螺旋丸らせんまる」

掌に螺旋丸を形成。螺旋に回る竜巻の球体を握り締めるようにして、その力を内包していく。

風が暴れて、辺りに暴風が吹き荒れた。

「掌握コネクト」

内包的に結合された螺旋丸の力が内側からその力を全身に送り込まれるような感覚と共に神経が研ぎ澄まされていくように感じられた。

この技も某魔法ファンタジー漫画のパクリであるが、一応技的には理にかなっている。

俺の力は【あらゆる風を操つる程度の能力】である。俺の身体的能力はこの能力を使って、外部からの補助によってなりたっている。【風の脚】なんかがいい例だ。

しかし、純粋な身体的能力に関しては内側の妖力を全身に送るところでその身体能力を向上させている。

そこで、思ったのだ。

外部で作られた【補助】を内側に持ってきたらどうか、と。イメ



「ジ的にもあの漫画が一番であったためにそれを使用したわけだ。

「行くぞ！」

地を蹴る。

風の脚の何倍ものスピードで接近して俺は玉藻前の背後を取った。

「螺旋丸」

ノータイムの溜め無しであるが外部で作られた力をそのまま活用しているので俺の妖力も上乘せされている。感覚や神経なども研ぎ澄まされているために繊細な技の構築も一瞬だ。

「この程度！」

振り向きざまに一撃。

槍のような尾が俺を突き刺す。

「だが、残念。それは残像だ」

さらに背後をとる2段構え。抜かりはない。

「螺旋丸」

激しい竜巻と共に九尾の身体が木々をなぎ倒して吹き飛んだ。

意識を覚醒させた。

「……」

重い瞼を開くのに時間が掛かった。重くだるい瞼を開けるとそこは知らない天井であった。

「……？」

微かな木造の匂い。畳の独自の香りをかぎながら、そこがいつも見慣れている屋敷の天井でないことを再度認識して玉藻前は廻りを見渡した。

古い倉庫のような狭さでありながらも生活感が溢れていて意外にもキッチンと整理されていた。

6畳半の部屋がその家すべてとなっっているらしく、片隅には書籍が積まれていた。

「……ん」

身体を軽く起こす。

「っ！？」

そうして感じる頭痛と身体の節々に感じる激痛が玉藻前の身体を刺激して止も終えずそのまま寝そべった。

仰向けに倒れてぼーっと天井を眺めているとその鼻腔に良い香りが漂う。その匂いを嗅ぎ自分が腹を空かせていることに気がつく。

「起きたか」

声がして、大袈裟にも玉藻前は肩をあげて身を硬くした。

見てみると、見知った顔が一つ。

「風間……大介っ……！」

「気分はどうよ」

手にもつお盆に香りのよい飯が玉藻前の置かれる。その視線がそれに映らず一点風間の目だけを威圧するように睨むようにして見た。

「お前がっ！どうして……！」

「どっしてっ……ね？」

肩を竦めてみせる彼の目はなんとも言えない顔をしていた。その瞬間に玉藻前が動く。鋭い爪を風間の喉元に突き立てた。左腕で奴の胸倉を掴み、その右手の爪で首を突き立てる。

柔らかく肉に喰い込み地が一滴静かに流れた。そのまま突き立てれば首に穴を開けることができるだろう。

「へえ……まだそんなに動けたのか」

「生憎、私は柔やわじゃない」

「……ほい」

風間の指が額まで近づいた。思わず私はその爪に力を込める。

パチン。

軽く音がして何をされたのかと思った途端に身体に激痛が走った。思わず声に漏らして身体を埋める。

「貴様……！何をした！」

「何って……ただのデコピン」

でっ……？

「ともかく、ちょっと刺激を与えただけでそれだ。あまり動かないほうがいいぜ」

「ふん、こんなもの……！」

再びデコピン。

「きゃん!？」

思わず声が漏れて玉藻前はついに地に伏せた。

「大人しく寝とけ。仮にも俺の【螺旋丸】（ひらせんまる）喰らったんだ。肉体が逝かれてないだけで運がよかったと思えよ」

そう言われて、玉藻前は再度思い出す。

そうだ、確かこいつにヤラれそうになり、慌てて自らの妖力を玉に込めてそれを身代わりとし、逃げたのだ。

だがこいつに喰らった技が効いていて山に入ったところで力尽きたのだ。

「何故、私を助けた……？」

思えば、仕事と称して妖怪の身でありながら陰陽師の手伝い事を行っような輩だ。大方、前に会った時もあの安倍泰成とかいう陰陽師の差し金だったのだろう。

もしま……私の身体が目当てなのだろうか？

玉藻前とて、三国を渡りその美貌で多くの男性を魅了した女である。この身体を目当てに迫ってくる男など数多と居る。

同じ妖怪でもそうであった。放浪するとき何回鬼に攫いかけられたか。

だから、きつとこいつもそうなのだろうと玉藻前は推測する。

もし、そうなら相手するふりをして絞め殺してやろう。いや、実際に抱かせて眠ったところを殺すのもいいだろう。そこから妖力を得るのだ。妖怪の精力というのは大きな妖力も交じる。こいつの力を物にすれば自分に負けなど無いほどの大妖怪と化すことができる。

「うーん、まあ強いていえばね。同僚の誼よしみかな？」

ふん、そんな嘘誰が信じられるか。

「……ふん、まあいい」

玉藻前は素っ気ない態度を取って置いて内心で舌を出す。今に見ている、風間大介。お前の最後は近いぞ。

結果から言うと、まったくもって風間は襲ってこなかった。

怪我が完治するまでここに居ても良いと言われてこの小屋に住んで居たのだが本当に、全くもって。逆に女のこちらが怒りたくなるほどである。ここまで蔑ろにされると女性としてのプライドが立たない。

動けないこちらを何時襲ってくるのだらうと、身構えて一晩待ったとしても来ない。拳銃にはこの家にすら帰ってこない。聞くところによると外で寝ているらしい。

ならば色仕掛けと、外で寝てもらっては身体を壊すと、中に入れてもひとつしかない布団を私に使わせて自分は壁に背中を預けて座って寝ている。

それでは悪いと同じ布団に入ることと勧めると最初は断っていたがこちらが強くと勧めたことと同じ布団に入ったとしても、何も起きない。それどころかすぐに爆睡である。

阿呆か、馬鹿なのか。

男なんて誰も野蛮な獣と一緒にするのはないだらうか？

こちらから襲つことはできるだらう。だが、それは負けた気がして嫌である。向こうから、発情して襲われなければならないのだ。

それは、玉藻前にとってはプライドであった。

3国をわたって、自分の身体が美貌であると自負するのに、風間としては興味がないらしい。



そんなことはありえない。あり得ないのだ。

なんだかムカムカと来て玉藻前はため息を吐く。

もしかしたら ？

「なあ、風間」

「なんだよ」

「も、もしかしてお前は……男に気があるのか？」

「ブウウウウー!？」

飲んで居た茶を思いっきり吹いて、風間は鋭い目つきで玉藻前を見る。

「お、お前なんでいきなりそんな……」

「……お前が、いつ襲ってくるのではないかと震えながら夜を過ごしていたんだ。だが、10日経っても一向にその気配がないから、そういう気があるのではないか、と」

「……阿呆か。俺にそんな気はねーよ」

「だが、実際安倍泰成とは良い雰囲気であつたでないか」

「……だから、違つて。ただ単に長く生きすぎて、理性が掠れちゃったんだよ。睡眠欲、性欲といった理性は止めようと思えばいく

らでも止められる。流石に、食欲は無理だが」

そんなものなのだろうか？と、玉藻前は首をかしげる。自分ももう4百年くらい生きてはいるが妖怪であっても人の形を成している限りそういった生理現象、理性というのは止めようと思っても止められるものではない。

「それに、さ。相手の気持ちを蔑ろにしてまで自分の欲求を満たすうとは思わないよ、俺は」

なんだか、私は誤解していたようだ、と玉藻前はため息を吐く。

結局、こいつは馬鹿なのだ。阿呆なのだ。

妖怪のくせにしてとんだお人好し。その強大な力を見せようともせず威張ることも無い。妖怪からしてみれば、それはとてもふざけたことであり、苛立つことである。

妖怪は畏られてその力を保つことができる。極端に畏れられなくなった妖怪は例え強大な力を持ってしても消えてなくなることが多い。

だと、言うのにこの男は畏れられずともその妖力、存在を維持している。

必死に修行して、力を蓄えて生きてきたこちらの身としてはその頭を力手割りたくなるほどだ。

文句の口でも開こうとした時

「待て、お客だ」

静かに、鋭い声で玉藻前の口を抑えた。

その狐の耳で音を拾ってみると確かに足音が。それもその数は百を超える。

「まさか、バレて……!!」

思わず声に漏れるが風間の顔は依然厳しいものだ。逃げようと腰を浮かせた所、1人の人物が風間の家に入ってきた。

安倍泰成である。

「どうした、こんな夜更けに」

「……」

「随分と、武士と部下を連れて一体何事だよ」

俺の問に無言で返ってきて月明かりから視える晴明の無表情なものであった。チラリと玉藻前を確認したが依然、その顔を保ったままに数十秒の間を置いて晴明が口を開いた。

「風間大介。お主を 封印する」

……ふむ。

玉藻前が驚愕の目で見る視線を受け流して俺は考えた。

どう感じても茶を飲みに来たわけじゃないと思っていたが封印か……。

「上皇様の命令書じゃ」

懐から巻き物を取り出して晴明はそれを読み上げる。

「風間大介。風間一家という名目の元、安倍晴明の代からの陰陽師

の助手でありながら、その正体は妖怪であり、この度をもって陰陽師のよる討伐及び封印を命ずる」

「お、おい待て！お前、風間と仲良くやっていたのではないのか！？」

叫ぶように玉藻前が声に出す。だが、無表情なままで晴明は構わず書を読み上げる。

「陰陽師。安倍泰成を軍師に陰陽師すべてを総動員することを命ずる」

「お前と風間は古き友ではないのか？いつも一緒であったのではないのか！？」

「また、武士を二百ほど動員することを許可する。九尾討伐の際の3将軍も同行することを心得よ」

「お前らの噂は宮中まで届いていた！2人はいつも一緒に彼らの絆は海よりも深いと！」

「妖怪という存在は根絶やしにしなければ都の、民の安全と安心を守れない。良い結果を待っている。……以上じゃ、これより風間大介の封印を」

「おい、安倍泰成！お前は！命令されただけで親しきものを殺すような事をする輩なのか！？」

ピクリと、晴明が動き。今日この日。初めて表情を見せた。

「黙れ！！化け狐！！お前に【私】の何がわかる！？」

その迫力。その威圧。霊圧。

数多の戦いをくぐり抜けた晴明のそれは俺の家がその圧力に地震のように揺らす程であった。そこらの妖怪や人であるならばそれだけで意識を手放すような威圧であったが、玉藻前は九尾だ。大妖怪である彼女はその威圧に一瞬肩を揺らすがそれだけであった。

そんな玉藻前の肩に手を置いて俺はため息を吐く。

「脅されたな」

「っ……！」

「大方、俺を討伐しなければ妖怪と仲良くやっていたことを理由にお前の門下である陰陽師をお前も含めて殺しにかかる、とでも言われたのだろう」

あの野郎も、大概だよな。

「……上皇は九尾の一件以来、妖怪という妖怪を討伐しろと躍起になっている。お主は九尾の戦いの時に妖力を使ったから」

バレたか。

「お、お主を式にすることを提案したのじゃ。強力な存在であるしなにかと便利であると言ったのじゃが」

「陰陽師が妖怪を式する、なんて前代未聞。それ以上に矛盾しているしな」

加えて上皇の妖怪嫌いときたものだ。

俺は再度ため息を吐いた。晴明には事実上陰陽師を広めるという目標があるし、人質を取られたようなものだ。俺が苛立って上皇を殺しに掛かっても下手に都を混乱に落とし得るだけ。晴明に関しても同じ。

陰陽師に関してここまで強気な発言の上皇の肝っ腹には敬服するが人質云々は関心しないな。

清明を見た。

その面は無表情を貫いているが微かに震え、そして今に泣き崩れ  
そうである。

門下か、俺か。

その二択を迫られた清明の心境は如何にして非道いものだろう。

なら、簡単だな。

「……俺を封印しろ」

「……」

「なっ！」

ビクリと清明の肩が跳ね上がる。

「お前……！正気か！？」

「ああ、人質を取られちゃね……お前も逃げる。そこに隠してある  
隠し通路から奥の山に出られる」

玉藻前が唇を噛み、怒りを顕にした。

「お前は妖怪だろ！人間如きはその生命を失うことなど」

「玉藻前。こいつは俺の親友だ」



「　っ！……もういい！知らん！お前なんか知らん！封印でもな  
んでもされる！」

玉藻前とて齒がゆく、そして悔しいのだろう。

妖怪という存在がたかが人間如きにその生命を投げ出すなど妖怪  
失格なのだ。

同じ妖怪として、俺がこいつを気に掛けるように同じ同僚として  
玉藻前も俺のそんな状況に気に掛けてくれたのだ。

「私に行く！世話になった！」

「ああ、元気でやれよ」

声を荒らげながらも律儀に礼を述べた玉藻前に俺は思わず微笑ん  
だ。

「お前は阿呆だ！馬鹿だ！」

「ああ、知ってる」

「人間如きにその生命を投げだすなど妖怪として失格だぞ！」

「知ってる」

「私は同じ妖怪として　！こんな奴に負けた私が恥ずかしい！」

「そうかい、それはすまなかった」

そうして訪れる沈黙は随分と長く、一分とも一時間とも思える沈黙は玉藻前によって矢張り破られた。

何か言おうと口を開きかけて、やめて俺と晴明にタツプリと殺気をぶつけた後にクルリと背を向けて裏口の隠し通路の扉に手を掛けた。

「……じゃあな玉藻前」

「……ふん」

鼻で返事をして玉藻前はその姿を消した。

「んじゃ、まあちゃっちやと始めてくれよ」

晴明にそう促して俺は晴明の前に立つ。晴明は俯き、その顔は着いに無表情を突き通すことができなくなりつつあった。

「……わかった」

「余計な術式なんて組むなよ。何年後かに出られる術式とか。どうせ都の有能な陰陽師が術式確認しにくるんだろ？」

「ああ、そうじゃ」

頷き、晴明はその手を動かす。ゆっくりと印が組み始められる。

「後、お前もう妖怪から妖力を吸いとしてその身体を維持するのは止める。俺がいなくなった良い機会だ。これからは人間らしく生きるよ」

「……ああ、お主もいなのだじゃ。これ以上長く生きても仕方あるまい……」

その印がやがて複雑になり始めてその指を加速されていく。

「お前の夢。絶対叶えるよ」

「精進する」

印がその形を成しつつあると辺りに光があふれた。六芒星が浮かび上がり、そうして妖力が引つ張られる感覚が襲った。

辛い。辛いが声に漏らさず顔にも出さず俺は晴明を見続けた。その指が印を組み完成するまでこの視線を外すことはない。

「風間……」

「なんだよ」

「怖いか……？」

今更だな、と俺は盛大に笑った。

「怖いか、うん。めちゃくちゃ怖い」

「っ！」

俺の言葉に大袈裟にも肩を震わせる。

「すんげー怖いけどさ。だけど、なんか平気なんだよ」

俺も判らない。怖い。自分の命が引つ張られて圧縮されて無茶苦茶にされるような感覚が先ほどから駆け巡っていた。それは幻覚などではない。何年経っても命が終わるといっのは慣れない。

慣れてはいけないと思うが。

だけでも、平気なのだ。

「封印だろ？いつか、出られるかもっていう期待もあるけれども。それよりもさ、お前に封印されるからかな？ちよつと安心できるんだよ」

印が、組まれた。

思いつきり引つ張られて俺はそれでも声に漏らさない。だが、さすがに顔を歪めた。

やがて引つ張られるような感覚がなくなると辺りが光に満ち溢れた。

不思議と心地良い感覚に身を委ねながら足場消える。否、足場が消えたのではなく俺の足が消えているのだ。徐々に下から光と溶け込む俺の身体。時間はもうない。

「清明」

これだけは言っておこう。

「ありがとうよ。結構楽しかったぜ」

「かざまあ!!」

晴明の顔が崩れて、涙をボロボロと流す晴明。そうして近づいてきて

唇に温かい感覚を感じて俺は目を見張った。

晴明の顔が近くに映る。

……しょっぱい。

キスは涙の味がした。

それを確かめた後に俺の意識は完全に途絶えた。





安倍晴明は女であった。これはこいつと共に仕事をこなし、仲良くなって気がついたことなのだが俺も大変驚いた。なにせ、正史とは違うからな。

安倍晴明は人間と狐の間に生まれた子であるらしい。父の名は保名。母は信田の森の狐で、保名に助けられたのを恩に感じて人間の姿に变じ葛葉姫と名乗って保名に嫁ぎ、晴明を産んだ。しかし姫は、のちにその正体がばれてしまい、森に帰っていく。

恋いしくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉

という歌を障子に書き残して。そして晴明が成長してから森に母を探しに行った所、狐が現れて竜宮の秘宝の水晶の玉を授けた。晴明はこの玉により世の中のできごとを全て知ることができた。

晴明が理を知り、その天才ぶりを示した原因もそれにある。

狐が嫌いとするのは母の憎悪ではなく、母を恋しく思った父が狐を見ては号泣する様を見てから来たものらしい。

水晶玉を手にした晴明はすっかりと人の気を無くした父と自分の食い扶持を稼ごうと陰陽師として働くことを決意するわけであるが、当然と晴明は女である。当時女が働くことを。ましてや聖なる仕事であり妖怪と戦うこともあり得る危険な仕事である陰陽師に女が成ることなどあり得なかった。

だから晴明は男として生きることを選んだのだ。

髪は長くともその時代は普通であったし髪は伸ばすことはできていてもどうしても成長する胸は男物の服を着てもうまく隠せない。

だからさらしを巻いたりしたらしい。

何度かバレそうになることもちよくちよくと合ったらしいが俺が晴明を女だと知ったときから融通を効かせてやったからだいぶ楽になったとか。

とにかく、安倍晴明は女である。

故に俺にキスしてもなんらおかしくはないのだが……。

まさか晴明の奴が俺に好意を持っていることなんてちっとも判らなかつた。理性が薄れているのが原因なのかどうかはしらんが、最後に途轍もない置き土産を残してきたものだ。

俺はどうだろう？

確かに、清明の事は好きである。美人である。スタイルもいい。だが、そこに「異性として」となると「うん」と首を捻ってしまふのが現状である。

一見ヘタレと思われるかもしれないが、何度でも言おう。理性が薄れているのだ。判らないのだ。

「まったくなんでこう、俺が会う女性は」

誰もが面倒くさく、なにかを抱えているのだろうか。

「……居た堪れねー」

人生、前途多難である。経験者の俺が言っただ間違いない。



9話「前途多難」(後書き)

(作) <実は俺の小説の安倍晴明は女だったのさ！

<な、なんだってー！？

第1章完結。

これから幻想入りへ！

うっうう……やっところまできたお……次は幻想郷だあ……！

やっとめーりんや文とイチヤイチャできるお……感激だお。

さあ、第2章へ続く！

10話「封印」(前書き)

(作) <清明の人気に嫉妬した

## 10話「封印」

奈良時代から平安の末に掛けてその名を轟かせた妖怪がいる。

名を風間と云いその容姿は人と変わらぬ姿であったと言われている。九尾の玉藻前があったように風間もまた化けているのかはわからない。だがその力は九尾すらも凌駕するとも言われている。

名を広めたのは奈良時代からであるが実は弥生時代から存在したとも出ている。魏志倭人伝に「倭の女王の元、風の人有り」と書かれているこの風の人とは風間が風を操るとされているためであり、記述容姿も他の書物と同じであるために風間は弥生時代から生きていたのではないか？また邪馬台国の女王、卑弥呼と深い関係があるのではないかと多くの説が出ている。

風間が途絶えたのは平安末。1156年頃である。

当時、玉藻前がその姿を晒して狐となり陰陽師、安倍晴明の子、安倍泰成らによって退治された年である。この時に九尾の妖術に泰成は手も足も出ずに居たが同伴していた風間がこれを退治した。

風間と安倍との関係は定かではないが非常に親密な関係であったことが当時の書物によって書かれている。

あの安倍晴明の頃から陰陽師の仕事を手伝っているとされている。何故、妖怪である風間と陰陽師である安倍が親密であったかは未だ誰もわからない。

一説では風間は清明の式ではなかったのかとされているが、この年、鳥羽上皇の命令によって安倍泰成が風間を封印されている。

式であるものを、しかも良好関係であったものを封印するとは考えにくい。清明の書や泰成の書にもそのことは一切書かれてはいないために謎である。

一番、有能な説は玉藻前が妖怪であり自分を苦しめた上皇があらゆる妖怪を討伐せよと命じているために風間も封印せよと泰成に命じたのではないかとされている。

この風間が封印されたとされる神社がある。風間神社と言われるその神社は京都の嵐山にある。嵐山の中枢部に位置する神社は鳥居が一つ。小さな祠が一つと小さな神社であるが風を操るとされるために風邪や風病などの健康を祈る参拝客が多い。

また、その祠には何重にも繋がれ、巻かれた鎖がありお札も多々張ってあるため封印の禍々しさが人気を呼んでいる。

妖怪ブームとなっている現在もその参拝客は鰻登りとのこと。

さらにその神社から視える景色は京都を一望できる高台であるために観光客も多い。皆様もぜひ行ってみたらどうだろうか。

の世界』より抜粋

『魑魅魍魎





京都の夜。山の中で一人の女性がその神社を訪れた。慣れた足取りで神社まで歩きその祠まで移動する。

月明かりが出ているとは云え夜道は暗い。それなのに慣れた様子をみせるといふことは幾度となくこの地を訪れたのだろう。

金髪の女性　　八雲紫は依然とした態度でその鳥居を潜ろうと足を踏み入れる。

パチリと、静電気に似た嫌な感覚が彼女を襲うが指を一つ切断するように左から右へ。そうして再度踏み入れるころには嫌な感覚はなくなっていた。

「……お久しぶりね。前にここに訪れたのは50年くらい前かしら。これで何回目だと思っているのよ」

一人呟いてため息を吐く紫。されど返事は無くまあいいわ、と肩を竦めた。

「晴明も中々に厄介なものを残してくれたわよね。でも、今度はいけるわ」

スツと指が光る。

「解」

指がなぞる。光と共にその祠に六芒星が浮かび上がるとその通り、

その順とは逆になぞっていく。右手でその六芒星をナゾリながら、左手はその結界を抑えながら。

神経を尖らせる。

術式も多く学んだ。結界としてはこの封印を解くものだけでも自身も強くなった。

妖力も前とは違う。

さらに指先が光術式が早くなって現れる。それを解いたら新たにまた出てくる。それらを幾度となく潰しながらも左手で結界を解いていく。

この術式は厄介だ。

解除方法はこの複雑な形と成した六芒星を逆の順に解いていきながら少しずつ妖力を与えていく。解除するたびにスキマが出来てそこに妖力を針に糸を通すが如く与えていきさらに結界も穴を開けて糸の妖力を通す。

結界の中枢部。『封』と書かれた封印の札を2つ同時方向から刺激を与えなければならぬのだ。

失敗すればそれまで。神経と妖力をその分だけ失って時間も消費する。

自分でもなんでこんな奴のために封印を解かなければならないのだと思ってもみたりした。

最初はほんの暇つぶし。封印されたから解いてみようとしただけ。だがその封印結果は強固であり何回も失敗した。

ああ、そうか。結局私は悔しいのだ。

晴明は天下一の陰陽師と謳われていようと私も私が解けない結界などないと思っていた。境界をいじればそれまで。

だが、能力すら届かないその強固さに紫は唇を噛んだ。

彼女の能力は便利である。便利であるが故にその力に過信していたのだ。

自分の力で、この結界を解いてみせる。その技術だけで晴明を凌駕するのだ。風間なんてその二の次だ。

「っ！」

通った！

妖力の糸が通り、さらに右手の六芒星の間に入れた妖力も十分だ。

さあ、ここからだ。

依然として右手で六芒星を解きながら左手で操り2つの妖力を合わせる。針を形成させてえ狙いを定めた。チャンスは一回。これであの札を指すだけ。

……。

今！

狙いを定めて、直線上に小さな針が伸びる。

そして、遂に、それが 刺さった。

封印されることとはどういふことなのだろう？

消える前、思っていたことだ。

白い空間にじっと居る？

意外と生活感に溢れた生活ができる？

どれも違う。

夢を、見ることなのだ。

自身は眠っているようであるが意識はある。夢の中で。ちょっと疲れたなと思えば意識が途切れ何時までもみたいなと思えば見られる。偶に流れてくる願いごとみたいな言葉に適当に返事したりして、そうした生活の中で当然内的時間隔なんてありゃしない。

その時も俺は夢を見ていた。

だが、夢の途中突如視界が真っ白になり 気がつけば奴がそこに居た。

どんな夢かもう、忘れた。

「八雲……紫か……？」

声が出る。喉仏が直に振動するこの感覚。夢の中とは違う。地面がある。足がある。大地の感触がある。空が視える。森の匂いがする。

そして、目の前には胡散臭い彼女が居る。疲れた様子を見せる彼女を尻目に周りを眺めて俺は心の中で叫んだ。

ここは、現実だっ！

「こんばんわ。随分襲い起床ですこと」

「こんばんわっ！八雲紫さんっ！」

大声に八雲がうるさそうに耳をふさぐ。

「声がデカイわ……」

「すまん、つい嬉しくてね」

自重しよう。嬉しくても自重しよう。

「……お前が封印解いたのか？」

「ええそうよ。盛大に感謝しなさい」

そう言って口元を扇で隠す。

「ありがとう。心から感謝する」

俺はキチンと腰を折って礼を述べた。

「しかし、大変だったろう。晴明の封印解くのは」

「ふん、この程度私に掛ければ」

八雲の身体が揺れた。俺は慌てて駆け寄って支えてやる。見れば疲れを見せて顔色が少しわるい。神経の使いすぎか、もしくは妖力の使い過ぎか。

……恐らくは両者だ。八雲特有の妖力も少ない。俺は支えたままに俺の妖力を流し込んだ。

「悪いわね……ちょっと疲れたみたい」

「気にするな。お前には感謝してもしきれねえよ」

それでも疲労は残る。ただ、失った妖力は注いだのでしばらくすれば回復するだろう。

そつと近くの鳥居を背を預けさせてやる。

「……しかし、俺はこれに封印されていたのか」



見ると鳥居の奥にある祠が開かれていた。鎖は契れて札は剥がれている。

「しかも、何だ、この『風間神社』って」

「貴方の神社よ」

「いや、分かるけれども……」

何、俺って祀られていたの？

「貴方、結構人気よ？風神風間ってね」

風神ね……風神様ふうしんじゃあるまいし。

「八雲、何世紀だ？」

尋ねながらも俺は目の前に広がる年を見つめる。光がある。高層ビルものある。となると……。

「21世紀よ」

遂に、この時代か。摩天楼。そびえ立つビル。俺が居た現代の世界。

この時代。もっとも便利である時代である。だけでも平安まで生きてきた俺にとっても小屋や藁家なんかが普通だと感じている。こういったものに少し違和感がある。

住めば都。最初不便で仕方なかったものでは今ではこれが普通だ

と感じていたのだ。

「変わったでしょ。京都　いえこの時代すべて」

風が俺を撫でて夜街を見る。

「ああ……変わったな。街の風景も、都の通りも」

わかりきっていたことだが、目があの光景を思い出す。身体に染み付いた都の街並みがこの変わりようを教えてくれた。

哀愁だだよう風に見えたのか、八雲珍しく黙りこみ息を飲むのが見えた。それを尻目に首飾りをそつと撫でる。清明からもらった玉もうこの世には清明はいない。一種の遺品みたいに感じる。ついこの前まで清明と酒を飲んでいたというのに、あんなに近くに居たというのに。一瞬、たった一瞬ですべてが変わった。

もうこの都には清明も、気の良い行商人や気むずかしいけれども優しくかった陰陽師たちも下町の酒屋のおっちゃんも居ない。

俺は唇をそつと撫でた。

そんな俺の様子に八雲は、閉じた口を開いて

「……風間、幻想郷に来ないかしら？」

そんな勧誘を口に出した。

幻想郷とは八雲曰く、人々が文明を発達させて妖怪が虐げられたり、忘れられた者や物が集まる『国』だと言う。そこでは妖怪は人

を喰い人は妖怪を退治するという一種の食物連鎖が成り立つ、本来のあるべき社会があると言っ。

「どう？元々誘うつもりであったのだけれども……」

「10日待つて欲しい」

俺はその問いに返してこう答えた。

「10日？どうしてか、聞いてもいいかしら？」

「見て回りたいんだよ。色々と」

実際、見て回りたいというのは本当である。京都に至っては先の時代 この場合前世とか云ったほうがいいのだろうか？そこでは京都は修学旅行にしか行ったことがないためにせっかくだから、と京都を回りたいのだ。

後、色々調べたいものがあるし。

「10日後。この時間帯。ここで待ち合わせだ」

「わかったわ。貴方も色々あるものがあると思うし……では、10日後に」

そう言ってスキマに入ってその場から消えた。

相変わらず気持ちの悪い能力である。

能力技術も妖力も上がったと思われるし、もう俺アイツに勝てな

いのではないか？

……元々勝てなかった気もするが。

「10日後に会うのではなかったのか？」

「いいじゃない、別に」

最近暇なのよ。と八雲はため息を吐いた。

京都烏丸通り。京都の街並みを拝見しようとしてやってきたら八雲が待ち伏せていた。

「あなたの封印は解いちゃったし、寝ようとも最近寝付けないのよ」  
「知らんがな。」

「睡眠の境界を操つればいいじゃねえか」

「……なんでもかんでも能力に頼ることはよくないわ」

「……お前、なんか変わったな」

教訓よ、と八雲は歩き出す。

どうせ一人で歩いたって楽しくないし、俺も歩みを進めた。

「と、いつことでデートしましょう」

そう言って腕を絡んできた。

「で、でーと?」

「ああ、デートって言うのは、男と女が」

「ああ、マテマテ。わかる、わかるぞ。デートだな。うん、そこじやなくてなんでお前とデートせにやならんのだ」

「あら、こんな美人とデートするのよ?嬉しいでしょう」

……用は、自分が暇だからこいつを誂<sup>から</sup>ってやるつと。

とんだ面倒な奴だよっ!

「……まあいい」

すでに俺は諦めモード。どうせ言ったって聞かん。それに美人であることはかわりないし、役得と思えば

「ほらほら、街の人達がこっちを見ているわよ。きっと私の美貌に見惚れてしまったのね」

到底思えないな。

「ええい!離せ!歩きづらい!」

「あら、ひよつとして……照れてる?」

はい、ブチリと来ました。

俺は腕を振り払い、そうして奴の脇に手を持っていく。所謂こしよぐりだ。

「きゃははあはあははっ！ちょっと！やめっ！ハハハハハッ！」

何？聞こえない。

とことんシカトして3分。遂にギブアップして境界を弄り、八雲はぐったりとして近くのベンチに腰掛けた。

「いきなり笑うなよ。皆に見られるだろ。恥ずかしい」

「誰のせいだと思っているのよ、誰の」

ジト目でこちらを見る八雲に俺は鼻で答えた。

「私、何も悪いことしてないじゃない」

「……」

まったくもってその通りであった。

「服？」

「そ、貴方いつまでその格好でいるつもり？」

確かに。俺の今の服装と言ったら麻服とわらじである。どこの時代の人だよとツツコミたくなる程であろう。

「いらつしゃいまs……」

八雲の先導の元、男物の服屋に入る。途中、入店を歓迎する店員の言葉が途切れて八雲に心奪われたように固まった。その他も同じくして視線が八雲に向かう。

早くしなさいよ、と声を掛ける八雲。男同伴である事実には頂垂れたように視線を落とすが一体どんなイケメソが彼氏なのかと続いて入ってきた者に全員の視線が動く。

俺である。

なんか文句あるのか！？

八雲を見たとき以上に固まる男達。なにせ麻服である。こんな服みたことないだろう。



「彼に見合う服を選んで頂戴」

店員の一人を呼んで指を俺に指した。

「別に服なんてそこら辺の動きやすい服でいいじゃねえか」

「わかってないわね。見立ては大事よ」

私のようにね。とクルリとまわってスカートの袖を掴んで一礼。

「……お前のその姿も異常だと俺は思う」

「あら、酷いわ」

クスクスと晒って八雲は口元を扇で隠した。

「じゅ、準備できました」

店員がなにやら大量の服を持ってきて言う。

「ほら、さっさと着なさい。今日は私の奢りよ」

「仕方ねーな」

服なんてどれも一緒だと思う。前世も今世も服に気を使ったことなんてない。一服何万とか信じられないからな。服にお金を掛けるくらいならゲームにお金を掛ける男だよ俺は。

店員に連れられて試着服に入る外から色々渡されてその中から適

当に選ぶ。

「こつという服を着るのは何年ぶりであるか。ちょっと忘れてしまった着方を思い出しながらそれらを着る。」

「うん」

唸って首を捻る。

Gパンに黒のTシャツ。その上を羽織るように白いシャツを着ている自分の姿に俺は首を傾げるだけであった。これで多少は見栄えが良いのだろう。今いちよくわからないが。

「あら、似合っじゃない」

外に出ると店員と話していた八雲がそう声を掛けてきた。

「自分じゃよくわからないが……ま、おかしくはないだろう？」

「ええ。うん、いいわねシンプルで」

あ、シンプルというのは とカタカナ語の説明をする八雲の話  
を聞き流しながら俺は再度首をかしげた。

……ま、いいや。そんなに深く考えなくても。

結局、本当にデートらしく遊んでしまった。京都を周り、都市部を周りカフェで食事を取って普通にデートだ。

隣が八雲というのがいただけでないが。

チラリと八雲を見る。

こうして並んでみると八雲は結構身長が高いんだな。俺と10センチくらいかな？ちなみに俺の身長は177センチくらいである。

「どうしかした？」

「……」

まあどうでもいいことは置いておいてだ。

今現在夕方である。夏とは云えもうすぐ日がくれる時間帯だ。

さて……。

「なあ、八雲。ちょっとスキマで行きたい所があるんだ」

いいか？声に掛ける。

「……ええ、いいわよ。行き先は？」

「長野県諏訪湖」

指定された場所にスキマがつかねれる。そこへ入る。

そこへはすぐにつながった。入たらもう長野だ。俺は地面にうまく着地して周囲を伺う。

本当にスキマって便利だね。四次元ポケットやどこでもドアみたく使えるのだから。

「長野に何の用があるの？」

八雲の問いには答えなかった。俺はそのまま歩き、たまに近場にある地図や団地を確認して歩く、幸いにもそこは近場であった。

無言のまま歩くのに八雲は黙って付いてくる。

どのくらいあるいたか、10分くらいだったかもしれない。八雲が時折尋ねるが全部無視した。

そうして目的地に付いて立ち止まる。

「ねえ！何なのよ!？」

痺れを切らしたように叫ぶ八雲であるが俺の耳には届いちゃいなかった。

見上げる。そこには建築物が一件。高層ビルのようにであった。

振り返る。

そこもまたスーパーが佇むだけである。

何の変哲もない。ただのビルとスーパーである。それだけ。他人にはそれだけにしか映らない。

だが、俺は

「風間……?」

矢つ張りという気持ちとどこか裏切られたような気持ち。これはただの妄想だ自分勝ってな推測だ。

何を今更。と思うかもしれない。笑うかも知れない。けれども

「俺は……前世の記憶を持って妖怪として生まれたんだ」

静かに語りだしていた。いつの間にか。日は暮れて夜の街並みが映し出される中で八雲に静かに告白する。

未だに。晴明にすら話したことがないのに。でも、誰かに話さずにはいられなかった。

「前世で、ロードローラーに轢かれて、気がついたら妖怪になっていて……そうやって生きてきたんだ」

取り留め無い。信憑性皆無。何を言っているんだと思われるかもしれない話を八雲は黙って聞いてくれた。

「ここ、俺が通っていた学校だったんだぜ」

見上げる高層ビル。こんなもの、ここには建っていなかった。

「その向かい側は俺の家でさ、毎日通校がすんげー楽で」

でも、スーパーに成っている。

「わかっていたんだ。ここは俺が生きた世界とは違うって。でも、同じ地球で同じ出来事が起きて……だから……もういいや」

あー。わかっていたことだったんだけどね。ちょっとショックと  
いうか。複雑なのですよ。

俺は頬を叩く。

辛気臭いのもう止め！

振り返る。八雲が神妙な面持ちで見ている。

「悪い。迷惑かけた」

「……その話本当なの？」

「ん？前世云々ってやつ？本当だが」

そう言っただけ俺はおどけてみせた。

「矢つ張りダメだね。ここは俺が居た世界じゃないや。なんか違う建物建っているし。それを確認しに」

「そう……だからこの時代の変わり様に驚かなかったのね」

「……あんまし、驚いてないんだな？」

俺が笑ってそう問うと八雲も微笑んだ。

「私は妖怪よ？もう何千年生きていると思っっているのよ。ちょっとやそつとじゃ驚かないわ」

そうか、そういうものか。

俺も長く妖怪やっていてそうだった類がもし目の前にあっても驚かない。やっぱりどこか常識が外れているのだろう。

「今日は有難うな」

お礼を述べて、俺は八雲を見た。

「楽しかった。久しぶりの外だったから」

「そう、それは良かった。私も楽しかったし」

そりゃ、あんだだけ誂えばな。

「はい、その後10日分の食費やらホテル代」

と渡されたのは一つの財布。

「いいのかよ？俺は今日こっちで野宿しよう」と

「せっかく買ってあげた服を汚さないで欲しいわ。それに、こっちのお金なんて持っけていても仕方ないでしょ？滅多に使わないんだから」

確かにそうであるが……。まあいい。素直にもらっておこう。

財布の中身をみると大量の諭吉さんがこんにちは。

「思っただが……こんな大金お前どうやって」

「何って、幻想郷に落ちている骨董品を売ったり昔のお金を換算させたりするのに決まっているじゃない」

あ、銀行からパクったとかではないんだな。ちょっと安心。



「どじするの？」「それから」

「ちょっと此処いらを見て回ろうと思う。お前はもう夜遅いし帰っていいぞ」

「そうするわ。動いたらなんだか眠たくなってきもの」

「んじゃ、10日後。ここに集合ってことでいいか？」

「あら、風間神社じゃないのね」

その風間神社ってのはなんだか複雑な気分になるよな。別に偉いことしてないのに祀られているし。

「ああ、向こうまでいくよりかはこっちの方がいいだろう」

「……それもそうね。じゃ、10日後また会いましょう」

そう言ってから手を振り、スキマに消えて行った。

「……さて、宿でもさがすか」

誰ともなく呟いて俺は長野の夜を歩いた。

夜空を見上げる。

長野の夜空は曇っていて星一つ見えない。それでも空を仰ぎながら多くのことを思い、そして思い出す。

京都の夜空は綺麗だったなー。

夏夜の蒸し暑さに汗を浮かびながらも俺は見上げたまま誰となく呟いた。

「紫、ごめん……」

寂しそうに呟いて、俺はがっくりと頂垂れた。

今現在7時を回っているところである。

八雲と別れて2日目。

俺は財布を盗まれていた……。

かりにもてめー妖怪だろと思うかもしれないが、俺も鈍っていたのだっ！久しぶりに外に出たから感覚が……それに、公園で寝ていたらパクられたんだよ！まさか寝こみを襲うとか聞いてねーよ！

「どうしよう……」

泊まっていたホテルにも帰れず。一応前払いは済ませてあるので大丈夫であるが いやそんなことはどうでもいい。払っていないことも別に良いことだ。

それにしたって俺も妖怪だが腹が減る。

食欲だけはどうしても抑えられないからな。食べなくとも生きていけるがそんな思いなんてしたくない。

「神様の馬鹿野郎」

なんとなく馬鹿にしてみた。まあ、関係ないのだけれども。

「……何か、お困りですか？」

声がして、大袈裟にも声を上げてしまった。

……ち、違うんだよ！だから久しぶりの外だから色々と感じがおかしいんだって。

見てみると10代程の若い女子高生がそこにいた。緑の髪は地毛であろうか？薄く透けるような髪色は染めたものなんてものじゃないな

い。

買い物袋をぶら下げて彼女は再度尋ねてくる。

「何か、お困りのようでしょうか」

「え？ええ。路銀やら生活費やらを盗られてしまって……」

なに年下に敬語を使っているのだろうか。

「そうなんですか！？なら警察に連絡しては」

「あー警察は勘弁してほしいな」

身分証明書とか持ってないし。

「……理由を聞いてもいいですか？」

「親に黙って日本中を放浪しているから」

ぱっと思いつく嘘をすらりと吐く。

と、いつか君。こんな夜中に夜の公園に知らない人に声かけちゃいけないから！

まったく、最近の子は危ないね。

帰るように促そうと口を開いた時。彼女が静かに何か神秘的な口調で言った。

「信仰　してみませんか？」

……危ないのはこの子のほうではないでしょうか？

「……は？」

「神様に、お願いするのです。これまで起こったことを、これから起こることをどうか無事に過ごせますように。そうすれば、神様はきっと貴方を救ってくれますよ？」

……あれですか、宗教かなにかですか？

「あの……これでも、れっきとした信仰布教を」

「えっと、君の家の親はなにか、宗教かなにかやっているのかな？ 駄目だよ。神様なんかに救いを求めちゃ。自分の力でなんとかしてみないと」

こんな子供にまで妖しい宗教を勧めさせるなんてなんて野郎だ。とっちめてやる。

これだから宗教はいかんだよ。大体が擬い物であるし変にハマると自分を取りも出せない。

「わ、私の家は神社で、キッチンと、存在するっ神様を祀っているのですっ」

ああ、神社の方なの？

よかつた変な宗教なんかじゃなくて。正直、こんな子まで勧誘させるなんて身も凍る怖さだからな。

「それで どうでしょう。この不幸も含めて神様にお願いしてみたらどうでしょう?」

「思うことなのだが、君は何処か可笑しいと思う」

唐突に可笑しい宣言された少女は目を丸くする。

「まず、第一年頃のお嬢さんが知らない男の人に話しかける。それも人気のない夜。さらに、知らない人に信仰してみないかと、自ら誘うこと。前者はただの世間知らずでは済まされないし、後者は神社というものは自らの足で訪れて自らが参る場所だ。そこに意志がなければ信仰の意味を果たさないと思う」

さらに少女が目を丸くする。

「君みたいな美少女に来てくれと言われればくるかもしれない。だが、そこに信仰があるか否かと言われれば否だ。……ちよつと説教臭いけど何でもかんでも信仰するかどうかを尋ねて回らないほうがいい」

それに、と俺はさらに付け加えた。

「本当に、夜中に知らない人に話しかけないほうがいい。マジで危ないから」

そこまで言うと、何故かクスリと少女が笑った。馬鹿にするような笑みではない。何処からおかしく笑を零しながら一言「すいません」

「……私の家の神社は信仰がなく人も訪れないので正直<sup>やけ</sup>自棄になつていました・そうですね、確かに私が言つと訪れた人は居ましたがそこから信仰は得られなかったです」

ま、そうだろうね……てか、お互い知らないのに何を話しているのだが。

「でも、襲われる云々は大丈夫ですよ？」

ちよつと自慢気にそう話してくる少女。

「私、ちよつと腕っぱしに覚えがあるんです」

ちよつと腕を捲つて力こぶを作つてみせるがその腕は細い。他からみれば見栄つ張りに写つたかもしれない。それかお茶目な高校生だ。

だが、俺が感じたのは驚きの吐息だった。

霊力が、溢れでているのだ。

会つた当初から気になつていたが今確信した。この子は能力持ちだ。しかもかなり出来る。

そこらの雑魚妖怪なんて目じゃないくらいに。

「何処がだよ、何処が」

一応は笑いながらそう言つて手のひらを振る。今の俺は人間である。家出した放浪人である。あの首飾りはしてあるし自分がその霊

力を感じ取るのはおかしいだろう。

「さて、もう帰んな。もう8時だ」

良い子はもう家に帰る時間である。親御さんも心配しているだろうし。

「貴方は何処で寝るのですか？」

「しょうがねえからベンチだよ」

それしかあるまい。昔、小屋を建てる前は普通に野宿していたからな。

久しぶりの野宿を思い出しながらベンチを指さして俺は答えた。しかしながらどうしたものかね。八雲に怒られるかもしれない。

畜生。盗人め……見つけたらとっちめてやる。

「あ、あの〜」

「ん？」

未だそこに少女がいることに疑問を覚えて俺は首をかしげてきた。ちよつと気恥ずかしそうに、または言いにくそうながらも声を掛けてきた。

「よかったですらウチに泊まりませんか？」

……………。



.....はい？

## 10話「封印」（後書き）

清明に関して多くの声が寄せられました。

清明ヒロイン説など多くの説が飛び交い、作者の感想ページでは清明コールが鳴り響いております。

（作）<お前ら、そんなに清明が好きか。どこが一体好きなのだ。

まさか、ここまで人気を取れるキャラであったとは・・・

作者もビックリです。

再登場するか否かはまだわかりませんが、そういった声が多く寄せられると嬉しいですね。

うーん。どごしよじか

11話「神様3人」(前書き)

やっぱり3人称のほづが書きやすい

## 11話「神様3人」

八坂神奈子と洩矢諏訪子は守矢神社の神である。その神社に祀られている神であり、その力は膨大である。だが、人の信仰がなくなるとその神力が失われて弱ってしまう。それを懸念した東風谷早苗が信仰集めに精を出しているのだが、2人はこの信仰集めを心配していた。

知らぬ人に声を掛けて集めようとする早苗であるが、いくら早苗が現人神であるとしてもそれは血筋であり中身は人間のままである。力があると言っても騙されて、怪しい男に囲まればそれまでだろう。

最近、よく知らない人には声を掛けるなど注意するものの信仰集めに歯止めが効かなくなっていることに2人は懸念を覚える。

神奈子と諏訪子は早苗の保護者でもあるのだ。自分が大切に思う娘を危険な目には会わせたくない

だから、土地を移してここよりもより効率よく信仰を増やすことを話そうと買物に出かけた早苗を待っているのだが。

「遅い……」

一向に帰ってこないである。

早苗とて高校生である。夜に帰ってこないこの頃の年なんてそこらに居る。だが、早苗はキチンとした娘であるし夜遊び　ましてや買い物の帰りである。夜遊びなんてするわけがないのだ。

だとしたら　やはり恐れていた事が起こったのだろうか。

苛立を隠せないままに2人はあっちこつちと足を動かして家をウロウロとする。

もし、もしそんなことが起きたらそいつを神の力で捻り潰して未代まで祟ってやる。

そんな事を考え始めた時である、玄関ドアが開いて早苗から「ただいまー」と声がした。

その声に反応して2人は猛然と走り玄関先の早苗を迎えて文句の一つでも言ってやろうと口を開いて、そしてそのまま動かなくなつた。

開いた口はあんぐりと大きく開き顎が外れたかのようにそのまま目の前の光景を見る。

東風谷早苗はとても良い娘である。

学校では委員長を受け持ち、誰に対しても優しく面倒見が良い。

いじめを許さず、悪を許さず、ロボットと特撮ヒーローが大好きで、美人で可愛くよい娘である。欠点といえば信仰に対して少しばかり変な方向に熱くなってしまう所だけである。

もう一度言おう、東風谷早苗は良い娘である。

そう、決して夜遅く帰ってきて2人を散々心配させた挙句　男  
を連れて帰ってくるような娘ではないのだ！

「お、お邪魔します」

「あ、神奈子様、諏訪子様。彼は風間大介君と言って私の1個上の先輩なんですけど、ちよつと色々あって家に泊めることになりました」

『(、・、)』　呆然

「あ、よろしくお願いします」『これから』お世話になります」  
そう言いながら頭を下げる少年。確かに見た目的には早苗と同じくらいである。

同年代の男の子。夜に女の子の家へ。

これが意味することとは？

そして『これから』とは？

激しく入り混じる思考に2人はその機能を停止していたがやがて  
1つの結論に至る。

私たちの早苗が夜遅くに男を連れ込んでくるわけがない。

つまり この男がすべての元凶。

そう思うと止まっていた時間が、世界が徐々に色を戻していき、そして2人は同時にその身体が動いた。

『お前が早苗を誑たぶらかしたのかあああああああ！』

神奈子は顔面へ、諏訪子はその腹へ。それぞれ強烈な正拳と飛び蹴りが風間という男にクリティカルヒットした。

信仰が薄れて力が無くなってきているとはいえ、2人は神でありその神力は侮るものではない。

いくら妖怪の身である風間としてその力は強烈に響いた。

結果

「か、風間さん!？」

風間はその意識を途絶えることとなる。

「まことに申し訳ない」

後日である。早朝に気絶した体を起こして茶の間に行くはず開  
口一番に謝られた。身長が高い女性と少女にまったく同時に謝られ  
て少し、ぼやけた頭を覚醒させた。

そういえば、俺は気絶したのだけ。

もう2千年以上生きている妖怪だというのに、なんとまあ、情け  
ないなと思うこともあったが、ふと2人に纏わる力が付き嘆息  
した。

神力だ。

神が通ずる力。神通力ともいうのか、風間の師匠 卑弥呼も所  
有していた、あの力が2人に垣間見たのだ。

その力は酷く弱い。弱いが、それでも神である。おそらく、東風  
谷が言っていた神とはこの2人なのだろう。その2人にボディーブ



ローと正拳突きを与えられて気絶するのも納得行く話だ。

ちよつと安堵。

「あ、いえ。気にしないでください。夜分遅く家に押しかけた俺が悪いですから」

それにしても、鈍りすぎだろう、俺。

即座に反応できなかったことを、相手が神だからとかそんな言い訳をつけるわけがない。そうだとしても、何かしらのアクションを起こすべきであった。

……ただ単純にいきなり殴りかかれて驚いたというものもあるが。

「そう言ってくれれば、助かるわ。こう言うてはあれだけでも、私たちもかなり動揺したから」

「重ね重ねすいません」

頭を下げると、いいのよ、と微笑んだ。

「いえ、年頃の女の子の家に夜分遅く上がり、拳句には泊まらせてくれなど礼儀に反していますから」

「そうそう、なんで早苗は貴方を上げさせたのだろうね」

小さい女の子　これでも神であるのだが　が少しコタツデーブルに身を乗り出してそう口に出した。

「えっと、俺、家を出て日本中を放浪しているんすよ、それで途中立ち寄った公園で財布を盗まれて落ち込んでいたら東風谷さんが声を掛けてきまして、『信仰、してみませんか？』と……」

その言語に、またかと言う顔をして同時にため息をついた。そして何か思つように台所で朝食を作る東風谷を見た。

「あの娘は……」

「はは……色々と苦労しているんすね……」

あの顔は『またか』という顔であった。過去に何度かやはり知らない人に声を掛けて信仰を得ようとしていたのだろう。

「何の話をされているのでしょうか？」

そこへ、東風谷が朝食を持ってきた。不意な登場に3人は苦笑いを漏らして同時に『なんでもない』と答えた。不思議そうに首を傾げるも特に気にならなかつた様子でご飯が出来ましたよ、と笑顔でお盆をテーブルに置いた。

……まさか自分の話だとは思つまい。

「そつえば、自己紹介をしてなかつたね。私は八坂神奈子一応、早苗の保護者だよ」

「私は洩矢諏訪子早苗の親族だよ」

「改めて私も自己紹介しましょうか。私は東風谷早苗です」

「えーと俺は風間大介つていいいます」

自己紹介を終えて一礼する。

「早苗によれば、10日程居たいそうじゃない」

「あ、すみません。図々しかったですか？」

いや、構わないわ。と八坂が首を振った。

「ちょっと、こっちも色々あるからね。確認したかっただけ。気にしないでいいわ」

「有難うございます」

また一礼して、風間はホッと安堵の溜息を吐いた。正直、10日もなんて図々しいとは思っていた。だが、実際八雲は10日程、結界を解くために使った妖力を完全に取り戻すために寝ているし、もう公園ベンチで寝るしかないと覚悟していただけに、その安堵は大きかった。

妖怪として縄文時代に生まれた風間であるが野卓というのは矢張り辛いものがある。

「さ、ご飯食べましょう」

東風谷の言葉に頷いて風間は箸を取った。

舌を巻くような朝食も終わり、茶の間でテレビを4人で見て居ると思わず茶を吹きかけそうになった。

慌てて飲み込んで気管をつまらせて咳き込む。

そうしてもう一度テレビ画面を見つめた。

朝のニュースになんと風間神社が取り上げられたのだ。

『風病の健康を願う参拝客やこの神社から見られる絶景を楽しむ登山客が多く訪れるこの風間神社。その神社にある妖怪とも風神とも呼ばれた『風間』が封印されている祠に巻き付かれた鎖や貼られてあったお札が切られていました。祠にある小さな扉。これも開かれています。』

これを今朝訪れた参拝客によって発見されて通報されました。鎖は錆びれていながらも纏わり付くかのようにがっしりと何重にも巻か

れてありました。検証の結果切断痕などは見つからなかったそうです。張つてあつたお札はその部分だけ燃え落ちていきます。多くの噂ではここに封印された風間が解放されたのではないかと

』

なんか、オオゴトになつとる……。

テレビには数多くのリポーターとTV局が訪れており、噂に駆けつけた参拝客がTV局のカメラに映っている。

「あ、私中学生の修学旅行の時ここに訪れたことありますよ」

「ああ、そういえば言つてたわね。……それにしても、誰かがやったのか、自分から出てきたのか」

八坂が何か思うように肩を竦める。

「そう言えば、貴方も『風間』だったわね」

洩矢がちょっとからかうように声にだして微笑む。

「ああ、そういえばそうっすね」

などと風間は少しはぐらかすように答えた。自分がその風間です、とは到底答えられるわけがない。

苦笑いを残した。

「風間さんは神様　もしくは妖怪って信じます？」

何か思つように東風谷に聞かれて風間は即座に答えた。

「信じるよ」

へえ、と八坂が声に漏らした。

「どうしてか、聞いても良いかしら？」

なにせ、自分が妖怪ですから。

と、答えようとして慌てて喉に詰め込む。今はまだあの首飾りのお陰でバレてはいないだろう。

神様の元に妖怪なんかが居たら即座に消されそうである。

それにしても、未だバレていないところを見るに、この首飾りは本当に便利だ。

「まあ、世の中不思議なことばかりですから、居たって全然おかしくはないんじゃないかな？と思っっています」

「……なんだか随分アバウトだね」

洩矢に言われて風間はそうですね、と苦笑いを残した。こんなもん、他にどう説明すれば良いというのだ。

「人生、そんなもんですよ」

アバウトに、大雑把に。生まれた時から狭める人生なんてありはしないと思う。

「それにしてもすごい人ですね……」

TVを通してあふれる人に風間は息を漏らした。なにが面白くてこんな小さな神社なんて訪れるのだから。

「前からここは人気の場所だったらしいですよ？それに、今妖怪ブームじゃないですか」

羨ましいです。と漏らす東風谷に風間は申し訳なさでいっぱいになる。

別に望んでもいないのに、これほどまでに人が集まり、ましてや信仰されているのに対して信仰を望むのに人が集まらない守矢神社。

俺の所を分けてやりたいと切実に思う。

「これだけ人が入れば、祀られている風間はすごい神力をもっているだろうね」

……ん？なんで神力？

「信仰から得られる力のことだよ。信仰が多ければ多いほどその力を増すものなのよ」

「逆に全く信仰を得られないと祀られる神様っていうのは力が消えかけていくの」

妖怪が畏れなくなって消えるように？

ああ、だからか。と風間は一人心で呟く。

風間から見て感じ取れる限り、間違いなくこの2人は神様だ。しかも、かなりの部類に入る神様。ちよつと最近祀られ始めた神様なんかじゃなくて、れっきとした古代からの神だと思う。

だけれども、守矢神社の信仰がなければその神力が弱まっていく。そして、やがてまるつきり信仰されなければ消えてしまう。だから、東風谷は信仰集めに必死なのか。

古代からの神であっても信仰がなければ弱体化する。信仰っていないのはあれば強いがそれを維持するのに苦労するのだろう。

と、ここまで考えて風間は首を捻った。

先ほど、八坂はなんと言ったか。

これだけ人が入れば、祀られている風間はすごい神力をもっているだろう。確かにそうだった。

ならば、自分はもしかして、封印されたこの千年の間で信仰された？

首飾りをしているので、細かな流れまでは判らない。後で試してみるか。この首飾りは完全にあらゆる力を隠し通す優れものであり便利であるが、自分に内包する妖力、またはそれに通ずる力を把握できないのが、欠点だ。

「早苗、そろそろ学校じゃない？」



「あつ、いけない！」

洩矢が時計を見ながらそういうと、慌てた様子で自分の部屋へ戻った。そんな東風谷の様子を見届けながら、風間は口を開いた。

「随分と、詳しいんですね」

自然と声に出して風間は2人を見た。疑問に思わなければ何か変に思われるかもしれん。

「何がよ？」

「その……神力とか信仰とか」

風間の言葉に2人は目を丸くした。

まるで何を言っているの？と言わんばかりである。

「私たちは、貴方と同じ神よ？風神の風間さん」

……………。

沈黙。その間は数秒であったが風間には嫌に長く感じた。

そうして暫く経って風間は息を思いつきり吐く。身体の奥底から息を吐いてそうして2人を見た。

「気付いていたか……いや、この言葉は可笑しいな。俺が『神』であることに 神の類ではないかと思いはじめたのは今朝のことだったからな」

それにしても、風間は失態を犯した。

首飾りを過信していたこともそうであるが、マズイ。凄くマズイのだ。この状況が。

「何かを使つて隠しているようだったけれども、神ともなるとそんなものは無意味よ。例え隠せたとしても自分の領域テレトリーに入った瞬間気がつくようにできているから」

「私たち神は他の神の侵入には敏感だからね」

洩矢が何か睨むように八坂を見た。

「……よく生かせておいたな。俺が気絶しているときに殺せばよかったものの。……自分の領地を汚されたもんだろ？他の神が聖域に入ることは」

風間も最近　というよりたつた今神としての自覚を持ったがこ  
ういうのはシビアなものだと考える。

東風谷の信仰集めがいい例だ。信仰とは神にとって死活問題である。他の神が自分の域に入り、信仰を得ようとすれば戦いになることは間違いない。

「うーん。諏訪子と話したんだけどね」

何か疑問が残るように、不思議な感覚に見まわったように八坂は首を捻った。

「貴方から一つもそんな嫌な感じはしないのよ。貴方が最初来たときに本当にただの人間かと思つた程だもの」

「それは、こいつのせいじゃないのか？」

と、首飾りを見せる。

「元々コレで妖力を隠していたんだ。神力も多分隠せていると思う」

「いや、それ関係ないと思うよ？さっき言った通り、神っていうのはどんな物や力でその神力を隠せても自分の領域に入いられたら気がつくように出来ているのよ」

「神力が弱いのか。そう考えたけれども、あれだけ信仰が集まればそれはあり得ないわ。だから、私たちは様子を見ようと思ったの。攻め入るような嫌感覚も聖地を犯された胸糞悪い感覚も一切なかったからね」

本当に不思議よ。と八坂はまた首を傾げた。

「東風谷は俺が神だって気がついていいのか？」

「んにゃ、気がついていないよ。あれはこの地を聖地とする神だけが感じ取れる特権だからね。幾ら現神人であつても人間だから」

「……東風谷も神様なのか」

身体は人間だけだね。と洩矢は答えた。

風間が何か考えた後に口を開いたが。

「神奈子様、諏訪子様。行ってきます！」

慌ただしく東風谷が入ってきて制服に身を包みかばんを持ってその2人に告げた。

「ああ、行ってらっしゃい」

「風間さんも、ゆっくりしていつてください！」

「あ、ああ」

どつちやらゆっくりしすぎたようだ。時間が一杯なのだろう。すぐさま行ってきますの声と共に出かけた。

「……あの様子じゃ、本当に気がついていないようだな」

「まあ、無理もないと思うわ」

一息を吐いて、八坂は言葉を繋いだ。

「結局、この地を訪れたのは偶然なのね」

「ああ。つい先程俺自身が神だって気がついたからな……ま、すぐ出ていくよ」

そう言っつて腰をあげようとしたところを手で制された。

「……別に構わないわ。貴方、宿ないんでしょう？後10日 9  
日だったわね。ここでゆっくりしていきなさい」

「……正気か？この地で祀られていない神がここに居るんだぞ？」

「うーん。正直、邪魔されているって感覚ないんだよね。私も、神奈子も。それに、丁度話し相手が欲しかったところだし。いいんじゃない？」

元が妖怪だった、だからだろうか？

そこら辺は判らない。なにせ神になったことを自覚したのがつい先刻だったし。

「まあ、良いなら良いが……」

「信仰もこの地では無理だから移そうってことになっているくらいだしね」

へえ、移すのか。土地。

信仰が集まなければその力が弱まる。この地を捨てて他で信仰を求めることになんのメリットがあるかしらんが、それもまた一つの可能性だろう。

「大変だな」

「まあね。でも信仰は0よりも減ることは有り得ない。足りない物は神様を信じる心だから」

貫禄のある言葉に風間は頷いた。

年齢的にはこちらの方が上であろう。力的にはどうか分からないがそれなりに風間が上なのかもしれない。けれども、やはり神様のランクは圧倒的に2人の方が上であった。それはもう断言できる。

そう思わせるだけの貫禄と、雰囲気がある。

「信仰が消えると神様も消えるのか？」

「それはないわ。ただ、神としての威厳と、それに伴う神通力が失われるだけ。早苗が良い例よ。彼女は神の血筋を持って『現神人』であるけれども人間だわ。信仰を持っていないからね」

難しいものだ。神というものは。

「あー早苗なら、ある意味信仰を持っているんじゃないかな？」

「どつという意味よ？」

「ほら、学校の人気ものじゃない、早苗」

……なんとなく想像ができる。

あの容姿である。かぐや姫、玉藻前と絶世の美女を見てきた風間であるが彼女には純粹に美人だと言い切れる。

それに性格も良い。

「一時期、早苗が信仰集めをあつちこつちに破茶滅茶に行ったけれども嫌な噂は一切立たなかったものね」

……それは、すごいな。

通常であるならば、あの勧誘は妖しい宗教をやっていると思わせる。実際、風間もそうであった。

そういった事柄は彼女にマイナスな噂が立つものであるが、それ

すらも凌駕するほどの人気が彼女にあるのだろう。

「それは、すごいな……」

しみじみと呟く。

「あれ、もう昼だわ」

長らく話し過ぎたようだ。気がつけばもう12時を回っている

「久しぶりに話し込んだねー」



主に2人の過去話を風間に話していた。喉もすっかり乾いたよう  
で洩矢が台所に向かった。

「あれ、早苗。弁当忘れてない？」

洩矢が水を飲みに行った所、数秒も経たぬ内にそう言った声が掛  
かった。

「げっ、本当だわ」

八坂が立ち上がり台所にある可愛らしい布に包まれた弁当箱を見  
てため息を吐いた。

「珍しいわね、早苗がこんなミスするなんて」

「妙に慌ただしかったものね」

八坂が振り返って台所を覗く風間に申し訳なさそうに声を掛ける。

「風間！。悪いけど、昼に早苗にこれを届けてくれないかしら？私  
たち、信仰のせいもあって境内しか歩き回れないのよ」

「ん、了解」

長野のこの街は風間の生まれ故郷であり、前世ではそこで生活していた。ただ、風間が居た学校が無くなっているが、それでも地理は変わっていない。

東風谷が登校する学校も風間が知る学校の1つでもあった。

風間が深く関わった場所が無くなっているのか、完全なる偶然なのか。それもわかぬままであるが、もう人間でもないし、幻想郷に行く予定であるからそんなことはもうどうでもよかった。

「ここか」

公立校である。風間もよく知る進学校であり、すぐに場所もわかった。正門近くに居る事務員に事情を話して中に入れてもらう。

事務員が届けようかと言われたが少しこの高校を見て回りたい。

なにせ、風間が受験に失敗した場所でもあるのだ。せつかなのでそのくらい良いだろう。

下駄箱を通り、スリッパを履いて学校を見て回るとチャイムがなった。

懐かしい感覚に頬を緩ませる。

「えーと、確か2ー4組……」

3階の上がり、学食に急ぐものや購買目がけて走る生徒をくぐり抜ける。

結構な人口密度だな。

私服で来ているために周りから変な目でみられるが気にしない。

「お、ここか」

2-4に着いた。扉を開けて中に入る。一気に視線が集まった。

「か、風間さん!?!」

窓際の席に彼女は居た。驚いて声を上げる東風谷に風間は手を上げて答えた。

「弁当、忘れてたから持ってきたぜ」

「えっ!?!あ、本当だ……」

慌ててカバンを確認して、それが本当だと知り、東風谷は頭を下げた。

「わざわざ、有難うございます」

「んじゃ、いいよ別に」

弁当を渡して、何時までもここに居るわけには行かないので立ち去ろうとする。

「じゃ、学校頑張ってるね」

「あ、あのっ」

立ち去ろうとして早苗の風に風間が振りむく。

「昼食、まだですよね？一緒に食べませんか？」

「風が気持ちいですね」

「まあね」

学校の屋上で2人、コンクリートの上に座りながら他愛のない話を交わす。

屋上で昼食を食べると言っても弁当は1つしかない。そこで、持っていた小銭で購買の残り物を買って食べることにした。

基本、生徒でなくとも買えるのだから購買というものはすごいと思う。学食も土日は一般公開しているらしい。公立校であるのに。

まあ、それがこの高校の魅力なんだろうね。

基本髪の色も長さも問わないし（ただ、矢張り過剰なものはNGだ）。

「んで、優等生の君がなんで解放されていない屋上の鍵を持っているのかな？」

安全のために、ほとんどの学校は屋上は開放されていない。それであるのに、屋上にこれたのは東風谷がその鍵を持っていたからだ。

「去年拾ったんです。偶然に」

聞けば色々と悩んだ時とか1人になりたい時によくここに来るという。

「お前も大変だな」

人気者というのは矢張り何処に行っても引つ張りだこのだろう。ゆっくりとした時間を過ごしたい時に人気の居ない屋上というのは最適だ。

「冬は矢つ張り寒いですけどね」

微笑みながら弁当の包みを解く。俺も残っていたクリームパンの袋を開けた。

「んで、わざわざ俺を此処に呼んでどうした？」

風間はそう尋ねた。弁当を渡したら風間はここに居る理由がない。昼食を食べることであっても神社に戻れば良いのだ。

わざわざ学校で話さなくとも食卓、もしくは東風谷の家であればすむことである。

それなのにわざわざ屋上にあがった。と、いうことは八坂と洩矢には聞かれたくない話か、それともただ単純にゆっくり食べたいだけなのか。

「……私、もうすぐ引越しをするんです」

「ふむ」

その話か。八坂や洩矢の話によるとこことは別の場所で0からスタートさせるといふ。聖地を離れてまで信仰を集めなければならぬ程深刻なのだろう。

「……そこへ越したつきりもう二度とここには帰れないと思うんです」

箸を止めて一息をついた。

「ここで出会った友達も、良くしてくれた近所の人も、もう会えないと思うんです」

「……不安、なのか」

そう尋ねると微かに東風谷が頷いた。

「その地で信仰が得られる保証はありませんし、まったくの知らない土地で生きて行けるかもわかりません。だから……」

なるほど。

風間は1人頷いた。

信仰を得ようと奮闘する東風谷であるが、酷く慣れ親しんだ場所であるからそういった無茶ができるものである。

次に得ようとする場所はまったくの知らない土地。

0からのスタートというものは誰であっても怖いものである。

そんな不安を2人に漏らすわけにはいかなかったのだろう。何故なら2人のためにと信仰を得ようと土地を移すのであり、東風谷がそのことに対して不安を抱けば2人が遠慮するのではないか。とで

も思っているのだろうか。

そうでなくとも、東風谷は恐らく2人にそんな姿を見せたくはないのだろう。

「……すみません」

何故か謝られた。

他人にはわかないでしょう、とでも言われているように感じて風間はため息を吐いた。

きつと何かを求めているのにも感じられる。あと1押し。それを風間に求めているのか。

そんな思考が過ぎつて、他人である風間に求めているも仕方がない いや、迷惑であろうと考えて東風谷は謝罪を述べたのだ。

「いいと思うよ」

考えていた思考を緩めると口からそんな言葉が出た。自然と、息を吐くようにだ。

えっ、と小さく漏らす声。表情は驚きに満ちていた。

「不安になって。……だれだっけいきなり知らない場所に放り出されたら　そこで生活しろと言われて不安にならないほうが可笑しい」

まあ、俺もそうであった。



そんな不安を吹き飛ばすために馬鹿になったのだ。……途中、お師匠に会ってボコボコにされたが。

「なにか、踏ん切りがつかなくなったり、不満や不安がたまったら馬鹿になればいいと思う」

「ば、馬鹿ですか？」

「俺が放浪した時、1人旅っていうのは色々ストレスが溜まるんだよ。だから、走って声出して身体を動かす。何か起きても深く考えず、自分の直感で行動するの」

最後の1口のパンをほうばり、風間は大きく背を伸ばした。

「『迷うな、止まるな、動き続ける』……俺の恩師の言葉。俺はそれで結構生きてこれた」

まあ、軽く見過ぎると痛い目もあつけれども。

立ち上がり、風間は柵に身を預ける。東風谷の表情はまだ固い。

「決めた後に後悔するのはオススメしないよ。東風谷」

風間は微笑み、東風谷の肩に手を掛けた。

「俺に言わせれば人生は前途多難だが、俺の恩師はこういっただろうよ。……『自由奔放』ってね」

東風谷の顔が上がり、その表情から、固さがなくなった。

「色々、有難う」

頭を下げて風間は3人を見る。

「いいわよ、別に。私たちも楽しかったし」

「そうそう、色々話を聞けてねー。偶にはこういうのも良いよね」

俺が気絶した日をいれて10日が過ぎた。約束の日にちである。

守矢神社の鳥居前で別れの挨拶を行う風間に諏訪子、神奈子は微笑んだ。

この2人とはこの10日で随分と仲良くなった。風間の過去の話しをしたり、2人の話を聞いたり。途中酒を交えて談笑もした。もちろん、東風谷が寝たあとである。

「風間さん……」

東風谷がこちらを向いて頭を下げた。

「色々とお難うございます。お陰で私、決心ができました」

「……そうか。ま、がんばれよ」

はいつ、と元気よく返事をして東風谷に笑顔が咲いた。

「もう、大丈夫かしら？」

「ん、まあね」

10日振りである八雲は10日前のあの場所に居た。相変わらず傘を差して紫のドレスを身に纏っていた。

「ああ、そういえば。すまん、八雲。財布を盗られた」

「別にいいわよ。こっちのお金なんてあまり意味のないものだし」

肩を竦めて裏路地に出た。人気のない場所である。そこにある廃墟ビルに入って八雲がクルリとこちらを向く。

「準備は良いかしら？」

「ああ、いつでも」

「それでは」

指が動いてすつと空間を撫でる。それだけで広がるスキマ。多数の目がこちらを覗く気持ち悪さは相変わらずである。そこへ、足を踏み入れる

「ようこそ、幻想郷へ」

## 11話「神様3人」（後書き）

幻想郷の強さに風間が加わるこんな感じ（ 作者的グラフです）

魔理沙<文<藍<諏訪子<神奈子 幽香 風間 天子<永琳<<）  
越えられない壁）<<風間（EX） 八雲<霊夢<晴明<<<卑弥呼

大体妄想だが、霊夢はかなり強いと思う。能力的に。夢想天生とか強すぎだろjk・・・

天子と永琳は勝負つかないと思う。天子に攻撃きかんし、永琳蓬莱だし。

文もかなり強キャラだと思う。晴明、卑弥呼についてはチートだし。そのうちオリキャラの設定とかつくるか。

オリキャラ設定(前書き)

ただの妄想。

## オリキャラ設定

風間大介

あらゆる風を司る程度の能力。  
あらゆる事を保つ程度の能力。

前世、人間。妖怪から神様へグレードアップ。やったね！

太古からの妖怪であり、その力は絶大。一度九尾を負かせたことがある。

戦闘スタイルはインファイター。

安倍晴明。

この世の理を把握する程度の能力  
陰陽道を司る程度の能力

おんにゃのこ。黒の長髪で容姿は美人。皆大好き安倍晴明。陰陽道を扱い、その力は霊夢すら凌駕。能力は最強部類に入るかも。

卑弥呼

あらゆる術を司る程度の能力

出場予定。クーデレさんになるかも。なにせ作者が大好きだから。それ以上でもそれ以下でもない。

通称『お師匠（風間限定）』

風間の師匠で風間に妖力や戦いかたをすべて叩きこんだ。風間曰く、彼女の修行はまさに『地獄』

幻覚等を好んで使う。その技術はトップクラス。

能力により霊力、妖力、気力を扱える。

弥生時代に信仰をあつめたために神様でもあり神力も扱える。術者のくせに格闘戦もトップクラス。



## オリキャラ設定（後書き）

晴明、卑弥呼に関しては今後でるかどうかは未定であるが、作者的にも読者のにも出したい。というか書きたい。

12話「幻想郷」(前書き)

遅くなつてすいません。ちょっとしたスランプに悩まされています。

## 12話「幻想郷」

幻想郷。書いて字の如く、幻を想う郷である。行き場を失った妖怪や忘れられた物が流れるその郷で風間は暮らすこととなる。

ここでは妖怪が人を食べ、人が妖怪を退治するという古来からの自然連鎖が生み出すものであった。

そこで儲けられた、妖怪と人のルール。

『スペルカードルール』通称「弹幕ごっこ」

提示するスペルカードと呼ばれる技をすべて撃破するか相手を倒すかによって勝敗がつけられる。

このルールについては予め八雲から教えられていた。

幻想郷で暮らすにあたっての最低限のルールである。風間とて妖怪の身であるためにいつそいった場面があるとは限らないのだ。

本来、弹幕ごっこというものは言わば女の子の遊び　おままごごとか　の延長なのである。そういった気軽さがあるからこそ、妖怪と人の関係が崩れることはないのだ。

まあ、勿論、殺傷能力をスペルカードを作ることによって必然と

リミッターをかけて抑えてあるが、当然個人の妖力と霊力を使うものである。

その攻撃によって死ぬ可能性だって否定出来ない。

なら、そういった場合はどうなるのか？ただのおままごとの延長ではないのか？

こういった場合は『事故死』とされるらしい。

歩道を歩いていたら車に撥ねられるように、バイク操作を誤り転んで死ぬように。それらの可能性は必然として起こったわけではなく『偶然』起こったことであると言えるだろう。

つまり、だ。

簡単にいえば『遊んでいたら偶然死んじゃった』

こういつことなのである。

そういった理解を得て風間は幻想郷にスキマを通って来たわけであるが。

「……マズった」

現在進行形で迷子であった。

周りは山の中。それはわかる。地形的にも山であることは間違いないことなのだが、風間は今、ここに来たわけであって幻想郷の詳しい地理などわかるはずがない。

空を飛んだとしても故に迷子である。そびえ立つ山や森に囲まれる。

「マズったな」

紫も人里近くに落としてくれればいいものを。

ため息を一つ吐いた所で違和感。

「……風？」

風だ。それも妙に荒々しい。少し経つと安定し、また暫く経つとまた荒々しくなる。その繰り返しであった。

しかもこの感覚は風使い　つまり同業者の感覚だ。

俺の他にも風を操る者が居たのか……。

よく考えてみれば、風を操るとはありきたりな能力なのだと風間は改めて思う。

例えば、大気を操る能力であったとしても風を操れるし、神奈子の乾を創造する程度の能力だって風を生み出せる。

だが、まあそう言った能力は一線があるからキチンと区別が付ける。対して風間が感じ取ったこの風は極端に……とでも風を『操っている』のだ。

「ふむ……」

少し興味が湧いて風間は森の中を進んだ。

近づくとつれて音も聞こえてきた。まるで爆音のような音に聞き覚えがありまさかと思いつつも近づいた。

森の中、その中に黒髪の少女が一人そこに居た。女子高生を思い浮かべるような服装が特徴であり、辺りには多くの木々が散乱していた。

その木の胴体部分はえぐれるようにして螺旋が掛かっており、そ

の跡にはやはり見覚えが。

「……ふー」

深く息を吐いて少女が集中する。感じ取れる妖力はデカイ。そして掌を目の前に持ってきてそこに風を収集する。

「くっ……!!」

集まる風を抑えつけて暴れる風を圧縮させる。手が震え、左手で手首を抑えて震える手を止める。

そうして形成された球。それを木に押し付けるような形で当てる。

風が弾けてやはり螺旋の形を残すがそれだけ。決れることもなく少女は疲れたように肩を落とした。

「はあ……うまくいかないわね……」

間違いない。螺旋丸だ。じせんまる

風の抑えつけが荒く、無理やり抑えて風の形と威力を阻害させている所を見るにまだ初めて間もないか。

それにしただって……。

まさか、自分の得意技が何千年経った今に使われるなど考えたこともなかった。ましてや螺旋丸なんて誰にも教えたこともない。

「阿求さんの資料によれば大地が決れるような威力があると……」

肩を竦めて今当てた木を見る。

「確かに抉れたけれど……実は嘘っぱちで使えない技だったりしたりね」

ズコー。

思いつきりすべって近くの頭にぶつかる。

「あら、人間なんて珍しい」

音を聞き分けて少女は振り向いた。

風間は一発で成功したとは云え、螺旋丸はそれなりに高度な技である。風を掌で圧縮してその力に妖力を追加する。

通常に圧縮しただけであるならば、螺旋状に描くような形はできない。威力も半減以下だ。

その圧縮の仕方が難しいのだ。昔を思い出しながら染み染みと風間は頷いた。

一度は本番で一発で出来たけれども、それ以来失敗することが大きくなってきて大変であった。

「こ、こんにちは」

取り敢えず挨拶。首飾りがあるためにまだ妖怪はバレていないであろう。神であること



「妖怪の山にくるなんて、珍しい人間ですね？」

ちよつと考えてそんな事を口にする。目は爛々と輝いているのは気のせいだろうか。

「その服装からするにやっぱり貴方は外来人の方ですか？」

「外来人……？」

「外から来た人。だから外来人。幻想郷の外の人をそう呼ぶのですよ」

なるほど、外から人も流れるのか。

そうして風間は八雲の思い浮かべる。……神隠しとかもしやアイツが起こした現象ではあるまいな

ありそうで怖い。

「えーと、そういうことになるな」

「あやや、矢つ張りそうですね」

「あの、何処か人が住むような村や集落ってあるかな？できれば教えてくれると助かるのだが……」

「それなら、お安い御用ですよ。こう言うてはあれですが、その代わり取材を受けさせてもらっても？」

しゅ、取材？

少女の言葉に風間は首をかしげた。

「あ、申し遅れました。私、射命丸文しゃめいまるあやと申しまして。『文々。新聞』を作っている者です」

あ、これ先週のです。と、渡されたのは1つの新聞紙。現代の物とそっくりであるその新聞には一面で『博麗の巫女、またもや貧困！？』と書かれている。

どうです？面白いでしょうか？と声を掛けられ、「はあ」と答える。

「それでは、行きましようか」

何やら準備し始める射命丸に風間は口を開いた。

「先刻は、何していたの？随分と必死だったけど」

「あやや……あれですか」

倒れた木々を尻目に射命丸が少し困った笑みを浮かべた。けれども、すぐにその胸をはって「秘密の特訓です」と答える。

「新しい技に挑もうと思っているのですよ」

新しい技ねえ……。

「まあ、それはともかくとして」

そう言いながら翼を広げる。黒いその翼はまるで鴉ようであった。

「舌、噛まないでくださいね？」

少し意地悪そうに言葉にして風が風間を纏い始める。瞬間、突風が走った。

「到着つと」

ここまで数十秒も掛からなかった。やはり、早いなと思いつつも風間は地に降り立つ。周りの風景をざっと見渡すと、そこは神社の境内であった。森に囲まれた神社の鳥居には『博麗神社』と書かれてあった。

神社の本殿の縁側に1人少女が座っている。お茶を飲みながら目の前にいる。まるで魔女のような少女と何やら会話をしているようだ。

「どうも！清く正しい射命丸です！」

「ああ！アンタまた変な記事書いて　　って、こいつ誰よ？」

射命丸の後ろに居る風間を指して少女は首を傾げた。

「ああ、外来人なんですよ、彼。名前は　　えーと」

そういえば言っていなかったか。射命丸が振り向いたのでそれに答えて風間は口を開いた。

「風間大介って言うんだ。よろしく」

言いながら風間は微笑んだ。初見の人には好印象に。これが風間のモットーでもある。それにまず笑顔が大事だ。

まあ、妖怪　　今は神様の身であったか。この身であるからいきなり攻撃仕掛けてくるやつとかたくさんいるがな。

中々強烈な奴も居たよな。フラワーマスターとか。

「そう、私は博麗霊夢。ここの巫女をやっているわ。んで、こつちが　　」

「霧雨魔理沙って言うんだぜ。魔理沙って呼んでくれ」

風間は頷き、そうして改めて2人を見る。この2人は人間である。それは間違いないようだ。だが、博麗と名乗る少女の感じ取れる霊力が半端じゃない。この若さでこれ程とは……晴明と同じくらい才能があるのではないか。

一方、もう1人の　まるで魔女の少女から感じ取れる力も相当であるが、あまり見たことのない　いや、ある。

魔理沙と名乗る少女の力。あれは確か風見が一度使っていた技の力に酷似している。

「風間……?」

と、呟く射命丸を無視して風間は何か慌てて取り付くようにして口を開いた。

「そ、それよりこちら辺には村とかないのかな?」

射命丸に対してそう口を開くと、射命丸は考えていたことを中断して博麗に話を掛けた。

「私はあまり人里に知り合いはいないので慧音さんでしたね。彼女に言っただけの住み所を確保してもらいたいのですが」

「面倒ねえ……ん?あれは外来人でしょ?外に送り返さなくていいの?」

あれって……。

物の扱うよう言われて少しムカつくがまあ、いい。得に嫌気とかそういった類いは感じられないし。

「それが、彼は自らの意志でここへ来たらしんですよっ!」

まるでネタの宝庫だ、とばかりに目を輝かせて言う射命丸。

「自分で？この幻想郷に？」

「とんだモノ好きも居た者だな」

到底信じられないように2人が口を揃える。

「ですよねっ、風間さん」

「ん？まあ……ね。一応八雲に誘われてこっち来たが、入ろうと思つたのは俺自身のわけだし」

「誘われた？紫に？」

「ますます、判らないと言う顔をする魔理沙に対して少し博麗が目を細めた。」

「またアイツは訳が判らないことを考えているわね……」

博麗の巫女。霊夢はこれまでの紫の行動、言葉。それらすべてが妖しいと確信できるような経験を幾つもしてきた。

「また、紫自身とはまだ出会って日が浅いが「思わさせる」「考えさせられる」ような事が幾つも起きている。」

博麗の巫女の勘は鋭く正確だ。

そうしてまた博麗の勘が言葉にする。

「面倒くさいことが起きるかもね……」

1人呟く言葉は誰の耳にも届かない。風間は射命丸に何か言われ、魔理沙はそれをおかしく見ている。

そうして博麗自身も呟いた言葉に重みを持たずに「まあ、いいか」といつも通り軽く流す。

コレが異変であった場合には違っていただろうが、風間は外来人。「ただの」ではない何かを持ってはいるがそれだけだ。

「あのスキマ妖怪に誘われたとは聞いておりませんでした！そこら辺をkws k!」

「いや、だから取材は後でだってば」

風間は射命丸を押しつけて、博麗に向き直った。

「で、その慧音さんって人に会えばいいのか？」

風間としては慧音と呼ばれる人に迷惑は掛けられない。大体、風間はもう3千年近く生きる妖怪 神である。

それこそ話によると住み所を確保してくれるというが別に洞穴でも洞窟でもましてや木々に囲まれた場所でもいいのだ。

人里に向かう理由としてはそこで働いて稼ぐためとある程度の野菜、肉等の食料。それと生活用品の購入だけである。

「そうね、彼女は何人も外来人を相手にしているし判らないことがあつたら彼女に聞けばいいわ」

そう言いながら何か思い出したように言葉を切つてふと考える。

ちよつと思ひ当たつて博麗はそこで初めての笑みを見せた　　ちよつと意地悪そつな笑みであつたが。

「素敵な賽銭箱はそこよ」

「……は？」

「だから、素敵な賽銭箱はそこよ」

……。

そこまで言われてああ、なるほどと気がつく。つまり貢げと。人里まで案内してやるから貢げと。

「賽銭箱というのは神社に参拝するときに、祈願や感謝の代償としてお供えする金銭の意味になっている。賽銭は神に奉げる供物の一種であるはずだ。俺は別にこの神社を信仰しているわけでも、参拝しにきたわけでもないよ」

あ、そうとでも言いたげに博麗は一瞬でつまらなさそつな顔に戻つた。なんだがそれが嫌で風間は言葉を続ける。

大体、賽銭箱は神社の寄付とは違つんだぞ？

「だが　境内に入って参拝の1つもしないんじゃ礼儀というものが無いよな」



言いながら風間は財布を持って本殿に向い作法に習いながら、礼をする。そうして投げ込むお金は八雲からもらったこちらのお金。その約半分を貢いだ。

金を鳴らし、礼をして戻ってくるころにはこちらが見ていて呆れるほど満面の笑みの顔であった。

「あら、そんなにお金を入れなくてもよかったのに」

顔に真逆のことが書かれてあったのにも関わらずいけしゃあしゃあと述べる博麗。

新聞に貧困とか書かれてあつたらなんだか貢ぎたくなるだろ。

「祀られる神への貢ぎ料だよ。この幻想郷で生きていけますようにつてね。なんだが苦勞しそうだから多めに入れただけだ」

「あら、それなら仕方ないわね」

相も変わらず笑みを崩さない。魔理沙は少し呆れながらため息。

「風間 こいつにそんな金使って大丈夫かよ」

「幻想郷の金の価値は分からないけどまあ、別にもう入れた後だし。どうこう言つつもりはないね」

言いながらも風間は首を振った。どうせ八雲からもらった金だし。八雲も自分の好きなようにつかいなさいって言っていたしね。

「それじゃ、案内してくれるかな？博麗さん？」

人里の風景は、平安よりも瓦の家が見えたりと文明が進んではいたが、それでも現代に比べれば劣っていた。

言うならば江戸末から明治時代の間だろうか。

人里と呼ばれるくらいに、人間もそれなりに多く住んでいた。それこそ妖怪も少しちよくちよく見られるが誰も騒ぎ立てるようなことはないし、妖怪も大人しく買物や商売の交渉など人と交わって暮らしている。

平安時代には都に妖怪が出たものならそく陰陽師が駆けつけて問答無用の成敗だから、風間にはそれがやはり新鮮に見えた。

慧音さん。という人物は半獣半人のらしく。この人里で寺子屋を開いているそうだ。さらに里の守護神とも言われているらしい。

「おや、博麗の巫女ではないか。人里に何のようだ？また宴会の食料調達か？」

「違うわよ。彼を人里まで案内しただけ。ついでにちょっとした収人も入ったし、買い物よ」

現れたこの人がそうかな？市の中。買い物袋を持って声を掛けてきたこの人。四角帽子を頭にのせて髪は蒼みが掛かった銀髪。スラリとした体格で顔立ちは整っている。

発せられる妖気は人の気が混じっている。

「外人かな？」

言われて頷いて風間は挨拶をした。

「どうも、風間大介と申します」

丁寧に頭を会釈程度に下げる。

「これはじ丁寧に。私は上白沢慧音と言つ。よろしく頼むよ」

お互いが会釈をして挨拶を交える。そうして次に博麗が話を切り

出した。

「お互いの挨拶が済んだのならいいかしら？この人の住みどころ。確保してくれない？」

「ふむ……そうは言われても……」

「あ、別に人里でなくともいいのです。小屋みたいなところがあればそれで構わないですよ」

「小屋……小屋か……」

少し考えるようにして手を頭に当てていたがすぐに風間を見て口を開く。

「人里より少しだけ離れた場所に使っていない倉庫がある。そこには前人が住んでいた場所であるから生活用品等も置いてあるだろう。よければそこを使ってくれないか？」

本来、外来人の受付というものは慧音　もしくは安全とされる幻想郷の住人に保護されることが多い。博麗の霊夢であったり、だが自分から生活を求める者には住居を与える。

慧音、博麗とて1人の人である。何人も外来人を抱えていられるわけがないからだ。

「ありがとうございました」

その場所を教えてもらい、丁重に頭を下げる。

「しかし、本当に1人で暮らしていく気であるのか？よければ私の家が空いているのでしばらく面倒は見れるが」

「あ、いえ。自分、外人って行っても自分の意志で来た者なんです。放浪経験も長いですし、なによりこの世界のことは八雲紫から聞いていますので」

「そうか……何か困ったことがあったら言ってくれ。いつでも力になるぞ」

その言葉に礼を述べて立ち去る慧音に頭を下げる。

「上白沢さんって良い人だな」

「そうね、悪いヤツではないわ」

言いながら自分の肩を揉む。

「さて、私は少し買い物をするわ」

言いながら立ち去ろうとして止まり、振り返った。

「貴方も面倒なことは起こさないでちょうだいね。駆りだされるのはいつも私なのだから」

その言語に一応頷いておいた。





12話「幻想郷」(後書き)

文章がうまくかけない。

ちょっと今回は短めです。すみません。



13話「東方風神録」(前書き)

遅くなつてすいません。

あと6万アクセスで50万!皆様の声にお答えして『番外編』  
『清明』  
卑弥呼の両話を予定します

### 13話「東方風神録」

風間が妖怪である　神であることは首飾りによって抑え隠している。これは八雲紫から直々に言われたからである。

今、この幻想郷に風間のような力を持つ者が入ると色々と面倒なことが起きるのだと言う。さらに言えば、この幻想郷に入ろうとする者もいるらしい。

八雲紫としては、異変として扱われて一悶着は確実に起きるだろうから、さらに風間が関与して複雑になるのは面倒な事だと言う。

しかしながら、いつまでも隠しているわけにはいかない。ではどうすればいいのかと尋ねた時、八雲はこう答えた。

新たに訪れる奴らが起こす異変が完全に終わってから正体を明かすように、との事だ。

何故終わった後なのか。そこら辺は判らない。だが、八雲紫には色々と思惑があるのだろう。

さて、そんなこんなで未だ神である　人外であることを隠す風間であるが、幻想郷に来てから1ヶ月。今はちよつとした運搬業を勤めている。

外人であるが、特殊な能力を持ったために八雲紫に呼ばれたといいふけているために、大っぴらに能力は使っている。ただ、力自体は一般妖怪の半分もないほどに抑えられているために今は軽視されているようだ。

そんなわけで幻想郷に来たわけだが、風間自身の生活というのは昔と然程変わってはいない。運搬業の仕事をしながら、稼いだ金で生活し、森の奥で身体を動かす程度だ。

運搬業と言っても、幻想郷の奥に住む人などに配達を行うことが多くある。これは、風間自身、幻想郷の細部を知るためでもあるが、それが人里の人達や、人里に事情があつて行けない人に思いの外、人気らしく。中々稼がせてもらっている。

「ちーす、毎度おなじみ、風間屋だよー。今日もお届けに……ってどうしたの？」

博麗神社。運搬業をやり始めてから配達が多くなつた場所でもある。なんでも、博麗の巫女曰く「人里に降りるのが面倒」である。

ちなみに、お金は貰ってない。実質『タダ』である。

これは風間が幻想郷当初に降りたとき運搬業をやり始める切っ掛けとなつたわけだが、ここは割合させてもらう。

さて、その博麗神社にて、今日も酒やら食料をお届けに来たわけであるが博麗と魔理沙が何やら深刻な顔で審議中である。

「風間か。悪ね、今取り込み中なんだ」

「どうした、なんか会つたの？」

「まあ、何かあつたとすれば、何か会つただけれども……」

博麗が少し苛立った顔立ちで何かを考えている。

「人里の方にもなんか変化あったか？」

「いや、今日は人里は特に　ん？　そういえば何か新しい神社がどうとか……」

「それよ、妖怪の山に神社ができたのよ。しかもたちが悪いことにその神様が信仰を集めているの。お陰で私の神社が危うく乗っ取られそうだったわ」

妖怪の山。妖怪の山といえば幻想郷に高くそびえる山の1つ。天狗がそこを疇としている山である。名の通りに妖怪が多く住むところだから人なんて滅多に訪れない。そこに神社ができたと2人は言う。

しかも、神様が博麗を乗っ取る？

なんだか凄くトンチンカンなことに風間は首を捻るばかりだ。そうして捻った首で考えて風間は八雲の言葉を思い出す。

この幻想郷に入ろうとする者が現れる。そして必ず一悶着起こすだろう。それが『異変』

首を元に戻して顔を引き締めた。

「……行くわよ、妖怪の山に」

「行ってどうするよ？」

「決まってるじゃない。これは異変よ。その元を断つの」

「ま、いつも通りってことだぜ。結局」

魔理沙の笑顔の反面、博麗は顔を顰めた。

「いつも、で行く羽目になってる私の身にもなりなさいよ。面倒じゃない」

「何言ってるよ。それが霊夢の仕事だろ？」

「な、なあ!」

風間が声を上げて2人は振り返る。今にも行こうとそれぞれ、陰陽玉を、箒を持つ2人に風間は声を掛けた。

「それ、俺も行っていいか？八雲には異変があると聞いていたのだが、この目でどんな者が確かめたいんだ」

「おいおい、いいか。これは遊びじゃないんだぜ？幾多の弾幕をくぐり抜けたものだけが、この幻想郷の異変というものをだな」

「あら、別にいいんじゃない？ただし、自分の身は自分で守りなさいよ？それと、かまったられないから倒れても置いていくわよ？」

言葉を閉じられて不満そうな顔を残す魔理沙を放っておいて博麗はどつでもよさそうに声を出した。

「お、おう。頑張るぜ」

なんだか、妙に緊張する風間である。

飛ぶのは妖怪の山の麓。秋の紅葉。落ち葉に視界が入らないように目の前に風を張って移動する。

「そういえば、貴方って飛べたのよね」

「そうじゃなきゃこの幻想郷で運搬業なんてやってられんよ」

「外来人にしてはスゴいな、お前」

まあ、元から飛べるが。

「それにしても、落ち葉が邪魔ね……こんな調子で山に入って大丈夫かしら」

「秋の風情じゃないか」

「邪魔くさいけどな……おや、良い匂いが」

風間の言葉に博麗と魔理沙も鼻を鳴らす。ほのかに香ばしい香りが感じられた。この匂いを何処かで掻いたことがあることは確かだ。そう……これは焼き芋……？

「あら、本当ね。美味しそうな匂いだわ」

「巫女の癖に神を喰べようだなんて！」

言葉と共に現れたのは小さな女の子。例によって幼女……とまではいかないが1、4、5程度の少女であることは確かだ。

「笑止千万、不届き千万！」

勢い良く紅葉と共に現れた少女が声を荒げる。

赤の帽子に黄色の髪。茶色のワンピースのようなスカートを履いてまるでその色合いは紅葉のようである。

「誰が食べるって言ったのよ。でも、美味しそうな匂いは貴方の匂い？」

「神様たる物、身に纏う香りも気をつけないと。あ、ちなみに私は豊穰の神ね」

豊穰の神……？

「うーん、生焼き芋の香り」

「収穫したてのお芋は私の香水。巫女に喰べられてたまるもんですか！」

弾幕が紅葉と共に、舞い上がるように放たれる。妖弾とは少し違うような色合いを持ちながらも、その弾は確実に風間達を狙っていた。

息を合わさるように3人一斉に散開してすぐに魔理沙が濃い弾幕を放つ。

太くレーザーのような弾幕はすぐに辺りを埋め尽くし、豊穰の神を飲み込んだ。

「おお、今日はそこそこ調子がいいぜ。これなら今日は楽勝だな」

「あら、随分余裕なこと」

濃い弾幕から出てくるりと一回り。擦れたスカートを叩いてちよつと不満顔。

「妖怪に怯える人間のくせに」

「失敬な、妖怪以外にも怯えるぜ」



「あんたらが今から行くところとしている場所は今までの妖怪と訳が違  
うわよ」

「へえ、それは楽しみね」

今度は霊夢が、巫女服から札を放つ。対妖怪用のその札は豊穰の  
神にまとり付くように動く。

「何の!」

回転。木の葉が舞豊穰の神を隠して札を防ぐ。

「私は八百万分の一の神この先は神がごろごろしてるわよ」

「神でも妖怪でもどちらでもいいわ。取り敢えず私たちは山に入る  
の。大人しく引きなさい」

「聞き分けの無い人達ねー」

はぁーと一つため息を吐いて、額に手を入れる。

「いいわ。行きなさい。私はしーらない」

「あら、素直じゃない」

「いい子だぜ」

「私は豊穰の神。戦うのはあまり好きじゃないの……本当は2人掛  
かりなんて無理なだけだけど。怪我するの嫌だし」

何か、眩いたようであるが、兎に角ここを通させてくれるらしい。  
言葉に甘えて霊夢、魔理沙は通り抜ける。

風間も後を追うようにして通り抜ける。

……一瞬、見られた気がするけれども、気のせいであろう。

てか、神様がー少し厄介だなー。

神奈子の話によると神同士なんてすぐに分かるらしい。風間の場  
合は少し特殊なようだが。まあ、いざとなったそれなりに戦えばよ  
いだろう。

「っ！アブね！今カスった！」

妖精がまるで蟲のようにウジャウジャと湧いて出てくる。あちこちから飛ぶ弾幕をかわしながら前を進む事は以外にも難しい。

弾幕自体、基本見慣れていない風間にとってはたかが妖精であるけれども、少し見分けるのは苦難だ。

慣れた様子の2人はスイスイと前へ進んでいく。

「おー大丈夫かー」

「……2人はさすがに慣れているみたいだね」

「それはそうだろう。この程度で音を上げてちゃこの先付いていけないぜ」

「……精進するよ」

山の渓谷に入ったようだ。

まるで夜のような薄暗さに風間は目を細める。

「しよっぱなから気持ち悪いなあ。　こころ辺の空気が重い・・・  
昼なのに光も届かないし」

「産医師異国に向こう・・・御社に蟲さんさん」

「何の呪文よ」

怪訝そうに顔を顰める博麗。こつ話しているうちも妖精たちの弾幕が張つてある中であるのだが、それをなんとも思えないように潜りぬけ、あまつさえ間の抜けた会話を行っていることに、少しは緊張感を持つて欲しいと風間は思った。

「あら、人間よ。また迷い込んだのかしら、ほいほーい」

「またもや別の気配。今度は結構な神力だ。」

「私たちは馬かなんかではないわよ」

「右に同じく」

「あら、聞き分けのないところがそっくりじゃない」

「失敬な！馬はちゃんと言う事聞く生き物だぞ！」

くるり。

回つて回つて、まるでゴスロリのような服装のスカートが舞う。

「誰よ、アンタ」

「私はここで厄を集めているの」

「それはえんがちよだな」

指を2つ、人差し指を合わせて魔理沙が切る。

「えんがちよの向こう側に私が居るから、人間は平和に暮らせるのよ。山は人間の立ち入る所じゃない」

「これから盛大に盛り上がってくる所だぜ。邪魔するな」

「人間が山に入ってどうするのよ。危ないわよ？」

「邪魔をするなら敵と見なすわよ」

「私は人間の味方。人間の厄を受けて、神々に渡しているの。なんなら、貴方の厄災も全て引き受けましょうか？」

「妖怪は私の敵。あんたは妖怪」

「あらゆる厄災が降りかかるわよ。人間を守る為にも行かせるものか！」

廻る。廻る。

スカートをはためかせ、まるで人形のような美しい顔とは裏腹に、身体が廻り廻ってその分だけ濃い弾幕が踊り出た。

「おっと、こいつはヤバイぜ。風間。下がっておいたほうがいいぜ」

風間の前に踊り出た魔理沙に頷いてその場を離れる。

少し上昇して後退し、入れ替わるようにして博麗も前へ出る。

「私の名前は鍵山雛厄かぎやまひなを貯めこむ神様。貴方達の厄を取り除かせてくださいな」

厄符「バットフォーチュン」

スペルカードだ。

宣言することで発動するスペルカード。提示されたカードの技を攻略するか、破るかでその勝敗が決められるスペルカードルールの重要中心物。

廻る厄の神から濃い密度の弾幕が放たれる。

それを悠々と紙一重でかわしながら陰陽玉の攻撃と札を。魔理沙はその極太いレーザーで応戦する。

弾幕と弾幕が宙で爆せて七色に光る。その中でも自分を狙う弾だけを見極めて回避する2人の姿を見て、やはり熟年の技の匂いがする。

「厄符『厄神様のバイオリズム』」

次のスペル。スペルを宣言して起こす弾幕が2人を襲う。

「あくびが出るぜ!」

レーザーが厄神を襲う。弾幕を操り盾のようにするがそれらを投げ倒して、貫通する。弾き飛ばされた厄神を博麗が追撃してスペルを破った。

「くっ……疵符『ブロークンアミュレット』」

「魔符『ミルクィウェイ』」

厄神のスペル宣言に合わせて魔理沙も宣言する。札のようなカードのような、あれがおそらくスペルカードというものだろう。宣言し、出されるのは輝く星のような弾幕。形をなし、個体を持って厄神に降り注ぐ。

「重い……」

「あら、そっちはっかかり気を取られていいのかしら？」

魔理沙のスペル上から博麗が踊り出て針のように鋭い弾幕を大量に降り注いだ。堪らずスペルが崩壊し、厄神も吹き飛ばす。

「……こなくそ！」

疵痕『壊されたお守り』

夢符『封魔陣』

霊撃が飛び、拡散して一瞬にして厄神のスペルが消し飛んだ。

その威力に風間は思わず笑みを残す。

博麗強えー。

「そ、そんなあ!?!」

「まだまだ!」

魔符『スターダストレヴアリエ』

魔理沙の畳み掛けるような横撃に厄神が唸る。

「悪霊『ミスフォーチュンズホイール』」

「あら、こつちよ?」

さらに横撃。今度は博麗の針弾幕と札のホーミングが飛ぶ。

「くつ、非運『大鐘婆の火』」

鋭い音と共にスペルが宣言されて2つのスペル弾幕が厄神を守るように展開した。

「おお、同時スペル」

「やるわね」

「あ、貴方たち! 2対1なんて卑怯よ!」

「何言ってるのよ、魔理沙が勝手に貴方と戦っているだけ。私は1対1のつもりよ」



「パーティだよパーティ。魔王を倒すためには勇者1人だけじゃ無理だろ？」

何を言っているのか、この2人は。

呆れたようにため息を出す。

まるで会話が噛み合わないくせに、連携が素晴らしいのだから尚ため息が漏れる。

「くっ！」

大鐘の婆の火。鬼火のような濃い妖気が2人を離すように拡散する。

「熱っ」

舞い上がる火の子が飛び、堪らず声を上げ、離れる魔理沙であるが博麗は拡散した火をもろともせず接近する。

「創符『ペインフロー』！」

妖気によって創られた水が接近する博麗を押し潰そうと襲うがすぐに靈撃を飛ばしてそれを爆ぜる。

「創符『流刑人形』」

水が流れを増して加えて弾幕が拡散する。

「残念、くっよ」

すでに懐に入っていた博麗が零距离で札を放つ。

「ぎゃあー！」

悲鳴を上げ、スペルが崩壊した。

「私は親切に追いつ返そうとしただけなのに・・・」

「追いつ返されること自体が親切じゃないのよ」

「これから先は神々の住む世界。後悔するよ。人間の行く所じゃないわ」

「あつそう。次はやっと妖怪の山に入るのね」

「山に行きたいって……貴方達本当に人間？」

「あら、失礼ね。まだ辞めるつもりはないわよ」

その言語に呆れたのか、厄神が盛大に溜息を吐く。

「ほら、行くなら早く行きなさい。ほいほーい」

「だから、私達は馬じゃないぜ」

「いいじゃない。早く消えて欲しいわ。イタタ……まったく。手加減くらいしなさいよ2対1なんだから」

「お大事に〜」

なんとも間の抜けた会話に風間は苦笑いを残す。アレほど激しい戦いを繰り広げていたのにも関わらず両者軽い感じなのだから。

これが幻想郷の言う遊びなのだろう。

「待ちなさい」

先を急ぐ博麗達とはぐれぬよう、追いかけるように行こうとする風間に厄神が声を掛けた。

「貴方……厄いわね。取り払って……って、何よ。貴方神様じゃない」

「ど、どうも……」

「なんだって人間の後を付くのよ？ やっぱり貴方も山の上にいる神退治？」

「いや……退治するかはわからないけど、まあ、あの2人は一応知り合いだし、俺この幻想郷に来たばかりだから異変がどういうものかしりたくてね」

さして興味がなさそうに鼻で返事をするが、思い出したようにして顔をこちらに向ける。

「この先何があったものかわからないけど、気をつけてね。貴方厄いわよ」

や、厄い……？

「不運があるということよ。人間だったら取り払ってあげれるけど、神様は例外なの。神自体に厄には対抗があるから元々取り払わなくていいんだけどね。あ、祟は別よ？」

「……ご忠告どうも、気をつけるよ」

「あら、素直でいいこと……いてて。それにしてもあの巫女たち容赦がないわよ」

博麗たちに追いつくと。すでに次の1戦が終わっていたようだ。

「つ、強い。私の兵器で倒せないなんて……人間とは思えない強さだわ」

へ、兵器……？

「さあ、先に進むわよ」

「人間よ。河童と人間は古来からの盟友だから教えてやるよ」

「盟友？古来からの宿敵の間違いじゃない？」

「負けた奴が盟友とか言うのはちゃんちゃらおかしいぜ」

そんな言葉にも華麗にスルー。

「最近、山の上に不穏な神が居着いたのは事実。貴方はそれを倒しに行くんだろ？」

「おっと、思わぬところで情報得たわ。何が目的で山に入っているのか忘れかけてたしね」

……それは、本当だろうか。

博麗も魔理沙もどこか少し抜けて  
いや、これが幻想郷に住む  
人達の本来の姿なのかもしれない。

「ああ、頼りない。人間は頼りない。やっぱり天狗様に相談した方がよかつたかな。まあ、

この辺の河童には伝えておくからこの先に行きなさいな」

そういう女の子。青い色神に緑の帽子。合羽のような着物に小さなリュックサック。

リュックサックから伸びるマジックハンドみたいな物きつと幻覚である。

「さあ、どんどん行きましょう」

「ほら、風間。もたもたしていくと置いていくぞ」

凄まじい勢いで進軍していつてるな。

「滝が見えてきた・・・これからが本番ね！」

博麗の言う通り、山の滝がみえてきた。水しぶきを上げる滝は長く、高い。これを登って行く。途中天狗と思わしき人物が立ちはだかったが2人瞬殺されて顔をよく見えなかった。

……出てきていきなり2つのスペルでボコられるのはさすがにかわいそうであったが。

「……っ」

いち早く、感じて風間は眉間に眉を寄せた。

「あやや……報告を受けてみれば、貴方たちとは……」

風と共にあの射命丸と名乗る天狗が現れた、何処か疲れているようにも視える。

「おや、何時ぞやの天狗」

「別に天狗に用があるわけじゃないわ。引きなさい」

まるで汚れ物でも扱つように手を振つて払う。

溜息を吐いて漏らし、額に手を当てた。

「侵入者の報告を受けて何故か私が呼び出されたのよ。私はただの新聞記者なのにねえ……見回り天狗の仕事でしょうが」

「何、愚痴を言いに来たわけ？」

「だったら案内してくれよ、聞いたぜ。山の上に神様が住み着いたんだってね私たちはそいつを倒しにいく勇者のパーティだぜ。命令は勿論ガンガンいこうぜ！」

え、それってなんてドラ エ？

「山の神様？ははくんさてはあの神様ね」

「何か知ってるの？」

「最近、天狗も手を焼く神様が住み着いたのよ。どんどんと山を自分の物にしようとするし……。最近は麓にまで降りて信仰を集めようとしている、って言う話だし……」

『そいつだ』

同時に言葉を聞いて手を打つ。

「何処にいる？そいつに会いたいのよ」

「調子に乗るようだったら天狗達で倒すつもり。貴方たちは必要な



いわ」

「折角ここまでできたのだから、いいじゃない」

「そうだぜ。こっちは厄介者退治のプロだぜ。素直に私達に任せな」

またもや、ため息。

「でも、私は貴方を通す訳に行かないの。私があっさり通しちゃったら、見回り天狗達も納得がいかないからね」

「面倒な種族ね、天狗って」

「まっただけだぜ」

黒い翼を広げ、扇を構える。風を広げて、威圧するように妖力を上げた。

「組織に属するということは自分の意志だけで動けないときがあるのよ。さあ、手加減して上げるから本気で掛かってきなさい！」

濃い妖力が風と共に舞い、射命丸を包んだ。

彼女もそれなりに年を重ねたようで、妖力の密度が濃い。相当できるようだ。

「手加減してくれる。なんてしけた事いわないで、どうせなら不戦勝にしてくれたっていんだぜ」

言いながら魔理沙も構える。それに対して博麗は少し顔を歪めた。

「面倒だわ……。あいつ、結構面倒くさいのよねー」

うーんと、唸る博麗。

ふむ、そうだな。そろそろいいかもしれない。

前へ踊り出るような形で射命丸と対峙する。

「おや、風間さんじゃない。貴方も来ていたのね」

と、声を掛けられ、適当に相槌を打って博麗たちに話を掛けた。

「博麗、魔理沙。ここは俺が引き受けるよ、先に行ってくれ」

「おお、男だな風間」

「あら、貴方で大丈夫なの？」

それは、射命丸の相手が務まるかという問いかな？

「正直、結構限界だからさ。この先に付いて行っても邪魔になるだけだし」

「そう、そういうことなら仕方がないわね」

「んじゃ、先輩からのアドバイスだ。弾幕はパワーだぜ！ガツンっ  
と行ってきな」

はいはい。

「と、言う事で文。この人が相手だから、私たちはお先にね」

「あやや、風間さんが相手ですか……って、何言ってるのよ。ここから先は誰一人通さないの。大人しく帰って頂戴」

「そいつはできない相談だ、ぜ」

魔理沙からレーザーが放たれる。

瞬間、それぞれ動く。

レーザーを風で防いですぐさまスペル発動。濃い弾幕が放たれるが博麗が、札で横撃して魔理沙と列をなし、弾幕を逆に盾にして射命丸をすり抜けた。

「あやや……お速いことで」

肩を竦めて、ため息一つ。そうして風間を見据えた。

「それじゃ、ちゃちゃと終わらせて追いましょつか」

「……手加減してくれよ。実は弾幕ごっこ。初めてなんだ」

言いながら風間は構えた。事実、決闘のような戦いは幾つもしてきたが、スペルカードルールというルールが決められた条件で戦うのは初めてだ。

それに、まだ妖力隠さないといきないのでそのハンデもある。

まあ、妖力抑えた状態で何度も戦ってきているのだけれども。

「弾幕デビューですか。お相手が私とは光栄ですね。能力持ちの外  
来人さん」

すつと顔が引き締まる。

「悪いけれども、インタビューはまた後で。ちょっと今はウォーミ  
ングアップに付きあわせて頂戴」

妖力が、跳ね上がり。風が舞う。それと同時に数多の妖弾が現れ  
る。風で形成されたものもあれば純粹に妖力だけで形成されたもの  
もある。

「もしかして、ウォーミングアップにもならないかしら」

岐符『サルタクロス』

「精進するよっ!」

弾幕が降り注いだ。

「これで4つ！」

「やるじゃない！次はどうかしら？」

妖力を抑えた状態で、射命丸のスペルを破る方法ない。体術を使えばどうとでもなるが風間自身の気持ちとしては弾幕ごっこの練習となっている。

スペル1つ1つに限られた妖力があるらしく、それが切れるまで逃げ切れればスペルを破ることができる。

弾幕を見慣れておかないと、後々面倒なので、今は回避に徹底している。

### 無双風神

射命丸が神速の風と共に消える。否、消えたのではない。早すぎ

てみないのだ。

神速で動きながらも妖弾を四方から放ち弾幕を創り上げる。

厄介なスペルである。

何処の方へ逃げようが、まとわり付くようにして動いて囲むように妖弾を放ってくるもんだからたまったものじゃない。

「っ！」

弾幕が当たりそうになるところを靈撃を飛ばして防ぐ。博麗特性のお札だ。威力は凄まじい。

陰陽の心得も晴明に叩き込まれたために札の扱い方は問題ない。

「あやや……これも破られましたか」

正直、ここまで射命丸が風を操りきれれるとは思ってもみなかった。できるとは思っていたけれども。精度が意外にも高い。

神速も速さに振り回されていない。

うん、強い。

「正直、風間さんがここまでやれるとは思ってなかったわ。でも、いい加減あの2人を追わないと」

風が収集されて、1つ、大きな空気に歪みができる。

この音。この感じ。知っている。

「いつまでも初心者にウダウダやっているんじゃない私のメンツが潰れるわ。悪いけど、決めさせてもらおうよ。風間さん」

暴風「螺旋丸」

「っ」

来た！

風が収集されて、圧縮される。あらゆる風が射命丸の掌に集まり、一時的に周りの空気が歪む。暴風とも呼べる風が集まる。圧縮する風が外へ逃げようと力が働く。それを手もう一方の手で手首を抑えて力を加えて抑えた。

「くう……」

なんとか、抑えきった射命丸の掌には1つの円形の風が。

「行きますよ！風間さん」

射命丸が素早く動き懐に飛び込んで彼女の螺旋丸が風間を直撃した。

吹き飛んだ風間が山の木々をなぎ倒して地に叩きつけられたことを見届けて、少しやりすぎたと頭を掻いた。

なんとか形を形成するだけで手がいっぱいであっただけに手加減なんて蚊帳の外であった。

「まずったかなー」

能力持ちの人間として後タインタビューする新聞記者の身である射命丸にとって、少しマズイ状況なのかもしれない。

「おーい、風間さん大丈夫ですかー」

声を掛けてみたが、返事はなし。

ふむ。



1つ自分で頷いて再度頭を搔く。

これはまずったかもしれない。

螺旋丸。風神の技を実践に使ってみたのは初めてであるが、此れ程とは。少し物足りないような気もするが、それはスペルカードの制限があるのだろう。

風間。あの風神と同じ名前であるから、興味を持ったけれども。所詮は外人か。いや、能力持ちであそこまで立ち回れる外人人はそうはいないけれども。少し惜しいことをしたか。

「悪いですねー風間さん。今日の私はどうやら手加減を余り出来ないようにして」

聞こえはしない。もしかしたら死んでいるのかもしれない。だが、声を掛ける。

「それじゃ、私はあの2人を追うので、コレにて　っ!？」

な、なに!？

突然のことに息が詰まり、激しく動揺する。

一瞬、たった一瞬でデカイ妖力が　辺りを包んだのだ。

確実に自分の倍以上あるのでかさに射命丸は少なからず、肩を震わせた。

大天狗以上はあるだろう、その妖力に慌てて周りを見渡す。

あまりに大きすぎて、一瞬、何処で発生したのかわからないほどであった。だが、すぐに飛んできた声にさらに射命丸は絶句する。

「イタタ……未完成でもこの威力なんだから洒落にならんよな」

「……………あ」

なぎ倒された木。そこに立つ人間　いや、今はもう人間じゃない。これはれっきとした人外だ。

それが浮遊し、射命丸の前に立ちほだかる。濃い妖力を残して。

「知ってるか、螺旋丸っていうのはただ、風を収集して圧縮するだけではだめなんだよ。そこに自分の妖力を加えて、それでいて形を崩さないように、螺旋を描くように圧縮するんだ」

風が集まり、暴風が吹き荒れる。その掌に集まる風は綺麗な螺旋を描いて、円球を描いて留まる。

四方に拡散する風が素直に吹き鳴く。

風符『螺旋丸』

そう、彼にとっては暴風もただの風。無理やり抑えるのではなく、まるで風自らがそこに集まるように、優しい。決して荒々しいものでもない。

「改めて、自己紹介をしようか」

言いながら肩を竦める。そして、まるで格好でもつけるようにヒルに笑ってみせて、それがなんとまあ、似合っていて。

「俺の名前は風間大介。巷では風神なんて呼ばれている。ただの神様さ」

ああ、なんてことだろう。

射命丸は諦めにも似た感覚に震えて、なんだか馬鹿らしくなり、笑う。

どうやら、選ぶ相手を間違えたようだ。

「んじゃ、悪いけど。眠っておいてくれ」

刹那、そう呼べるに正しい時間で風間の姿が消えて、気がついたら風と宙を舞っていた。

空にいるのに、宙を舞うなんて、可笑しいこと。

視野が、暗くなる。



### 13話「東方風神録」(後書き)

皆様のお陰でもうすぐ50万アクセスとなります。

この度は50万アクセスを記念してなにか、番外編を作りたいと思います。

晴明のその後であったり、晴明がおんにゃのこであることがバレた時や、卑弥呼と風間の出会いなど。ご要望があったら感想にてどうぞ

50万記念！番外編「卑弥呼と風間」（前書き）

50万ユニークアクセス。ありがとうございます！これからも応援のほうよろしくお願いします。

それでは、眠たい目をこすって書いたものですけど。風間が卑弥呼とあったお話です。どうぞ！

## 50万記念！番外編「卑弥呼と風間」

時は弥生。人が米を農作するようになり、言葉を持ち村を作る時代。ここから人の発展が始まったといっても過言ではない。

渡来人と呼ばれる人がその技術を日本に伝えたことから発展した人の生活。

その中で幾多の村を束ねて1つの国を作り上げた人物がいる。神の使いともされ人々から尊敬、畏怖、または信仰の目を向けられる人物。

その人が占うと100発100中。また、怪奇な現象を操り妖術を使って人の心を惑わすともされる。

名は卑弥呼。

「魏志倭人伝」によると、卑弥呼は邪馬台国に居住し（女王ノ都トスル所）、鬼道で衆を惑わしていたという（卑彌呼 事鬼道 能惑衆）。この鬼道や惑の意味には諸説あり正確な内容は不明。ただし中国の史書には、黎明期の中国道教のことを鬼道と記している例もある。

そんな卑弥呼であるが、この魏志倭人伝に興味深い記述が残されている。

倭ノ国ノ女王、側二風ノ人、在リ

この風の人と呼ばれる者は、風を操り幾多の妖怪を退けたとも言われている。魏志倭人伝にはこの記述しか書かれていないが、後の文章に『女王ト親シキ』と書かれている。

学会では今話題となっている『風間』ではないのか。風間と卑弥呼は夫婦関係にあったのではないかという説が上がっている。

しかしながら子を持たず、生涯夫は持ちあわせていないとされているのでこの説については否定的な部分が多い。

未だ謎を多く残し、さらに歴史の至る部分でその片鱗をのぞかせる『風間』彼は一体なものなのか。

風間神社が解放されている事件が話題となる今、さらなる『風間の嵐が学会に吹き荒れることであろう。

魍の世界 part 2』より

『魍魅魍



50万記念！番外編『卑弥呼と風間』

……どうしたものだろうか。

風間は深く悩む。

朝の運動も済ませてうんぐん唸ってかれこれ1刻は経つ。そうであつても依然として答えは出ず。未だにこうしてウンウンと唸っているのだが。

「うんぐん」

首を捻ってさらに考える。

首が傾くと同時に世界が傾く。さらに捻る頭と首。そうしてさらに時間が経つが。

突如、世界が廻った。

大袈裟でもなく、ただ単に視野が。風間が見る世界が廻ったのだ。

そうして次に感じる痛み。思わず「痛っ!」と叫ぶ。

「お前は何をしている」

顔を上げればそこに顔が。整った顔立ち、長い黒髪が肩から漏れて風間の顔にフワリとかかる。

「……臭い」

ゴキ。ボコ。

文字に表したらこんな感じだろうか。髪の毛のその脚力に苦しみを覚えて、思わず咳き込む。

「……乙女になんと失礼な」

「乙女って歳でも」

ゴリ。

「ぎゃあああああああ!?!お師匠!ダメ!それ以上はらめええええええええええ!」

「黙れ！その生意気な口を一生しゃべれなくしてやる！」

賑やかな午後。

他の人が聞けば何事かと血相を抱えるだろう。実際最初は本当に何事かと部下が何人も飛び込んできた。

だが、それも慣れればただの音。小鳥が鳴く音のようにそれは日常の一風景なのだ。

一悶着。

さらにボコボコにされた風間は満身創痍ながらもお師匠と呼ぶ自分の師に言葉にする。

「お、お師匠。無理です。これ以上は」

「……ふん」

もう余計な言葉を言う元気もあるまいと判断した女 卑弥呼は風間を解放する。

(六芒星呪縛に腹部連打って……さすがの俺でもしんどすぎ……)

唸って身体を立たせる。少しジャンプして首をコキコキと動かす。

「それで。いつまでお前は手間取ってるんだ」

「お師匠。俺にはこういうのは向いてないですって」

そうして見渡すのは1つの部屋。木と藁で出来た小屋であるが。風間と卑弥呼の後ろには大量の模造品やらなんやらが。

風間は政務の一つとして来週訪れるとされている魏の大国の使者がくるというのでその部屋の装飾を任されているからだ。

何故風間か。理由は簡単である。

『働かないから』

「お前がマジメに公務をこなしていればこんな仕事し侍女にでもやらせているものの」

「疲れてなにもしたくなくなるほど、地獄のような修行をさせているのはどこのどいつだよ」

あんな修行の後に公務をこなせなんて無理がある。

「男のくせに、軟弱だな」

「だれだってあんな修行受けたら死にたく成るわ」

もはや、修行と称してただ単にいじめているだけなのかもしれない。

幻覚と幻聴を見せつけるし。ましてや痛みを加えてきたものとキタ。

さらに、格闘訓練と称してサンドバックのようにボコボコにする

し。

「阿呆が。私はお前のためを思ってたな」

「あーはいはい。それはありがとございした」

ともかく、コレを片付けないと遊べないのでちゃっっちゃとやってしまおう。

「姉さん」

部屋に声が響いて、2人は振り返る。腕の入れ墨が目立つ若い男。卑弥呼の弟である。

名は帥升ウラシマというらしいが、本名かどうかわからない。何せいつもニコニコと笑みを浮かべて丁寧な言葉を使っているも裏で何を考えているかわからない。

表情が読めない奴なんて、本当に何を考えているかわからない。

それにイケメンだからなおかつ信用ならん。

「そろそろ、時間です」

「そうか」

今の時間は確か国の集会だったか。

倭の国を立ち上げてから色々忙しい。卑弥呼も多忙である。

「風間、私が帰ってくるまでに終わらすんだぞ。いいな」

「はいはい」

ギョ。

耳を引つ張られて、思わず声を上げる。

「イタタタ！」

「わかったな？それと『はい』は一度だ」

何度も頷いて、やっと開放される。耳の痛みに顔をしかめて耳をさする。

「では、いこうか帥升」

「はい、姉さん」

踵を返して小屋を出る2人。

それを見届けると、風間は大きくため息を吐いた。

この日本 倭の国の女王卑弥呼。歴史の教科書にも乗っている有名なお人はとんだお人だった。

歴史とは感じてみなければわからないとは言いが。まさかこんな風であるなんて誰が想像できようか。

最初に会った時もそうだ。

作業をしながら風間は思い出す。

あれは縄文時代だったか、弥生の初期だったか。能力を使って色々遊んでしゃしゃりでているところに卑弥呼　お師匠が現れて出会って3分でボコボコにされたことを思い出す。

今でも身震いがする。

いきなり世界が代わり、肉が削ぎ落ち、血管が破裂する感覚。目玉が焼き付き、腕が溶ける。

狂った世界にのたうちながらも、必死で抗うがそのすべてが無駄で一方的にボコボコ。

そのすべてが幻なのだが、風間がその痛みに耐えている中、実際にボコボコにされていた。

その中で気を失い気がついたら卑弥呼の部屋で寝ていたのだ。

そして、卑弥呼に「私のことはお師匠と呼べ」と言いつけられてあらゆる力の使い方を学んだのだ。

体術にばかり、妖術に然り。

それにしたって、未だにわからないのは妖怪である風間を何故弟子にしたのか。風間に出会ってボコした理由も『苛立っていたから』である。

そんな理由でボコったで良心が出来たとか？

いや、あの人に限ってそれはないだろう。どこまでも冷静で冷徹。他人には興味がない人である。

自分の行動には未練も迷いもためらいもない。こうと決めたらとことんやる。

モットーは『自由奔放』迷うな、止まるな、動き続ける。

理由を尋ねても『なんとなく』と答えるので、ますます判らない。弟に聞いてみたところ、『気に入られた』らしい。

……本当になんとなく、かもしれないが。

卑弥呼の気まぐれによってこの国に住み、そうして卑弥呼の元で修行をしてもう10年以上経っている。

風間もこの国の公務を任されるように（働かないがというより、働けない）なり、だいがこの国にも溶け込んだ。

それなりに楽しい生活はさせてもらってはいるので、卑弥呼には感謝している。

縄文時代は話せる人間なんてもんはいなかったし。なにより人接することができなかった。

「よし、こんなものだろう」

装飾なんてものは学生以来であったが、学生の装飾とは異なる。だが、この時代の風景というのはそれなりに馴染んだつもりだ。こ



の時代にありそうな 似合いそうな配置に装飾をおけば良いだろう。

「お、終わったようだな」

声がして振り向く。

片方の手を腰に当てて立つ卑弥呼。この時代布をつなぎあわせたような服である。卑弥呼の場合巫女服のようなものであるが、その上からも十分わかるそのスタイル。

顔立ちは美人であるし。胸も豊富である。

そこら辺の男なんてすぐ捕まえることができる容姿であるのに付き合う男性はいないという。

本人曰く『興味がない』らしい。全男が泣いた。

「まあ、ね。一応は終わった。お師匠のほうも会議終わったみたいだな」

「人前に出るのは疲れる……」

風間の隣に腰を下ろして壁に背を預ける。仮にも魏の使者のための小屋だというのにまるで自分の家のようにくつろぐな。

この人、人付き合いというものが苦手らしい。風間がこの国に来た時も部屋に籠りっぱなしでろくに口もしゃべらない。話すときは弟か風間だけだった。

さすがに、それはイケないと。無理やり風間が外に出したわけだが。

相も変わらさずぶっきらぼうにしゃべることしかできない。弟曰く、それがそそるらしいが。

「お師匠もいい加減、慣れたらどうだよ。もう10年以上経つだろう」

「お前が未だに鬼道を理解出来ないことと同じ理由だ」

そう言われるとぐうの音もでない。

鬼道は要は陰陽道だ。妖怪の自分に理解しろってところがおかしいが。

「……」

風間の肩に寄り添うようにして首を乗せる卑弥呼。よほど疲れたのか、そのまま身を預けてきた。

「……臭く、ないか」

「はい？」

突如の言葉に風間は思わず聞き返えず。

「髪、だ。洗ってきたんだ」

ああ、そのことか。小さく言葉にして風間は部屋を見渡しながら

答えた。

「お師匠、あれ冗談ですよ」

「何!？」

慌てるように飛び離れる。

「お師匠の髪はいつも良い匂いしかないよ」

ゴツン。拳骨一つ。思わず頭に手を当てておろす。

「痛た」

「お、お前つてやつは……!!」

ちょ、ちょっとは気にしてたんだぞっ……!!と呟く。

「あれ、気にしてたの?大丈夫、大丈夫。お師匠の髪が臭いわけが

」

ゴツン!

さらに拳骨、今度は強く。思わず沈んで風間は声を上げた。

「ぎゃあああああああ!？」

「風間など、もう知らん!」

肩を震わせながら出て行く卑弥呼。

からかいがあるが、からかつのに命を掛けるなど馬鹿らしい。

これ以上は何も言つまいと風間も外へ出て自分の家に向かう。

日は経つ。

魏の大国の使者との会議も無事に済ませてしばらくのんびりとした時間が続いた。

だが。

「子供？」

「ああ、川に流れていたらしい。酷く傷を負っているからに妖怪に襲われたんだろう」

いつものように卑弥呼の家に行くと、子供がそこに居た。

ボロイ布を纏い、えらく痩せほけている。小汚い顔をしながらも卑弥呼が優しく撫でる髪に気持よく笑っている。

「私としてはここで受け入れようと思うんだ」

「ほう……人嫌いのお師匠もついに子供も持つか」

ゴツン。

「何時の話をしているんだ。私はもう『にーと』なるものではないぞ」

さいですか。

もう一度視線を落とす。

子供……であることは間違いない。その他に特に問題はない。だが……なぜだろう。何か違和感があるが。

じっと見つめていると、子供もこちらを見返してきた。撫でられる髪に気持よく目を細める目が開かれてこちらを見る。

沈黙すること数秒。

チン

「アゲウ!?」

こ、この糞餓鬼……! 男の大事な所を……!

「おお、ちゃんとあつたんだな」

「あるわ!」

力はそんなになくとも、どうやらクリティカルヒットしたようだ。

「この糞餓鬼……!」

キツと妖力出して睨むと、卑弥呼の後ろに隠れるようにして下がった。

「おい、風間。怖がっているだろう。やめろ」

「お師匠!こいつ男の大事な所を……!」

ああ、やべ。戻さなきゃ。

数回に分けてジャンプして戻す。

「……ともかく、この子は私が面倒を見る。お前も融通を効かせるよ」

「お師匠は子供好きですよねー」

普段、ぶっきらぼうである卑弥呼であるが、子供に対してはすごく優しい。何が優しいってもう少しその優しさを自分に分けて欲しいと思うくらい優しい。

「可愛いじゃないか」

あーはいはい。

風間は未だに響く痛みに悶えながらも頷いた。

「……」

「……」

そしてどうしてこうなった。

卑弥呼の住むのは都ではなくその近くの村である。元々ここが卑弥呼の地元であり、倭国も安定し公務も都で行われることから近々移動する予定ではある。

さて、倭の国の都市に公務できているわけであるのだが、卑弥呼は占いで籠っている。その間の子供 権治というらしい の子守を任されたわけだが。

ブン！

ガシ！

「狙うなよ、糞餓鬼」

「……ふん」

くれぐれも仲良くするんだぞと、卑弥呼に言われ、卑弥呼が籠った瞬間股間キックを狙って来やがった。

勿論、2度食らう風間ではなくその足を手で防いだのだが

グサ！



「ぬおおおおおおお！この糞餓鬼いいいいいいいい！」

瞬時に鼻フックされた。

さすがに風間も頭に来て拳骨を返す。するとどうだろう。一瞬で泣かれてしまい。周囲から痛い目で見られる。

子供はすきだけれども。ちょっとしたイタズラなら割り切れる。だが、こいつの場合どうも好かない。それは本能的な何か。天敵とも言えるだろう。一瞬でわかるのだ。そういうのは。

ああ、こいつとは合わない、と。

「おい風間、何を泣かせている!？」

ゴツン。

ぐすん、こっちが泣きたいわ。

阿呆な子供を拾ってから1ヶ月ちょっと。極力風間としてもあの子供とは会わないようにしている。まあ卑弥呼に会えば必然と子供も一緒なのだが、なんだか、風間としても嫌な感じがしたし。それ以前に合わない。

卑弥呼は相変わらずゾツコンなようで顔が爛々としている。

どうやら子供が欲しかったらしいが、さつさと男でも捕まえて作ればと言ったらすぐく睨まれた。すぐみ上がるほどの恐怖を味わった。

もう二度と言つまい。

非常に癪なことにあの子供も村人に人気なようで。卑弥呼の暮らす地元ではちょっととしたアイドルである。

みんながみんな。それをわが子のように大事に扱う。卑弥呼もそんな様子に微笑ましく笑う。

「……………」

風間としてはなんも面白くない。ないが。引き込み、冷たい目をする卑弥呼よりは笑っている卑弥呼のほうが良いので非常に癪で

あるが子供にすこし感謝だ。

「……いいな、子供は」

風間の隣に来て村の子供達と遊ぶ権治を見る。

「……」

言葉に答えずして風間は空を見た。

風がピリピリすると風間自身も苛立つてくるのだが。今日は特段風がおかしい。そのせいもあってか険しい顔をしたまま首を振る。

卑弥呼との修行のせいもあってか、自分の能力に馴染んできた。それほど深密になると、やはりこういう風に敏感になってしまう。

「なあ……風間」

「悪い、お師匠」

卑弥呼の言葉を切る。怪訝そうにこちらを見る。

そうして卑弥呼はハツとする。風間の顔が一段と険しいのだ。

「今日はちょっと体調がすぐれないや。今日はもう仕事ないんだろ  
うっ？」

「あ、ああ。私はこれから都にいくが風間はもうないな」

コクリと頷く。

いつものほーんとしている風間であるがあの時以来 最初に  
会った時以来見せる表情がそこにあった。

悲痛の顔だ。機嫌が悪いような、それでいて悲しいような。

「先にながらせてもらうぜ」

「そ、そうか。身体には気をつかえ」

手を上げて立ち去る風間。それをただ単にボーツと見つめるだけ  
であった。

今になって思えば、この時引き止めていれば、と思う。

深夜である。やはり、嫌なことは起きるものらしく。風の知らせというものはあるらしく。

「……………」

深く息を吐く。呼吸をおちつかせて妖力を出す。周りを見渡してそうして最後に前を見る。

「……………糞餓鬼が」

「クツククク！卑弥呼も馬鹿だなあ！？」

悲痛の叫び。燃え上がる炎。倒れる柱と藁の飛び火がさらなる火事を生む。

先程まで賑やかに子供たちの笑い声と村人の温かい生活があったというのに。一瞬、たった一瞬ですべてが砕けた。

「お前にはとことん、嫌な予感しかしなかったよ、糞餓鬼」

「ケツケケケ。俺もだよ。妖怪」

目の前に立つのは全長3メートルもある鬼。巨体な身体は返り血で染まっている。

「妖怪なら卑弥呼が気がつくはずだが」

「俺の能力は『あらゆるものを騙す程度の能力』この身体も、人の

心も。妖力も。すべて騙すことができる」

「なるほど……」

深くため息。

「だが、お前だけは引つ掛からなかった。妖怪であろうと関係がないのに」

「最初、俺が妖力出して威嚇したのに、ケロツとしてたからな。その能力。深く疑っている者には効かないだろう」

もしくは、深く信用している者にはね。

呟いて風間は肩を竦めた。

「そう、それが俺様の能力の唯一の欠点。だが。子供の姿となり村に入り込めば。人間如き。いくら卑弥呼といえども騙すのは楽勝。お前も疑っていないながらも完全には見破らなかつた」

その結果がこれだ。

両手を広げてこの惨状を魅せつける。

「ハハハ！人間なんぞたやすいものよ！」

「一つ質問いいか？」

ギロリとごつい目玉が2つこちらを見る。

「何故この村を狙った？都なら人がいっぱいいるというのに」

「ふん、この能力でこの策を思いついたのは最近だ。試したかったんだよ。この策がどこまでいくか」

なるほど、そうして卑弥呼がいなくなった今がチャンスというわけか。

「質問は終わりか？」

「ん？ああ」

そうか、と呟いて鬼が笑う。下品な笑い方だ。子供の時のほうがもうちょっと上品だったもの。

「そうか、そうか。……じゃあしねえ！！」

声をあげる。と同時に強大な拳が振り下ろされた。風を切り、音と共に振り下ろされる拳。

「死ね……だって？」

それを受け止めて風間はキツと鬼を睨んだ。

風間は唇をかみしめた。

ここは卑弥呼の地元である村だ。卑弥呼が生まれ育ちそうして今でも憩いの場所として住んでいる村を。ただの鬼如きに崩された。

自分がぶがない。

違和感があったもののそれを気のせいだろうと確かめもせず流  
してしまった。

風間が来たときも良くしてくれた村人もこんな糞餓鬼にやられて  
しまった。

耳に残る悲鳴。

もうすこし気がついていれば。

唇を噛みすぎてうっすらと血が流れる。

こんなやつに……こんなやつに……！

「死ぬのはお前だよ。糞餓鬼」



もはや首しか残らない鬼を見下ろして風間はその首を踏む。

「クツクク。俺も失敗したなーこんな強いやつがここにいるとは」

「……まだしゃべれる元気があるか」

笑う。笑う。首だけの鬼が笑いに笑う。

不愉快で風間はすぐにその口を閉ざそうと風の槍をもち構えた。

「おっと、やられる前に1ついい手土産を用意しておいたぜ」

聞く耳を持たないと、槍を振りかぶる。

「俺の能力、あらゆるものを騙す程度の能力。これであるものを騙しておいた。わかるかい？」

「……」

「クツクツ。お前だよ。ここの村人。何人が仕留め損なっているが丁度よかった。この惨状すべてお前がやったことになっているんだよ。俺の姿も子供の姿となっているだろう。」

ピクリと肩が動いた。槍先が止まって風間は顔を一瞬歪める。

「最高だろう！？妖怪のくせに人間と一緒にいるなんてよう！許せるわけねえだろう！？」

盛大に響く笑い声。

「あの卑弥呼。どうやらお前に夢中なようだが。ざまーないな！自分が信頼していた奴が自分の村を崩壊させたなんて知ったらどう思うか」

「……それだけか」

「ああん？」

鋭く、そして小さい言葉に鬼は怪訝そうに顔を歪めた。

「……それだけかと聞いている」

「お前……なんとも思わないのかよ」

別にと小さく吐き捨てて風間はその首に槍先を突き立てる。

「……興味ないね」

元々、風間は妖怪である。人と住む事はいつか限界がくる。それこそ陰陽師などが現れたら尚更だ。もうそろそろここを離れようと思っていた事だし。

丁度良い機会なのかもしれない。

卑弥呼に関しては心のこりであるが、まあ、それも巡りということだ。

割り切れないときとやっていけないのだ。

村を失った責任は自分にあるように感じて、ただ逃げているだけなのかもしれない。だが、どのみち村には居られないのだ。

すべての火事を風で消し止めて風間は踵を返す。

……まあ、色々楽しかったよ。

お世話になりました。お師匠。

卑弥呼が報告を受けてみればそれは酷い惨状であった。自分が住んでいた村が焼かれ、人の裂かれた死体が転がっていた。

頭に血が上り、微かに残った跡から妖怪の仕業だとは思った。だが、生き残った村人から卑弥呼は衝撃をうける。

風間がやったのだと。

村人は見たらしい。風の槍を抱えて暴れ回る姿を。最後に権治を殺して去っていらしい。

そんなこと、信じられるわけがなかった。何かの間違いだと呼びたかった。

だが、どの村人もそう証言するばかり。いよいよ、本当なのか。何故だ、崩れそうな心も持って痕跡を辿ると、風間の家まできてハッとな気がつく。

そうして、思わず自分を呪いそうであった。

風間の家にただようその特有の妖力。その妖力と撒き散らされた妖力と異なるのだ。

細かく偽造されているようだが。風間の妖力の場合。波長が特  
なのですぐにわかった。

そうして、唇を噛む。

これは『騙し』の妖力だ。聞いたことがある。あらゆるものを騙  
し、力を振るう鬼がいると。

「阿呆が……っ」

ああ、本当に阿呆だ。

ここまで点々と伸びる血。その量は放っては置けないほど怪我を  
していることがわかる。だが、何も言わず、唯一、痕跡を残して去  
って行った。

勝手に1人で戦い、勝手に出て行く。

ああ、本当に阿呆だっ………！

「私の、修行はまだ終わってないぞ……かざまあ………！」

肩が震えて、拳を柱に叩きつける。

だが、どれだけ叫んでも声は届かない。

……ああ。

小さい、冷たい風が吹いて卑弥呼は空を見上げた。

……奴はもう帰ってこないんだ。

隣にるのが当たり前になっていた。一緒にいるのが自然のよう  
に感じた。人が呼吸をするように。そんな当たり前の時間だった。

「風間……」

小さく、小さく、呟く。

遠くで自分を探す村人の声が響いた。

「今日は、冷たいな。風が」

空を見上げて、風間もまた思う。

END



50万記念！番外編「卑弥呼と風間」（後書き）

どうだったでしょうか。今回初登場の卑弥呼様！クールキャラとなつていますが。風間のお師匠なのですよ。今後は清明どうよう登場させるかどうかわかりませんがw

感想等よろしくです。返事はまとめて行いとおもいます

#### 14話「ある意味決闘」

幻想郷でもっとも有名でありながら、人が近づくことすら困難な山、妖怪の山。

読んで字の如く、それは妖怪が住み日々を送る。

妖気の風が流れ、黒い羽が宙へ舞う。

天狗で統一するその山の頂上で、神社が1つ。守矢神社である。

その地で幻想郷の扉を叩くその神社は蘇った神力を糧に、さらなる信仰を集めようとさらなる行動へと移す。

それが、博麗神社の乗っ取りである。

信仰を集めない神社である博麗神社であるが、幻想郷の中ではある意味で、もっとも有名な神社であろう。

古くから幻想郷と共に、博麗結界と言う幻想郷の核と共に時間を過ごすその神社は守矢にとっては信仰を集めるうえで重要な事であった。

ある者は自らが使える神のために。

ある者たちは自らを支える巫女のために。

2人の神様、1人の巫女。幻想郷の扉を叩く彼女ら。信仰を集め

るその行動に誰が迷惑しようとも考えない。

地を変え、帰る場所を捨てる彼女らに後戻りはできないのだから。だけれども、矢つ張り。幻想郷という所はスゴイ所で。

「嘘……神奈子様が……」

いくら2人掛かりであったとしても、信仰が復活した。神力が戻った神奈子に勝る者なんていないと思っていた。

自分だって、特別な人間だと。その力は偉大だと思っていた。

「任務完了だぜ」

「中々しぶとかったわね」

だが、そんな考えは吹き飛ばす。

「……ありゃ。まさか負けるとは」

少し、擦れた衣類を叩きながら神奈子はそう口にする。

「ほら、負けたのだから。私の神社を乗っ取るうなんて考えないで頂戴」

「信仰のない、神社は色々と危ないのよ。せめて分社だけでも置かせて頂戴」

「お茶頂戴」

』……』

「え、そういう流れじゃないのか？」

なんだか、変な会話を乗り越し。それを無視して早苗は神奈子に声を掛ける。

「大丈夫ですか、神奈子様」

「あー。ちょっと疲れたかも。弾幕ごっこというのは肩がこるねー」

肩をトントン、叩きながら神奈子はそう口にしてそうして博麗の巫女を見据える。

「さて、貴方が勝ったわけだけど」

「別に、この幻想郷のルールに従ってくれさえすれば、後はどうでもいいわ。ただし、私の神社を乗っ取るうとか、辞めて頂戴」

その言語に頷いて、神奈子は神社の縁側にドカリと座る。縄を外してリラックス。

「しかし強いね。幻想郷には貴方みたいな奴がゴロゴロいるのかしら」

「そうね、大概は」

言いながら、一つ背伸び。またもや、肩を叩いて擦れた巫女服を叩いて整える。

「お茶でも飲んでいきなさいよ。今入れるから」

「あら、そう。お言葉に甘えさせてもらっわ」

「おお、気がきく神様だぜ」

神奈子が腰を上げてお茶を淹れようとするので、早苗が止めた。

「私が淹れます。神奈子様はそのまま居てください」

「あーすまない。ちょっと私も疲れてるんだ」

苦笑いを残して、縁側に腰をおろす。

早苗が茶の準備をしようと腰を上げ、台所に向かおうとしたその時間。

風が吹き荒れた。

ここは山の山頂である。風も多く吹く。

だけれども、そんな自然の風ではない。言うならば竜巻。それが降ってきたのだ。

暴風は辺りを吹き荒れ、神社が揺れて、木々が揺れる。

思わぬ風に皆、よろめく。

「ちょっと！文……！あんたもう少し丁寧……に」

博麗が少し怒ったように口を開くが途切れの悪く口を閉じた。あまり理解が出来ないように、顔を顰める。

驚くを通りこして、可笑しいと感じられる。そんな顔である。

それは早苗も同じであった。

暴風が止み、竜巻から現れた人物は。この地に越すことを背中を押してくれその人物であったのだから。

少女を抱いて、現れるその人　風間大介である。

皆、一応に固まるのを見届けて風間は肩を竦める。

一応、射命丸を抱えているのだから、そういった行為はできないものの。長年、染み付く動作というものはやはりやってしまうわけ。

「お疲れ。どうやら終わったようだな」

言いながら歩いて、縁側に射命丸を下ろす。

「気絶している。しばらくは目が覚めないと思うから」

トントン、肩を叩いて風間はざっと見渡す。

その中で見知った　この世界にくるまで世話になった一家を見つけて笑う。

「久しぶりだね。約1ヶ月って言ったところかな？守矢家の皆さん？」

『か、風間（さん）！？』

諏訪子がいらないようだけれども。神奈子、東風谷は1ヶ月前とは変わっていないようだ。言うならば、少しボロボロとだけか。

「ちょっと、どういう事が説明してくれる？」

博麗がため息を吐いてそう尋ねてきて、風間は間髪入れずに答えた。

「俺、神様」

「……」

実に簡単な答えである。

一応、久しぶりの開放なわけであるが、自分でも驚くくらい溢れ出る神力と妖力。

信仰⇨神通力となるとしたならば、結構なものを持ちあわせているだろうと予測したけれども、どうやらそれとは別に元から備わっている妖力も体内にあるらしい。

それぞれは別なために混ざりあうこともない。

謂わば、燃料タンクを2つ持ち合わせているようなものだ。これについては、八雲曰く、風間の能力に関係あるらしい。通常であるならば、妖力が神力どちらか一方に決められる。

鍵山雛が持ちあわせていたのは妖力に近い物であった。豊穰の神が持ち合わせたのは神力に近いものであった。

風間が異例というのは確定らしい。

そもそも、能力自体。てっきり風間は『風を司る程度の能力』ばかりだと思っていたがそれとは別に『あらゆる力を保つ程度の能力』



というものを持っていたらしい。

人から畏怖を奪わずして妖力を保っていたれたのも。

封印され、尚神力だけではなく妖力を保っていられたのもそのためである。

ちなみに、これは生命力も保つこともできる。

よっぽどな事がない限り死なないのである。

不老不死……とまではいかないが、不老であることは確かだ。

さて、それはさておき。

「……文、アンタがやったの？」

「ん？まあね」

螺旋丸のお陰で衣服が……！なんてことは起きなかったが、それなりに擦れたために上着を一枚着せてやっている。

「おいおい、風間は神様だったのか」

「そつだよー神様だぞー偉いんだぞー」

「全然見えないけどな」

「確かに、薄々可笑しな人間とは思っていたけれども。まさか神様なんて思わないわよ。威風のかけらもないし」

なんと、可愛気のない奴らか。

威風云々に関しては、明らかに神奈子（諏訪子は除外）の方があ  
るとは自覚しているけれども、そのようにはつきり言われると、少  
々傷つく。

「貴方も、こっちに来ていたなんてね」

神奈子がちよつと嬉しそうに言葉にして笑う。

「ああ、俺らの居場所はもう、向こうにはないからな」

「か、風間さんが神様だつて知っていたんですか!？」

驚いたように声にして東風谷は神奈子を見る。

「何言ってるのよ。自分の領域テリトリーくらい把握するわ」

「……じゃあ、風間さんつて矢つ張り……」

ズイっとこちらを向くので、風間は髪を掻いて気不味そうに笑っ  
た。

「ははは……改めて自己紹介しようか」

風を吹かす。

辺りに、あるその風を完全に支配していることを魅せつけて。

「風間大介。巷では風神『風間』って呼ばれているよ。よろしくな」  
東風谷の目が見開く。

「1ヶ月前……風間神社の祠が開いたのは」

「勿論、あの日。お前の家に泊めてもらった日に俺はあの神社から八雲紫に封印を解かれたんだよ」

まともや言葉を失って東風谷はあ然とする。

それはそうだろう。風間はちよつと笑う。

自分が信仰を誘い、そして自分の家に泊めたのは神様であり。そうして幻想郷の扉を叩いて入り、また目の前に現れたのだから。

「なんで、私たちに黙ってたんだよ」

ちよつと、不満そうに魔理沙は声を漏らす。

「それは」

「私が口を止めたからよ」

隙間を割って出来たのは八雲紫。相も変わらず、人の会話を覗き聞くのがお好きなようぞ。

「……貴方は？」

「こんにちは。守矢の神とその巫女。私は八雲紫。この幻想郷の管

理者ですわ」

幻想郷の管理者こと、八雲紫。その能力。『境界を操る程度の能力』で瞬間移動　ワープのように扱う。何処にでも出れるために神出鬼没である。

その能力は、はっきり言って人が初めてみたとき、とても好意が持てるようなものではない。

「お前、相も変わらず気持ちが変わるい登場の仕方をしやがって……。もっと普通に出てこれんのか普通に」

「あら、これが普通よ」

「お前にとつては、だろうが。ほら、東風谷がちょっと臨時体制入ってるだろう」

あらあらと。声に出して喉の奥で笑う。

「別に取って食おうとは思ってないわよ、守矢の巫女さん？」

なんだか、馬鹿にされたように感じて、東風谷はむっとする。

「それで、なんだってこんな面倒くさい事をしたのよ」

腰に手を当てて、如何にも面倒くさそうに声にだす博麗。

「タイミングがあるのよ、タイミングが。彼女らがこちらに来ることとは、前々からわかっていた事だし。それに合わせてやれば、面倒な事は1つで済むじゃない」

「……まあ、それはそうだけれども」

大体、と八雲がこちらを見た後にあからさまに溜息を吐いた。

「彼はもう2千以上前の大妖怪　今は神様でしたっけ。そんな大物がいきなり現れたら色々和小突く輩が絶対現れるわ。そんな状態で幻想郷に慣れるなんて無理な話しよ」

貴方達のようにね。

神奈子、東風谷を見据える。

「だから、1ヶ月隠してもらったのよ。そうして、この異変の時に一緒に本性を出す。それも『異変』として扱われるためにね」

……なるほど。

だれか、力を持つものが現れるなら、きっと誰かがちよっかいを出しにくるだろう。それが幻想郷というものだ。

理由はなんでもいい。力試し、暇つぶし。

そうして、それに風間は全力で対応するだろう。スペルカードというものは事前に聞かされていなかったら尚更だ。

おそらくは、風間は勝つだろう。

勝つことでさらに誰かを呼び、火種を飛ばす。戦火を広げて、博麗の巫女が動きやがて異変へ　と言う流れか。

ならば、どうせ起きる異変を1つにしておいてしまおうと。そういった所か。

「そういうこと。わかったかしら、霊夢？」

その言葉に、素直に頷いて博麗は縁側から腰を上げた。

肩を回し、1つ背を伸ばす。

「さて、わからないこともわかったし。私は神社に戻るわ」

魔理沙も同調するように腰を上げ、帽子と箒を取って立ち上がる。

「そう、お疲れさま。霊夢」

「私も家へ帰るぜ。今日は少し疲れた」

「後はよろしくねー紫」

ちょっと、間の伸びた声。疲れているようにも感じ取れる言葉を残して2人飛び去って行った。

「さて、大体話しもまとまったようだし、俺も家に帰るとするか」

話　つまり今後の幻想郷の暮らしについてであるが、それもまとまったので大人しく家に帰ろう。

「あら、もう帰るの?」

神奈子に声を掛けられて風間は振り返る。

「まあね。久しぶりに力出したら、ちょっと硬くてさ、これから何処かに解ほくしていこうかなって」

「あらそう、なら」

『ちよっと待ったーーーーー!!』

響く声。

何事かと思ひその声の方を見る。

神社の上。屋根の上に腕を組み、堂々と立つ人物。太陽と重なり黒い影に視える。

神奈子たちも何事なのかと縁側から顔をのぞかせた。

そうして、いきなり鉄の輪が無数落ちてくる。

神力が乗ったそれはまるで弾幕のようであるが、風を形成してすべて弾き飛ばす。

「ほう……やるではないか」

「……何者だよ、お前」

その問い掛けに答えず、声を上げた。

「風間大介。風神！貴様と決闘を申し付けにきた！」

はっ？決闘？

突然の申し付けに顔が引き締まる。

だが、よく見てみると、そいつはちょっとした知り合いな可能性が出てきた。



巫女服のような衣類。そうして、金髪の髪を両前で束ねている。顔こそはお面によって隠されているが、その特徴的な帽子。

カエルのようなその帽子に見覚えがバリバリある。

と、いつかあの帽子をかぶっているのは1人しかいない。

「……諏訪子。何してるんだよ、お前」

「な、何を言うか。我は諏訪子という者ではない！正義の味方『蛇蛙戦隊ケロレツド』だ！」

え、何。これ笑うところなの？

何かを求めるように2人を見るけれども目をそらされた。八雲は楽しそうに1人で爆笑している。

「風間大介！悪の不屈き者よ！我が決闘を受けよ！」

「いやいや、意味がわからんわ」

なぜ、このような事になるのか理解不能である。

だが、一つの可能性　むしろ答えにたどり着いて風間は首を振り、溜息を吐いた。深く息を吐いてボソリと呟く。

「どうせ、暇だから、弾幕ごっこやってみたいとかそんなもんだろ  
う」

「ギクリ」

分かりやすい。神奈子も東風谷もやったものだから、やってみたくなったのだろう。

長年生きた神の考えることではない。むしろ子供の考えることだろう。

いや　ある意味神が考えることかもしれない。

諏訪子ももう長年生きているだろう。風間も経験したことが自分らにとって暇というものは厄介なものなのだ。

仕方ないと、小さく呟いて息を吐く。

「いいよ。その決闘受ける」

そういうと満足そうに頷いて1つのバッチらしきものを投げつける。それをつかむ。

掌を開けてみると蛇と蛙の模様がついたバッチがそこにあった。

「これを持って明日の明朝！ここに来い！」

……ああ、決闘＝バッチ的な？

漫画の見過ぎなのではないだろうか。この神様は。

喧騒。

それに目が覚めて鴉天狗 射命丸文は身体を起こした。布団の  
ようなものが掛けられ、8畳ほどの客室のような場所で寝かされて  
いた。頭がうまく機能せず、ぼやけた頭を振り周りを見渡す。

和室 であることは間違いない。だが自分の家でも天狗の館で  
もない。

ではどこか？

何故か痛む身体を引きずるようにしてその和室から出る。

「あら、起きたの」

声を掛けられてみると、見知った顔が2つとできれば関わりたくない顔が1つ。

「ここは……？」

博麗霊夢にそう尋ねて射命丸はなおも周りを見渡す。

「守矢神社」

「守矢神社？……なぜ、私はそんなところで？」

守矢神社。確かこの妖怪の山の頂上にできた神社だ。ここが神様が色々と出しゃばったことをするので上からの命令で懲らしめにくる予定であった場所。

「覚えてないの？貴方、風間さんにやられてここに運ばれてきたのよ？」

風間

「っ！？」

そつだ、そつだ！

風間大介！

風神とも謳われた風を操るものなら誰でも憧れるあの風神！

「そうそう！霊夢！あの風間が風神だったのよ！」

「……わかってるわよ」

少々うるさそうに顔を顰めて手に持つお茶で一口。

そうして顎で指し示す。

そこに視線を寄せると、男が神社の境内で1人立っていた。

間違いない。風間である。

「……なにしてるんですか？彼」

ずっと1人空をみあげている。

「決闘だつてさ。私たちも見物できたんだぜ」

「紫に無理やりこさせられたけどね」

一度視線を横に移動する。

八雲紫。この幻想郷の管理者とも呼ばれている。能力はたしか境界を操る程度の能力であったか。

その力を壮大で決して関わりたくない妖怪でもある。

「決闘……？誰と？」

「見てればわかるわよ」

八雲紫の声と共に境内に爆風が起きた。

爆風。つとんでも大したものではない。すこし煙ができて周りを覆う程度。視野が悪くなるだけで大した被害もない。

「きたか」

視線を落とす。

前を向いてその爆風で出来た煙が晴れるのを待つ。

だが 爆風が晴れる前に境内に音楽が流れた。

まるでそのリズム、音は一昔前の戦隊もののように。

「悪は許さず、子供の笑顔を愛し、正義を貫く！」

複数の声がして風間は顔を顰めた。爆風が晴れてその全貌が明らかになったとき。深く、深くため息を吐く。

「雨と飴をこよなく愛す、じゃわ蛇蛙戦隊ケロレット！」

「話と輪をこよなく愛す、スネークブルー！」

「奇跡と買い物をこよなく愛す、スネークケロピンク！」

それぞれがポーズと決めセリフを云い、そうして声を合わせた。

『蛇蛙戦隊！守矢レンジャー！』

ババーン！

音楽とピタリと合うようなそのタイミング。練習したのだろうか。

それぞれ3人がお面をかぶり、東風谷に至ってはラジカセを持っている。

「ふふ……悪の親玉。風間大介！成敗してくれるわ！」

時代劇か、戦隊物かどっちだよ。

「……かけー」

「……確かに」

おい、その巫女と魔法使い。よくみる。すぐくダサイぞ。

「ふむ……ポーズも音楽のタイミングもそれぞれの決めポーズも完璧だわ……あの戦隊。中々のやり手ね」

おい、八雲。アンタもか。

もしかして、正常なのは自分だけなのだろうか。風間はまたまたため息を吐く。

まあ、取り敢えず。

「東風谷。危ないからそのラジカセ置いてきてきさない」

「何を言う！私は東風谷というものではない！蛇蛙戦隊スネークケロピンク」

「東風谷」

「……はい。すみません」

東風谷がラジカセを置いて戻ってきたとき。風間は息を吐いた。ため息でもない。真剣な息。すべての力の流れをつまむための呼吸。



「まあ、いいや。とつとと始めるぞ」

「いいだろう。ルールは1対1の」

諏訪子の言葉を切って風間は声をだす。

「ん？いらんよ。面倒だから3人まとめて掛かってきてくれ」

啞然とする3人に尚も言葉を続ける。

「そりゃ、神様の身分としては諏訪子と神奈子の方が上だよ？でも、さ」

バッチを取り出して、魅せつける。そうして投げた。まるでこれが合図だぞ、といわんばかりに。

「正直。俺の方が強いよ」

チャリン。

蛇と蛙の様子が描かれたバッチ。それが地に落ちて金属の音が鳴ると同時に暴風が吹き荒れる。

弾かれたように神奈子が動いて前へでる。風脚を使ってまるで瞬間移動の如く速さで距離を縮めて拳を突き出す風間に対して神奈子もまた掌に神力を乗せることで答えた。

その差をギリギリ。コンマ一秒でも遅れれば誰かがダウンしていただろう。

衝撃が境内の轟く。風が暴発して神社を揺らした。

諏訪子、神奈子、東風谷には。もはや巫山戯ている場合ではない。それぞれが一瞬で顔がひきしまった。

「はええ……」

魔理沙が口にする。まったくもってみえなかった。わかったのは風間の体がぶれた所。

「……」

射命丸も息を飲む。確かに経験した速さ。実際に受けてみるとまばたきすらできない速さである。

あれを受けるあの神様もスゴイと知らずに呟いた。

「くっ！」

瞬時に散開。弾いて距離を取る。ここまで早く距離を詰められると言っことは距離を開けることすら無謀であるが距離を取らずにはいられなかった。

「神具『洩矢の鉄の輪』」

無数の鉄の輪が風間を押し潰そうと迫る。またこれは拘束もできるのだ。

だが

「……っ」

神奈子から諏訪子へ目標を変える。鉄の輪をぐり抜ける。勿論、スピードは緩めない。

避けるなら前へ。それが風間のスタイル。

「ちょ、ちょっと!」

追撃。近づいて近接戦へ持ち込んだ。あらゆる方角へ距離をとるうとするがそれを許さない。

「はっ!」

そこへ神奈子がカバーへ。入れ替わる形で諏訪子とチャンジする。

「この!」

重たそうな一撃が風間も掠めた。円を意識して力を流して大勢を崩す。

そこへ膝を入れて、さらに掌底を入れる。

「風符『塵旋風』」

一つの竜巻が伸びて神奈子を飲み込み吹き飛ばす。零距离からの威力だ。相当キツイはず。

「だ、弾幕ごっこじゃないの!?!」

「悪いけど」

竜巻を切る。

「ルール上問題はないはずだ。互いがスペルを宣言することを条件にこの弾幕ごっこは成立している。近距離戦でも問題はないよ」

竜巻『ランドスパウト』

地上から上空へ竜巻が伸びて砂を巻き込む。

「まあ、俺は接近戦で負ける気はしないけどね」

そう言ってニヒルに笑ってみせた。



14話「ある意味決闘」(後書き)

うがー遅れたー

15話「挨拶周り」(前書き)

修正!

美鈴をもっと強く!

## 15話「挨拶周り」

風間の朝は早い。日の出前には目が覚めて、朝のトレーニングを行う。トレーニングと言ってもただ体を動かして汗をかくものであってその運動量は適度だ。そうして近くの川で汗を洗って顔を洗い、すっきりとしたところで朝食を食べる。

昼間は運搬業をこなしながら幻想郷を周りの地理を覚える。夕方には仕事が終わりに人里に顔を出して食料などの買い物を行う。その前か後に博麗神社を訪れて調達を済ませた後に家へと帰る。

肉が欲しければ自分で狩りを行い、火を焚いてほっと一息をつく。

後はゆっくりと時間が過ぎるのを待つ……。

そういう生活である。

爺臭いと思われようが（まったくその通りであるが）習慣となっている生活を無理に変えようと思わないし、ましては『まだ』『退屈ではない』。

長年晴明と一緒にあっちへこっちへの生活を繰り返してきて、これほどまでゆっくりとした自分の時間が確保できるのは素晴らしい幸福であった。

誰にも縛られず、自分だけの時間をどう扱おうといい。人目を気にせず空を飛び、能力を使える。

ああ……なんと素晴らしいか。八雲も良い世界を創り上げたもの



である。

そうして今日も風間の朝は早い。

1日の始まり。今日は何処へ行くことかと考え、ベットから起き上がる。

「……」

「おはようございます！師匠！」

……嫌な、1日になりそうだ。いや、言い換えそう。

嫌な1日だ。

「ほら、師匠、朝御飯ですよ。この後は稽古ですよねっ。お供します！」

……これは一体全体なんだろうか。

啞然。呆然。そうして情報整理。得られる情報を総動員。朝から頭をフル回転させて思考回路を限界まで上げる。

彼女は誰か 射命丸文であり天狗である。

それは間違いない。間違えるわけがない。風間の螺旋丸で気絶させた妖怪でもある。

さて、ここで幾多の問題がある。

何故、射命丸がエプロン姿でここに居るのか。

何故、彼女は師匠と呼ぶのか。

何故、彼女がここで朝御飯を作っているのかっ！

何故、家にいるのかぁ！

Why!?

……え、俺なんかした？

「ほら、師匠早く食べないと冷めちゃいますよ?」

「マテマテ、色々待て!」

なんとも純粹な笑顔を残す射命丸であるが。ちょっと待って欲しい。色々待って欲しい。

「何故、君が此処に居るんだ」

「何故って……師匠のお世話を」

「なぜっ……!お世話をする事になってるんだっ……!」

ナゼって……。首を捻り、少し考え彼女は口にする。

「師匠だからでしょうか?」

よし、おk。色々間違ってる。

「質問を変えよう。何故、君の師匠になってるんだ。俺は」

「いいですかっ!師匠!」

ガバツつと立ち上がり。拳を奮い立つ。

「今、風を操る者にとって風神の身分というのは憧れのものなんです!風のトップ。八百万の神の中でもその威厳は偉大であり、その力は壮大なんです。そうしてその中で風神風間というのはもう神様みたいなものなんです!」

神様だけどな、俺。

「と、いうわけなんです」

「つまり、オノレは弟子にしろと、そう言っているわけか」

「簡潔に言つと」

……ため息。

「却下だ」

折角作ってくれたので、飯くらいは食べようと風間は箸を持って答える。

「な、なんでですか!？」

「俺は弟子は取らん」

あ、意外においしいな。

「なんでですか!？」

「なんでもだ」

「そこを何とかお願いしますよ!」

風間はため息を吐いて、おわんを机に置く。

「別に俺じゃなくても風を操るやつなんてそこらじゅうにいるじゃ

ないか。神奈子だって風を創造できるし」

実際、『風を操る程度の能力』という能力でなくても風を形成したり、操ったり、創造したり。そういった能力は多数ある。風間の場合は『風を司る程度の能力』であるが風を操る事自体物珍しくもない普通の能力なのだ。

それであるならば別に射命丸の求む『師匠』とやらは風間でなくても良いのだろう。

「私は、風神の風間さんをお願いしてるんですっ！その戦闘スタイルも私に合うだろうと思ったからぜひその技と経験を教えてもらおうと思ったのです！」

戦闘スタイルねー。

確かに、射命丸が『螺旋丸』を形成した限りではスピード重視の立ち回りで近接への流れも多そうだ。

だが

「……俺の教えなんかで得するのか？」

「っ！？はい！勿論ですとも！」

「俺は人にモノを教えたこともないし、『一応』まだ修行中の身でありから付きつきりってわけにもいかない。大概が実践のみで基本なんて教えている暇なんてないぞ」

「大丈夫です！普段の師匠の行動を盗みさせてもらいます！」

ははっ……。

別に弟子を取るのが嫌なわけでもない。

教え方がわからないということもあるが、風間はまだある人の『弟子』の身であるのだ。

そういうジレンマもある。

射命丸の熱意に負けたわけでもないけれども、いい気分転換程度にはなるだろうと風間は思った。また、この幻想郷での出来事はすべて新聞屋の彼女ならわかるだろう。

つまりはよりよく、早く幻想郷を知るためには彼女のその情報網を『利用』する必要があるのだ。

ので、結果的には弟子を取った。

そういう事にしておっつ。

さて、風間の仕事は運搬業であるが、そのすべてが人里のためにあつちこつちに移動するものではない。

つまるところ、物を取ってきて欲しいという『運搬』もあるのだ。

だが、そう謳って仕事をやり始めたけれども。風間は今やこの天狗のお陰で知れ渡る『大妖怪』である。（弟子になったよ！的な自慢等で埋め尽くされている新聞はさすがに勘弁して欲しいと思つた。てか、どんだけ嬉しいのだろうか）かと言って人里で慣れ、運搬業の重要さとその関係が深くなっている今でも妖怪の身であつてもその仕事は入る。

あの寺子屋の慧音先生も妖怪であるのだから。別に構わんだろうというのが人里の考えだ。

さて、人里は取り敢えず大丈夫だとして幻想郷の挨拶周りが今度は重要となってくる。

ここに来る前に正体がバレたのならば挨拶回りは必ずしるこの命令が入っている。

挨拶回りのどこが重要か、簡単なことである。

まず最初に2千年近くの大妖怪がこの幻想郷に来て古参者がブイブイ言わない保証はない。守矢がそうであったようにいきなり凶々しく入ってくるのは色々厄介事が起きる。

ので、挨拶回りをしてこちらを下としてみせるのだ。

大妖怪であるけれども、この幻想郷の「新人」ですよ。とアピールするのだ。

生憎、威張ることも下にみせることにプライドなんて持ちあわせていない。妖力抑えてまで妖怪と戦っていたころなんているんなら妖怪に蔑まれたから。別になんとも思わない。

もう一つ利点がある。

この幻想郷の地理、地形、住所、そこに住む人達の関係などがわかる。

これは運搬業をやる側にとっては大きなことだ。



と、いつわけで今日はその挨拶回りである。例のごとく射命丸文も一緒である。「

「お前仕事は？」

「昨日で終わらせてきました！」

優秀な子である。

「挨拶回り、ですか」

てつきり稽古でも付けてくれるのかと期待したらしい我が弟子（飯）は少し残念そうな顔をしたがすぐに目を輝かせる。何か面白そうなことでも思いついたのだろう。付き合いは短いが大抵わかる。

「厄介事はおこすなよ。あくまで挨拶回りだ」

「わかってますよ」

地図を開いて机に置く。こうしてみると意外にも広いことがわかる。

「まずは何処からいくのです？」

「そうだなー妖怪の山と守矢はこの前行ったし。まず最初に紅魔館にいこうか」

「これまたいきなりハードな所からいきますね」

「別にただの挨拶回りだよ。紫曰くなんかイチャモン付けられたら  
返り討ちにしてやってもいいって聞いたからな。勿論、弾幕ごっこ  
で」

まあ、そんなこと俺はゴメンだが。

「……その400年近く生きた吸血鬼の主を筆頭に紅魔館はこの  
幻想郷でも3強に入るくらい戦力が高い所ですよ？」

「ん？ドンパチはなるべくやらないようにするけど、この幻想郷か  
ら言ってそれはキビシーかもしれんけどさ、西洋はよくしらんが『  
たかが』400年ちよつとの小娘が俺に勝てると思うっ？」

ニヒルに笑う風間は少し射命丸はゾツとした。

この人には正直プライドというものは無いが長く生きてただけの貫  
禄とその蓄えた力に自負を持っている。

400年をたかがと言える輩はそうそういない。聞けばあの紫や  
守矢の神たちよりも前に生まれてきたという。

恐らくはもつともな古参か、長く生きてために『神』になった妖  
怪。

今考えてみればとんでもない人である。

「んじゃ、まあ行きますか」

「で、なんでお前もついてくるんだ？」

「付いてきてるわけじゃないぜ。たまたまいくところが同じってだけよ」

途中魔理沙と合ってそのまま同行している。

聞けば紅魔館の図書館に用があるらしい。

「また盗むですか」

「借りているだけだぜ」

死んだら返すとほざいているらしい。

まあ、丁度良い機会であるし、紅魔館を案内してもらおう。

飛ぶこと数分で紅魔館が見えてきて。なんともまあ、赤い館である。正直目が痛い。

門の前までくる。柵のようなものに鉄で出来た門。それほど頑丈なものには見えないが、その前には中華服を着た女性が1人。壁に背を預けていたが、風間たち3人を確認するとすぐに構え始めた。

「お、起きてる。珍しい」

「……また貴方ですか。いい加減、にしてくださいよ！貴方のせいで私がどれほど怒られと……！」

「魔理沙？彼女は？」

「紅美鈴。この紅魔館の一応門番だ」

「一応とは何事か！れっきとしたも、ん、ば、んです！」

声を荒げながら紅美鈴と言う女性はこちらに視線を向けた。

「……貴方は？」

「俺は風間。あんたの所の主に用があつてさ」

風間……？どこかで聴いた名だと紅は呟く。だがしかし。

「それじゃ、風間 後はよろしく」

はあ？と魔理沙を見る。幕にまたがって今にも飛び　いや『進軍』しそうな勢いである。

「おい。中国！今日はこいつが腕ためししたいっていつから連れてきたんだ！」

……はああ！？

「中国ではありません！紅美鈴です！って……力試し？私と？」

「おう！こいつ外来人で自分の力を試すためにこっちにきたんだってサ！」

「おい、こらそこの白黒魔法使い」

何嘘八百並べているんだと、忠告しようとして、風が舞った。

七色に光る弾幕が風間目がけて飛んできたのだ。

「大丈夫だぜー風間 そいつ大したことないからー」

「あー！もう！」

まったくもって話を聞かない。もくしは聞けない奴らである。スゴイ流れてこの子と戦うことになったが、どうせ魔理沙のことだ。隙を見て紅魔館に突入するのだろう。

……はあ。

「この私に勝負を挑むなんて無謀ですね！丁度いい機会です。鬱憤を払わせてもらいますよ！」

「いや、だから！違うって！」

一気に弾幕が濃くなる。綺麗ではあるが、確実に殺る気がかかっているためか威圧がする。

「師匠！ガンバー！」

……。

ため息すらでない。気持ちを切り替え、風間は息を付いて構える。

そうして、一気に接近する。

どういった癖かあのペンダントは付けたままであるために。妖怪であること 神様であることに気がついてない。それ故にこのスピードに驚きを隠せないでいるようだ。

射撃戦は、好きじゃないんだよっ！  
だんまく

中段から上段への蹴り。一蹴を入れる。吹き飛ぶ紅であるが、それに張り付き追撃をしかける。

腹へ拳を当てて、開く。浮く体を抑えるようにして一蹴。距離を保つ。

「っ！」

轟

それに相応しい音で風を切って最速で紅の体が動き、掌底が入った。

「グッ……」

その激しい痛みが目がチカチカとする。

なんだ、この掌底……！腹が抜れっ……！

息をする暇もなく。紅の体がぶれる。気がつけば2撃腹と横腹に入れられる。肋骨を折られないように無理に体をねじって距離を取ったが掌底の衝撃で飛ばされる。

「張り付き（インファイト）ですか。中々嬉しい戦いをしてくれますね！私は大好きですよ！」

中華服は伊達ではなく、飾りでもない。

間違えること無くこの動きは拳法！それもかなりヤバイ方のだ。

と、というか動きがおかしい。域としては達人レベル。

「はっ………！」

おいおい、魔理沙。こいつが大したことないって？冗談じゃない。

「この子、マジやばいって。半端無く強いよ。」

「行きますよ！外人人！」

「違っけどな！」

「霸ッ！」

「掌底からの連続技。右に扇の軌道で蹴りが飛び、飛翔して上からも責められる。」

「気の香りがするあたり気を操る能力か。それにしただって接近戦インファイトに関する熟年度というか、気に扱い方が尋常じゃないというか。」

「円の軌道でいなして、体勢を下から崩す。肩を掴んで関節を高速でいれる。そこから投げて地面に叩きつける。」

「が、」

「はあ！？」

「ブリッジの要領で踏ん張り止めて足で地を蹴る。そのまま顔面に蹴りを入れられる。」

「……なんつー動きだよおい。」

「さらに抜かりがなく、体勢を整えられぬまま連続で技を入れてくる。」

「接近戦において、距離が離れるまで休むことなく動き続けることが重要だ。こちらが休むときは距離を離れるとき。だが、人間より」



妖怪のほうが体力はケタ違いに大きい。

一度張り付かれれば、そこで高速の拳やらなんやらが飛んでくるのだ。

うーむ。

拳やらをいなしながら、風間は考える。

この子は果てしなく強い。近接においての立ち回りもその技の精度もケタ違いだ。唯一の欠点は火力だが、気で内側に攻撃しているため問題なし。

厄介だな……。

今まで戦ってきて本格的な張り付き（インファイト）ってあまりやったことがない。風見とやったときであっても基本は弾幕であった。

晴明とやるときに「お前の張り付きは嫌いじゃ！」って怒鳴られたのはこういうことかな？確かに鬱陶しいというか、厄介というか。

近接に関しては右にでるものはいないと自負していたけれども、早くも反省だな。

風間は1人思い、頷く。

無理やり体勢を崩して相手を力で押し、距離を離す。

「……貴方……本当に外来人ですか？いや、外来人であったとして

も普通じゃない」

紅が睨むようにしてこちらを見てそういう。

「私の近接にここまでついてこれた人なんていません。正直、戸惑っていますよ」

「だから、俺は外人じゃないって」

やはりと、目を潜める紅であるが

仕方がない。

本気でいきましょう！

「改めて。俺の名前は風間。つい最近ここ幻想郷に来た風神だよ」

目を広げて驚きの満ちた目をした。

風圧。

戦いながらも風を操り紅の体にまとわり付かせることでその動きを封じる。または体勢を崩させる。

そうして開いた隙。その一瞬を逃すわけがない。

「ふっ！」

息を吐いて掌底。腹へ打ち込み、肘を畳んで水月へ。そこから足を絡んで慌てて体勢を整えようとするところへ邪魔を掛ける。

1回転。

サマーソルトを放ち、上空へ。

浮き上がる体。それに追撃を加えてさらに上へ。

妖怪である紅は空を飛べる。

空中でも十分体勢を整えることはできた。

だが、空は彼の領域だ。

暴風が紅にまとわり付き、その身を離さない。

「しまっ……っ！」

気がついた時間にはもう遅い。彼が目の前まで高速で迫る。目が合い、彼が間近まで来た。そう認識した時。

紅の体は竜巻と共にさらに上空へ飛び舞った。

「……」

ドサリと、体が落ちる。それを風間は確認して一息を吐く。

「さっすが師匠！中国如きに負けるわけがないですよね！」

と、嬉々に表情を浮かべて歩み寄ってくる。

だが

「……なるほど、人外の方でしたか」

のそりと体を起き上がらせてその服についた埃をはらう。その手先微かに気を纏いそうして目を見据える。

その目、その顔。真剣。

「私も、改めて自己紹介しましょう」

構える。

ははっ……確かに意識を落とした筈なんだけどな……。

「私の名前は紅美鈴。この紅魔館、この幻想郷。格闘術に置いて右に出るものはいません」

刹那。

そう表現するに相応しく、その時間、瞬間に美鈴の体は消えた。微かな残像を残し、微かな軌道は残さず。

見えたのは一瞬、美鈴の美脚だけだ。

3メートルの距離を離された　いや、吹き飛ばされたのだ。

「ぐっ……！」

頭が吹き飛んだのかと、勘違いするが、その手を頭に当てることで首と繋がっていることを認識した。激しい痛み。耳鳴りと共にその頭痛は痛覚を超えていた。

「　覇ッ！」

軽い足取りで距離を詰めてその掌底が腹を抉った。内蔵が上に押し出されるような感覚、すべての臓器がぐちゃぐちゃにされる。

目の前が紅くなり、慌てて風間はその意識を繋いだ。

血を吐き出す暇もない。歯が折れるんじゃないかと思うほどきつくかみしめ、風間は殺気を風に混ぜる。

風よ……。

短く吐息と共に言葉を吐く。その言の葉に載せた言霊。瞬間に美鈴は距離を取って下がった。

一瞬の判断がその生命を救った。

いくら気を使ってもその回復力、その耐久力を強化しても。

「ッ」

地面が深く抉れるほどの攻撃を耐え切れるわけがない。

「紅　美鈴だったか」

変わった。間違いなく変わった。

自称風神をきつく見据えて美鈴は構える。

「その攻撃、その技、その意志。同じく近接攻撃インファイトを得意とする俺から言う。確かに、強い。強敵だ」

だが

「俺も、伊達に生きてはいない」

お前のそれと　俺のそれ。

「どちらが強いか　試そうか」

ニツとニヒルに笑う風神。その笑顔にすべての鳥肌が立った。ただこうして息をしているだけでも、すべての感覚が奴は危険だと物語る。

その力　おそらくは神力。

自分を潰さんとするその威圧に、美鈴は嘔み締めた。

美鈴は弾幕は苦手だ。大の苦手だ。元々中国の大陸をまたに掛けてその格闘術を極めた彼女に取って遠距離での攻撃というのはそのスタイルは得意なわけがなかった。

だから、素直に嬉しいと美鈴は思う。

そうして、世界は　この幻想郷は広いと感じた。

こんな化け物みたいな奴と近接勝負タイムンが出来るのだから！

「　行くぞ」

風間は小さく呟く。その風を収集して力を内側に持ってくる。『  
コネクト 掌握』も使わず、これは真剣な勝負。』

タイムンだ。

2千年以上生きてきたなかでこうして近接勝負が出来るなんて、  
しかも幻想郷でだ。

手加減不要、どちらかが倒れるまで。

「　」

言葉すらかき消して動く刹那の速さは美鈴の動体視力を上回るの  
は安易なことだった。

背後を取る必要性もなく、ただ一突き。

「くっ……！」

確かに動体視力を上回った。だが、美鈴の勘。長年染み付いた戦いにおいての経験。

そして、風圧に自然と体が動く。

円の動きで力を受け止めるのではなく、受け流す。腕が掠り、切れたように傷が付く。最初は腕、そこから体を交えてその攻撃を避ける。

まずは、四肢を　！

腕を掴み、流れるような動作でその手を抑えて肘関節の向きとは逆へ。

鈍い音を響かせて腕が跳ね上がる。だが、その腕が壊れることなく

一蹴。

その蹴りを避けて再び離れる。

「痛っ〜！」

さも痛そうに右腕を振る風間。内気功によって強化されてもその肘は砕くことはできなかった。



再度腕を振り、そうして手に力を込めて握る。

「  
」

息を整える暇もない。その暇を与える隙すら惜しい。地を蹴って再び接近してくる美鈴。虹色の気を纏って肘打ちの突。

まともに受けても吹き飛ばされるだけ。

いや吹き飛ばされるならまだいい。その虹色の気。あれは危ないものだと勘が疼く。

流す　　ことは無理。なら普通は後ろへ下がるだろう。

だが、風間は前へ出る。ギリギリで引きつけ、そうして前へ。沈むように姿勢を低くしてついでに足を刈り取る。

突如として消えたように見えるだろう動作に美鈴が足をとられる。

だが、それで終わらず。

### 黄震脚

震脚か……！

衝撃波が風間を襲い、吹き飛ばされるがそれで終わる美鈴ではなかった。吹き飛ばされた体を追尾してさらに震脚。

体を浮かされる。

## 紅寸剄

紅く色を纏い掌底が放たれる。普通の掌底の比べ物にもならない程の衝撃が、痛みが体を襲った。

掌底を撃った後に衝撃で体が横へと移動するが、神速で動き襟を掴まれる。

## 烈虹拳

いくつもの拳がその残像を残して風間の体に食い込む。

## 天龍脚

永久とも思える時間の突きを受けて、まだ終わらず。その蹴りは龍の如く、天へ。

## 降華蹴

そうして天から地へ。まるで天国から地獄から突き落とされるの如く。地面に大きな爪痕を残してめり込む。

「極彩『彩光乱舞』！」

虹色の竜巻が風間を横殴りに、まるで洗濯機のように回される。右へ左へ、確かな打撃を受けてついに天へ吹き飛ばされた。

「ハア……ハア……」

出し切った……チャンスは一度、この時のため。連続のコンボを確かにすべて叩き込んだ。

風間の体が地面に叩きつけられ、まるで糸を失った人形の如くパタリと倒れる。

勝った……！

「勝った ツ！？」

立ち上がる風間の体。ゆるりとゆっくりと立ち上がり、そうして美鈴を見据えた。

その殺気。

え、嘘。

そんな筈がない。

だって……だって、あれだけ、叩き込まれて……！

それは瞬間だった。

一蹴。それを受け流す時間もなく、まるで死神の鎌が首から上を切り落とすように。半円の軌道を残す。

ただの蹴り。それだけで世界が吹き飛んだ。

気がつけば地面に横たわっていて、左手がまるで棒の如く動かない。嫌な感触。たぶん折れた。

それだけで幸いしたのが幸運に感じるほど。見れば近くの林が一部吹き飛んでいた。立ち上がるうとして、それが叶わないことに美鈴は絶句する。

それだけじゃない。

何も、聞こえない。何も感じ取れない。

自分が立っているのか、寝ているのか、

「ッ……ッ……！」

声すらも出ず、半端に立ち上がった体は再び地に伏せた。うつ伏せに倒れて微かに感じ取れる振動をたどってみれば、優しく笑顔を向ける男が1人。

「振動を聴かせてやった」

美鈴には聞こえないが、それでも風間は続けた。

「お前がその左腕で防いだ時、真空を切り裂いて振動を耳から脳へ直接響かせ、その体の感覚すべての機能を混乱させた。人の電気信号を邪魔することすら容易だよ」

ま、一時的だがねー。と呟く。

「気を操っているのか、意識は飛ばないが逆にそれが地獄か」

余りオススメしない戦い方だよ。

「今は眠ってくれ。そして礼を言っよ。久しぶりに素晴らしいタイマンだった」

ありがとう。

風間が美鈴の頭に手を添えて微笑む。

心地良い風が美鈴を駆け抜けて。そうして意識を手放す。

美鈴もまた満足そうに笑った。

## 15話「挨拶周り」(後書き)

修正しましたー！

主人公の2つ名などはしばらくは「風神」でお願いしますね。

風間の技については某忍者技以外は自然の風を形成したオリジナル等を考えております。

ゼロ魔などはわからないでござる^q^

まあ、一応東方2次なんでこれ以上の他の漫画等の介入を避けたいつてのが本音ですけどね。

さてさて、清明、卑弥呼とオリキャラを混ぜましたがぶつちやけ東方二次なのでこれ、介入して大丈夫なのかなー？と思いき悩みますね。読者様が「おい、出せよクズ」と罵ってくれるなら考えますけど。

(ぶつちやけ人氣がすぎて怖い。清明とか清明とか清明とか卑弥呼とか)

一応、2人を混ぜた異変は考えております。

( 作 ) <どうすつかない

追記；木下さんが感想で罪袋を書いて盛大に作者は爆笑して腹が據り全治2週間のケガを負いましたが、罪袋はゆかりんの下僕なので、別のモノをもっと考えてほしいですねw

追記2；皆さんもつと罵っているのよ！つてそれはさておき、美鈴は普通に強いと思うんですよ。弾幕が苦手っただけで近接だと風間

IFなお話「もしも風間が恋姫の世界へ行くことになったら・・・」(前書き)

恋姫はおもしろいよね！私も大好きです

タイトルは「風神十無双」ってところかしら



IFなお話「もしも風間が恋姫の世界へ行くことになったら・・・」

男は封印されていた。風を操るちょっと不思議な男だ。

その男は妖怪であり、また神であった。故に封印される。

封印されることはどういふことなのだろう？

消える前、思っていたことだ。

白い空間にじっと居る？

意外と生活感に溢れた生活ができる？

どれも違う。

夢を、見ることなのだ。

自身は眠っているようであるが意識はある。夢の中で。ちょっと疲れたなと思えば意識が途切れ何時までもみたいなと思えば見られる。偶に流れてくる願いごとみたいな言葉に適当に返事したりして、そうした生活の中で当然内的時間隔なんてありゃしない。

そうして夢を見て、突如光がある男を襲う。

そこから物語が変わる。

ある青年の生きた人生。それすらも変えるような物語だ。

本来であるならば、ある賢者がその封印を解き、青年は忘れ去られた楽園へと旅立ち、多くのものと再開し、出会い、そして交わる筈だった。

だが、それはちょっとした事。

ちょっとした事でその物語が変わる。

幾つかの分岐が分かれるように、「もしも」の話があるように。

物語は変わる。

「我が名は趙子龍！その武をとくとご覧あれ！」

「別に見たくもねーよ！ぎゃあああそんな危ないもん振り回すなあああああ！」

「ご主人様」

「やめろ、その言葉で呼ぶな！俺の人生すべてが終わる。主に俺の

精神がヤバイんだよ！」

「風が……貴方は一体……？」

「俺の名前は風間！風が大好きなちよつと可笑しな（元）人間だよ！」

「朱里ちゃん、朱里ちゃん。風っていうのはね。人の想いを乗せるモノなんだ。だから一生懸命願えば、きっと風は吹いてくれるよ？」

「私の 想い……」

「な！？風向きが変わった!？」

「火が……！くそ、どうしてこんな急に……!？」

「我が名は風間。風間とは風の絶え間であり、風が吹いている時でもある。その意はすべての風を操ること。とくとご覧あれ。風神と謳われた男の風を！」

ちょっと可笑しな三国時代でちょっと可笑しな男が無双する。

そんなIFなお話。

そんな物語もあるのではないかな？

## 16話「紅き幼い月」

今更ながら門番を吹き飛ばして挨拶なんて、常識はずれにも程があるよな……。

今気がついてため息を漏らす。

門を超えて中に入るとそれは紅だった。

紅い。見渡すのは紅。紅魔館の外観ほどではないが中の色は紅く染め上げられていた。

「ようこそ、紅魔館へ」

透き通った、綺麗な声が紅魔館のエントランスに響く。見ればメイド服を着た少女が1人。

スカートが短く、コスプレと思われるでも致し方ないようにみえるがこれがまた妙に似合っている。

「どうも、最近この幻想郷に降り立った風間と申します」

「お嬢様から伺っておりますわ。案内いたします。こちらへ」

「あ、あの……… すいません。この娘なんですけど………」

申し出て少し冷や汗が出る。挨拶に申し出て玄関の人を吹っ飛ばすなんてマナーもへったくれもないからね。

「ああ………彼女ならそこへ置いておいてもかまいませんわ。そこ娘は丈夫だけが取り柄ですから」

言われるがままに美鈴を床に置く。すると何処からともなく妖精のメイドが現れて美鈴を引摺るように奥へと消えた。

「………」

「さあ、案内しますわ」

紅い館の中を案内され1つの扉の前までくる。メイドが扉をノックすると中から鋭い声が響いた。

ちなみに射命丸は居ない。なにやら急な仕事が入ったらしく、天狗が4人掛かりで彼女を押さえに来ていた。必死に抵抗して『私は師匠と一心同体です！』とかなんとか言っつけて付いて来ようとするので気絶させてやった。

「入れ」

風間は長年生きたきた中で能力の影響もあるが色々なモノに敏感になっている。

それこそ人の感情であったり、力の波長や声色の殺気など。

元々風を操って『噂』を拾ったりしてきたなかでそういった事を読むのが得意となっていているのだが、この声に殺気というか『狂気』じみたものが混じっていることに少し額に皺を寄せた。

それも一瞬のことであるが、これが吸血鬼特有の『雰囲気』というのか。

扉を開けて中に入ると紅く伸びた絨毯の先に大きな玉座が1つ。その玉座に座るのは1人の少女。まだ子供のようにも捉えることができる彼女には翼が1つ。

足を組んで頬を付き、少し興味深そうにこちらを見ている。

その紅い瞳。

何かを見据えるような、探るような視線をしっかりと見て受け止めた。

何だよ。

ただ見られるなら何も思わないが探るような、その奥にあるような目に少し嫌悪を覚えた。

「ようこそ、この紅魔館へ。私はこの館の主であるレミリア・スカレット。こちらは私の従者の十六夜咲夜よ」

咲夜と呼ばれたメイドが腰を折って礼をする。

「どうも、風間大介と申します。この幻想郷に降り立ったばかりで、



是非挨拶にへと」

そうして見て、邪悪な笑みを浮かべた。だが、その笑みに悪はな  
く。

「最近の者は人の家の門番を吹き飛ばして挨拶にくるのかしら？」

「おや、幻想郷では口より手が先に出ると聞きましたが？」

故に風間も冗談で返した。

「ふふふ……そうね、ここの連中は気が短い奴等ばかりだわ」

咲夜、と言葉を繋いだ。

「お客様におもてなしをしなさい」

一礼。そうして彼女が消える。なにか能力か。

少し経ってテーブルとイス、それと紅茶が運ばれてきた。

「折角だわ。うちの自慢の紅茶を飲んでいきなさい」

……紅茶ね。

まさか人の血なんか出てくるのではないだろうか。

露骨に嫌な顔をしたので、それに気が付き少し微笑みを漏らして  
レミリアは口を開いた。

「まさか、客人に血なんて飲ませないわよ」

心底楽しそうに微笑むものだから、なんだか恥ずかしくなって風間は急々と紅茶に手を掛けた。

「い、いただきます」

紅茶を飲み、喉の奥。胸の中が熱くなるような感覚に思わず唸った。

この味、そうして喉越しの後味がなんとも素晴らしい。

「咲夜の紅茶は本当に美味しいでしょう？私の楽しみの1つでもあるのよ」

「恐れ入ります」

丁寧に一礼して再度紅茶を注ぐ。

「貴方は『運命』という言葉を感じるかしら？」

「……運命、ですか」

そう、と呟いて紅茶を飲みテーブルに置いてこちらをじっと見るレミリア。その紅い瞳はまたもや何か風間を探るような視線だ。

「人が刻まれた運命……いいえ、人だけではないわ。生きとし生けるものすべてが運命を持っている」

例え、妖怪であってもね。

「俺は信じませんね」

風間がそう答えるとレミリアはへえ……と息を漏らして頬を付く。

「理由を尋ねても良いかしら？」

「運命とは定められた未来、運命だったから、仕方ない。そんな言い訳で何もかも逃れるような奴にもなりたくないし、なにより」

息を付いて、そうして言葉を繋ぐ。

「俺は人に縛られるのが大っ嫌いなんですよ。運命もまた然り。そんな言葉で未来を縛り付けるなら。そんな運命ぶっ壊してやる」

風間は思う。

自分がロードローラーに轢かれて死んだのが運命ならば、こうして妖怪の身で生まれてきたのが、この世界にきたのが運命ならば、卑弥呼が、晴明が、そんな奴等と出会ったのが『運命』ならば。

じゃあ、俺は何をしてきたと言うんだ。

人と出会ったのが運命、轢かれたのも運命。妖怪として生まれたのも運命。

言い換えれば人生の大半を運命で括りつけられる。では、俺が生きてきた事は？何を頑張ってきたかというのか。

運命という言葉を確認するならば誰しもその人生の大半が運命。そ

んな人生を認めるくらいなら運命なんてものは風間は信じない。

「そう……なら、1つゲームをしない？」

「ゲーム……？」

問われて頷く。そうして大層嬉しそうに笑う。

「簡単なゲームよ。……私の能力は『運命を操る程度の能力』私が提示する運命を打ち砕いたのなら貴方の勝ち。どう？簡単でしょう？」

「……また、大層な能力をお持ちのようで」

運命を操る程度の能力か、だからあんな事を聞いたのか。

「いいでしょう。受け手たちですよ」

なら、引くわけにはいかない。運命を打ち砕くとかなんとかかっこいいことを言った後に引くなんてカッコ悪いことなんてできない。

風間がそう答えると、レミリアはそれこそ、邪悪な笑みを浮かべた。

「『お前はある地下に行くと思ぬ』」

……。

殺気……ではないが、なにやら不穏な空気が駆け抜ける。死を宣告されるような言葉を受けて全身の鳥肌が立った。

「咲夜、彼に例の部屋を案内してあげて」

「……………はっ」

何か言いたそうな顔を一瞬して、間を開けて咲夜は頷いた。

「貴方は死ぬ……………ね」

地下。咲夜に案内された部屋の1つで風間はため息を吐いた。鼻が曲がるような血の匂い。湿湿とした地下の中でゴミのように横たわる『元』人間。無残にはじけ飛んだ妖精。

「貴方は……だーれ？」

どうつすかなーおい。

1つの部屋に少女が1人。狂気の感情が部屋を支配し、波長が大きく乱れる。

荒々しく、そうして悲しく。

「どうして、俺が会う女性は」

こつも面倒な娘が多いのか。

「運命ってやつ？」

ハハッ、馬鹿らしい。

「だれなの？」

幼い声が響いて風間は答えた。

「初めまして、フランドール・スカーレット。俺の名前は風間」

息を付く、血のにおいが鼻腔を燻る。

「新しい『お人形』？」

違つよ。

「ただの神様さ」



16話「紅き幼い月」(後書き)

このように短くてもいいから毎日更新してほしいってあります？

それとも期間が開いてもいいから長くしてほしい!とか。

1ヶ月1万字以上とか



## 17話「狂気の金の月」

「神様？」

「そう、神様だ」

頷いてフランと呼ばれた少女に近づく。金髪のサイドテールに小さな帽子。愛らしい顔をしているがその目、その雰囲気は濃い狂気に満ち溢れている。

「神様が私と遊んでくれるの？」

地下に立つ数本の蠟燭。その妖しい輝きに照らされる笑顔は悪魔のように恐ろしい。この地下に充満している狂気のせいか、危うくなにかに取り込まれそうになって意識を慌てて覚醒させた。

息を付いて風間はゆっくりと首を横に振った。

フランの顔がゆがむ。

「じゃあ、お兄さんは何しにきたの？」

「……君はここに居て楽しいかい？」

地下にある部屋を見渡して、風間は口を開いた。その言葉にフランの眉が跳ね上がる。

「……楽しく、なんかいいわよ」

「じゃあ、なんで君はここに居る？」

「なんでって……お姉様が貴方はここに居るって……」

「理由、わかるかい？」

風間がそう口にするのと、一気に部屋の温度が下がった。元々地下ということもあってか少し寒い程度の温度が一気に氷点下まで下がった気がした。

「なによ、さつきからアンタ」

濃い殺気が辺りを埋めつくす。狂気が周りを支配して威圧するように低い声が地下に響いた。

「さつきから訳の分からない事ばっか言って。もういいわ。折角遊ぼうと思っただけど」

死ネ

「禁忌『レーヴァテイン』」

炎が駆け抜け。それはまるで剣のよう。灼熱の剣を向けられる。常人なら、その熱さ、その殺気に狂うだろうが、風間違う。

炎の剣を向けられながらも尚も口を開いた。

「レミリア・スカーレットが自分の妹を地下に閉じ込めなければならなかった理由。最初自分の妹を閉じ込めてるって聞いて頭狂っているのかと思つたよ。なんて阿呆な事をつてね」

でも、

「その理由がわかった。フラン、お前が『狂っている』からだよ」

「っ！……何を……！」

「妹を閉じ込めなければ、いけなかつたんだ。狂気に身を任せた吸血鬼を抑えるには『本気』で殺す気じゃないと勝てんからな。それが嫌で、レミリアはお前を閉じ込めた。でも、それじゃ狂気は収まらない」

だから、少しずつ餌をやっていったんだ。その狂気を満たすために。閉じ込め。いつか破裂しないように僅かな犠牲を与えて。

妹を殺さないためにね。

「いいか、フラン。お前は『狂っている』んだよ」

「ウルサイウルサイウルサイ！お前の何がわかる！私は狂ってなんかない！」

「本人が自覚しないから、尚もたちが悪いな」

瞬間、何か切れた音がした。世界が紅くなる。それほどまでの殺気が全身を駆け抜けて、フランが振りかぶった。

黙し死ネ。

轟音。爆音。そうして灼熱。

スペルカードの力を超えるような衝撃と灼熱の炎が地下の部屋を駆け抜ける。

確実に殺った。とフランは邪悪な笑みを浮かべた。

だが

「う、嘘……！」

その男は生きていた。

炎を身に包ながらも、その服が焼け焦げ、腕が黒くなるうとも。

無表情のまま、そいつは立っていた。

「レミリアはこれがゲームだと言ったが、よくよく考えれば可笑しな事だった」

運命云々ならなんでもいい。それこそトランプでもいいし、なにか他のでもいい。なのに態々地下でフランと合わせなくても良い筈だ。

ただ、狂気を満たすための餌としたのか、そう考えれば一番妥当ではあるが。

遣る瀬無いなー。

1人呟いて、風間はそれでも少し笑う。

でも、まあ良い気はしないがよかったと思う。

レミリアの事はどうでもいいが、目の前にいる彼女が気になって仕方がない。閉じ込めざる負えない状況だった、というのはわかるが。フランも閉じ込められてどう思っただろう。

狂気を閉じ込めるつもりが、逆に大きくなった。

それもそうだろう。地下に1人こんな広い部屋に閉じ込められ、遊び相手は恐怖に歪む『人形』だけ。話し相手なんていやしない。

きっと『人形』にも話しかけただろう。

ここにきて風間に話しかけたように。でも、恐らくは返ってくる返事は悲鳴。安易に想像ができる。

まあ、結局の所 両方悪いんだよね。

こんな所にそれこそ百年単位で閉じ込めたのなら、精神がどんどん悪くなるのは必須。でも、それこそ外に出せば殺さなければならぬ。

悪いのはすべて

「この狂気ね」

ため息を吐く。

咲夜曰く、膨れ上がった狂気は最近『人形』では我慢できなくなっている。故に『風神』の俺が選ばれた。

レミリアからして見れば、絶好の得物だったのだらう。神の類い。弱いわけではない。

『嫌なら、逃げてください。貴方にはその権利があるとお嬢様は言っています。ゲームを放棄するならそれもまた運命だと』

結局どっちも運命かい。

風間は息を吐く。

ならその運命を壊すしかないな。

「死ねええええええ！」

血で固められた黒いハート型の槍がフランの腕から放たれる。

「  
それを肉薄して風の盾を形成する。」

「な、なんで」

槍が弾かれ分散する。

「  
フラン」

ビクリと、肩を震わすフラン。狂気の感情は極めて情緒不安定だ。喜怒哀楽の安定が無く、そのすべてが本能に忠実だ。故に理性というものがない。

だから、絶対だと信じた自分の力を　なんでも壊せると信じた自分の力を弾かれフランは混乱する。

「いやあああああああ！」

叫びながら、黒い『目』のようなものを掌に集めた。

咲夜から聞いた『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』物資の中心である『目』。それを破壊することによってすべてを壊すことができる。

それを手中に移動させることができるのが彼女の能力。

「死ネ！死んじゃえ！」

だが、それを握りしめる瞬間を押さえれば問題はない。

音速を超える。

手を弾いて襟を掴む、体勢を崩してそのまま投げた。

地下の壁にブチ当たり煙を上げた。アスファルトの粉が舞う。

「フラン」

再度言葉にする。

フランが立ち上がり、濃い殺気をぶつける。

「レミリアには餌として与えられたって考えるのは嫌だからこう考える事にした。君を救うために俺をここに呼んだってね」

「私を救う……？」

訳がわからないと言ったような顔をしてフランが歪む。

「俺は 神様だ。だけど、そこに威厳というものがなくただの妖怪上がりの新米だ」

一枚のスペルカード。それを取り出す。キツと睨みつけて戦闘体勢を整うフラン。もう一度『目』を呼ぼうとしているのか、魔力が跳ね上がった。

「神奈子も諏訪子も貫禄もあるし威厳もある。そこに信仰力が戻り立派な神様だ。でも俺には神力が合っても2人程『神』としての力は使えなかった」

人の幸福にするとか、人の願いを聞くとか。神様の当たり前の事封印されていた時にも似たようなことをしたが、果たして効果があったことすら妖しい。

完全なる神だけの力を酷使用する。これを神聖化というらしい。

「妖力を合わせ持つ俺には『力』は確かにあるが神としての力はまだ完全に芽生えてなかった。逆に妖力をあわせもつことが邪魔となつたんだよ」



そこで、だ。

「つぼみの状態の俺を咲かせるにはどうするか。色々試してみてもなかった」

一枚のスペルカード。それを魅せつける。

「こいつはこの紙に妖力を込めてそれを発動させることで開放する。なら、こいつに神力だけを込めて邪魔な妖力を外せばいい」

「何を、さつきから言ってるの！？私はお話は好きだけどアンタが言っている意味わかんない！」

要するに、こいつに全妖力をぶち込んで神力だけを残して完全な神にするってこと。内側の妖力を外で覆ってその力を糧とする。

「つまり、君はこの幻想郷で最初の俺の神を見れるってこと。そうして君はその狂気から開放されるんだ」

スペルカードを発動する。

「満開『東方風神記』」

辺りが、光輝く。



17話「狂気の金の月」(後書き)

短めで投稿

18話「とある風神」(前書き)

遅くなつてごめんなさあああああああああい！

## 18話「とある風神」

目覚めが悪い朝だと、風間は思う。

重い瞼をあげて見上げるのは白い天井。上半身を起こして周りを見渡す。天井は白いが周り紅くなんとも不気味な部屋であった。シングルベットが1つ風間を寝かせていたものであるがその他にテーブルや本棚など紅い家具がその部屋を飾っていた。

「目が覚めたか」

声がしてみても向くと幼い少女が1人。紅い双眸でこちらを見ている。

風間を地下にいかせたレミリア・スカーレットであった。

「あんたか」

風間は息をついた。そうしてこちらに近寄る少女を一瞥する。

「貴様、あの子になにをした」

突如投げかけられた。少し苛ついているようなそんな言葉。

「なにを？」

「はぐらかすな、フランになにをしたと聞いている」

胸ぐらを掴まれてレミリアはそう問うた。少し息苦しく、それでも言葉を続ける。

「神様としての仕事をしたままでだよ。吸血鬼」

そう吐き捨てるように言葉にして風間はレミリアを突き放した。

「仕事……だと？」

「そうだよ……元はと言えばおまえさんが俺を地下に送りこんだんだろ。ゲームうんぬん抜かしやがって。危うく本当に死にかけたわ」

乱れた胸元を直して風間はレミリアを見据えた。

「運命なんて所詮こんなもんだ。俺の勝ちだけ、紅き月よ」

「……っ！そ、そんなことはどうでもいいんだ……！私が聞きたいのはどうでもいいゲームの話の事ではない。あの子が　フランが　どうして『正常』なのかを聞いている……！」

どうでもいいって。よくもまあね。

風間はため息を付き、レミリアを睨みつける。

「あの子があそこから出たいと願った。それを神様が叶えた。簡単な話だ」

そう、それだけなのだ。それ以上でもそれ以下でもない。ただ挨拶に来たこの館で幼い（といっても実年齢は百を超えるが）少女と出会い、『信仰』するから願いを叶えてくれと『願った』それだけ。

「ど、どうやってだ。あの子の狂気。それはたかが（・・・）風神  
ごときが抑えられるわけが」

「抑えたつもりもないし、たかが（・・・）400年生きた妖怪に  
言われたくありません」

少し拗ねたように風間は声にだす。お前より倍以上生きてるつー  
の。

「抑えてない　　？まさか！」

「壊したよ。あの狂気」

ドン！と再び衝撃、背に衝撃を受けて自分が壁に抑えつけられて  
いることに気がつく。目の前には殺気だつレミリアが。

「貴様！壊しただと……！？あの狂気を……？『吸血鬼の狂気』を  
か！？」

ここまでブチ切れる理由、それを風間は理解している。故に冷静  
を持って返答してため息を吐いた。

「落ち着けよなにも『全部』なんて言った覚えがねーよ」

吸血鬼とは、古来より恐れられたヴァンパイア。血を吸う鬼であ  
る。生と死の狭間に存在する彼らは一度葬られた者などが多く、ま  
た血を吸われた者もヴァンパイアになるとも言われている。

そんな吸血鬼たちは『狂気』の感情がある。

狂気と聞くとものすごく悪い意味での解釈が多いかもしれない。だが、人間にもあるれっきとした『感情』の一部である。

狂う気。通常とはかけ離れた感情を表す普通代名詞であるが、妖怪たちにとってはあつて当たり前『感情』なのである。

狂気がなければ人は食えない。月に置ける妖力の恩恵も受けられない。

吸血鬼の『食事』である血もおそらく、狂気なくして飲めるはずがない。

人間でいう『本能』が無くなったようなものだ。それを壊したとすれば、それはもう妖怪でも何でもない。

ちなみに、風間も当初は『狂気』があつた。馬鹿にならずにいれば他の妖怪と同じく人を食べていたのかもしれない。

妖怪が必ずもっている狂気の感情であるが、もちろん理性によって抑えることができる。

あ、これはいけないな。と思えるほどしっかりした理性と抑えられるような狂気があればこの幻想郷のように人と妖怪がともに生活できるだろう。

だが、フランには抑えられないほどの狂気があつた。

何百年閉じ込めていたと聞く限り、おそらくは生まれつきか、なにかの原因によって膨れ上がったか。



それはともかく、人の感情と同じように吸血鬼の狂気もまた必要な感情の1つなのである。

故に、『壊した』と言えば『心』を壊したと思われても仕方がないわけだ。

「俺の神としての能力とフランの『壊す能力』を使う。んで、フランの内側の狂気をごく一部。自分で制限可能な狂気を残してあとは『目』を壊してはい終了。まあ、あとはフラン次第かねえ」

「……………」

何か言いかけたレミリアであったが口を閉じて、近くのイスにドタリと座った。

「……………あなたとフランが倒れたところを見つけて、先に起きたフランが『正常』だったものだから一体全体何をしたのかと思ったけど……………」

「……………一応聞いておくけど、どこを見て正常だと思った？」

ため息を吐いて風間を指差す。

「起きて第一に貴方を心配した。まずありえないことね。倒れた他人を心配できるとしたら正常な考えを持った者よ。……………それに目が違ったのよ」

目ねえ……………。

「まあ、上手くいったならいいさ」

風間は息を吐いた。

正直、神聖化が上手くいくとは思ってもいなかったし風間はただ内側の狂気を外へ出したただけだ。それを壊しただけで正常に戻るとは正直わからなかった。

だが、それも杞憂に終わったなら幸いだ。

「風間！」

突如扉が開かれて金髪の髪が視野に入る、と思った途端ボディにタツクルを食らった。

「ウゴォ！」

思わず低い声で唸る。

神力も妖力も使い果たしたために『あらゆる事を保つ程度の能力』を持ったとしてもすぐに回復できるわけがない。

タツクルと言ってもフランにとってはただの抱きつきだろうが、風間にとっては無防備な腹に高速で抱きついてくるものだから、それは最早タツクルと言っても過言ではないだろう。

「倒れたから心配したんだよっ」

「た、倒れたのはお前も一緒だろうが」

「私は大丈夫だもん、でも風間は凄く力使ったんでしょう!？」

「ん、……まあ大丈夫だよ」

もう一寝すれば完全に立ち直れるな。

しかしわれながらよくできたな。到底あの地下に居たフランとは違うな。

「んで、紅き月よ」

「なによ」

「フランはこれでお外へ出れるかな？」

少し驚いたような顔をしてフランはこちらを見る。元々そういう約束でこちらら協力したんだ。信仰をきちんと得ているし、狂気も抑えられる程小さい。

……しかしながら妖怪から信仰を得るってどうなんだろう。

しかも吸血鬼ってね。

「……まあ、そうね。閉じ込めておく理由がないし」

モジモジと手をいじくりながさう小さくつぶやいた。

自分が閉じ込めていただけに、今のフランを見て何を思ったか。少し顔を歪ませる。風間は息を吐き頭に手を当てる。

『よく、我慢した』

バツ、と顔を上げるレミリア。

『人形』を与えることでその狂気のある意味で抑えていたレミリア。彼女は果たして間違っていたか？

風間はそうは思わない。

たしかに、やり方としては残酷だったかもしれない。もっといい手があったかもしれない。それによって散っていった命もある。

だが、そうせざるおえなかったのもまた事実である。

彼女と同じ立場なら自分はなにができた？妹が狂ったとしたらその場で何ができる？どう解決できる？

その最善の策をその場で考えられることができるか？

自分ならできないだろう。

まったく関係ない第3者だから色々な見方ができたし、色々な事ができた。

故にレミリアを責めることはできない。

まあ、ゲーム云々で地下に送るのはやめて欲しかったけどな。

「お姉さま？……泣いてる？」

「っ……！そんなわけないでしょう。錯覚よ」

目を擦る彼女をみて、フランは少し考えてレミリアの頭に手を乗せた。

「ふ、ふらん？」

「よしよし」

ナデナデと頭を撫でるフラン。純粹にほほえみ姉の頭を撫でる彼女。つくづく、地下で殺気立った彼女とは思えない。

「ちょ、ちょっと！なにしてるのよ……！」

「お姉さまを励まそうと思って」

「ば、馬鹿。なによそれ別に平気よ」

「じゃあ、私が撫でたいから撫でさせて」

微かに目頭を熱くした彼女。果たしてその強がり姉としてのプライドか吸血鬼としてのものか。

いずれにせよ。

……可愛いな。

まったくこの場に似合わず、風間はそう思った。

「#0500」

「ああ、てか挨拶に来ただけなのに2晩泊めてもらった挙句まだ居座るのはマズイだろ」

他の場所も周りたいたいしな。

「そう……もっとゆっくりしていてもいいのに」

「まあ、他のところも挨拶しにいかんとな」

あれからもう1晩泊めてもらい、完全に復活した風間は次なる挨拶回りにいくべく紅魔館の門の前で別れを告げていた。

「てか、挨拶回り1回目でこんな苦勞するとは」

もっとスムーズにいくかと。

「ダメね。ここの連中を甘くみてはいけないわ。『必ず』一悶着起きるわよ」

「……それは運命か？」

「ふふふ……どうでしょうね。信じないのでしょうか？運命」

まじかよおい。

「ま、忠告よ」

肩を竦めて見せてレミリアは晒う。

「じゃあーね！風間！」

フランが元気いっぱい手を揺らす。

その後ろでは2人を日から守るために日傘を持つ十六夜と美鈴。

「風間さんっ！また来て下さい！今度は負けませんよー」

やはり類は友を呼ぶのか彼女とは同じく近接格闘者として色々談インファイター義できて楽しかった。

「はは、また今度なー」

正直、ご勘弁願いたい。この人強すぎ。

「私からもぜひ、今度は美味しいお茶をおもてなしますわ」

十六夜が凜として声にだし、風間は頷く。

「んじゃ、まあ行くか。また今度。落ち着いたらくるよ」

『またねー！』

手を上げ紅魔館を後にする。



## 白狼天狗の苦惱！

私、犬走椀は白狼天狗であり一番下つ端である。今日も妖怪の山の警備や上司の手伝い（使いつ走り）など日々が忙しく。最近では山に来た神様のお陰で正直目が回る忙しさだ。

なんでもあの射命丸文という上司に当たるアホ烏　ゴホン、烏丸天狗様が書類仕事をしているらしい。

あのアホ烏様が仕事をするとは本当に珍しい。それほど忙しいのだろう。私ももっぱら最近ではにとりとの将棋ができなくなっている。

仕事するのは楽しいが、正直、将棋をするほうが楽しいし気楽だ。

「椀、ちよつといいかしら」

「はい、なんですか？」

「ちよつと文の様子みてきてくれる？彼女ここのところ缶詰だから、ちよつと心配なのよねえ」

「文様ですか……」

「なんでも、無理やり連れてきて、仕事させたものだからねえ、天魔様が直接命令したからおとなしいけど、どうなってるかなーと思つてねえ」

正直、私も気が進まないが、仕方がない。上司の頼みだ。

私はある1つの部屋を訪れる。滅多に『仕事』には使われない文様の書斎室。彼女もそれなりの地位なので個室が与えられるのだが、しようもない糞みたいなお新聞をつくってる。

これが何故だが人気なのだから（と、言うより脚色しすぎで逆におもしろいらしい。その発想はなかった）腹ただしい。

仕事しろよ。

何故こいつが上司なのだろうか。いつか出世したら蹴落してやる。

まあ、彼女もそれなりの書類などを回されるが、いつも仕事をし

ないぶん溜りに貯まり、ついには天魔様が泣き頼むくらいだ。

よってその整理にあたるのが彼女の缶詰の理由である。

私みたいに清く正しく美しく仕事していればこんなことにならないのに。本当にクズだな。

ここに連れて来られる前なんでも男と一緒にだったらしいが、そいつと一緒に幻想郷を回る予定だったらしく、今この扉の向こうでは鬼神の如く書類たちを片付けているだろう。

男と一緒にか。噂ではあの風神らしい。

まあ、それはいい。さて、そろそろ様子をみなければ。

「文様？入りますよ？」

2度ノックして入り込む。……汚い部屋だ。この人は掃除もできないのだろうか。

ああ、クズだから仕方がないか。

「……文様？」

なんだか、本当に様子がおかしい。てか、空間がおかしい。

なんというか禍々しいというか。

というか、書類の山に埋もれてあの糞鳥の姿が見……え……。

「ふふ……この書類共め……紙の分際で……貴様らのせいで師匠との甘いもとい修行の時間が……ああ、こうしているうちにも師匠は幻想郷を回って……ああ、私の能力の向上のために貴重な時間が……。ふ……これもどれも、この屑紙のせいで……ブツブツ」

「ヒイ！？」

な、なによあれ……！なにか、なにかオーラがつ！オーラが出てるよ！

後退り、書類に足を囚われて思わず尻餅を付く。

「……だれえ……?」

「っ……!っ……!」

恐怖に足がすくむ。文様のこの姿を見ればあの鬼でさえすくむだろう。なにせ私がこうして竦んでいるのだ。鬼が竦まないわけがない。

「あらあ……もみーじ、じゃないい。ちよつどいいわあ。手伝ってちよつだい」

「え、あ、その、えつと」

駄目だ。恐怖で声が出せない。文様ってこんなに怖かったか。

「わ、わたし、はあ……そのう……」

「……手伝え。食わりたいのか。犬」

「はいiiiiiiiiiiii！て、手伝いますう！手伝いますからあ！」

……今日も私は苦悩が絶えない。

## 18話「とある風神」(後書き)

さて、遅くなった言い訳を書くのはともかく、皆さんに重大発表です。

祝！「安部清明及び卑弥呼再登場決定！」

はい、登場します。あの2人が登場します。もう決めちゃいました。

どついう登場をするかはまだ秘密ですが(ご想像にお任せ)これだけはいいます。

2人とガチバトルします。

はい、もうスペルカードルール、なにそれおいしいの？レベルです。

風間ちゃんボコボコの予感です。

それではまたいつぞやに

追記：やっぱり、オリキャラだすならオリジナルでやれっていう人もいるんですね。

私が悩んだことがこれなんですよ。これはあくまで東方二次であつて東方キャラをスポットにおかないとだめじゃないですか？

でも、多くの読者様から意見、出して欲しいという要望があつたためにこの2人を出すことはもはや決定事項です。

不愉快な方はすいませんでした。。。

さて、例のごとくあの人が私の腹筋を壊したので明日はちょっと更新できないかもです。結構スランプなのでなるべくはやくには更新したいと思ってます。



## 19話「迷いの竹林にて」

その森は迷いの竹林と呼ばれているらしい。

人里より南に位置するその森は多くの竹が生える森である。

なるほど、迷いの竹林ねえ。

ただの竹の森が何故迷いの竹林と呼ばれるのか。その所以はまず、この竹にあるだろう。

深い霧が立ち込め、その竹は日々成長する。目印を付けていたとしてもわからない。また緩やかな傾斜で方向感覚が狂う。

どこへ行っても同じに見えるその景色。

冷静に迷いに竹林というものを分析しながら、その風景を見回す。

さて……ここは今どこだろうか。

風間は現在、絶賛迷子中であった。

迷いの竹林という存在は運送業をする上で何度か話は聞いていた。

曰く、その竹林の奥には薬師が住んでいてその弟子がたまに人里に降りて薬を売りにくるとか。

曰く、その竹林には道の案内人もとい焼き鳥屋があり迷うと何処からか現れて道を案内してくれるらしい。

……現れないけどね。

絶賛迷子中の彼にとってその存在は今すぐ出てきてほしいと願うものであるが、そういう都合の良いものではないらしい。

それにしただって結構人里で運搬業をしてきたつもりであるが、一度もその薬師の弟子とも迷いの竹林の案内人なんて出会ったことがないな。

話によると慧音の知り合いらしく、よく人里にくるらしいが。

「うーむ。飛ぶか」

結局はそうなる。

地によって方向感覚を狂わせているのなら飛べばいい。簡単なことだ。

最初っからそうしろよと思うかもしれないが、風間としては迷いの竹林というものをどういうものか味わっておきたかったのだ。

十二分に狂わされてあっちこっちに歩いた。もう十分に迷った。

なんだがちよつと悔しいが仕方があるまい。ここは素直に飛んでちやちやと永遠亭に挨拶をするか。

そう思い、足に力を込めて飛ぼうとした時。

「……………人間？迷い人かしら」

……………うさみみブレザー少女が声をかけてきました。

ピンクの髪を長くなびかせ、なにやら嘆息するうさみみブレザー少女。

短いスカートを履きブレザーを着こなす。そのピンクの髪の毛とうさ耳さえなければきつと普通の女子高生であつただろう。

風間はそちらに向き直り姿勢を正した。

「こんにちわ。君が迷い竹林の案内人？」

「違うわよ。私は鈴仙。永遠亭の薬師の弟子をやってるわ」

ああ、そちらか。

「ちょうど良かった。永遠亭に用事があるんだ。ちょいと案内してくれないかねえ」

「用？怪我か何か？」

「いや、ちょっとした挨拶をしようかと」

そう答えると、少し首を傾げる鈴仙。

「挨拶？」

「俺はこちらに来て間もないから、この幻想郷の各地各場所に挨拶をしに行っているんだよ」

風間が分かりやすく説明すると、おもいつきり顔を歪められた。

「外来人？それにしたって各地を挨拶って……貴方。死ぬわよ」

おもいつきりため息を吐かれました。てか、人間だと思われているのか。いや、あ  
そういえばペンダント。すっかり忘れる。

「いや、俺は人間じゃなくて　っ!？」

ペンダントを外そうとして説明を言いかけた風間と鈴仙の間に衝撃が割り込んだ。

虹色のような妖力と煉獄のような妖力。

燃えた竹が虹色によってその竹ごと吹き飛ばされ、竹林は燃えひろがなかったが、その場所がひどくえぐれている。

驚きうろたえる2人であったが、風間はすぐさま鈴仙を巻き込んで前へ飛んだ。

瞬間にその場が吹き飛び、突き出すように鈴仙を前へやったが反応が遅れて少し攻撃を喰らい鈴仙より前へ吹き飛ばされる。

この濃い霧。なにかおかしいと思ったら妖力の索敵さえも狂わすのか。じゃなければ攻撃の反応が遅れることはまず、風間にとってありえない。

油断していたとはいえ、瞬時に避けることが可能な風間が遅れるのはあり得ないことだった。

「ちょ、ちょっと！大丈夫！？」

慌てて鈴仙が駆け寄り風間の怪我したところに手を当てる。傷自体は軽い火傷とすりキズ程度だ。問題はない。

軽く舌打ちをして起き上がる。

「……………」

風を操り索敵。そしてその姿を見つける。

白い髪、炎。

黒い髪、虹。

そうして不老不死。

風間は思いつきり晒った。

あの馬鹿共が……！

「に、人間？」

「鈴仙さん、ここにいておいてくれ」

「へ？え、あ、うん。　　じゃなくて！なに？なんなの？」

「俺はちよつとあの阿呆共をお仕置きしてきますわ」

ペンダントを外し、風間は飛脚した。

藤原妹紅と蓬萊山輝夜は殺し合うのが日常である。きかっけは妹紅が藤原　つまり輝夜に求婚し振られて自殺した父の仇が最初の目的であった。

だが、何年も経ちこうして輝夜と関わっていると最早そのことはどうでもよいことに感じる。

父が自殺したときは本当に悲しく、本当に殺したいほど憎んだが、生憎2人は殺しても死なないのだ。

これはそれほど生があるというわけではなく、本当に殺しても死なないのである。首を飛ばしても、体を千切っても。焼いても、潰しても、死なないのである。

それは蓬萊の薬を飲んで『不老不死』となったからである。

ので、2人の間にスペルカードを超える戦いをしても結局生き返るのだからなんでもいいわけで。今日も十二分に死合っていた。

2人の同時の攻撃。今日の死合いを終わらせる全力。

だが、その間に割って入る影があった。驚く双方であるが、当然止まるわけがない。

『っ！』

挟むようにしてその攻撃が割って入った人物にぶつかる。当然、全開なわけである博麗霊夢さえ、これを受ければ到底無事では済まないだろう。

だが、しかし。

『え……！？』

割って入った人物。その人が生きていることにも驚くが、風間の姿に2人は息を飲んだ。

見覚えがある顔に驚くが、2人は突如胸ぐらを掴まれた。ぐるりと世界が回り同時に投げられる。地面に打ち付けられ、竹に当たる。

その衝撃、その痛みに思わず息を詰まらせた。

いくら不老不死とは言え、ちゃんと痛みはある。ぶつかつた竹が折れる（・・・）ほどの衝撃を受けて平気な顔ができるわけがない。

「突風つぎかぜ 風槍かぜやりの五月雨さみだれ」

スペルカードの宣言と共に空から無数。風で出来た槍が雨のように降ってきた。槍はすべて地と服を縫い付けるように刺さり、身動きができなくなる。



「よう、お前ら」

声をかけられ2人は顔を上げた。その姿。昔見た者とまったく同じ。服装こそ違えどその顔はよく覚えている。

だが、見覚えがない。

感じたこともない。

この、妖力は、なんだ？

ズン、と重みを感じて体が震えた。それだけではない、竹林が確かに揺れた。この地が彼の妖力によって振動している。

「随分と面白いことしているじゃねえか」

「え、あ……」

妹紅は声が出ない。驚きやら、痛みやら、どうして彼が此処にいるのか。もう頭がパンクしそうである。

「死合いね、そんなに殺し合いたいなら。俺と殺るか？」

「あ、えっと、その」

輝夜は驚きを通り越してこれは夢かと思いはじめ。だが、確実に痛みもあるし、地の感触もある。何故千年前に助けてもらった、死んだはずの彼がここにいいのか。

それよりも、この妖力はなんだろうか。

永琳といい勝負なのではないのか。

彼が地に降り立ち、2人に歩み寄る。そうして、妹紅を見据えた後思いつつつきり、拳骨した。

「~~~~っ!?!」

本当に星が見えた。その痛みに思わず涙が出る。

「随分と妖力が扱えるようになった割には相も変わらず感情だけで操りやがって。感情をつけるにしたってもう少し精密に扱えや。頭パンクするぞ。それにてめえ、不老不死の戦い方してんじゃねーよ」

妹紅が怒られてるー。思わずニヤリと晒った輝夜であるが、瞬時に輝夜も星を見ることとなった。

「……………!?!……………!?!」

「てめーもだぞこら。お前があそこまで出来るとは思ってもなかったけど、あんな戦い方してるとマジで死ぬぞ」

「わ、私は不老不（ry）」

ゴッソ。

「有限ある中で勝つ戦いを見出す、そいつの集中力っていうのは半端がない。』どうせ死んでも生き返るのだからいいや』って気持ちで戦ってたら足元掬われるぞ」

な、なにも殴ることはないじゃない。

2人の心境は同じである。

「……と、まあ説教食らわせたが。今日は（・・・）ここまでにしてやるう」

そうして、風間は晒った。

「せっかく再会したんだ。色々込み入った事情もあったみたいだが、まあ、殺り合うだけの元気があるなら大丈夫そうだな」

実際、殺り合うのは勘弁してほしいが。

「妹紅、かぐや姫。お久しぶり」

風間が手を上げて笑った。

19話「迷いの竹林にて」（後書き）

連続投稿でござる。

作業をするときのBGMってなに聞いてます？私は東方のアレンジ  
オーケストラやジャズ。もしくはアレンジ集などを聞いてます。あ  
とボーカルアレンジね。

寝るときは上海紅茶館や碎月のアレンジ集を聞いてゆったりと寝ま  
す。

また普通の曲なら夏の記憶とか、神様家族の「Brand New  
Morning」とか。

## 20話「永遠亭」

「ま、お久しぶり」

「……」

啞然とするその姿に風間は苦笑いを浮かべながらも、目の前の人物を見据える。

長身であり、中華服をイメージするような服。美しく伸びる銀髪は三つ編みのようにまとめて背中まで伸ばしている。

あの時は軍服のようなものを着ていたため、なんだが新鮮な感じがする。

八意永琳。

一度会ったのはかぐや姫を逃がした時か。なつかしいなあ。

「……貴方は……死んだはずじゃ」

つぶやく永琳である。目の前に見える人物は間違いなく平安の世で輝夜を逃がしてくれたその人物ほかならない。

なぜ彼が此処にいるのか、という疑問は天才を持ってしても推測できるものではなかった。

いや、それ以前にあの月の兵士たちからどうやって生き延びたのか。

「死んでもないし。勝手に決め付けるなよ」

そう笑う風間。

この声。間違えなく彼だ。何年経とうが忘れはしない。なにせ永琳にとっては命の恩人だ。あの状況を助け、生きる道を与えてくれた。

驚きを通りこして何か想うモノがある。

「でも、どうやってあの状況を　いえ、そんなことはどうでもいいわ」

気になることではあるけど。それよりも。

今、この状況を。

彼と再び出会えたことを嬉しく思う。会ったのはたった一回。でも、その一回で彼は確実に永琳の命を救った。

また、輝夜から聞かされた数々の話。

思うことは色々あるわけで。

「とりあえず、こう言っておくわ。『お久しぶり。会えて嬉しいわ』」

「ああ、お久しぶり。八意永琳」

「それにしたって、本当に懐かしいわね」

「まあ、千年前くらいだもんな」

永遠亭の中。客間に座るのは永琳、鈴仙、輝夜、妹紅そして風間だ。

「俺が飛ばした後、すぐに幻想郷に来たのか？」

「すぐ、ってわけではないわ。幻想郷自体ができたのはあの何百年後だもの」

輝夜がそう答えて、テーブルにおいてある菓子をほつばる。

「てか、貴方こいつとも知り合いだったのね」

妹紅を指差し、輝夜が菓子を食べながら口を開く。こいつ、などと指を刺された妹紅は輝夜を睨む。

「ん？んーそうだな、知り合いっちゃん知り合いかな」



そんなに深く関わった覚えもないけど。妙に印象が残る娘だった。

「……あん時はねー私もまだまだ若かったというか」

「今もヒヨっ子だけだな」

妖力自体は素晴らしいと思う。綺麗な形で炎を形成できているし、なによりその妖力の濃さが半端ではない。

センスだけではやっていけないのだから、結構な努力をしたのだろう。

元々、妖力を使って自然を形成する自体が難しいのだ。

風間はもちろん、その能力的にも風を使うが、それはあくまで『操る』今は『司る』が元々存在する自然の風を操ることに過ぎない。

なのに、妹紅ときたら自分の妖力を変換させて火を作る。

火というのは一番形成しやすい部類に入る、妖怪の代表的なものだろう。

だが、それはそれで難しいものもありよくここまで操れるようになったと風間は思う。

まあ、相も変わらず感情が荒いが。

「てか、かぐや姫が妖力使って殺気立ちながら弾幕振り回すとは、

世も末だな」

至っては、妖力でかいし。

「ま、私も色々あったのよ　それよりも。もうかぐや姫じゃないんだから『輝夜』って呼びなさいよ」

「あーそれもそうだな。そう呼ばしてもらおうわ」

お茶を一飲み。

あー癒されるー。

「しかし、貴方があの風神ね……」

何か思うことでもあるのか永琳がつぶやく。

「なんだ？なにか不満か？」

「不満ってわけじゃないわ。でも、言っちゃ悪いと思うけど貴方に神としての威厳がないというか、なんというか」

うぐつ、痛い所付くなあ。

「まあ、元々妖怪上がりの神だからな。そう言われても仕方がないし。だいたい、まだ神初めて1年も経ってないからな」

神となったのは封印されて100年くらい経ってからのらしいが、自覚して芽生えたのがここ1年なのでそう答える。

「私が最初に会った時ですら、ただの雑魚妖怪かと思ったもの」

と、妹紅。

「私が最初に会った時はただの変質者ね。あれは」

と、輝夜。

「あーそれはわかるな。いきなり声をかけてきて怪しさ満点だった」

「でしょう？それかただのパツとしない人間ね」

と、なにやら風間の第一印象について意気投合する2人。聞こえる言葉は地味だの影がどうなの、妖しいだの。

よし、わかった。お前らの俺に対する評価は十二分に了解した。

「永琳」

「何かしら」

「ちょっとこの2人借りるぜ」

「お好きにどうぞ。できるなら姫様は最近だらしないようなので、徹底的にね。……よければこの鈴仙もどうぞ」

「ええ!？」

お、なに。お前もくる？

「な、なにをするの……で、しょうか」

「ああ、別に敬語なんて使わなくていいぜ」

「えっと、じゃあなにをするの？」

「勿論」

地獄の特訓ってやつだよ。

「おーい。もう終わりかい？意外と早かったね」

「……はあ、はあ……どうして、こうなったし」

「……わ、私関係ないのに……」

「……し、しんど……！」

意気投合し、風間の第一印象（悪口）を言う2人と+ をつれて竹林に。

戦い方を教えるという修行という名の地獄に早くも息を上げる3人。

取り敢えず、片っ端から3人相手にスペルカードルールでの決闘を行っている。遠くから永琳が兎幼女とともにピクニックの如シートを広げて飲み物片手に観戦中。

「なるほど……3人相手でもこれって、本当に貴方強いよね」

「まあ、一応本気だし」

さすがに3人相手は本気でやらんと負ける。だいたい、スペルカードルールさえ慣れていないのに手加減なんてしたら返り討ちだわ。

「休んでいる暇ねえーぞ」

突風『風槍の五月雨』

「ちょ、ちよつと!」

慌てて回避行動に取る3人。風を凝縮、そうして鋭利に尖らせて槍に見立てたそれは、空中から無数に雨の如く降り注ぐ。着弾点すら把握するのが難しい。

真上から攻撃に反応が鈍いのは仕方がないしね。

一見単純そうにみえても本当にこれは避けるのは難しいと思う。

「くっ　こなくそ!」

蓬萊『凱風快晴 - フジヤマヴォルケイノ -』

炎が空を覆い風の槍を塞ぐようにして広がる。

おーそういいう使い方もできるのか。なるほど。でも、まあ。

がら空きだぜ!

その隙を突いて風間は妹紅に接近した。

「だ、から……!」

慌てて距離をとろうとする妹紅。そこにピタリとついて離さない。

「弾幕ごっこなのに、接近戦は……！」

「ルール違反でないぜ」

まあ、邪道であるがルールは違反してないだろう。

神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』

黒、赤、青、白、黄色、5つの色の玉が飛来して弾丸のごとく駆け抜けた。音速を超えるような速さが妹紅もろとも風間を狙う。

突風『ガストネード』

塵旋風のような竜巻であるが、それが二人を囲い、玉を弾く。瞬時に妹紅に掌底を入れて竜巻外に弾く。

「ちょっと！輝夜！今私ごと狙ったでしょ！？」

「あら、気のせいよ」

竜巻が弾かれ風が吹き、木の葉が舞う。視野が悪くなり風間は慌てて木の葉を払った。

「たあ！」

接近するのは鈴仙。軽いステップと共に蹴りが上段へ。

それを受け止める。木の葉が収まり、視野が元にもどるとそこには鈴仙の紅い目がこちらを見ていた。

「見たっ！姫様！」

すぐに鈴仙が下がり、スペルを提示する。続いてその他二人も同じくスペルを宣言する。

一気にくるか気が！

「っ！」

神宝『蓬莱の玉の枝 - 夢色の郷 -』

不死『火の鳥 - 鳳翼天翔 -』

散符『インビジブルフルムーン 真実の月』

爆音、それぞれが妖力を最大限に用いて風間をつぶしにかかった。実際、そうでもしければ負けるほどの者である。手加減なんてこと出来るわけがなかった。

竹林が一部大きくえぐれクレーターのようなものを残す。

「やった」

催風『シークレットエア』

「えっ………？」

生ぬるい風と共に、次々と三人は膝を折っていった。地に膝を付き、拳句に手もつく。体の気という気がまるで抜かれたように脱力し動けない。



まるで催眠　いや麻酔のようだ。

「あつぶねーなおい。三人同時とか洒落にならんぞ殺す気かよ」

声がして見てみれば風間が若干冷や汗をかき顔を青くしていた。

「そ、そんなどうして　確かに私の目を……っ!？」

鈴仙の目は赤い。この目を見たものは狂気に落ちて様々な幻影を見る。だが、風間が彼女を見たのにも関わらず幻影をみることもなくあっさりとおの三人の攻撃をよけたのである。

「あ、貴方　」

何かに気が付き、鈴仙は再び声を上げた。輝夜と妹紅も何事かと顔を上げて驚きのこえを上げる。

風間の目が紅く燃えるような目をしていた　。

20話「永遠亭」(後書き)

別に中二に目覚めたとか、新しい能力とかではなりません。  
ただの反作用です。

21話「優曇華」(前書き)

中の説明会

## 21話「優曇華」

「ちょっといい？」

夜。訓練を終えて、結局永遠亭にとまることとなった風間は月見酒を飲んでいた。

「なんだ？夜這いか？」

「死に晒せ」

「ご、ごめんなさい……」

じよ、冗談なのに。

「ちょっと気になることがあって」

「例の目が」

頷く鈴仙。

「まあ、立ち話もなんだ、こっちへ来いよ」

ペタペタと足音を立てて隣に座る鈴仙。

「酒、飲むか？」

「要らないわ」

そうか、と呟き風間は口に酒を含んだ。

「んで、例の目のことだったな」

「ええ、私の目を見たものは皆狂気にやられて幻覚などを見る。なのに、貴方は見なかった。そればかりか私以上の赤い目をしていた」

ちょっと一問を空けて風間が答えた。

「あれは俺のあらゆる事を保つ程度の能力が関わっていると予測している」

「予測？」

「ああ、確信が持てないんだよ。元々、持って生まれた能力じゃないんだ」

あらゆる事を保つ程度の能力というのは、途中覚醒した能力だ。はつきりと能力として覚醒したのは封印された時。

それ以前にも予兆というか、能力のあらわれはあったが、はつきりとしたのが封印の時であったためにそう判断する。

「この能力は気まぐれでね、全部が全部保てるわけがない。今現在で確定しているのは『生命力』『妖力』『神力』『若さ』くらいか」

「保つ？じゃ、私の狂気を目を見たとき、その能力が発動して正気を保ったってこと？」

「まあ、予測ではな。元々、幻術には見飽きるほどに受けたことが

あるがそれが関係しているとは思えない。狂気の目を見たためにそれを保とうとしてこちらにも狂気を発動して飽和したってところか。……ようは、反作用するってことだよ」

狂気というのは誰でももっている。妖怪ならなおさらだ。

それを操りうまく見せるのが鈴仙の能力。正確に言えば、鈴仙は波長だったか。

「見飽きるほどって……まあ、いいわ。聞くところによると、そのあらゆる事を保つ程度の能力ってすごく便利ね」

「それでもないさ」

酒を口に含んで風間は答えた。

「そうだな……たとえば、俺が蓬莱の薬を飲んだ時とかはやばそうだな」

「???なぜ」

蓬莱の薬は不老不死の薬である。どんな状態　細胞が諸滅しない限りどんな状態でも復活できる。それは人間の再生能力を上回る。「蓬莱の薬を飲み、『生命力』を保っているのに、余計な分子が入ったらそれを異分子とみなして正常に保とうとする。つまり　殺そうとするってことだ」

「　　っ！でも、蓬莱の薬のおかげで死ぬことはない」

「そう、だから俺は生ながら死に続けるってことだ」

それに俺は耐えられるか？多分、俺は無理だ。

「便利なようで便利じゃないのね」

「ああ、どうにもね。生命力っていつても腕が粉碎すれば元には戻らないし、首が吹っ飛ばせば確実に死ぬ」

最強でもなんでもないよ。俺は。

ただ年を取らない、ある程度の傷なら時間が経てば直る。それだけ。

唯一の救いは、妖力と神力には上限がないってところか。

「でも、私たち3人相手に余裕で勝つなんてやっぱり貴方は強いわ  
「よ

「そーでもないさ。妹紅と輝夜は本気じゃなかったし」

「う、嘘!？」

「本当」

2人とも殺す気がかかってきてなかったしね。もしあの2人が本  
気できたら絶対勝てない。技術とか、力の差じゃなくて、単純に。

だってあいつら死なないもん。

「……私もまだまだね」

ため息を吐く鈴仙。まあ、それなりにだったし。これから成長の将来性ありつてね。

「まあ、そんな時は黙って酒！」

そういつて酒を突き出す。

月見酒はいい。心が落ち着く。

「私はいいつて」

「なんで、こんなにも月が綺麗なのに」

「月は好きでもないし、嫌いでもないの」

「……そうかい」

風間は酒を戻して自分のコップに注いだ。そうして酒を飲む。

月を見上げる。満月でも半月でも、ましてや三日月でもない。ただ一部が欠けているだけの月。時折うすい雲が月を隠す。

それがまた風情があつていい。これに桜なんかがあれば最高なんだけどもね。

「……」

しばらく、沈黙が続く。なにか思うようにして鈴仙が俯き、風間



は黙って見上げて酒を飲む。

縁側に涼しい風が吹いて、鈴仙がよくやくその沈黙を破った。

「私は、月の兵士だったわ。自分でも言うのはなんだけど、優秀だった。訓練ではいつもトップだったし将来は重要な役に就くことが決定されていた」

「へえ、エリートだったのか」

「でも、私は人間が月に攻め入ってくるって聞いたとき、逃げ出したわ。戦が怖かったの」

「……」

酒を、口に含む。

「可笑しな話よね。人間が怖いって逃げ出したのに、逃げ出した先が地球だなんて」

「……」

「皆を、仲間を、友達を裏切ってこの地球にやってきて、姫様に出会って師匠に出会って、それからちょっと嫌な奴にも会って。それはもう警戒されたけど。打ち解けて。私、本当に幸せでこの地球にきてよかったって思う」

でも、月が出る夜は俯いていた。月が見上げるのが嫌だった。

「私は どうしても、月は好きになれない」

夜の月。虫の音。縁側に時折ふく風。そうして飲む酒は体を温めよい気分に合わせてくれる。口に酒を飲みまたしても沈黙するが、風間は息を吐いてもう一つのコップに酒を注いだ。それを鈴仙に渡す。

「だから、私は飲まないって」

「いいから飲め！こんな綺麗な月を前にして月見酒が飲めないなんて月見酒愛好会会長の俺が許さん！」

啞然として、なにか奇妙な珍獣でもみたかのようにポカンとする鈴仙。

しばらくそうしていたが、やがて声に出して小さく笑い、酒を受け取って、なんの会よと零した。

そうして、月を見上げた。

この夜。あたりが暗闇に落ちるその夜を天から唯一照らす月。

綺麗……。

思わず呟いた。満月でもない、ただの欠けた月だけど、本当にそう感じた。

いつも俯いていた月は見上げるとこんなに綺麗だったのか。

「風間さん」

「なんだ」

「月を見上げながら飲む酒は中々いいわね」

ふっと、微笑む風間。

「だろ」

見上げた月を肴に、飲んだ酒は少し苦かった。

いつか、この月を好きになる時はくるのだろうか。

21話「優曇華」(後書き)

ちよつと雰囲気のない話がすきな風月。

ほのぼのとした話を作るのが楽しいです

## 22話「お茶会」

1 晩泊まった後、風間は永遠亭を後にした。永林と輝夜に関してはまた後で訪れて昔話に花を咲かせながら酒を飲もうと約束し、妹紅に関しては焼き鳥でも食いながら、ということになった。

さて、紅魔館、永遠亭を挨拶を終えた風間はどうしようかと空を仰いだ。妖怪の山、守矢神社に関しては異変とともに挨拶は済ませている。

「ふむ。少しづらついでみるか」

散歩でもしようかと風間はどことなく歩みを進ませる。別にそこらの妖怪なら負ける気がしないし、迷ったときは空を飛び、風で人里を探せばいい。簡単な事だ。

しばらく、陽気な日の散歩を楽しみ歩く。

こうしてたまには歩いてみてもいい。折角2本も足があるのだからね。

こうして歩いて1時間弱。なにか黄色の色が視野にはいって風間は思わず足をそちらに向けた。

「これはまた……」

なんとまあ、懐かしい。

そこには一面の向日葵が咲いていた。本当に綺麗な花である。大きな花を咲かせるその花に懐かしみを覚えた。

ここまで見事な花畑を咲かせる奴は風間は1人しか知らない。それもずいぶんと懐かしい顔だ。面識は一回しかないし、出会いは最悪だった。いかにも好戦的であったがこの花だけはずいぶんと印象に残っている。

「見事な向日葵の花畑でしょう」

声がした。風間は振り向かず答える。

「ああ、とても綺麗だ」

「ふふ、有難う。どう？『前』に見たときより綺麗に咲いているかしら？」

「いや、お前さんの咲かせる花は昔も今も変わらず綺麗だよ」

「そう、ありがとう。私も昔の知り合いにそう言ってもらえてとても嬉しいわ」

瞬間、振り返り迫るこぶしを円の軌道で受け流した。

今度は逆のこぶしが風間を狙う。それを、受けてとめて対峙する。

「相も変わらず好戦的だな」

「あら、それは貴方だけによ」

大地の緑をイメージさせるような綺麗な碧の髪。少し狂気的な赤い瞳。整った美しい顔立ちに笑顔が咲く。

風見幽香。フラワーマスター。

「お久しぶり、千年ぶりかしら。風間」

「お久しぶり、千年ぶりだよ。風見」



「しかし、お前さんも幻想郷にね」

「あら、それはこちらのセリフよ。貴方は封印されたと聞いたから」

この家も本当にずいぶんと懐かしい。いくらか西洋のものが入り込んで家の内装自体は変わったがその本質は変わってなかった。

テーブルを挟んで紅茶の楽しみ談話する2人。その様子がなんだかおかしくて風間は笑った。

「なによ」

「いや、なんだかお前と茶を楽しむなんて想像もできなかったからさ」

「心外ね。私は茶は好きよ？」

いや、そういう意味ではないと風間は首を振った。

「俺たちの出会いは最悪だった　と言ってもお前さんが勝手に戦いを挑んできたものだから。てっきり『そういうお方』なのかと」

その言葉に風見は手を振る。

「それこそ、心外よ。私だってなんでもかんでも戦う輩ではないわ。もう一度戦ってみたいとは思っけど」

やっぱり。風間は顔を顰めた。

「もう、やらんぞお前さんとは特に疲れる。そっちがやる気なら俺はここから全速力で逃げているところだ」

「……まあ、いいけど。ああ　それとお前さんなんて呼び方しないで。風見幽香って名前がちゃんとあるのだから」

「んじゃ、風見」

風見が首を振ってティーカップを置いた。

「風見さん」

フルフル。

「風見ちゃん」

「殺すわよ」

……。

「……………幽香？」

「よくできました」

上機嫌に紅茶を口に含む　幽香。

「そういえば、貴方の名前ってなんだったかしら」

「風間」

「下の名前よ」

「風間がかまわん。俺はあんまし下の名前好きじゃないんだ。むしろ苗字が気に入ってる」

風間とは、風の間　風が吹いている時と風が止まっている時を指す。この苗字が気に入っているのは自分が風神だからかもしれない。

「あら、ならなお更下の名前で呼ばなきゃね」

「……なんで」

「知っている？私ってさらしいよ」

……。

いや、わかりきったことだけれども。

なんだかなー。

「……大介だよ。風間大介。好きに呼んでくれ」

「そう、じゃ遠慮なく。大介」

「なんだ」

「呼んでみただけ」

「……」

ま、いいや。

口に紅茶を含む。少し苦いような、甘いような程よい味が喉に通る。

「どう？私の入れた紅茶は」

「え？ああ、まあ美味しいね。まあ、十六夜が入れた紅茶ほどじゃないけど」

「………はあ〜」

ため息を吐かれました？

え、なに？まずいことでも言った？

「貴方って本当にあれね。普通は余計なことなんて言わないのだけれども」

「……俺は別に本当のことを言ったまでだよ。お前が本気で聞いてきたから、俺もそれに答えたまで」

ま、いいわ。と呟いて幽香は再び紅茶を口に含んだ。

「貴方、変わったわね」

「そうか？そうは思えんのだが」

幽香は頷く。

「昔に比べて随分と垢が抜けたというか……少しクールになった」

「別にまともな会話なんてしてないのにな」

「分かるのよ。貴方だって私が昔と比べてどう違うかわかるでしょう？」

問われて思わず頷いた。

やっぱり分かっってしまうものだな。

「昔と比べてどう？」

「幽香が？」

もちろんよ、と頷き微笑む。昔と比べてねー。あの時は戦ってしかないし。なんとも言えないが。

「大人っぽくなった」

そういうとはあ？と口をあんぐりと広げて幽香は呟いた。

「大人っぽくなった？私か？」

「ああ、昔はお前、子供っぽかったもんなー」

なんだか、心の余裕があるというか、なんというか。

「俺にとつちや、幽香はまだまだ子供だけどねえ」

そういうと、幽香はしばらくした後、大声で笑いをあげた。いきなり笑い出した幽香に風間は顔を顰める。大丈夫か？ついにおかしくなったか。

「違うわよ。ふふふ……『子供』ねえ、私をそういうのは貴方だけよ。ふふっ」

「なんだよ、実際お前とは千年近くも年が違うし。それにまだまだ咲いていない蕾だぜ俺からしたら」

「ふふ……貴方からしたらねえ。いったいこの幻想郷で私にそう言えるのは何人になるかしら」

しばらく、しきりに笑った後、ニヤリと幽香が笑い少しシャツをはだけた。そうしてスツと近づいて耳元で囁く。

「ねえ……これでも、私は子供に見えるかしらあ……」

甘い。普段の彼女から想像もできない甘い声が耳元に囁かれる。視野が落とされ豊富な胸が目に入り、はだけた服から白く艶のある肌が見える。

「大介え……私は子供かしらあ？」

思わず手を上に上げた。その手が幽香の体に近づき、やがてひとつの形を作る。

……えい。

「きゃあ!？」

風間特性のデコピンが入って思わず額を押さえながら幽香はイスに座った。

「おふざけはほどほどにね」

「……つまらない奴」

まったく、冗談も過ぎるものがあっただな。

何もなかったように紅茶を口に運ぶ幽香に風間はため息を吐く。

「それで、幻想郷はとりあえず回ったのかしら？」

「ん？まあ、一応有名所は挨拶は終えたかな」

そう言うところとちょっと一間が開いた。何か思うことがあるのか、少し考えたそぶりを見せてやがて口を開く。

「そう、だったら私と」

「ハロハローこんにちわ。お2人さん」

そこへ、1つのスキマが開いて奴が現れる。

紫の中華を思わせる服に金髪の髪。風間の封印を解いた張本人。

八雲紫である。

「おう、八雲。どうした」

「……」

「あら、幽香。そんな顔してどうしたの？」

ニヤけ顔で笑って八雲は幽香にそう尋ねた。

なんでもないわ、と呟いて紅茶を注いで口に運ぶ。ちょっと不機嫌そうだ。

そりゃ、お前人の家にいきなり入ってきたらだれだって嫌だろ  
う。

「まあいいわ。それで大介？挨拶周りは終えたのかしら？」

「おう」

名前で呼んだことには突っ込まず、風間はそう答えた。

「そう、幽香にも挨拶は終えた見たいだし、ちょっときて貰うわ  
」



「はあ？何処へ」

「幻想郷の境界　正確には私たちの家ってところかしら」

その言葉に、幽香に待ったが掛かった。

「ちょ、ちょっと今大介は私とお茶を　」

「あら、もう終えたのではなくて？それよりも彼には直ちに来てほしいのよ」

「何を勝手に　」

おう、なんだか雰囲気が悪いぞ。

「幽香、しょうもねえから悪いけどいくよ。また今度続きをしようぜ」

そう、風間が口を開いて立ち上がると、幽香は何か一瞬言いたそうに口を開いたが、しぶしぶという形で頷いた。

「それじゃ決定ね」

パツとスキマが開く。

……まったく、この人は本当に自由というか、なんというか。

「はい、1名様ご案内」

スキマに、飲み込まれる。

22話「お茶会」(後書き)

なんだかなー

## 23話「藍」

八雲藍は八雲紫の式神であり、その実態は九尾の狐である。

妖怪の中でもメジャーで悪の代名詞とも呼ばれるだろう九尾。果てしないほどの妖力を保有し、狐火にはじまり幻術を多数用いる。

最強の妖怪の一人である。

「はあ」

そんな彼女がため息を吐く。今現在。新しい幻想郷の住人を迎えるからと、食事を用意させられているのである。

高等な種族であると自負していた彼女にもはや前まで持っていたプライドは消え失せた。弱っているところを紫の確保されて契約したがやることと言えば雑用のみ。

本気で反逆しようと心見たこともあった。

だが、まるで藍を赤子のように扱い締め上げてみせるのだから紫の実力は図りしれないだろう。

「余計な事は考えないほうがお勧めするわ」

殺気と共にぶつけられた言葉の痛みと重み。 ああ 私はなんて

無力なのかと痛感させられた。

それ以来に、彼女が受け持つ仕事に文句を言わずに今まで行ってきたのだが、それでもやはりため息は出てしまうもので。

「らんしゃまーどうしたのですか？」

心配そうに裾をそっと引っ張る少女が1人。その耳、尻尾で分かると思うが彼女は猫。化け猫である。藍の式神であり、愛すべき子でもある。

実際、マヨヒガで目につけた時から『君にきめた!』と叫んでしまっただけだったのである。

「なんでもないよ。橙」

そう言って笑い、彼女の頭を優しく撫でる。気持ちが良いのか、されるがままに橙は薄く目を閉じる。橙の癒しを堪能した後には血運びを手伝わせて再び料理の手を再開する藍。

「ふー。あらかた終了か」

料理の腕もだいぶ上がった。昔は酷くできなかったというのに、彼女なりに独学でここまで成長したのだ。少し昔を思い出して薄く微笑む。

昔、か。

ふと、思い出す。今でも 最近では特にあいつの顔を思い出す。

黒髪黒瞳。少しボサボサとした髪型であるが、顔立ちはとても整っている。

馬鹿な奴で友人である陰陽師のためにその人生を投げ捨てた妖怪。噂では封印されて祭られているらしいが。

思いふけるようにして、イスに座りひじをつく。

「風間　ね」

別にそれほど深い関係、ではないと思う。確かに彼の家では世話になったがそれもかれも風間に退治されかけたのが原因だ。

「……いかな、暇があれば奴の事を考える。どうかしたものだな」  
別にホの字なわけではない。それは断定できる。だが、あれほど自分に絶対の自信を持っていたのにいざ倒されたのだからショックな以外にもないだろう。

さらに言えば、倒されたのに彼に介護されて元気になったのである。

まったくもってふざけた話だ。

「　　っ、帰ってきたか」

主　　紫の気配を感じて藍は立ち上がった。それともう一つ気配が感じられるがそれが紫の言う新しい住人だろう。

さてはて、一体どういう輩なのか。

主を出迎えようと、中庭　玄関と門を隔てる庭　に出迎えたところ。

「あ

彼女は、出会った。

出会ってしまった。

今、おそらく一番に思っていた。

その人物。

風間大介に　。

「え、な、なぜ……彼、が、いや。奴が、ここに……？」

紫となにやら楽しげに話す彼。ボサボサとした黒い髪。目視175くらいの背に少し、細いように見える体。いまこそ、ジーパンとシャツという現代の服を着ているがそれは間違いなく風間だ。

百年経とうが千年経とうが見間違えるわけではない。

見間違える筈がない。

自分を倒した相手だぞ？自分を助けた相手だぞ？

気がつけば、藍は、歯を強く噛み締め。叫ぶ。

「かざまあ ああああああ！」

「　　っ！？た、玉藻前！？」

その声。千年経っても変わらず。そうして遂に何かがはじけた。

怒り？悲しみ？嬉しさ？懐かしさ？

分からない。どれがどれだか。なにがなんだか。

でも、これだけは言える。

彼は今、間違はなく此処にいる。



八雲の家はちょっとした武家屋敷だった。豪邸にも見えるそれは風間にとって少し懐かしく思える。平安の世では沢山とあったものだ。それは懐かしくなるだろう。

「中に私の式に料理をさせて待たせているわ」

「式？妖怪のお前がか？」

「そ、会ったら貴方はきつと驚くでしょうね」

なに、俺に面識がある奴なのか？

ともかくと、武家屋敷の門を潜り中に入ると玄関に紫と同じく中華系、陰陽の服を着た女性が1人待っていた。

随分と尻尾を持つ女性で、何処か見覚えがあった。

こちらの姿を確認した後、女性は突如として声を上げた。

「かざまあ あああああ！」

「っ！？た、玉藻前！？」

間違いない、玉藻前である。これはまた、随分と懐かしい顔である。いや、それよりも。

殺気。いや、それに混ざる何かを感じとったときにはすでに遅かった。その立派な9本の尻尾でぐるぐる巻きに縛られた。

「ちよっと、藍」

「貴様！よくもまあ、ノコノコと私の前に現れたな！」

紫の言葉を遮るようにして藍が怒鳴る。

……だめだ、風間しか見ていない。

しかしながらここまで彼女が憤怒したのも久しぶりにみた気がする。やはり、一悶着あっただけに思う所があるのか。

……しばらく様子を見ようかしら。

傍観者は達観する。

「おいおい、しばらく振りなのに随分と熱いご歓迎だな。生憎と縛られる趣味はないんだが」

「黙れえ！」

ギリギリと、尻尾が締め付けられて背骨が悲鳴を上げる。

「なぜ、此処にいる貴様は封印されていたはずだ」

「お前のところの主は封印開放してもらってね。この地に案内してもらったわけよ」

「ゆ、紫様が……？」

見ると、紫が頷いて答える。

「本当よ、私が封印を解いたの。ねえ、藍？貴方少々お痛がすぎるわよ。これ以上私の友人を締め上げるなら、私も容赦しないわよ」

ドスが聞いた低い声。思わず藍はうるたえる。尻尾の締め付けが少しだけゆるくなった。

「なあ、玉藻前。お前一体全体なにを怒ってるんだよ。久しぶりに会ったのだからさ、もっと」

「貴様に、貴様に何がわかる！」

怒鳴り声。かんしゃくを起こしたようなそんな悲痛の叫び声と似た声に風間は思わず言葉を切って口を閉ざした。

「あの日、あの時。私を倒した男が、私を助けた男が……！あんな陰陽師の女なんかはその人生を捨てたお前に何が分かるというのだ！」

締め付けが、酷く強くなり。いよいよ風間は肺から息を吐いた。

「藍！」

「妖怪の身でありながら、陰陽師に惚れたか！？惚れたから助けたか！情けないものだな！」

泣き叫ぶようにして声を荒げる藍。その様子に紫は啞然とする。彼女がここまで感情的になり声を荒げるなんて姿。みたこともなかったからだ。

「所詮、人の寿命は短く、伴侶を共にすることなんて叶わない。そんな女のためになぜ自分を捨てられる！あんな屑な陰陽師なんか」

「黙れ」

叫ぶ声を遮って殺気が  
いや声が低く鳴り響く。思わずその殺  
気に紫は自分を抱いた。

瞬間、竜巻が彼を包み込み、尻尾から解かれる。

暴風。

それは間違いなく暴風だ。まるで嵐を包んでいるのかのような彼の  
その姿に紫は一種の寒気を覚える。

「八雲。手、出すなよ」

「はっ、いいだろう。今こそあの屈辱を返す」

その言葉は最後まで口にできず。気がつけば体が全力で逃げてい  
た。

それは長年の条件反射。もはや本能。

距離をとってみるといつの間にか自分が立っていた場所に彼がいる。そこには割れた地面が。

藍もまた、寒気を覚える。

「くっ  
」

スペルカードを取り出し、宣言しようとして。

「あ  
」

気がつけば地に倒れていた。元々。この身で動くようになってから弾幕ごっこになれたためか接近戦に反応できなかった。

めまぐるしいようなスピード。それこそ、紅魔館の門番でなければ即席の反応なんてできやしない。よって藍は地に倒れ、風間はそれを見下ろす形となった。

やられる。

そう思うが、それに反してゆっくりと彼は彼女に話しかけた。

「なあ、玉藻前。俺はな、清明が好きだ」

「  
」

「伴侶とか、そういうのじゃなくて。ただ純粹に清明が好きなんだ。不器用で、どこか抜けててさ友のためにだって戦える。そんなあいつが好きなんだ」

そう優しく語り掛ける風間。先ほどまで殺気をぶちまけたとは到底思えない。

「友達として、親友として、あいつが本当に好きだった。そんなあいつが困っているから、助けたいと思った。それじゃあ　ダメなのか？」

痛みも何もない。ただ倒れただけ。ここからいくらでも反撃できる。

それでも体は動かなかった。

何か吹っ切れたように、体を地に預けたまま藍は動かない。

「すまなかった」

長い沈黙の後、やがて口を開き、開口一番にそう誤った。それに風間は微笑み頷く。

「ほら、立てるか」

手を差し出し、それに藍は答える。その手を握り、立ち上がる。

自分だけ、怒って、かんしゃく起こして。本当に何をやっているのか、私は。

なんだか恥ずかしくなって頬を掻く。

彼女にはもやもやとしたものがあつた。封印される彼の言葉。可笑しいことはなにもない。それでも彼女は妖怪としてのプライドがあつた。



人とは儚い存在である。寿命も短い、すぐ死ぬ。だからこの幻想郷にくるまで、人間に偏見を持っていた。だが人里に行き人と接し人という存在を理解し始めて、藍は自分を悔いた。

この苛立ちは自分へのものだったのかもしれない。

それを喚いて当り散らすのは子供がやることだ。

私は恥ずかしい。

「お前、大丈夫か。顔赤いぞ」

「う、うるさいっ！こつち見るな馬鹿者！」

えー。

なんだかさつきから理不尽な扱いである。

「藍？気が済んだ？」

声を掛けられて紫の方を向いた。扇を口元に当てて微笑む彼女に藍は腰を折って頭を下げる。

「はい、申し訳ありませんでした。紫様」

「そう、貴方最近少し変だったから。大丈夫ならいいわ」

その言葉に藍は驚く。確かに、最近妙に苛立っていたのは自分でもわかる。でも、紫や橙の前ではいつも通りに振舞ってきたはずだ。

「自分の式の状態くらい、把握しなくて何が主よ」

そう言って愉快そうに笑った。

「紫様……」

「さあ、浸ってないで飯よ飯。貴方たちも食事前の運動でおなかですいたでしょう」

中に入った入った、と。まるで母のような言葉を出しながら陽気に家に入っていく。

それに続くようにして歩く。2人。なんだか、先ほどのような事があつたからか、風間は彼女の背に語りかける。

「玉藻前」

「藍だ」

えっ？と風間は向く。

「私はもう玉藻前なんかではない。八雲紫様の式。八雲藍だ。これから私の事を藍と呼べ」

振り返り、極上の笑みで藍はそう口にした。

「  
ああ。分かったよ。  
藍

「ああ、そうそう。庭の修復。貴方が行って頂戴」

「……おねえ!?!」

### 23話「藍」(後書き)

なんだか、展開が最近速いと思うんで、これからじっくりとゆっく  
りと行きたいと思います。

## 24話「湖上の氷妖精」

「まあ、今日はこんな所か」

挨拶回りが終わった次の日には、風間は運び屋としての仕事を再開していた。と、言っても大抵が人里から離れた場所への食料の輸送が多いために仕事自体はすぐに終わる。

一番忙しい時でも3時にはその仕事を終えてしまうのだから、このうえなく楽だ。

さて、今日も特に忙しくはなく、むしろ仕事のあとの方が忙しい。

「どうも〜風間屋です」

「あら、風間さん。いらっしやい」

「……どうした、やけに上機嫌じゃないか」

博麗神社への食料輸送及びパシリ。これが仕事が終わった後の日課に入っている。元々、博麗神社の巫女。博麗霊夢によってこの運搬業として働いてはどうかと案が出たのだ。

「あら、そう見える?」

「……否定しないってことは良いことがあった、と」

いつものように食料を運び、風間はなぜが機嫌が良い霊夢に首をかしげていた。

大抵、この神社の巫女　　霊夢は機嫌がよくない。

ただの無愛想であるが、貧困なためによりいつそう機嫌が悪いように見える。

神社に参拝客がないために金が入らない。故に貧困で食料が無く、さらに意味もなく月に何回か宴会を開かされる。あまり良いことが起こらない彼女であるからして、機嫌が良い時は　　こうして表情に出すほど良い時は滅多にない。

と、いつでも最近では風間がお賽銭箱に大量のお金をつぎ込んだ挙句、食料まで『持ってきてくれる』のだ。食料には困らなくなったのも事実である。

「ふふ〜ん。見なさい!これを!」

バツと、お賽銭箱を指差す。まさか、と風間はお賽銭箱に近づき、そうして箱に触れて少しだけ持ち上げてみた。

ズシリと重たい感覚が体を襲い、驚き、信じられないような目で霊夢を見た。

「お、おお、お金が入っている……だと……!?」

ドヤ。

そんな顔と共に勝ち誇った顔をする彼女。

「馬鹿な!こんな辺境の神社に、なんの神を信仰しているか巫女すらもわからない巫山戯た神社に、参拝客が!?それにこのお賽銭!俺が『やってしまった』お金の比じゃないだ!」

「ふふん。なんでも言いなさい。今の私は寛大な心を携えているのよ」

「……まさか、こつも立て続けに異変が起こるとは……恐るべし、幻想郷……!」

「……ちよつと、人の神社に金が入ってきたからって異変扱いしないでくれる?」

いや、実際異変レベルだろ。

まだ幻想郷に来て間もない風間でもわかる。

博麗神社にお賽銭が入ることは、まず間違いなく高確率でない。

なにせ信仰する神が巫女すら何を祭っているのかもわからないという巫山戯た神社だ。しかも、神である風間が入ってもなんの嫌な感覚もない。

さらに、霊夢のその公平な態度。妖怪だろうが人間だろうが変わ



らないその性格に好意を抱く妖怪も少なくない。

人里の言葉を借りるならこうだ。

『妖怪神社』と……。

「んで、真面目にどうしたんだ、これ」

「実は言つと、私にもわからないのよ。今朝起きたらこうなつてた」

ふむ。と、いうことは深夜に訪れて金をドブに捨てていったと。

「だれが溝よ」

「実際、参拝にしたつて、神社参りには多すぎる金だよ。信仰つていうのは要は心だから、神様も信仰心を一番大事にする。ぶっちゃけお賽銭なんて形だけのものなんだよ」

それこそ、金をいっぱいあれば願いが叶うなんてことはまずない。

つまり、溝に捨てたようなものだ。

「ま、いいじゃない。金はあるにこしたことはないわ。誰がどうしようつと、『もうこの金は私の物』なのよ」

ハハ……相変わらずだな……。

まあ、本人が気にしないというのなら、別に良いが。

「まあ、取りあず。俺の仕事は終わったからな、行くよ」

「あら、お茶ぐらいだすけど?」

「いや、遠慮しておくわ。それにそろそろ）・・・（あいつがかえってきそうなんでね」

あいつ?そろそろ?

博麗が首をかしげたその時。

「師匠おおおおおおおおお!」

そらきた、と呟いて空から急降下に飛来する黒い何かを見上げた。

「な、なにあれ!?!」

黒い物体。ちょうど太陽と重なって黒く見えるそれは一直線に2人をめがけてきた。

「陰符『妖怪結界』」

護符の1つ。一応スペルカードに則って宣言しているが、晴明の札の1つだ。最近では札をベースに神力を流せば似非陰陽道を扱えるようになった。

『ふぎや!』

声にだして黒い物体が横に離れる。地面を転がり、3メートル程離れる。しばらく動かなくなっていたが、急に立ち上がり風間に詰りめ寄る。

「師匠おおおおおおお！」

「ぐふう……よう、射命丸。仕事はもう終わったのか？」

タツクルのような抱きつきにいきを漏らすがなんとか口にする。

「はい！もうバツチリと終えて、仕事を押し付けた馬鹿共にもお仕置きしてきました！」

「そ、そうか……それはご苦労」

笑顔を浮かべる射命丸に対して霊夢はため息を1つ吐いて1人納得したように頷きさつさと神社の縁側に戻ってお茶を飲み始めた。

「師匠！今日こそ修行を！」

「あー別にいいが。寄るところがあるぜ」

「何処でしょう？」

「紅魔館だ」

風間が行っている日課の1つ。それが紅魔館の門番との出稽古であつた。

インファイターである両者は紅魔館の遭遇以来、フランやレミリアなどと顔を合わせる他に美鈴との手合わせを行うようになった。

この幻想郷において、恐らく風間を差し置いても肉弾戦については美鈴が一番である。

風間はいくまでも2千年以上の経験に基づいた、『勝ち』の接近戦を行うが、それに対して美鈴は実践経験こそこの幻想郷においては風間に比べたら少ないが『技』の技量が半端ではない。

八卦掌にばかり、中国拳法においての殺人拳や太極拳の動きまでその拳法の技すべてが彼女の体に詰まっている。

曲がりなりににも独自の拳法を繰り広げてきた風間の土台はそうそうに吹き飛び、こうして表では『手合わせ』などとほざいているが、ちやっかりと美鈴の技を盗んでいるのである。

その代わりに、と言っては自己解決であるが風間は美鈴に戦いの『勝ち方』を教えている。

どうしても弾幕ごっこでは弱者の部類に入ってしまう美鈴は彼女曰く弾幕の『苦手意識』からある。なにせ、弾幕ごっこは頭で『遠距離戦』がどうしても主流であると認識してしまうからだ。

肉弾戦は最強である彼女を勝たせる方法。つまりは、肉弾戦の持ち込み方を教えているのだ。

そんなわけで紅魔館に向かっているのだが。

「さあ、あたいと勝負よ！」

「……誰ぞ？」

変な奴に絡まれました。

紅魔館に行く道中。その湖で青いワンピースを着た幼い少女。見た目10歳くらいの少女がいきなり勝負を挑んできたのだ。

見たところ妖精のようだが。

「ああ、師匠。彼女はチルノと言って氷の妖精です。馬鹿なので皆親しみを込めて『？』と呼んでいます」

「へえー。……え、ま、まるきゆう?」

なんだがよくわからないが、どうやら氷の妖精らしい。

「あたいはさいきょーなんだから、ね!あたいの縄張りにきたやつは皆ギツタンギタンだ!」

「ま、まあ取り敢えず。やるなら相手するけど」

「いえ、師匠がでなくても、ここは私が」

その言葉に風間は首を振った。

「んにゃ、ちょうどウォーミングアップにはなるだろうし。俺がやるよ」

「ふふーん。今日のあたいを舐めないほうがいいよ。なんたって、ひっしょー方法を教えてもらったんだからねっ!」

何か自信がありげに腕を組んで勝ち誇った顔をするチルノ。

「んじゃ、いくよ」

「先手必勝!」

掛け声と共にチルノが突っ込んでくる。

「氷符『アイシクルフォール』!」

スperlカードの宣言と共に冷気がチルノの周りに集まる。冷気の束。それがチルノの腕に集まり螺旋を描いて鋭利に尖らす。

一点を集中としたその冷気の束。恐らく下手な刃物より切れるだろう、その氷柱がはじけ飛ぶ。

「突風『風槍の五月雨』」

宣言するのは槍。飛来する氷柱を相殺 いやそれ以上の物量がチルノ目がけて飛ぶ。相殺した分は消滅したが、それ以上の個数がチルノを貫かんと迫る。

だが。

槍の間、それを踊るように空中でステップ（……）してそれらを紙一重で避けた。

「なっ　！？」

驚きの声を上げたのは射命丸であるが風間も声こそあげないが目を見開く。

あの、避け方は。

「氷符『コールドスプリングラー』」

寒気を通り過ぎるくらいな冷気が集まり、塊を作る。超低温。それが吹出し瞬時に槍となる。

避け終えて、なおも接近しながらその手に槍を形成したチルノ。

「突風『プラスチックピア』」

暴風。それらを精密に操り、ひとつの槍　薙刀を作り上げる。

チルノの槍と風間の薙刀が交差し、削り取るような風の薙刀と、切り裂くような氷の槍が音を立てる。

「インファイト接近戦!?!」

射命丸の驚きの声も、今は耳に入らない。

こいつ　やっぱり。

「たああああああ!」

その体には似合わない大きな槍を振るう。それを難なく避けて下段から体を捻らせて斬り上げた。

氷の槍が音を立てて崩れる。だが、すぐに冷気が集まった。

「せい!」

「　　つと」

その手には剣が。氷でできた剣が無茶苦茶に振り回されて風間が顔を歪ませる。

その剣さばきは御世辞にも良いとは言えず、むしろ素人のそれに似ていた。



リーチの差を埋めることなくただ、闇雲に突撃してくるチルノ。それをいなしながら風間は考えた。

さっきの動きといい、この妖力や冷気の集め方と言い、妖精にしては出来過ぎるぐらい上手い。さらに言えば、射命丸の言う通りの妖精なら彼女の能力の扱い方は尋常ではないだろう。

おそらくは『冷気を扱う程度の能力』か『冷気を操る程度の能力』か。どちらにせよ、自然系の能力をもつものだろう。

自然系を操るのは難しい。それこそ、一瞬にして個体を形成したりまた集めて圧縮したりとその技量は何十年かけてようやく第一歩を踏み出すほどだ。

チルノと戦っている限り、自然系を操る者の中で確実に上位に食い込むほどであろう。

だが、いや。そうか。

彼女が妖精だからこそ、これほどまで冷気を手足のように扱えるのか。

「でも」

反転、差を開いて剣の間合い外から打ち込む。

「っ！」

剣でなんとか防いだが吹き飛ばされた。湖を3度ほど跳ねてチル

ノは体制を整える。

「素人のそれじゃ、俺には勝てないよ」

風符『風伯の吐息』

風で形成された弾幕が吹雪く。

それらはチルノを巻き込み、湖に水柱を立てた。

## 25話「戦いの勝ち方」

「ん……？」

「おい、起きろ」

気絶していたチルノが起き上がり、周りを見渡す。

「あれ？あたいは……？」

少し混乱しているのか、頭に手を当てて、やがて風間が視野に入った時声を上げる。

「お前！すごいな！さいきよーのあたいを倒すなんて、なかなかできるやつだ！」

「チルノ、と言ったか。お前、最近誰かに戦い方教わったか？」

いきなりの質問に、チルノは首をかしげるがやがて思い当たって頷く。

「紅魔館のもんばんに弾幕の避け方を教わった！」

やっぱり。と風間は頷く。

チルノのあの避け方。

空中でステップして避け方は風間が美鈴に教えたものだった。

本来、弾幕ごっこは空中戦での戦いが多い。それに対して美鈴は地を軸に動く接近戦を得意とする。故に、彼女が弾幕ごっこでの戦いを苦手意識を抱くのは仕方がないことだ。

避け方も空を飛ぶより地を蹴って避けるのが得意なのである。

だから、風間は美鈴に空中でも地上と同じように動ける方法を教えた。

彼女の能力は気を操る程度の能力である。生き物すべてがもつ『気』という力。魔力、妖力、神力と並ぶ力だ。

その力を利用して、空中に気を放ち、それを足場にするような形を作る。それが風間が彼女に教えたこと。

地面と同じように体重を支えて踏み込むこともできるし、跳躍することもできる。

チルノが教わった、ということは冷気を足場としたのだろう。

ただ、この避け方はあくまでも『接近戦用』であって、ただ避けるためのものではない。ましてや細かいステップを踏めるような者でないという意味がない。

それなのに、チルノはやってみせた。

これはもう才能があると見て間違いない。

それに。

「なあ、チルノ。ちょっと質問なんだけど、遠くから行って安全に時間を掛けて行くのと危険だけど真っ直ぐ行って時間をかけずにいくの、どっちがいい？」

「真っ直ぐ!」

射命丸が言ったように恐らく、チルノは馬鹿ではない。馬鹿は馬鹿でも単純馬鹿なのである。

それなりに思考はできるし、冷気を細かく正確に操れるほどの集中力と才能を持っているのだ。これがただの馬鹿にできるわけがない。

「アニキ!これからアニキって呼んでいい!」

へ？

突然の言葉に戸惑い、なにやら指さしてこちらを見ているので、アニキとは風間のことだろう。

「あたいを舎弟にしてください！」

「はあああああ！？」

今まで黙っていた射命丸が声を上げた。

舎弟……？

ああ、ようは弟子にしてくれってことか？

「貴方のような妖精風情が師匠の弟子なんて良いわけないでしょうが！」

「なんだよ！別にいいじゃん！」

何か求めるように射命丸の視線がこちらに向けられる。

「なんで俺なんだ？美鈴に教わってるんだろ？」

「美鈴から教わった避け方は、風を操ってる強い人に教わって言うてたから、もしかしてアニキじゃないかと思って」

なるほどね……。

「ま、そういうことならいいぜ。他にも教えるやつがいて細かいは見れないけど、俺なんかでよければ教えることは教えよう」

「し、師匠」

その言葉に射命丸は何か目をうるわせて訴えかけているが、それに反してチルノはガッツポーズである。

「これからよろしくね！アニキ！」

「よう美鈴。お邪魔するぜ」

「あ、風間さん。こんにちわです」

さて、紅魔館である。

日課の1つである美鈴との手合わせをするためにやってきたのだが。

「いいですか！言っておきますけど、師匠の弟子の中で私が一番偉いんですからね！そこらへんわきまえてくださいよ！」

なにやら射命丸が不機嫌な様子である。チルノを弟子にとったことや、美鈴との手合わせの中で戦い方を教えているという事になにやら不満をいだいているらしい。

風間としては弟子というのは射命丸だけで、チルノ、美鈴はただ戦い方や手合わせを行うだけなのだ。

「……？よくわかりませんが、今日は射命丸さんとチルノちゃんまで一緒なのですね」

「ああ、途中いろいろあつてな。ちなみに、射命丸は俺の弟子だ」

「そうですね！師匠の自慢の弟子ですよ」



はい、そこうるさい。

なんとしても自分が一番だと強調したらしい。

「早速だけど、始めたいんだけどさ。美鈴には悪いんだけど。成り行きでこの2人にも戦い方を教えることになっちゃってさ。さすがに3人相手もキツイんで1人1人での手合わせでいいかな？」

「あ、はい。私は構いません。風間さんにはお世話になっています」

「んじゃ、射命丸と美鈴は手合わせしてくれるか？ルールは1本先取。相手を無効化した方の勝ちだ」

「なんで師匠とできないんですか！」

案の定、射命丸が不満を漏らした。

「……言うておくけど、現時点では確実に射命丸より美鈴の方が強いからな」

なっ　！？

何か絶句するような目をこちらに向けて、やがて視線が美鈴に向けられる。美鈴はなにか照れたように頬を掻いた。

「恐縮です」

何か言いかけて、声は出さずぱくぱくと口を閉じたり開いたりしたが、やがて息を吐いて「わかりました」とつぶやいた。

「すぐに私のほうが優れていることを師匠にお見せいたしましょう」

ピン、と空気が張り詰めた。

「始め！」

風間の声と共に空気が歪む。風が圧縮されて射命丸が動く。間を取って大量の弾幕が美鈴を襲う。

地に叩きつけるような弾幕の雨に美鈴はまるで舞うように避ける。地を滑らせ細かいステップを刻み長く紅い髪を揺らす。

彼女の研ぎ澄ませた神経が体中の筋肉を弾けさせて気が充満する。

そして、跳躍した。

空中にいる射命丸を捉えて動く。

美鈴が近接戦闘に得意だということを知っているのか、そのまま空中を飛んで距離をとりながら弾幕を張る。

だが、纏わり付くかのような接近が距離を離さない。

「虎砲」

その距離が十分に達した時、空中中でまるで地にいるかのように踏ん張り、掌底を打ち込む。その速さ。射命丸が慌てて回避行動を取りなんとかその掌底を避けきる。

だが、肘を畳み、体を回転させて一蹴。

美鈴の右足が脇腹に食い込んだ。

「ぐっ  
」

息を漏らし、地につくかどうかのギリギリの所で反転し、体勢を整えた。

「せい！」

扇を振って風の刃を形成し、それを美鈴に振るう。

「黄震脚」

空中で足を下へ打ちつけて振動を起しその刃を相殺させた。

ふむ。随分とうまくなったものだ。

風間は思わず唸る。

旋符「紅葉扇風」

スペルを宣言し、紅葉のような弾幕が風に載せられて繰り広げられる。弾幕の密度も濃いその弾幕を、美鈴は一度息を整えてすぐさま姿勢を低くし、空中でステップする。

一瞬一瞬が消えては現れる。

瞬動と呼ばれる近接戦闘の技の1つで気を足にためて弾き、瞬発的な移動を可能とする技だ。風間でいうところの風脚だろう。

ただし、この技は本来真っ直ぐしか移動できない。空中で姿勢を変えることができないからだ。

だが、美鈴はそれができる。元々地上で開発された技であるのに、それを空中でやるのだ。空中で足をつける（・・・）事ができるので、当たり前と言っては当たり前であるが。

「撃符『大鵬拳』」

虹色の気が美鈴の拳に集まる。空気の流れが一変し、美鈴の中の気以外の気が集まる。空気、森、生き物すべてが発散し、ただよう気。それらが集められて濃い気を残す。その容量に射命丸は顔を歪ませて気を引き締めた。

あれは　っ！

「岐符『サルタクロス』」

なおも接近する美鈴に新たにスペルを上乗せする。さらに濃い弾幕が一気に散る。

「だあああああ！」

美鈴の拳がその弾幕に打ち付けられて射命丸の弾幕が一瞬で散った。妖力の弾幕と気の拳がぶつかりり、煙を残して射命丸の視野を覆い隠す。

「しま　」

思わずその煙に目を隠し、

そうして、

煙が晴れた時、瞬動を使った美鈴が目の前に現れた。

「私の、勝ちですね」

美鈴の掌底が目の前で寸前で止まり、美鈴が少し微笑み口を開いた。

「勝負あり！」

風間の声が響いた。



「……」

射命丸は自分が負けた事を疑った。彼女とて、伊達に長く生きたわけではない。妖怪の山の天狗の中　いや、この幻想郷の中でさえ自分の力は少なくともあの吸血鬼、レミリア・スカーレットにさえ引けは取らないだろうと自負していた。

それが、いつも魔理沙にやられている紅魔館の門番ごときにやられるなどは夢にも思わなかった。

啞然、そして近寄ってくる自分の師　風間、目を向けた。

あれだけ、大口を叩いた結果がこれだ。何を言われるか、身構えてその言葉を待つ。

「今の戦い、負けた原因わかるか？」

原因、負けた原因。

思いつかず、射命丸は首を振る。射命丸としては空中戦は大の得意である。その神速を活かして速さで相手を攪乱し、そうして濃い弾幕を張る。

だが、美鈴はそれを許さなかった。

貼りつくように接近し、弾幕も難なく避ける。気がつけばこっちのペースは崩れていた。

「お前が驕っていたこともあるが　まず最初に力の使い方だな」

「力の使い方……？」

その言語に射命丸は首をかしげた。

「わ、私の風の使い方が何か間違っていたでしょうか」

「うーん。風の使い方って言うか、力に対しての風の使い方っていのかな……？」

言っている意味がわからずに射命丸はまたもや首を傾げる。

「あー。例えばだ」

風が身振り手振りで説明をし始める。

「美鈴なんかそうなんだけど、近接戦闘者っていうのは、1点に力を集める傾向があるんだ。射命丸は近中距離での散った弾幕で速さで攪乱するタイプだろ？そういうったタイプは1点の力に極端に弱いんだ散るってことは力がその分分散する。どれかがかすったら致命傷になるような攻撃でもない限り、下手に動くより真っ直ぐ突っ切ったほうが避けやすい。まあ、俺や美鈴なんかは瞬動使えるから逆に攪乱できるけど」

まあ、それは置いておいてだ。

「1点に集める力に対して、何時までも力を分散させていたら、逆に危ない。接近する者に対して物量で対抗しようとはせずに密度と同じく1点の力で対応するべきなんだ」



「1点ですか……」

「ああ、俺で言うところの言えは『螺旋丸』が一番イメージしやすいだろう」

あれは、風の塊みたいなものだからな。

「もつとも、近接格闘者にこちらも1点に集めたらそりゃ、向こうのほうがプロだから負けるだろう。だから、単純になっちゃいけない。時にばらけ、時に集めるってところか」

逆に弾幕の力を強くして1個1個重くすることも必要だ。近接格闘者にはとにかく近づけさせない。自分の間合いを見極めて、もし接近されたら1点に集める。

「これが『戦い方』ってものだ」

そう言っつて風間は射命丸の頭に手を載せた。

「弾幕ごっこっていうのは、基本弾幕の撃ち合いだからな、俺らみたいな『異端』相手の戦い方は知らなくて当然だ。でも、覚えて置いて損はないよ」

「は、はい！」

「さて、改めてだ。お前たちには特に自分の能力の扱い方を身につけてもらいたい。と、言ってもただ能力を使って弾幕を張るとか、そういうのではない」

射命丸とチルノは首をかしげた。

「どつという意味さー」

チルノが声に上げる。

「お前たちの能力は何だ？」

その質問に3人は答える。

「冷気をあやつるていどの能力？」

「風を操る程度の能力ですね」

「気を操る程度の能力です」

「それが共通する事とはなんだ？」

その言葉に3人は顔を見合わせる。共通する？冷気と風と気……？ここに何か共通する点などあるのだろうか。

冷気と風ならまだわかるかもしれない。風は冷気を運ぶ。そつい

う関連性がある。

だが、気はどうだろうか？

考える3人だが、やがて何か思い当たったのか、美鈴が静かに口を開いた。

「自然、ですかね」

「そう、その通りだ」

その言葉に射命丸は目を見開いた。

「自然？なんでですか？冷気や風ならわかりますけど、気は力の一部なんじゃないんですか？」

「いや、気も立派な自然の一部だよ」

そう言って風間は人差し指を立てた。

「気って言うのは妖力、神力、霊力と違ってどの生物、植物でも確実に持っているものなんだ。確実に持っているのは『物』だけ。この流れている空気だって気を漂わせているものなんだ」

「で、ここからが重要。」

「能力を持っている者は多々いるけど、その中で自然を操る能力って言うのは、一番汎用性が高くて難しいと、俺は推測している」

「難しい、ですか」

言葉を復唱する射命丸に風間は頷いた。

「生み出すのではなく、操る事はかなり難しい。俺だって最初からこんな風に操っているかと言われるればNOだ。確実に十年単位は掛かった」

お前たちはいくつくらい掛かった？と風間は尋ねた。

「私は風を完璧に操る事ができたのは200年くらいですかねえ、それ以降は何も意識しないでできましたから」

「私は今の状態になるまで500年掛かりました」

やはり、100年単位は必須か。

風間の場合卑弥呼に鍛えられた期間があつたので数十年で出来たが。

「ん〜アタイはよく覚えてないけど、生まれた時からできただけだな」

「「え？」」

美鈴と射命丸は驚きに満ち溢れた表情をチルノに向けて、逆に風間は何処か納得したような顔で頷いた。

「ちょ、ちょっと。生まれた時からそんな風に操れるわけが」

「いや、チルノならできてなんらおかしくないだろうね」

射命丸が何か不服そうに、こちらを見る。

「生まれた時から冷気を完全に制御出来たなんて、そんな話」

「チルノならできるんだって」

頭を搔いて風間は説明する。

「チルノは、妖精だ。おそらくは生まれた時からあの湖上に居るんだろうよ。そして、生まれたその日から冷気を操ったって不思議じゃない。そりゃ、妖精の中『では』おかしいけど、妖精『だからこそ』できるんだ」

妖精っていうのは、自然から生まれた生き物である。それ自体が自然と同じ。いくら体が吹き飛ばされようがすぐに自然から再生されるだろう。

だから、妖精というのは厳密には死なない。

彼女自身が自然だからこそ、冷気をまるで最初から手足のように操ることができる。

ある意味、風間と同じく操れるだろう。

それに、彼女は少々特殊である。

妖精にしては力を持ち、考える力も話す力もある。妖精とは単純な生き物であるから言われた事に対して深く読み取るうとも、感情というものがない。

言っではなんだが、ロボットのそれに近い感覚だろう。

だがチルノは違う。

「お前らかなり強い。でも、俺に言わせてみれば、それは雑魚妖怪と比べての話だ。永林、妹紅、輝夜、八雲、幽香、フラン。ましてや神奈子、諏訪子クラスに比べたら虫けらみたいなものだよ」

「む、虫けらですか」

何を今更と肩をすくめた。

「当たり前だろ、妹紅や輝夜、それと永林は死なないし、幽香は戦闘狂で恐ろしく戦いの勝ち方つてもんを知ってる。フランの能力は化物じみてるし、神奈子、諏訪子は俺とは比べ物にもならない神だし。八雲に至っては あれはもう、チートだよ。誰か勝ってみろって話だ」

その他にも霊夢や魔理沙、咲夜などがいるが彼女らは人間である。故に限界というものが存在するから例外だ。

妖怪は正直やるうと思えば足がもげようが、手が千切れようが動き回れる。

「でも、そんな化物とタメ張れる技がある。それを教わってみたいとは思わないか？」

ニヒルに笑って見せて、風間は3人を見る。

「それって、つまりさいきょーになれるってこと？」

「おうよ、一時的だけだな」

この幻想郷の事だ、いつ異変が起こるかわからない。異変が起きた時、いつか化物クラスと戦うこともあるだろう。

そうした時、そういった技があるといろいろ便利だからな。

「で、どうする？正直、悪いけどお前らに教えるのは暇つぶし程度にしか考えてないんだ」

そう言っつて3人を見渡す。

「習得できるかも、怪しい高度な技だ。どうする？やるか？」

風間の言葉に3人は頷いた。

25話「戦いの勝ち方」(後書き)

感想等は落ち着いたら。



## 異変の前触れ（前書き）

これから、オリジナル異変の一章です。

## 異変の前触れ

異変。幻想郷の異変というものは、博麗霊夢が動くことでその事柄が完成する。

幻想郷全体に及ぶ一種の事件。博麗霊夢が動けば異変とし扱われて、迅速な解決が行われる。異変を起こした者は様々。

支配しようとした、壊そうと思った、封印を解こうと思った。

物騒な考えから大規模な異変へとつなげる者も居れば。

興味を持った、暇だった。

などと巫山戯た考えで異変を起こすものもいる。

それが幻想郷であり、それが異変というものだ。

今日のこの日。

「あら お嬢様のお気に入りのカップが無いわ……」

小さなことから異変の芽は起ころ。

「カップが無い？」

友人の相談に風間が声を上げた。

ここは紅魔館。

風神　風間大介が行う1日の日課の中に紅魔館でお茶を楽しむというものがある。美鈴、チルノ、そして射命丸との修行の後に夜遅くに咲夜が入れる紅茶を飲むのが習慣なのだ。

十六夜咲夜　完璧で瀟洒なメイドと一緒に夜の紅茶を楽しむような事になった切っ掛けがあるのだが、そこはまた何処かの話で。

それはともかく。

毎日の夜にバルコニーにて2人で世間話、愚痴などを肴に飲む紅茶の場でお嬢様　レミア・スカーレットが気に入っているコップが無くなり、えらくレミアがショックを受けていることを咲夜は話した。

少し考えて、風間は口を開く。

「なんでまた、カップなんかで」

まず最初に風間はレミアがそのコップを拘る理由を問うた。別にそのカップ以外でもよいのでは？と第三者からの率直な意見を友人に述べた。

何処か失礼な言葉かもしれないが、咲夜は凜として答える。

「妹様が初めてお嬢様に差し上げたプレゼントだったのよ」

なるほど　と、風間は紅茶を口に含む。

相変わらず舌を巻くような味であるがそれはともかく。

「妹様は笑って『良い』と言ってくれたのだけれども、お嬢様としてはショックだったみたいで　」

フランこと、フランドール・スカーレットは情緒不安定でその狂

気に飲まれ破壊行動を繰り返す狂気の吸血鬼であった。

それを風間が神の力でなんとかして以来、普通の女の子相当の感情をだして常識が出てきた。故に、フランとしてはなんとも思わなかったのだろう。

物とはいつか壊れ、または紛失するものだ。

「カップが無くなったのは私の管理不足だわ。お嬢様になんと申し上げて良いか」

珍しく、顔に影を差してため息を付く咲夜。

詳しく聞くと、もとにあった場所からそれが紛失し、慌てて紅魔館中をさがすも結局見つからなかったという。

「お嬢様も私のせいではないと、言ってくれたけど。やっぱり気になるようです」

彼女自身も紅魔館だけではなく、誰かに盗られたのではないかと探しているようだ。

「カップねえ……」

呟いて紅茶を含み。風間はしばらく味を楽しんだ後に口を開いた。

「今、幻想郷であらゆる物が無くなっているの、知ってるか？」

その言葉に咲夜が目を見張る。

「10日前にも、幽香の育てていた花が花瓶ごとが無くなったらしい」

「幽香 風見幽香ね？」

頷く。

当然、修羅のごとく怒り狂ったらしいが。

止めに行った風間としては苦いものである。

「5日前には妹紅の服が無くなって」

計5着くらい持っていたから大丈夫だったらしいが。てか、同じ服5着って。

この服が私って感じだろうか？

そう言われて思わず頷いたのは無理もないことだろうが。

「そして今日。レミリアのカップが無くなった。果てしてこれらすべては偶然か？」

「……異変、なのかしら」

最後の1口をくいと飲みあげて風間は咲夜を見る。月明かりの下、彼女の銀の髪が怪しく光る。

「ああ、多分。俺の予想だとこの日の5日後。誰かの大事な物が盗まれるだろうね」

そして、その5日後。博麗神社のお賽銭箱が紛失しことによって、  
博麗の巫女が動く。

異変が始まる。

当然のごとく、たんまりとお金が入ったお賽銭箱を盗られ、阿修羅の如く暴れまわった霊夢を止めるのは苦しくも、偶然神社を訪れた風間であったことは完全なる余談である。



## 異変の前触れ（後書き）

だいたい10話くらいですかねえ

咲夜については外伝で上げます。

なにか良い名曲ってないですか？

夏の記憶など、まったりとあっさりしたものから、

サビがめっちゃくちゃ良いもの。

東方のアレンジでもおkです。よければ教えてください。

なんども感想にあったこの異変の元ネタですが。導入はにてますがあの同人アニメではありません。

決して某コメが流れる動画に感化されたわけでは(r y

まあ、物が盗られることはそれと似てますが、根本的には違います。

てか、早く続編でてくださいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii

皆様から教えてもらった曲の感想は次回のアとがきにでも。

## 26話「異変者の風」

「異変よー！」

そう叫ぶのは博麗神社の巫女。 霊夢。

幻想郷の異変のエキスパートとでも言っても過言ではないだろう。そんな彼女が叫び、すごい形相で周りを見渡した。

「必ず犯人を見付け出してボコボコにしてやるわー！」

吠えるような声。怒鳴り声に近いそれを近くで聞いていた金髪の少女。 自称、普通の魔法使い 霧雨魔理沙は顔をしかめた。

「まあ、他のところでも物が無くなっているし異変、なんだろうがなー」

魔理沙もこの幻想郷で異変を解決してきた1人でもある。彼女が博麗神社の霊夢と親しいというものもあるかもしれないが。

「レミリアの所もカップが無くなっているだろー、妹紅の所も服が無くなって、あの風見幽香の所も花が盗られたらしいぜ」

「そんな事はどうでもいいわ！私は、私の金を盗られたのよ！他のことなんて知った事ではないわ！」

「おいおい、それはいただけない言葉だなー」

そんな言葉を投げたのは風間だった。彼は偶然神社を訪れて、暴れる霊夢を沈静化した後に縁側で体を休めていた。抑えつけるといふことは、暴れるやつを倍以上で力を押さえてないといけない。結局疲れたのは彼だけで霊夢はすぐに立ち直った後に解決に躍り出たのである。

「これは傍から見ても立派な異変だろ？ちゃんと解決しなきゃ」

「いいのよ！私の金を盗んだやつを見つけることは、他の物を盗んだやつを見つけることに他ならないから！」

その言葉に眉を寄せた。

「なんで同一犯なんだ。複数犯の可能性だってあるだろう」

「いえ、それはないわね」

霊夢は腕を組んで、顔を歪めた。

「この手の犯人は同一犯という可能性が高い。それに、一貫性がないうように見えるけど。5日おきにという周期で物を盗っている。複数犯であるならもつと盗る感覚を縮めてより多く盗るわね」

いえ。

「あるいは、複数で動いていて指揮するやつがいる、ってこともね。5日おきっていう周期も『何かの』下準備期間なのかも」

その推測に思わず風間は声を漏らした。

なるほど、さすがに博麗の巫女である。そう思わせるような推理と貫禄がそこにあった。

「さて」

声に掛けて、お被い棒を手にして札、または退魔針などの装備を整え始めた。

「えらい、重装備だな」

「いい？これは異変よ。いつ何処からか誰が邪魔してくるかわからないわ」

「お、いよいよ開始か」

魔理沙も軽くストレッチを初めて魔道書をパラパラとめくる。

「風間さん、貴方はどうする？前みたいについてくる？」

霊夢としては先の異変の事を言っているのだろう。風間があの時射命丸を押さえてついでに招待をばらした。妖怪の山に神社がこしてきたあの異変。

「ああ、微弱ながら俺も手伝うよ」

顔を引き締めて風間は立ち上がった。

まず最初は紅魔館であった。

ここではレミリアのお気に入りのカップが盗まれたということ  
直接状況を聴きに来たのだ。レミリアが盗まれたカップはフランか  
らプレゼントされたもので、とても気に入って大切に扱っていたと  
いう。

「俺が咲夜から聞いた話では無くなったのは丁度妹紅の服が無くなった日から5日後。夜の紅茶を出すときに気がついたらしい」

「なるほど、で。どんなカップだったのよ」

目の前に居るレミリアに霊夢は尋ねた。

ワンピースの服にブカブカとした帽子。コウモリの羽をもつ彼女が少し気を落として答えた。

「普通のティーカップよ。特徴があるとすれば紅の模様が入ったカップね」

吸血鬼の彼女はよく好んで紅色の物を集める。よってフランがプレゼントしたカップも当然紅い紅茶というわけだ。

「咲夜が無くなっていることに気がついたのよね？」

「ええ。私が紅茶を淹れようと、食器棚に手をかけた時に」

「確実に、妹紅が服を無くしてから5日後に　つまり、昨日無くしたのよね？」

「間違いありませんわ。一昨日も同じく紅茶を淹れたから」

ふむ、と呟いて霊夢はなにやら考えている。やがて、何かあったらしくに連絡ちょうだいと、言葉にしてすぐに踵を返した。

「あ、おい」

そのあまりの呆気無さに思わず風間は声にだして追った。ちなみに、魔理沙は別のところで聞き込みである。

「もつと詳しく聞かなくていいのか？」

「今は情報が少なすぎるわ。咲夜やレミリアもあれ以上知っていることはなさそうだし」

てきばきと動いて紅魔館の門番にまで辿りつく。

「中国！」

「誰が中国ですか！　って風間さんと霊夢さん？」

先ほどまで花に水やりを行っていた美鈴が門番の仕事に戻っていた。まず最初にレミリアに話を聞こうと後回しにしていたのだ。

「あんだ、昨日怪しい人物見てなかった？無理やり侵入してくるやつとか」

「へ？別に見てませんね。昨日は魔理沙さんも来てませんでしたし」

「そう……」

美鈴の言葉に何か考えるように腕を組む。

昼間、寝ていてあまり仕事をしてない印象がある美鈴であるが、寝ていても侵入者の察知くらいはできる。もう何十年と主の館を守



つてきた門番である。そう容易く侵入できるわけがない。しかも、最近では風間との修行の効果なのか、魔理沙さえも退却するほどの仕事っぷりである。

「霊夢」

突如として咲夜が現れる。まるでそれは瞬間移動のようなものであるのだが。彼女は『時を操る程度の能力』の持ち主でその時を止めて動いているために、瞬間移動のように感じるのだ。

「お嬢様から許可が頂いたわ。私も探させて貰うわよ」

やはり、彼女も気になるらしい。

「あら、足は引つ張らない頂戴ね」

悪戯っぽく霊夢は微笑んだ。

次は風見幽香のところである。

魔理沙は妹紅のところへ聞き込みを行っているために次に移動したのだが。

「……随分と機嫌が悪いわね」

「当たり前よ。私の花が盗まれたのよ？機嫌が悪い訳がないじゃない」

向日葵の花畑。

フラワーマスターこと風見幽香が住むこの畑でいかにも不機嫌そうに幽香は居た。それでもきちんと花の手入れを行っているところ

をみるに、ほんとに花が好きなのだろう。

「正直、暴れ回りたくらいよ」

「やめてくれ……」

風間が思わず嘆いて手を振った。

実際、暴れていたのだから洒落にならない。それを止めたのが風間自身であり、その苦労は涙が出る程ものである。

弱小妖怪共をしばって鞭でシバイていた彼女の姿を思い出し、思わず身震してしまふ。

そんな風間の姿を見て、ため息を吐いて風見は手に持つ日傘を肩に担いだ。

「で、何の用よ」

「貴方だけが盗まれたわけじゃない。そういえばわかるでしょう」

その言葉に眉を寄せた。

「異変ね」

さすがに、幻想郷の住人であり、その事の適応さに風間は舌を巻いた。

「私は金が入ったお賽銭箱ごと盗まれたのよ。だからこうして動いているのだけど　貴方何か知ってる？」

「知らないわよ。むしろ私が聞きたいくらいだわ。花を盗まれた時だって気がついたら無くなっているんだもの」

幽香が盗まれたのは10日前。丁度花の手入れの時間の時だという。

「手入れするときの時間は？」

「夜よ。いつも花を細かく見るときは日の終わりの時間で決めてるの」

その言葉に咲夜はハツとした顔で幽香を見た。

「夜 それって8時くらいじゃなかったかしら？」

「ええ、その通りだけど 貴方も？」

「私がカップが盗まれた事に気がついたのも、8時だった」

「……私のお賽銭箱が盗まれたのも8時くらいだったわ。分社からお酒を取り出そうとして外に出たときだったもの」

お互いが顔を見合わせて、それぞれ口を開く。

「決められた時間、決められた日にちに盗まれるって事か」

風間のつぶやきに霊夢が頷いた。

「どうやら、犯人は同じ時間、そして決められた期間に物を盗むみ

たいわね」

それぞれが聞き込みを終えて神社に戻る。魔理沙もどうやら妹紅の聞き込みを終えたらしく、神社に戻っていた。

「妹紅も夜の8時くらいに無くなっていることに気がついたらしいぜ」

「やっぱり。皆5日起きるの夜8時くらいに盗まれている……か」

「レミリアの紅い花柄のカップに、幽香の花。そして妹紅の服に霊夢のお賽銭箱か……何か共通点があればわかりやすいのだがね」

風間が唸って考える。

沈黙が流れた。

皆考えにふけっているようだが、如何せん情報が少なすぎる。

犯人の姿は誰も確認できておらず、盗まれたものの共通点もない。ましてや盗んだ理由もわからない。わかっていることは盗まれたもの、その周期と時間帯のみだ。

「……こうなったら5日周期と時間帯を利用して、待ち伏せしようかしら」

「お、張り込みだな！」

魔理沙が楽しそうに手を叩く。

「待って、張り込と言っても次に犯人が狙う物とかわかるの？」

張り込みを行おうにもまず、次に狙う場所がどこか特定出来なければ張り込みを行うことはできない。咲夜はまずそこを示唆した。

「盗まれた場所、幽香の畑、迷いの竹林、紅魔館。どれも異変が起こった場所だわ」

「つまり、次も異変が起こった場所で盗まれると？」

「ええ、つぎは恐らく妖怪の山あたりか」

風間の問いに頷く。

「根拠は？」

「私の勘よ」

そりゃ、まあ。確実性がありそうだな。

「なにより、後4日もあるわ。他の場所は注意を呼びかけていくもの大切よね」

物がありそうな場所に

「香霖のとなら私が言ってくるぜ」

「人里なら、慧音が一番よさそうだな」

「それじゃ、お願いね」

皆一同が頷く。

4日後 ティーカップが盗まれてから5日後。

その日は結局最後まで物が盗まれることはなかった。



くNGシーンく

紅魔館、聞き込みにて。

「俺が咲夜から聞いた話では無くなったのは丁度妹紅の服が無くなった日から5日後。夜の紅茶を出すときに気がついたらしい」

「なるほど、で。どんなカップだったのよ」

目の前に居るレミリアに霊夢は尋ねた。

ワンピースの服にブカブカとした帽子。コウモリの羽をもつ彼女が少し気を落として答えた。

「Aカップよ……」

え？

書いた作者もびっくり。

もちろんNG。

幻想郷におけるバストは恐らく小町が最強でしょうねー。90くらいありそうな予感。

ちなみに、晴明はバスト88。

卑弥呼はバスト90です。

うーん。マンドム。

## 27話「異変武の風」

博麗神社。

犯人が現れると張り込みを行つた3日後に風間たちは集められた。

この異変に関わつた関係者。レミリア、咲夜、魔理沙、幽香、妹紅、そして風間。それらが神社にて集められる。

「待たせたわね」

神社の本殿から霊夢が現れる。

何か神妙な面持ちで周りを見渡す。

「異変に犯人がわかつたわ」

その言葉に皆が息を飲んだ。ただ、魔理沙、咲夜は霊夢から事前に聞かされていたのか黙つて霊夢を見ている。

犯人がわかつた？

「この異変、不自然な点が多いのよ」

そう言つて人差し指を上げる。

「私たちが自分たちの家に誰かが入ったら気がつかないわけがないわ。だから、最初は能力持ちの妖怪かと思つた」

「気配が察知出来ない奴とか、姿が見えない奴とかか？」

風間が声を上げる。

「そういう事になるのなら、萃香が該当するけど あいつは物を盗るような輩でもない。盗ったとしても酒の類でしょうね」

萃香とはこの博麗神社に入り浸っている鬼の1人で、酒が死ぬほど大好きな困った鬼である。

其の能力は密と疎を操る程度の能力というもので、その気になれば自分を霧にできる能力である。

外部から侵入されれば、少なくとも勘のよい霊夢は気がつく。そうしたことを踏まえて、もう1つの結論を繰り出した。

「だから、考えて、顔見知りである可能性が一番に高い」

息を飲むのがわかった。

「ここに来て新しい妖怪共の仕業というのは考えにくい。可能性として気配も姿も消せる妖怪ってのがあんだけど、それでも一番の可能性が高いのはその日に人見知りが来ている可能性ね」

「だ、だけどその日に来ていた客が多い場合特定できないだろ」

もっともな意見を述べる魔理沙である。

博麗神社とて、妖怪が好む場所でもある。魔理沙に然り、萃香に然りまたは、紫など。多くの妖怪が訪れる。

「紅魔館ならどう？あそこは招待している客しか招かないのよね？」

霊夢の問いに頷くレミリア。

「幽香の家だつて、勝手に入れるものでもないわ。なら、私たちが知っている人物が盗んだという可能性が一番に高い」

だから、その点を重点的に調べた。

「その日、その家を訪ねて接触している人物が居たわ。それも盗んだ日の当日に」

息をためて、霊夢はまるで探偵のように指を差した。その様が多々似合っている。

「 風間大介。貴方がこの異変の犯人ね？」

『 っ!?!? 』

皆が一様に驚き、縁側に座る風間を見た。

信じられないと、幽香は首を振り妹紅は驚きのまま固まる。

「貴方は事件が起こったその日に必ず物を無くした奴と接触している。幽香の家、妹紅の家、紅魔館。そして、私の神社。きっかり5日ごとにそれらを訪れているわ」

「……訪れているとして、なぜ俺なんだ。勿論、それらがすべて偶

然かもしれないだろ？」

何か思うように冷静に風間は口を開いた。

「それに、俺にはキチンとアリバイがある。夜の8時頃、咲夜がカップを無くした頃に俺はフランと6時から8時までの時間遊んでいた。これはレミリアも咲夜も知っていることだ」

あくまで、冷静に。まるで何かを試すような言いように霊夢はへえ、とつぶやく。

「あら、それなら何故貴方はレミリアが無くしたカップの『特徴』を言い当てたのかしら」

「そりゃ、いつも使っているカップだし、レミリアが紅いカップだって自分で」

「無理ですわ」

咲夜が風間の言葉を遮って静かに答える。

「お嬢様が飲まれるカップは必ず、夜の時間1人でゆったりと飲むものよ。お嬢様が妹様のカップを大事に思っているからこそ。少なくとも、風間には見せていないわ」

何か、つらそうに途切れて声に出す。

「さらに言えば、レミリアは紅いカップとは言ったけど、その詳しい特徴までは言っていないかったわ。なのに貴方は『紅い花柄のカップ』だと口にした。それに、アリバイになんて、『協力者』が居れ



ばいくらでも出来るわ。ねえ？答えてくれるかしら。何故貴方は知りもしないカップの特徴まで言い当てることのできたのかしら？」

「ここ、までか。」

風間は息を吐いて顔を伏せる。

「思えば、寶錢箱を盗まれた時だって、貴方この神社に来た時お酒を受け取りにいたわね？お酒は分社の倉庫に置いてあるのに、わざわざ、遠くにある本殿の倉庫まで取りに行った。他にも幽香の家を尋ねた時だって珍しく花について質問したそうじゃない。どんな育て方があるのか。花瓶などは使っているのか」

息を吐き、お被い棒を向けた。

「思えば怪しすぎるのよ。貴方の行動すべてが。その日に限って。」

「さあ、お前のやったことはすべて、まるっとお見通しよ！観念しなさい！」

そして、チャツチャと金返せ！と締めくくった。

「なるほど、やはり異変解決のエキスパートなだけはあるね」

風が、風間の妖力が吹き出した。思わず身を丸くする霊夢たちであるが、それを機に跳躍し、神社の屋根の上に登る。

月夜のあかりが彼を照らして怪しく光る。

「その通りだ。正解だよ霊夢。俺が君たちの物を盗んだ  
正確に  
は君の予想通り協力者にやらせたんだけどね」

霊夢が言った言葉。1人が指揮をして複数で動いて盗む。まさにそれが風間であった。的を得たような言葉にあの時、内心ヒヤッとしたものだ。

「なぜ、貴方が……」

友人であり、その日も紅茶を一緒に飲んでいただけにショックだったのだらう、何か恨むような表情で咲夜は風間をみた。

見れば幽香や妹紅、レミリアが睨むように見ている。

「『今』はその言葉に答えることができないよ、十六夜咲夜」

そうして周りを見下ろし、ニヒルに笑ってみせる。月夜に照らされた彼が一段と怪しく見えてその様はまるでラスボスのようだ、魔理沙は勝手ながら思う。

「博麗霊夢。レミリア・スカーレット。十六夜咲夜。藤原妹紅。風見幽香。風神の名の元に君たちに宣戦布告を行う」

一段と濃い力。

間違いなくこれは神力であり、その力の圧迫に思わず膝を付きそうになるほどであった。あの風見幽香でさえ、冷や汗を掻いたほどである。

「君たちが大事とするものは我が頂いた。返して欲しくば、俺と戦い、打ち勝て。これは宣戦布告であり、異変の宣告である」

これが、風神、風間。

いつもの陽気で優しい風間大介はここにはいない。居るのは歴戦をくぐりぬけ、この時代まで生き延びた神。

風神の二文字。

「では、この博麗神社にて決められた時間にてお会いしよう」

そう言って立ち去ろうとする風間。

そこに魔理沙がなんとか声に出した。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！私は」

「お前に『今回』は用はない。普通の魔法使い。俺は博麗霊夢を筆頭とする5人に宣戦布告を行ったのだ。見物は許可できるが、お前が直接この戦いに関与することは許さない」

「っ」

何を巫山戯た事を。私だって異変解決組の1人なんだ。そう言葉にしようとしても口が開かない。それほどまでの威圧が魔理沙を駆け抜けた。

「では、諸君。決められた時間に」

一瞬の暴風。その風に目を瞑ればもう彼がいなくなっていた。

彼が去った後の博麗神社は静けさに見舞われていた。

まるで嵐が過ぎ去ったかのような雰囲気。それを破ったのはこの神社の巫女であった。

「決められた時間……ね。恐らくは5日後の夜8時ってことよね」

「ええ、恐らくは」

再び沈黙となるが、それが破られるのにそう時間は要さない。幽香は突如、踵を返して神社に背を向けて口を開いたからだ。

「なら、話ははいわ。私はすぐに帰って準備する。彼と戦えるのでしょうか？素敵じゃない」

どうやら、それが一番らしく、花の花瓶は後回しようであった。その表情は先程の驚きの顔ではなく、戦闘狂として戦えることに喜びを感じている顔であった。

「私も、そうと決まれば長居は無用ね。咲夜。帰って準備するわよ」

「はい」

レミリア、咲夜も幽香の言葉に同調し、飛び去っていく。

「私も、風間相手なら念入り仕込まなきゃな」

妹紅も少し、嬉しそうに言葉にして去っていく。

その様子に霊夢はどうしようもなく、自然と笑を漏らした。

「まったく、さすが幻想郷の住人ね」

皆、なんだかんだで戦うことが好きなのだ。この異変というお祭りだ。

「魔理沙。そういう事だから、今回は我慢しなさい。貴方はパーティーにお呼びじゃないみたい」

そう言って神社に去っていく霊夢。

1人残された魔理沙はくちびるを噛み締める。そして仰ぐ。

ひとり、なにか思うように月を見ていたがやがて盛大なため息をぶち漏らした。

「ちくしょう。今回だけは我慢してやるぜ」







## 28話「異変参の風」

博麗神社。

5日後の夜8時。

決戦の時である。

集まるのは今回の異変の被害者。各自が物を取り換えすため。または風神との戦いに身を疼かせている。

「よくぞ、集まってくれた」

声がして、その場に居たものすべてに緊張が走る。

風と共に現れた風間。それが5日前と同じく博麗神社の屋根の上に立つ。以前と違うのは黒いフードをかぶった者が3人程居る事か。

「ふん。貴方たちが風間の言う協力者ね」

「ああ、俺の優秀な仲間だよ」

その時だけ、この空気に似合わない笑みを浮かべる風間。

だが、すぐにその顔を引き締め、宣言する。

「では、始めようか」

空気が淀み、皆が一斉に構える。

「ルールは簡単。チームマッチだ。各自が戦い、それに勝利した数が多いチームが勝利。君たちが大切にしている物は返そう」

「なるほど、誰かが貴方と相手し、それ以外その黒フードの奴と戦うのね」

「ああ、さすがにここでやると混戦になるため。場所は移させてもらおう。時間も惜しい。始めようか」

威圧するかのような、妖力と共に突風が駆け抜ける。

それが合図のように黒フードが一斉に動いた。

一瞬で間合いを詰めて各自の目の前に現れる。まるで瞬間移動の様　　実際は瞬動であるが。

驚きに体を硬直する霊夢たちであるが、さすがに戦いをくぐり抜けてきた者たちである。驚いたのは一瞬。されどもすぐに体勢が整えられる。

だが、その一瞬の間、黒いフードは一枚の札を取り出し、宣言する。

『転移っ！！』

光が身を包み、黒いフードは霊夢たちを巻き込んで消える。

それぞれが、決戦の場にて転移される。

妖怪の山。対峙するのは博麗霊夢。

そして。

「……異変なのに、やけにうるさいのがないと思ったら……アンタはそっち側か」

「当たり前よ。私は師匠の弟子なのよ？　博麗霊夢。この射命丸文が風神の弟子の名の元に貴方のお相手をするわ」

そうして一枚のスペルカードを取り出す。

紅魔館前。湖上にて。対峙するのは藤原妹紅。

そして、その前には小さな影。

「ちっ、お前が相手かよ。私も外れクジ引いたな！。　　すぐに終わっちゃうじゃない」

「言ってな！。驕ると足元掬われるよ　藤原妹紅。チルノがお相手つかまする！」

一枚のスペルカードを突きつける。

向日葵の畑。対峙するのは風見幽香。

黒いフードを投げ捨てる影。

「私は風間と戦ったのよ？　雑魚はお相手でないわ。すっ  
こんでなさい」

「そんなに、ガツカリはさせないと思いますよ？　風見幽香。紅  
魔館の門番にて紅美鈴が相手を致します」

一枚のスペルカードをそつと取り出した。

博麗神社。対峙するのはレミリア・スカーレット。十六夜咲夜。

そして、風神、風間。

「なるほど、こつこつ事ね。それにしても、2対1よ？いいの  
かしら？」

「ん？別に。いいハンデだと思うけど」



レミリアの問いにとくに臆することなく風間は答えた。強がりではなく、本心からそう思っているのか。いや　実際、2人相手でもキツイだろう。

なにせ、風神。

まがりなりにも神であるのだから。

「そう、ならいいわ。　その言葉。後悔させてあげる」

狂気が空気を支配する。吸血鬼の狂気。それを制御するレミリア。それに時を制する咲夜。この2人を相手にするのだ。

手加減も、出し惜しみもいらぬ。

「そうそう、殺る前に少しいいかしら？」

「なんだよ」

「あの黒いフード。あいつら、美鈴たちでしょう？」

へえ、と風間は息を漏らした。

「よくわかったな」

「そりゃ、そうでしょう。彼女の気でわかるものよ。それに、貴方といつも紅魔館前で修行していたことも知っているのよ？わからぬはずがないわ」

「花は  
」

突如の言葉にレミリアは顔をしかめた。

「花は、蕾から咲く瞬間が一番美しい」

「そうね。それは当然の事でもあるわ」

「ああ、だから、今日が一番美しい日だと、俺は思う」

なにを？とレミリアは呟いて尋ねる。その答えを風間は口にしながら。なんなのよ。と不貞腐れるレミリアに微笑む。

先ほどの険しい顔はどことなく消えて、一瞬。この場に似合わず、風間大介は口にした。

『満開！』

花が咲く。

射命丸文。チルノ。紅美鈴。

スペルカードが宣言され、3人の花が咲いた。

## 28話「異変参の風」(後書き)

おすすめ曲を書いてくれた人。ありがとうございました。

中々気に入った曲もあって、それを聞きながら執筆しております。

おかげで作業スピードもUP。

考えられない更新速度でございます。また、なにかありましたら感想等お願いします。

## 29話「異変四の風」

異変が行われる前の話し。

「俺がお前らに教える事は、力を自分の内側と外側。すべてを覆うことだ」

「力で覆う？」

射命丸の質問に、風間は頷く。

「俺らが行う体の強化って言うのは、ただ単に自分が持つ純粹な力を体に流す事だろ？それを超えるために、外部からの力も利用して、外部、内部の力を体に内包させて身体能力等をあげることだ」

首を傾げる射命丸。美鈴は少しわかるようだが、まだ深いところまで納得出来ていない様子。チルノに至っては確実にわからないようだ。

「あー。これは、そうだな。実際に見せたほうが早いかもしれない」

言いながら、風間は螺旋丸を形成する。荒々しい風が掌に集まり、それを握り潰して内側に取り込んだ。

「コネクト 掌握」

瞬間に、風間の体が風に包まれる。体の底から力が湧き上がってくる感覚。それを感じながら3人を見る。

「これが、内側の力。美鈴でいう剉脈を利用した内気功だな」

その言葉に、ああ、と納得する美鈴。

「んで、こつちが外部の力」

その状態のまま、外にある全ての風を集めて体を覆う。すると、内側の風と外側の風が組み合わせさり、内なる妖力が爆発して大きな力を生み出す。

「こつち」

思わず、それを押つける。即席の技であるが何分扱いが難しい。外の力と内の力を無理やり合わせているのだ。

磁石のマイナスとマイナスを無理やり押し付ける。当然、その反発という力を生み出す。それによって生まれた力を利用する、というような感覚だ。

「ふう、出来たか」

しばらく経って風間が息を吐く。

その容姿　その力に皆一同息を飲んだ。

嵐。そう言葉にするに相応しい風が風間の体を包んでいる。ビリ  
ビリと、荒々しい妖力が跳ね上がり若干外に放出している。

感じ取れるだけでも、普段の風間の妖力の倍以上は感じ取れた。

風間自身の力だけではなく、自然の力も借りて、自分の力に　。

「元ある妖力に、自然の風を一点に集めて無理やり圧縮する。んで、それを合わせて自分の妖力で抑えつけて無理やり力に変換する。」

まあ、説明するとこんな感じかな。俺のは神力が邪魔しているから、やけに難しく、使い勝手が悪いけど。純粋な力を持つてるお前らなら、できるだろうと思う」

風間はそして少しニヒルに笑ってみせた。

「これをスペルカードに収めて宣言すれば、いつでもこの状態になれるってわけだ。命名するなら　」

満開と、名付けよう。

蕾から花が咲くように。

お前らもまた、その力を咲かせる。

てね。どうだ、かっこいいだろ。





そして、その日。花が咲く。

「満開『風神の烏天狗』」

暴風が身を包み、内包する力と合わさる。そして妖力が倍增する。彼女の黒い羽が風に包まれ、舞う。そして、風が吹く。

その風は色を持っていた。

黒い。黒い風だ。それが射命丸を包み、そして彼女はそれを手足のように制御して動かす。

「……面倒ね」

霊夢は息を吐いた。断言する。これは一筋縄ではいかない。持つる全ての力を出す。容赦も手加減も、出し惜しみも不要。

驕った瞬間、負ける。

そう確信するほどに今の射命丸は強者である。

「貴方とは、一回本気でやってみたかったのよ」

「そうね、私も思っていたわ」

凍てつく緊張感が支配する。

スぺルカードの宣言の後、あらゆる力が収集され、やがて黒い気が美鈴の身を包む。気が実体と化し、その服を包んで黒くする。

彼女の内なる力と外で集められた力が合わさり、その気力が跳ね上がる。

その力は風見幽香と同様　いや、それすら凌駕しそうであった。思わず、幽香は口元を緩めた。

「見かけだけじゃ、つまらないわよ？」

「退屈させないと思います。　なにせ、この状態では風間さんは3分と持たなかったですから」

へえ、それは楽しみね。

幽香が晒い、そして傘を先を美鈴に向けた。

「久々に、本気だしても良さそうね」

「お相手致しましょう。フラワーマスター風見幽香。貴方には息する時間すら与えません」

爆発する力が対峙し、向日葵がざわめく。

彼女たちを囲む向日葵。それはまるで闘技場のようである。

強大な力が、ぶつかり合う　。

「満開『氷上の妖精女王』テイターニア」

湖上の冷気が凝縮され、チルノの体を包んだ。内なる冷気と外の冷気が合わさり、やがてチルノは完全なる氷に包まれた。

「……………」

何をしているのかと疑問を持つ妹紅であるが、やがて慌てて構えた。

チルノの妖力が跳ね上がったのだ。その力の大きさに思わず舌打ちする。

氷が弾け、やがてチルノが現れる。

「なっ  
」

それは、チルノであってチルノではなかった。

青い髪。そしてワンピース。氷の羽。妖精である彼女が特徴はすべてチルノを示しているが、その体が違っていた。

身長は伸びて、顔は大人びて、その胸は豊富に膨れている。

「はは……見かけだけは立派だね」

思わずつぶやく。

その姿に驚いている場合ではないのに、思わず呆然と見つめてしまふ。先程まで10歳程度の少女が20歳くらいに進化しているのである。だれだって驚くだろう。

「見かけだけかどうかは戦って判断して欲しいね。なにせ、この体のアタイはやけに体が軽くて頭が冴えているんだ」

ニツと笑ってみせて構える。

「さっきまでのアタイと思ったら足元掬われるよ。雛鳥」

「はっ、言ってる。バカ妖精」

温度差の激しい湖上にて対峙する。

「さあ、始めようか。吸血鬼。人間」

風間が晒す。風が博麗神社を吹き抜けた。

痛い。

思わずそう感じてしまうほど、風間の風には力があつた。まるで風の1つ1つ無数の針を運んでいるかのようなようだ。

思わず鳥肌がたつ。その力に吸血鬼の狂気が疼いたのだ。

「久々に本気を出すことができそうだわ」

「そりゃ、よかつた」

彼の手が風を集めて螺旋丸を形成する。それを握りしめてそれを内包する。

「コネクト掌握」

風が包む。レミリアが吠えた。

「咲夜！気をしっかり持ちなさい！相手は神よ！一瞬の油断もしないで！刈り取られるわ！」

「……は、はい」

彼女らしからぬ、途切れの言葉に再度叫ぶ。

「相手は風間大介じゃない！風神なのよ！貴方が思う奴はここにいない。覚悟を決めて全力でやりなさい！」

「了解しました！」



思わず、風間は晒った。

イイネ。いいよ。俺も戦うのは好きじゃないけど。今日はゾクゾクするわ。



これでいいんだよな。紫。



## 29話「異変四の風」(後書き)

ヒーハースピード投稿だぜ！

さて、なんだか成長したチルノ。これを名づけてチル姉とお呼びします。

んで、美鈴の元ネタはMUGENのリンちゃん。

射命丸についてはまんま風間と同じだけど、黒い羽に掛けて風が黒くなります。

満開の元ネタは勿論卍解。

なんかいろいろパクってるけど、設定が違うからイイヨネ！

なぜ、入れたのか。厨二病が大好きでかっこいいからです。

### 30話「異変五の風」

チルノは氷の妖精である。

その体は氷で出来ていると言っても可笑しくはない。故に、自然を体に取り込んだ時、其の力に比例して体のあらゆる部分が成長してしまったのであると風間は推測した。

体と精神は1つである。

体の成長と共に精神も成長し、故にチルノの思考は大人としての思考が働いている。

「氷符『アイシクルフォール』」

宣言するスペルカードと共に冷気の弾幕が駆け抜ける。左右を挟むように繰り広げられる弾幕に妹紅は晒いながら前へ出た。

「やはり、変わったのは姿形だけねっ！」

誰でも知っている。このスペルカードの安全点。

彼女の正面こそ、安置。

そこへ突撃して、妹紅は自分のスペルカードを宣言しようとした時。

チルノの手が妹紅の腹に掌底を打ち込んだ。

ただの掌底。気も使わない。

だが。

「氷塊『コールドスプリングラー』」

螺旋を描いた氷の塊。鋭利に尖ったそれが妹紅の体突き抜ける。掌底は放った掌から螺旋に描いた槍が伸びたのだ。

「がぁ……」

体中に激痛が走り、スペルカードを零す。

血の塊を掃き出し、驚きの目でチルノを見る。

それを見下してチルノは槍を横になぎ払った。

槍から妹紅の体が滑り落ちて湖に落下する。

水柱を立てて、妹紅が水の中に沈んだのを確認するまでもなく口を開いた。

「馬鹿はアンタさ。なんでわざわざ目の前なんか安置を置かなきゃならないのさ。置く利用として、『誘いこむため』だろ？」

ため息を吐く。

「さて、これでわかったかい？アタイはもう、昔みたいなアタイじゃない。わかったなら、本気で掛かっておいで不死鳥。これで終わりなんて言わせないよ」



『リザレクション』

湖上に火柱が立ち水が蒸発して霧を生む。妹紅が飛来してチルノと対峙した。

「あークソ痛いわ。私はね、死なないだけで、痛いモンは痛いのよ」  
言いながら、服を叩いて汚れを叩いた。

そして、妖力を放出する。

それと共に炎が妹紅の身を包む。

それはまるで不死鳥　鳳凰のようであった。

「悪かったわね。妖精女王テイターニアとやら。本気で行かせてもらっわよ」

瞬間、二人の距離が開いた。

「滅罪『正直者の死』！！」

「凍符『フリーズアトモスフェア』っ！」

炎の弾幕と、氷の弾幕。

それらが相殺されて蒸気を生み出す。

二人の力の差は互角。だが、分が良いのはこちらだと妹紅は自負する。

なにせ炎と氷だ。氷を溶かす炎に勝てるわけがない。

蒸気の煙をかいくぐり、移動する。

ボヤで見える彼女の体は動いていない。きっと無駄に動くよりは動かずにいたほうが良いと判断したのだろう。

だが、それも間違い。

この視野の悪さは逆に動くべきだ。妖力の探知を使えばいくらでも発見できる。

「じっ！

不死『徐福時空』

空を覆うような広い範囲での弾幕。炎がチルノを囲むようにして動く。

この360度の弾幕にどう対応するか見物だと、妹紅は晒す。

だが。

「凍符『パーフェクトフリーズ』」

刹那で世界が凍った。そう言っても過言ではない。

コンマの世界で次々と弾幕が、炎が凍る。氷の脅威は瞬間の速さの中、ついにはその弾幕を放った妹紅すらも凍らせ、湖も凍結する。

パーフェクトフリーズ  
完全凍結とはよく言ったもので、氷を溶かす炎すらもその凍結の前に為す術も無く氷の魔の手に落ちる。

「誰が、氷より炎の方が強いって言ったさ。アイス氷だって触れれば火傷するってこと、知らない？」

氷の世界にただ1人動く女王妖精。ティターニア

ゆつくりと手を上げてその指がパチン、と弾いた時。湖上を除くすべての氷がはじけ飛んで崩れる。妹紅も例外ではなくその体が粉々に砕け散った。

「それに 炎でも溶かせない氷もあるのさ」

『リザレクシヨ』

「がああっ……！があああああっ……！」

雄叫び。バラバラであった体が炎と共に燃え上がりその体を修復する。

「はあ、はあ、はあっ……！」

息を荒げる。

不老不死であろうが、復活するのに　ましてやバラバラになった体を修復するのに、相当な気力が必要である。

精神は体と繋がっているために、その疲労が蓄積された。

やがて、息を整えた時先程までの荒々しい妖力が消え失せる。

「畜生。ずいぶんとご無沙汰だった走馬灯なんてもんを久しぶりに見てしまったよ」

おかげで、目が覚めた。

何時ぞやの誰かさんの言葉を思い出す。無理やり放出するだけの妖力ではなく、感情に流されず。常に冷静に、支配するのは己の力だ。

ただ闇雲に妖力を出すのではない。時には糸を針に通すように細かな精密が必要だ。

「悪かったね。チルノ。これからが本番よ」

「そう。ならアタイも出し惜しみはしないよっ！」

冷気がこの空気を支配する。それは霧のように、それは霜のように。あらゆる低温の冷気がやがてチルノを中心にはじけ飛ぶ。

弾かれる弾幕。その冷気は濃く、下手をすれば妹紅の炎すら凍らせるだろう。故にスペルカードを宣言するまでもなく、距離を取った。離れすぎず近すぎず、間合いを見極めて妹紅は妖弾を撃ちまくる。

通常の弾幕を張って牽制する。すぐにチルノに向けた弾幕は氷、力なく地面に落ちる。一瞬にて凍てつくその霧状の弾幕に妹紅は少し舌打ちをする。

厄介な弾幕だ。個体ならまだしも霧状となっているために攻めるに攻められない。

滅罪「正直者の死」

スペルカードを宣言する。

炎と共に繰り広げられる弾幕がチルノを襲うがすべて氷となる。やはり、思った通り妖力ぶつけてまるで手ごたえがない。

「散れっ！」

凝縮された霜が吹き飛び妹紅を襲う。霧状の弾幕など、避けようがない。勿論、旋回して距離を置く。スペルカードは宣言したままであるがまるで役に立たない。

「くっ」

スperlカードを切り捨ててそれを振りきれるように再度旋回を試みる。

まるでホーミングしてくるアミュレットみたいだな、とその厄介性に思わず舌打ちをする。

ショットを打ちながら霧をずらしていき、妹紅は反転する。こんなのにまともに付き合ってられない。

なら、私は私のやり方で！

旋回をやめて、あえて霧の中につつまむ。体中にその霧が纏わり付く。完全に体が凍結擦る前。その瞬間、叫ぶ。

「不死の鳥の鳥 - 鳳翼天翔 - ！！！」

体の炎が形を作り、それはまるで火の鳥、不死鳥のよう。霧状の



弾幕が吹き飛び蒸発する。纏わり付いた炎を妹紅はそれを宿したままチルノに接近した。

妹紅の十八番でもあるこの技。体にまとも、そのまま弾幕で放つこともできる汎用性が高いこのスペルカード。

輝夜相手でも十分に張れる最強の1角。

「いい加減、チマチマとした弾幕も飽きてきたんじゃない？女なら体張りなよ」

その言葉に笑みを浮かべた。

「タイムンか。いいね。ゾクゾクするよ」

凍結「氷上の籠」

冷気がさらに集まり、体を覆う。チルノの羽が翼を描く。太い尻尾を生やし、まるでそれは龍の様。

鳳凰と龍。それらを形容する2人が激突し、湖上を揺らした。一度の衝突で蒸気が生まれ、それを氷が冷やして冷気となる。まるで正反対の力が激突するたびに光り輝く。炎の光、氷の光。どちらもどっち。力は均衡であった。

そこで求められるのは圧倒的戦術センスと、経験。

「フリーズタッチミー！」

掌底が妹紅の体を貫く。すぐに体が凍傷するが炎がそれを相殺して体に氷を残さない。それを防ぐこと無く受け切った妹紅はチルノの顔を片手で掴むと湖上に叩きつけるように放り投げた。

「虚人『ウー』！」

十分な接近。体勢を整えようとするチルノにゼロ距離からそれは打ち込まれる。激しい炎の弾幕がチルノの体を貫き、そして湖上に叩きつける。

氷で覆われたその湖上はさらに追撃をかける『ウー』によって打ち破られ突き抜け湖上の水に落ちた。

吹氷「アイストルネード」

湖上の水が竜巻を起こして吹き上がる。それを難なく避けて竜巻内から出てきたチルノを的確に捉える。「火の鳥」の尾が伸びてチルノを捕まえる。

氷を覆っている彼女に取ってそれはすぐに凍るものだと考えていた。だが、それは間違えである。

妹紅の火の鳥は決して凍らない不死の炎。妹紅の心が折れない限り、この炎も消えることはない。

それが不死鳥。

「私のこの炎は貴方の氷では消せないよ」

故に灼熱の炎が体を燃やし、悲鳴を上げて苦しむ。

「氷塊……『グレートクラッシュ』あああああああ……！」

持てる気力を総動員してスペルカードをなんとか宣言。掲げる。

湖上の氷が割れて氷の塊が大砲の如く妹紅を狙った。翼を羽ばたかせてそれを避ける。

その隙に剣を形成して炎を切り離す。

落ちる体を翼で支えてチルノは息を吐いた。

殺気。

明確な敵意を感じ取って体を反転させようとする。だが、先程の炎が効いているのか体が思うように動かない。

「インペリシャブルシューティング」

妹紅の弾幕が体を突き抜ける。なんとか致命傷は避けたが確実に体のダメージは大きい。尚も飛来してくる弾幕。

龍の翼で自らを覆い隠し、護る。

「どつした、さっきまでの威勢は」

「蓬莱人形」

多重スペル！

さらなる追撃。このままではマズイと、翼を広げて空へ逃げる。

だが、そこに妹紅が居た。

弾幕を打ちながら接近してきたのだと気がついたころにはその拳がチルノの腹を捉えていた。灼熱の拳。蒸気をあげながら自分の氷が溶けているのを感じる。

さらに蓬莱人形のスペルが追撃　拳の合間を縫ってチルノを叩きつぶさんと集中して降り注いだ。湖上に叩きつけられて、2度3度跳ね上がりチルノは氷の上に伏した。

弾幕をここまで操れる、その事にチルノは驚く。

これが実力の差。

長く生きた人間。幻想郷が生まれたと同時に誕生したチルノとは年季が違う。さらに、経験もだ。

その差を埋める相手の『驕り』。それが完全に無くなり全力でチ

ルノを倒そうとする妹紅。

その事にチルノは少なくともうれしさを覚えた。

この体だから、この頭だから。考えられる。

前の自分が、いかに馬鹿にされ、相手にされなかったか。

自分だつて必死に生きてきた。自分だつてこの湖を護るため。友達を護るために頑張ってきた。

すぐに勝負を挑むのは妖精の性。馬鹿なのは、深く考えられない妖精の性なのだ。

でも、今は違う。

今の自分と、あのチルノは一緒。だが違う。

自分は妖精女王<sup>ティターニア</sup>。あのチルノは氷妖精。

前の自分では考えられない。こんなすごい奴とまともに戦える。

馬鹿だと馬鹿にされたあの自分が。それが、嬉しくて嬉しくて、妖精女王チルノは声を上げて晒う。

圧倒的実力差？経験不足？

力はほぼ均等。なのに劣勢なのはそういう事か？

馬鹿馬鹿しい。そんなの、言い訳だ。

足に力を込める。

思うように動かない。だが、気合で立ち上がる。

「今のアタイは妖精女王<sup>ティターニア</sup>。氷妖精チルノじゃない」

小ぢくしづやくのは血口暗示。

自信を持って。

「アタイならやれる」

氷の上でしづやく。

「アタイなら、やれる」



自信を持ってチルノ。風間の言葉を思い出せ。

『お前たちは、恐らく戦いの中で思うだろうね。これが実力の差か  
つて。所詮、咲いた花でも、地の中で、時には嵐に揉まれ、それで  
も長年咲いてきた花にはその美しさでは敵わない。でもさ、諦めた  
らそこでゲームイズオーバーだ。お前らの力ならやれる。自信を持  
て』

「アタイはやれる！」

ラストスペル

凍符「ティターニア妖精女王のパーフェクシーズ完全凍結」

すべての物よ。

妖精女王の名の元に命ずる。

凍れ。

突如として、先程まで虫の息であったチルノの妖力が跳ね上がった。スペルカードを宣言した瞬間、すべての物が凍った。明らかでない冷気の いや絶対零度の侵略。

その凍結にもしかしたら幻想郷すべてを凍らせてしまうのではないかと思うほどであった。その力。恐らくはラストスペル。

「こちらも最後の1枚を掛けて宣言しよう。」

「思えば意外と　いやかなり苦戦をした。」

「彼女がチルノということだけで馬鹿だと割りきっていた自分を恥じる。」

「彼女はこんなにも出来て、こんなにも強い。」

「その1枚。答えよう。」

ラストスペル。

蓬萊「凱風快晴　・フジヤマヴォルケイノ」

フェニックス不死鳥の火が一層より輝く。灼熱の炎。それはまるで富士の山の噴火の様。

渾身の今の持てるすべての妖力をここに。

妖精女王の完全凍結の氷と不死鳥フェニックスの噴火の火が、激突して爆ぜる。

「……つたく、服がボロボロよ」

爆ぜた後に残された妹紅。チルノはその力を失って小さくなり倒れている。それを見届けて妹紅は自分の服が破けていることを嘆いた。

「……ちゃん、と。服。かえ、しなさいよ……」

ユラリと、妹紅の体が揺れて、

彼女もまた湖上の上に倒れた。

妹紅対チルノ。

結果、  
ドロー。



30話「異変五の風」(後書き)

第一戦終了。

チル姉。もしくはEXチルノでした。

### 31話「異変六の風」

博麗霊夢は知っている。射命丸文がいつも、本気を出さずに相手にしてきたことを。彼女は今こそ鴉天狗という地位であるが、その実力は大天狗と同じ程度だと自慢話で聞かされた事がある。

それが誠かはわからない。

だが、恐らくは誠であろう。目の前の妖力。それが証だ。

「……やっとアンタとは本気でやれるわね」

「ええ、私がいつも手加減してきたからね」

対峙する。

「言っておくけど、私も手加減しないわよ。こちらからお賽銭盗まれているから」

「手加減なんて無用よ。手加減したら最後。貴方は負けるわ。それも無事ではすまない」

黒い風支配し、その空気を薄くする。息苦しさに見舞われて霊夢は苦笑いを浮かべる。

「面倒ね。まったくもって面倒だわ」

本気でやるのは久しぶりだ。

霊夢の霊力が、放出する。

「風神に敗北の二文字は存在しない。敗北が確定した今でも抗うなら掛かってきなさい……！」  
霊夢！

「奇遇ね。博麗の巫女にも敗北の二文字は存在しないのよ！」  
文

瞬間、妖怪の山が咆哮を上げた。

山が鳴り響くように、その力は交差する。

霊夢の霊力が、文の妖力が、交わり爆発音を上げた。

黒い風が舞い霊夢を切り裂かんと迫り、それを札で叩き潰す。

何度目かの交差。

2人はスペルカードを宣言する。

力符「陰陽玉将」

岐符「サルタクロス」

ただ純粋なスペルカード。力で押し切ろうと両者はその力を緩めない。よって力の均等が生まれて空間が歪む。

風が駆け抜け、霊力が発散する。

その衝撃に吹き飛ぶが体勢をすぐに整える。

早かったのは文であった。

その風は神速を生み、やがて姿をかき消す。

音すらも超えて霊夢を通り過ぎる。

振り返り文の姿を捉えたが遅れて衝撃がやってくる。

### ソニックブーム

圧縮性流体の中で、音速以上の速さが生み出す強い圧力変化の波。圧力・温度・密度が急激に変化して不連続面ができあがり爆発に伴う圧縮波。

翼が生み出すその衝撃に体が捻れて吹き飛ぶ。

まるで、文に吸い込まれるように。

「風符『風神一扇』」

扇が霊夢を捉える。

風神の一撃。

なんとか体を浮かせてその衝撃を和らいだが思った以上に体が悲鳴を上げた。

だが、転んでもただでは起きぬが博麗の巫女。

その衝撃が当たる瞬間、スペルカードを投げ捨てた。

霊符「夢想妙珠」

妙珠が文の体を貫いて吹き飛ばす。スペルカードを宣言していた瞬間だけに当然、防ぐことはできない。

文は唇をかみしめた。

なんとというセンス……！

体勢が崩れているのにも関わらず咄嗟にスペルカードを投げ捨てて、なおかつ宣言するなんて離れ業。誰が考えようか。

いや、誰ができようか。

刹那亜空穴

瞬間、霊夢が上から現れた。

亜空穴か……！

瞬間移動とも言えるその技。それが一瞬の、刹那の時間で霊夢が現れる。よく、この技の実験を自分がつけたものだと言は若干の笑みを浮かべた。

まだ実験中のこの技。それが本番で、しかも一瞬で形成できるあ

たり、霊夢はやはり天才なのだろう。

霊夢のスペルが輝く。

「墮ちろ！」

夢符「封魔陣」

陣が組み込まれ、それが文を撃ち落さんとばかりに迫る。

「誰がつ！」

疾風「風神少女」

受けるのではなく、避ける。広範囲で組まれた陣を前へと瞬間に移動した。

避けるなら前へ。近接戦闘者インファイターの基本だ。

一瞬で避けられた事に霊夢は思わず舌打ちをする。

さらに、このスペルカード。自信の速さを高めて弾幕を放つスペルカードであるはずだ。風神録異変で文が使ったスペルカードの1つ。

面倒くさいスペルであることは記憶している。

それを回避に使うとは。

霊夢を囲むようにして文が黒い風を伴って動く。それを回避するべく霊夢は上へと逃げて霊弾を打ち続けた。

彼女が動いたたびに放たれる弾幕。その合間を縫ってさらに旋回、回避する。

「しつこい女は嫌われるわよっ！」

結界「パパラッチ撃退結界」

結界が文を捉えた。その衝撃に思わず顔を歪ませる。

「な、なによこのスペル！」

「いつか貴方に使おうと思っていたのよ」



霊夢が晒す。

夢符「退魔符乱舞」

退魔符が一斉にばらまかれ、それが乱舞する。

踊り狂いながら舞う退魔符が文を捉えた。

数十枚はあろうかという退魔符が文を襲う。さすがの文もあれだけの退魔符を食らったら洒落にならない。

「ふざ、けてんじゃ……！ないわよ……！」

風神の咆哮。

黒き風が荒々しく吹き上がる。無理やりにその結界が破壊されて退魔符ごと吹き飛んだ。

「ちっ」

「あ、アンタ私を何だと思っているのよ……！」

妖怪1人の専用結界なんてスペル聞いたこともない。それにそのスペル名がもう文を馬鹿にしているとしか言いようがない。

「パパラッチ」

「私は、清く正しい新聞記者よ！」

風神「風神木の葉隠れ」

黒い風が舞う。

幾多の実体を持つ風の弾幕が霊夢を襲う。

宝符「躍る陰陽玉」

それらの風が博麗神社の神器の1つ、陰陽玉によって防がれる。

「行け！陰陽玉！」

陰陽玉が一齐に文を狙う。その陰陽玉自体が自立してその玉からレーザーが放たれる。

「くっ……面妖な。まさか、これが噂のフア」

「宝符『陰陽宝玉』」

言わせないとばかりに宣言するスペル。陰陽玉が光り輝き、爆発する。

それが生み出す衝撃を直に喰らって文は悲鳴を上げながら吹き飛んだ。

巫山戯ている場合ではないと、文は顔を引き締めた。

### 風神「天狗風」

山から風おろされる風が文を包む。そして、それを一気に凝縮して霊夢に放つ。

「ふん、こんな一直線」

### 散。

霊夢の前で風が弾けて貫く。その衝撃、内蔵やらなんやらがえぐれるような感覚に思わず息を漏らした。さらに、その風が纏わり付いて離さない。

「突符『天狗のマクロバースト』」

風が萃つまる。

密度の濃い風がやがてレーザーの如く放たれた。

その手から伸びる風のレーザー。それが霊夢を直撃する。衝撃の風が生みそのまま吹き飛ばされた霊夢であるが、追撃の手を緩めない。

旋符「紅葉扇風」

扇を振るう。

1度。振るわれ風の刃が突き抜ける。

2度。さらに風が突き抜ける。

3度。もつと風が突き抜ける。

何度も、何度も振るわれてその風は霊夢を離さない。四方から振るわれる風が霊夢の体を殴るように駆け抜け、あつちにこつちに体が吹き飛ぶ。

まるでなぶり殺さんとばかりの風の塊はやがて収まり、だが風神は追撃を収めない。

岐符「天の八衢」

天から伸びる風の塊。それが霊夢を地に叩きつけた。

元より手加減する必要がないと言ったのだ。そして、博麗の巫女とはこれくらいで倒れる奴でもない。

「……っ！」

やはりと、地からレーザーが伸びて文はそれを避ける。

亜空穴。

亜空から現れるのは霊夢。アミュレットを放ちそのまま拡散する。

そのアミュレットを喰らい、体勢が崩れた。

「お返しよー！」

神技「八方鬼縛陣」

陣が組まれて文を縛る。強烈な退魔の陣に文は悲痛の声を上げた。焼けるような痛み。それに霊夢は追撃をかける。

符の書「夢想妙珠連」

妙珠が連なり、文をさらに縛る。さらなる激痛。完全に文は縛られて動きを止めた。

符の式「陰陽散華」

陰陽の陣が霊弾を散らす。まるで華が咲くかのように広がる霊弾。

マズイっ

膨れ上がる霊力に対して文は唇を噛み締める。

「はあああああああ！！」

黒い風の弾幕が体を包み、自らを爆ぜる。

「あいつ……！」

無理やりに爆せてその衝撃で陣が崩れた。なんという無茶をする。だが、すでに技は出来上がってる。そこから間に合うわけがない。

「符の参『魔浄閃結』！！！」

陰陽の霊弾と魔浄の光が組み合わさり1つの光の霊弾を創り上げた。その強大な力。それが文を包まんと迫る。

それが文と接触したとき、眩いばかりの光が輝き霊力の波が拡散した。

さすがの文であっても、これなら。

「っ！？」

光が晴れた時、文の黒い風が文自身を包み隠していた。

「無双風神」

風が拡散される。

より一層の濃い風の弾幕が文を守っていたのだ。あれだけ叩き込まれてもまだ平然としている所を見て、霊夢は舌打ちをする。

本当に、面倒だわ……！

風を纏いながら、文は唐突に口を開いた。

「……私が師匠に弟子入りを申し込んだのは、ただの暇つぶし風神の取材をしやすくするためでもあったのよ」

「……」

黙って霊夢が聞く。こんな場でも唐突に話す文の言葉を聞くのは本当に無駄に律儀だ、と文は晒う。

「でも、師匠と修行を繰り返す内にそんな気持ちなんて吹き飛んだ」  
唐突に取材を申し込んでも相手は神だ。だから、相手にされない

だろうと、まず弟子入りすることで友好関係を得ようとした目的すらも吹き飛んだ。

彼は1つ1つ丁寧に教えてくれた。何百年を生きたとしても何千年生きた経験の差は大きい。どのように風を操り、どのように風を使えばいいのか。

それまで自分の力を確信していた文は間違っていた解釈を正して、風を操るように試みた。

「丁寧に教えてくれる彼に、少し後ろめたくなって正直に言ったのよ。私は、実は取材目的で貴方の弟子に入ったんですってね」

彼は笑って言ってくれた。

そうか、俺は暇つぶしでお前に教えているから別にそんなの気にしないけどな。

「暇つぶし程度で自分が培ってきた技を普通教える？」

文は笑ってつぶやく。

「……随分と、風間さんが好きみたいね。貴方」

好き、好きねえ。

たしかに、大好きだ。博麗が言う好き。その好きは文にはまだわからない。

師匠としてか、異性としてか。



でも、大好きであることは間違いない。

「そうね、大好きよ。だから、この技を使って負けることは私には許されないの」

言いながら、文は黒い風を掌に集めた。

「霊夢。覚悟しなさい。多分、これ手加減できないから」

風が、あらゆる風が集まる。

自分の妖力を合わせて、暴風を掌の上で圧縮する。

荒々しい妖風が集めてそれが出来上がる。

風符「螺旋丸」

「……っ!？」

凄まじい力に霊夢は思わず本能的に身構えた。

あれは……！マズイ……！

「行くわよ！」

風符「天狗道の開風」

風の道が霊夢を捉える。竜巻の中心の中で文ははじけ飛ぶ。

風の道が霊夢を捉えられて、避けることが出来ず霊夢は慌てて札を取り出す。

「夢符『二重結界』っ！」

結界を形成する。

だが、これでは足りない。

あれはマズイのだ。

霊夢の勘が体を動かした。

「結界『拡散結界』……！」

さらなる結界を多重でかける。

レミリアのゲンニグルすらも届かないであろう。多重の結界。

だ。。。

螺旋丸はその結界すら破る。

文の螺旋丸が霊夢が張った結界をことごとく破る。障子をやぶるかの様に容易く、霊夢は鳥肌が立つのを感じた。

マズイ、これはマズイ！

螺旋丸が目前まで迫る。

その風は嵐の様。

そして、遂に最後の一枚が破かれた。

勝った。

その文は確信する。

螺旋丸が霊夢の体に辿り着く。  
。

その瞬間、

世界が廻った。

視野がグルリと1回転。そして吹き飛ばされる。

突然の事に驚き、文は周りを見渡す。

自分は霊夢を通り過ぎていて、その手には螺旋丸はない。背を見せる霊夢は螺旋丸を喰らった形跡もない。

なにが、何が起こったの……？

「悪いわね、文」

霊夢が少し、振り返る。

その目は虹色に染まっでいて、文は体を竦ませた。

「貴方はよくやったわ」

まるで、敗北を言い渡すかのように口にする。

吹き上がる霊力。

まだこんな余力を残していたのか、と文は顔を歪ませる。

虹色の目は虚空を見据えて文を捉えておらず、文は体を竦ませながら息を吐く。

空を飛ぶ程度の能力。

その能力は自分が飛ぶだけではなく、あらゆる物を空に飛ばせる。

弾幕もまた然り、どんな攻撃もこの能力を前にしては効かない。

彼女の最強の能力。

「正直、これは疲れるし使いたくはなかったんだけどね。喜びなさい。コレを使わせたのは貴方が3人目よ」

言いながら、霊夢はため息を吐いた。

「やっぱり、貴方化け物ね」

「失礼ね。まだ人間やめてないわよ」

夢境「二重大結界」

文の体を結界が捉える。

そして、霊夢は印を組み始めた。これで終わらせるつもりなのだろう、霊力が吹き上がる。

散。

彼女が指が形を作る。

瞬。

印が組まれる。

寂

その形が作られるたびに霊力が上がる。

侘

恐らく、彼女の最大の技

集



その形　　五芒星が作られて陣が完成した。

師匠、貴方でも勝てるでしょうか。

あらゆる弾幕を受け付けない、歴代最強の博麗霊夢を。

卑怯ですよ。チートですよ。

でも、私は諦めませんよ。

師匠の技は無敵なんです。この技を使って負けることは師匠の顔に泥を塗っちゃいますからね。私は負ける気ありませんよ。

「お賽銭の恨みよ。手加減はなしだ」

ラストワード

「夢想天生」

私は、この技で  
！

ラストスペル。

風神「螺旋丸」

激闘の妖怪の山。

「あー少し、やり過ぎたかしら」

霊夢が小さく呟いて気絶する文を見下ろす。

「……てか、お賽銭！」

霊夢が文に近づき、ポコポコになった文をさらに往復ビンタしておいうちをかける。

本人は至って真面目に、気絶した文を起こそうとしているのだが、到底さらに意識は沈むわけで。





### 31話「異変六の風」(後書き)

鬼畜……！霊夢さん……！鬼畜……！

圧倒的……！圧倒的チート……！

てなわけで霊夢戦。

文ちゃんポコポコの回でした風符から風神になったのは一応の強化版。名前思いつかなかったので札名だけ変化。

次回は幽香と美鈴。

### 32話「異変七の風」

黒という色に何をイメージするだろうか。

心が黒い、感情が黒い。腹黒い。

いろいろな例えの中で、黒という色は悪いイメージがあるのは、その色が明るくないからである。また、古来より悪者というのは闇つまり黒の色が定着しているからだろう。

だが、黒という色は強い色だと風間は言う。

何色にも染まらず、その色は濃く、

また、もつとも世界を支配する色なのだと。

なにせ、宇宙の色であるから。

放出する色は黒。

その色が美鈴の中華服を染め上げてその纏し気は自身の力を底上げする。

黒い中華服に身を包み、帽子を投げ出してその手に黒い革の手袋を付ける。

七色の気を操る美鈴の満開はあらゆる気を集めて外と内を合わせて強化する。本来、気には色はない。故に美鈴の気というのは少々特



殊な気であると風間は説明する。

気が実体を持たせる。それは滅多にできない事である。

気力、というのは霊力、妖力、神力に並ぶこの世の4大勢力の1つである。なのに、数えて気力だけが扱う者が少ないのはその難しさ故だ。

大抵の生き物は気力を持っている。それは妖怪にも人間にも共通して言えることであるが（神にはない）、気力は実体に出すことが難しいから　いや、実体に出すことは、ほぼ無理なのだ。

何故なら、すでに実体を持つ、別の力が体の中にあるから。

人間の70パーセントを水で占めているのに皮膚を切れば水ではなく血が流れてくる。

なぜなら、心臓を動かしているのは血であるからだ。

気力もまた同じ。

でも、美鈴は気を使う。

美鈴にも妖力はある。妖力という血があるのに、気という水を使うのは、美鈴が『気を操る程度の能力』であるからだ。

その能力は能力を持つ生命の中でも強者の部類に入ると、風間は言う。

気というのは自然だ。

空気と同じ、あらゆる所に存在し、生きるものが持つ1つの力。

その力は生き物がこの地球に存在する限り。その力は無限に存在する。

「せいぜい、楽しませて頂戴！」

その無限の力が集められた時、美鈴の気力は膨れ上がり続ける。

「遊んであげるわよ、中華娘。この私が相手してあげる」

幽香は大きく体を広げて構えた。

「口を開く暇があったら、体を動かしたらどうですか？」

冷たい言葉。その言葉は遠くにあり、世界が移動していた。膝を着いて、倒れはしないものの、その遅れてやってきた痛みを硬直させる。

息が吐くまもなく呼吸ができない。

震える顎を押さえてやっとの思いで息を吐いた。

そして、顔を上げる。

美鈴は遠くにいて、自分は膝を付いている。何をされたのか理解できないまま幽香はようやくの思いで立ち上がる。

思考を一つにまとめる。

衝撃で吹っ飛んだが、一瞬だけ見えたのを思い出す。接近して、腹に何かを当てられた事だけ。

確認しただけでも腹に一発。後は見えなかった。

でも、確実に3発以上は喰らっている。

なるほど、確かにすごい。

「言ったでしょう。退屈はさせませんって」

黒い気という実体を持つ程に濃い気力がこの花畑を支配する。その気迫。その威圧。何時ぞやの風間を思い出して体が久しぶりに震えた。

でも、それだけ。

対峙するのは神じゃない。妖怪だ。

幽香は思う。

楽しいだろう。この力。彼女が言った通り退屈もさせないし、息を吐く暇も与えないだろう。彼女は近接戦闘者<sup>インファighter</sup>。先ほど以上の猛攻撃が自身を襲うだろう。

手加減する義理も、驕る気ないが、それでも彼女の戦闘狂として、心から喜ばせる事はないだろうと幽香はこの戦いの熱気の中で、心の奥底で冷めた考えがよぎる。

濡れるほどの相手は、この世で私はたった1人しか知らない。

負けても、清々しいと思える相手をこの世で私はたった1人しか

知らない。

「構えてください。フラワーマスター風見幽香。戦いはこれからです」

「そうね、これからだわ」

弾幕ごっこ。

スペルカードルールにて定着した幻想郷の決闘。

だが、この時の花畑は闘技場である。故に、繰り広げるのは綺麗に彩られた空の弾幕ではない。

黒い血が飛び交う肉弾戦だ。

黒符「彩黒の風鈴」

スperlカードの宣言と共に繰り広げられる弾。だが、根本的な攻撃方法は肉弾戦である。

弾幕を囿とし、決めるのは自身の体。それが美鈴の戦闘スタイル。弾幕を放ち、生まれる隙を突く。

だが、幽香も伊達に長生きではない。一切の隙も見せず、また消えるような速さで近づくと美鈴の体を見逃しもしない。

「2度は喰らわないわ」

彼女の拳をいなして傘で美鈴をなぎ払う。防いで、さらに追撃をかける美鈴に幽香は瞬間で足で美鈴の足をなぎ払った。

拳法と言っても、すべての近接戦闘の要は足にある。

美鈴が空中戦が苦手だとボヤいていたのも、空に足が着かないからだ。その力を支え、その力を強める足は拳法に然り、すべての格闘戦術に置いて大事な軸。

幽香の一蹴は気で強化されてもなお、美鈴の足に響く。

そのパワーに思わず顔を歪ませて体の体勢を崩した。

それで終わるわけがない。

体をくるりと回転、そうして追撃をかけるべく、跳躍。

傘を広げる。

魔砲「ノンディレクショナルレーザー」

これは、魔理沙のっ！

畳み込まれ、レーザーが美鈴を地に叩きつけられる。

普通では蒸発するようなレーザーでも気を纏い満開状態の美鈴には腹に痛みを感じただけで済んだ。

すぐに体勢を立て直して美鈴も跳躍する。瞬動の動きで即座に幽香の後ろに回って美鈴は空中で足を着けて踏ん張る。

剄脈から気を集中させて肘打ち。背中に衝撃をつけて地に墮ちて息を詰まらせる幽香に美鈴は攻撃の手を緩めない。

美鈴の得意技は技をつなげるコンボ。そこから大技につながることも可能なスピード型。さらに、気は内側を直接叩き、その力が無くとも岩を貫通させる。

接近戦のプロフェッショナル。

風間ですら、敵わないその近接は幽香に防げるわけがない。

だが、ここは畑だ。

幾度の連続技。妖怪であるが故に体力の心配はいらす、気力は底上げされて増大。一向に減る様子もない。

しかしながら技の間にはどうしても隙間ができる。

そんなコンマの隙間に通すように花を操る事はさすがの幽香でも無理だ。

でも、1秒あるなら行ける。

我慢しろ。

必ず隙があるはず。



拳が黒を纏う。体を伸ばして振り切る拳。幽香の目が光った。

着弾点を受けて、ワザと体を後方に押し流す。幾多の急所に打ち込まれて体があまり言う事をきかずにそこまで下がることはできなかったが、リーチ。間合いが外れて美鈴の足がかすかに動く。

ここっ！

タイミングを測っていた幽香が、手を向ける。触手のような植物の手が美鈴を絡み取った。

いくら、気によって力が強くなっても体を動かせない関節技であるならいける。ここからゼロ距離でレーザーを撃ちこめば

そう思って傘を突き出したが、幽香は顔を歪ませた。

花が、

枯れた。

何が起こったか。すぐに分かった。美鈴の纏う黒の気。それが花の精気を奪い取ったのだ。

頭に血が昇ったのが、すぐに分かった。

花の精気を吸い取る。彼女の黒い気は、すべての精気を吸い取る。  
花を枯らせる。

美鈴の拳が迫る。それを幽香はつかんだ。

乾いた音じゃない。

鈍い音だ。

それほど美鈴の拳は強く、だが幽香はそれをしっかりと受け止めた。

それをつかみ、投げ出す。

地に叩きつけてその手を握ったまま傘を突き出した。

魔砲「マスタースパーク」

レーザーが地を削ってクレーターを創りだす。

「があ……はあ、はあ……！」

クレーターの中から美鈴が跳躍して飛来する。

肩で息をして、腕をかばうようにしているその姿。

肩から血を流し、そのダメージは軽いとは言えない。

「誰が、起き上がっていいって言ったの？」

落ちなさい

さらなる、傘先が美鈴に付けられる。後に回っていた幽香がさらにレーザーを生み出す。

その前に、動いて、円の流れて傘先を弾いてずらす。

レーザーがずれて空へ伸びる。

「くっ」

だが、本来の狙いはレーザーではなく周りに展開されていた弾幕であった。

レーザーばかりに気が行って周りをよくみていなかったのか。

幻想「花鳥風月、嘯風弄月」

爆音が花畑に包み、再び闘技場はクレーターに包まれる。

黒い気が発散して広がり、美鈴は地に堕ちた。

満開が解けたか。

黒い気が発散したのを見届けて幽香は見下ろす。

精気を吸い取る　ましてや花を代価に自分の気を高めるなど、吐き気が出る。

昇った血を下ろして幽香は再度ため息を吐いた。

やはり、風間と戦いたかった。

確かに、美鈴は強かった。紅魔館での噂とは違って、戦ってきた中でもかなりの実力を持ちあわていると言ってもいいだろう。

だが、所詮、紅魔館の門番程度、私が負ける筈が

「っ!？」

再び、跳ね上がった気力。

幽香は美鈴を見る。

黒い気を纏わせて、こちらを見上げていた。血を流しながらも戦いの目をこちらから外さない。

満開状態は最後まで解けていなかった。

最後まで気力は続いていたのだ。

気は自然。どこにもある力。

故に、無限の力だ。

本人が倒れなければ、いくらでも補充できる。

「まだ、終わっていませんよ！風見幽香あー！！」

スペルカードを宣言する。

禁忌「スリーオブアカインド」

宣言と同時に黒い気が人の影を作り、やがてそれは美鈴本人の形を作る。姿形も似た合計3人の美鈴。

このスペル。

まさか、狂った吸血鬼の

「私のは、3人が限界なんですけどね」

決めますよ。

後ろで声がした。

振り返る間もなく、衝撃が体を運ぶ。



極符「彩黒乱舞」

黒い気を纏い、舞うのは美鈴。

激しい乱舞の攻撃は、終わる気配を持たず、またその攻撃が体の髓まで染み渡り痛みを残す。

やがて、永遠とも思える攻撃が終わり、地におちる。

その先には2人の美鈴。まるで対峙するかのような2人の間に、幽香が堕ちてくる。

その手には黒く光る気が纏う。

華符「彩黒蓮華掌」

2つの掌底が幽香を挟むようにして、ぶつかると。

同時にそれぞれの反対からクロスカウンターのように入る掌底。

2人がすれ違い、通りすぎた後。

内側から爆ぜるような黒い光が巻き起こる。

やがて、何もかも包み込んだ後に、自分で作ったクレーターの上。

幽香が倒れていた。

気絶した彼女の横。美鈴は疲れたように見下ろす。

スペルが消えて他の2人の美鈴が消える。

「……ごめんなさい」

小さく謝る。

何に對してか。ボロボロの幽香の隣。

何故か奇跡的に残った花が小さく咲く。

満開が解かれ、美鈴は息を吐いた。

「少し、疲れました」

小さく呟いて空を仰ぐ。そして、襲うのは体の脱力感。倒れるようにして地に座った。

夜空の中に浮き上がる大きな月。

後を支配するのは、黒の色。

幽香 対 美鈴

結果 美鈴の勝利

### 32話「異変七の風」(後書き)

幽香ファンの方、すいません。後でケア入れます。

次はレミリア戦。感想は異変後

### 33話「異変八の風」

吹き荒れる嵐。纏まった風が頬を過ぎって擦る。不気味な風の音が威圧するかのようについた。弾が群れをなし、それが弾幕となる。風がそれを運び、散った。

それを一つ一つ、丁寧に避けて自らも弾幕を放つが風がそれを許さない。

この場を支配するのは、間違いなく彼だ。

だが、この場には時を支配する者も居る。

弾幕が時を止め、風が時を止め、その場に存在するすべてのものが止まる。その時の中で動く影。銀髪を靡かせ、その手から無数のナイフを投げつける。

「チエック」

幻世「ザ・ワールド」

時が動きだし、風神を囲むナイフが一斉に襲いかかる。

王手であるが、詰みではない。

圧縮された風が分散して暴風がナイフをたたき出す。

四方を囲んだナイフが力なく地に堕ちて、それを見届ける間もなく風間はスperlを叩きつける。

### 風神「霸王楓月」

風が、圧縮された風が四方に飛び出す。

それを纏い、自分の周りを周期させて風間は空へ飛び出した。

十分上昇した後、それらをまるで叩きつけるかのように放つ。圧縮された風。それらが二人の目前で幾度の拡散を起す。

爆発に似た拡散は周りをすり削り、地に堕ちた物はまるでクレイターのように沈んだ。

夜符「デーモンキングクレイドル」

黒いような、紅いような。そんな弾幕が螺旋を描いて絡まる。そして、その先端は風間を指し、一直線に飛ぶ。

神速の螺旋はその心臓を打ち抜かんとするがいと也容易くその前の障壁に阻まれた。

護符「晴明印の陰陽壁」

頑固として隔てる障壁。レミリア・スカーレットは舌打ちをしてさらに飛来する。

「  
チエック」

凜とする声。『<sup>チエック</sup>王手』の合図。

隔てる障壁の裏で銀に輝くナイフが光る。風間が動く。この距離。



その速さ。コンマの世界で動いて何もかもが消える。

### 風神妖怪

神速のスペル。射命丸の風神少女と同じスペル。その風神が動く度に弾幕が繰り広げられる。

「ちよこまかと！」

### 魔符「全世界ナイトメア」

闇が広がり、紅き眼光が光る。包まれる黒き狂気。広がる闇が風間を捉える。

### 傷符「インスクライブレッドソウル」

咲夜のスペルとレミアアのナイトメアが合わる。ナイフが闇に消え、そして風間を襲う。完全な視野外からの盲目的な攻撃。頼りなのは空気を裂く僅かな音。

厄介な……。

小さく呟く。

視野をうばられた風間にとって感覚だけが頼りだ。

なのに、空気を裂く音は反響し、何処にあるかわからない。

なら、このナイトメアを

「風節『山の卸風』」

宣言するスペルカードは範囲型。風が円を動いて集まり、やがてゆっくりと拡散する。霧が晴れるようにナイトメアが晴れた。

広がる視野。そして目の前には銀色に輝くナイフ。

卸風がそのナイフに纏わり付く。そして、一気に弾いた。

デーモンロードアロー

悪魔の形を作った弾幕がまるで射る矢の如く飛ぶ。狙うは風間。旋回してよけるも、しつこく纏わり付く。

「散れっ！」

言霊。

すべてが散る。

チラチラと紅い破片を月明かりで光らせながら落ちる弾幕にレミアは息を吐いた。

「言霊　貴方、やっぱり化け物ね」

「吸血鬼にバケモン扱いなんてされたくねーよ。俺は神だ」

肩を竦ませる。

「大体、この位どつてこともないよ。紫だつて朝飯前」

「あの妖怪賢者と一緒な時点で化け物よ」

笑いながらレミリアは手を翳す。

神槍「スピア・ザ・グングニル」

螺旋を描いて創りだす血のような紅い神槍。グングニル。

「過大評価しすぎだぜ」

突風「風神の風槍かぜやり」

両者が弾く。

それぞれが槍を振るい、その振動は波紋を持って弾ける。その波動に思わず咲夜は身を縮ませるが、すぐに主と共にかけ出す。

だが、そこに人間が入り込む余地はなかった。

神速の槍。

紅い槍と風の槍が相見舞う度に衝撃を生み、彼の腕が振るわれる度に風が起こる。彼女の腕が振るわれる度に妖力の余波が飛び交う。

咲夜は月の下で繰り広げられる槍の合戦に思わず呆けた。

私が、入り込む隙なんて無い。

二人は正真正銘の化け物である。

だが、咲夜とて主の従者である。

主を助けるのが使命。

ザ・ワールド。

時を止めるという行為。決してこれは無限に出来る物ではない。力は有限であり、咲夜の霊力が切れればそれまで。

だが、十分に風間を取っては脅威となる。

時を止めて、弾幕を間近に張る。

「しつこいつてのー！」

風符「風神の風袋」

風の弾幕が散ってナイフを飛ばす。だが、十分に接近された無数のナイフすべてを弾く事はかなわず、その肩にナイフが刺さる。

「ハア！」

息を吐いて一閃。グンニグルが貫かんと迫る。

「墮ちろ！」

誰がっ！

風の槍　薙刀を振り切り、それを弾く。だが、入れ替わるように咲夜が間合いに入り込んだ。薙刀など、間合いが長い獲物などは接近されると厳しいものがある。それをわかっている咲夜は懐に飛び込み、ナイフを振るう。

金属音が響き、さらに息するのを許さないような連撃が風間を襲う。

それをすべていなして、無理やり風を叩き込んだ。

吹き飛ぶ咲夜。だが、入れ替わるレミリアに風間は思わず舌打ちをする。2対1という戦いにこちらは休む暇もないような連撃はさすがに堪えるものがある。

「俺だって疲れるんだぞ！畜生！」

「あら、貴方神でしょう？」

必殺「ハートブレイク」

必殺の名にふさわしく、そのスペルは驚くような速さで風間を貫く。

咄嗟にずらしたが、それでも脇腹に一突き。

「やっと捕まえた」

痛いというより、熱い。

そんな感覚を得ながら脇腹を見る。見ると尖った先端に鎖のようなものが付いていてそれがレミリアの手から伸びていた。

「生憎、縛られるのはごめんね！」

鎖でつながれているそれを、無理やり引き千切る。

脇腹から無理やり外されて、血が出るがすぐに能力によって再生する。

「そういえば、神の血ってどうなのかしら？随分と美味しそうだけれども」

「知るかよー！」

言いながら、スペルを叩きつける。

風神「風華電嵐」

風が、集まり、1つの竜巻を作る。中で冷気が集まりそれが電となって散る。

氷の礫は竜巻と共に飛び散り、それが弾幕のようにレミリア達を



襲った。氷の礫と云えども、嵐と共に舞い上がれば十分な脅威となる。博麗神社の中央から伸びる竜巻を中心に四方に伸びる礫。当然と風間にも被害が及ぶが風を操るのは風間である。

対抗するように弾幕を繰り広げる咲夜とレミリアから風間を護ようにして礫は舞い上がり、それを相殺するのだ。

ならば、とレミリアは妖力を集める。

中央にそびえるあのスペルを壊すのみ。

グンニグルを振りかぶる。

紅い閃光が駆け抜け竜巻を貫いた。

はじけ飛ぶ嵐。礫がより一層散るが竜巻が消え去った。

冷気の塊が月夜の中で光り、舞う。

互いが対峙して3人はそれぞれ構えたまま動かない。

ここまで一進一退。2体1でもこれなのかと、レミリアと咲夜は唇をかみしめた。

「なぜ」

気がつけば、咲夜は言葉にしていた。風間がこちらを見る。

「なぜ、貴方はこの異変を起こしたの」

それは確かに、レミリアも気になる言葉であった。風間が異変を起す理由は何処にもないのだ。いや、そうではなく。

物を盗む理由がない。

レミリアのカップ。妹紅の服。幽香の花。

そして霊夢のお賽銭。

そう、何処にも理由がない。

考えてみればおかしなことばかりの異変である。

そして、一番に気にかかる彼のここまでの言葉。

まるで

「そうだね」

肩を竦めてみせて風間は笑ってみせた。

「その答えが知りたくば俺に勝つんだな」

まるで 戦う理由を作るような。そんな言葉が多いのだ。

「でも、まあそうだな。お客さんも来たようだし。そろそろ終わりにしよか」

お客？

その言葉と共に空気を裂くような、そんな音が複数博麗神社に響いた。

「あー！ちょっと！所々壊れてるじゃない！」

言葉がして、レミリアは見下ろす。

霊夢を始めとするメンツがそこに居た。それぞれ戦いの後であるのか、皆一様ボロボロである。服は破け、少し焦げている者もいれば、血を流す者も居る。

「おう、お前ら。どうだ勝ったかー」

そんな彼女らに気さくに風間は声をかけた。

「すみません。じじよー。負けでじまいましたあ」

「ははっ、アタイは引き分け」

文が涙を流しながら謝り、チルノはバツが悪そうに頬を掻いた。

「私は完勝でした！」

誇らしげに胸を反らす美鈴。その大きな胸がそり上がり自慢気に語り始める。

「いやー是非風間さんにも見せてあげたかったですよ。圧倒的力であの幽香さんをまるで赤子のよう　ってあああ！イタイタイ！幽香さん！タンマ！そこ骨がっ、骨がっ！」

「誰が、赤子ですって？言うようになったじゃない。『美鈴』」

「でも、事実私が勝って　ぎゃあああ！？そこ、その関節は曲がらっ！」

元氣そうでなによりである。風間は苦笑いを浮かべる。

まあ、予想通りであるが美鈴が幽香に勝ったのは少し意外であった。勝算はあったとは言えあの幽香だ。2人を見るに、相当殺り合ったのだらうと予測できる。

あれだけ、騒ぐ元氣が残ってる分怪しいが。

それは良いとして。

「こらー！風間！早くお賽銭返しなさいよ！ぶん殴るわよ！」

本当に金が大事らしい。

「まあ、まてつて。この試合終わったらな、ちゃんと『返してやる』から。黙ってみてる。そろそろ終わらせるから」

空気が、一変する。

先ほどまでの和やかで賑わった空気が一変した。

下で馬鹿やる者達にレミリアと咲夜も肩の力を抜いていたが本能がすぐに構えた。

靈夢達も何事かと息を飲んで見上げる。

「お前らは　霊夢達は皆それぞれあいつらの満開を見たと思うが。俺のはちよっと違ってね」

言いながら一枚のスペルカードを取り出す。

「元々、満開は俺が『神』としてなるための業だったんだ。俺は能力上『妖力』と『神力』を合わせ持ってる。神として不純なゆえ。つまり半妖半神ってことだ」

だから、これは完璧な神となるための業。

とくにご覧あれ、神の姿を。

「咲夜！くるわよ。気い引き締めなさい！」

「はい！」

咲かせましょう。

神の花を。

滿開「東方風神記」

光が、支配する。

夜に輝く光は暖かく、急激な眩しさに目を痛みつける事はなく、その姿は徐々に現れる。

羽衣を着て、和の服を着こなし、風が舞って纏い付く。

「あれが……師匠の満開」

文が呟いて見上げる。

自分たちの満開とは違う。何かが根本的に変わっている感覚。あれは風間であって風間ではない。

風神と名乗るに相応しいその姿。その力。

神力があたりに散って重圧が降り注ぐ。

威圧。心が潰される。その圧倒的な力に皆息を飲んだ。

「改めて、自己紹介しよう。幻想郷の者達よ」

黒い瞳がすべてを見通して、見向けられる。

「風間大介。八百万の神の1柱。風を司る風神だ」

衝撃「風神の通り道」

すべてが、一瞬にしてかき消される。

動いた姿すら見えない。気がつけば風間は後ろにいて、レミリア達は振り返った。

途端、世界が歪んだ。

霊夢は、文はこれを知っている。

ソニックブーム。

圧縮性流体の中、音速を超える速さで伝わる圧力変化の波。文も自分の力を総動員して似たようなモノができる。



だが、あれはただ通った（・・・）だけ、そのスペルの名の通り。  
風神が通っただけなのだ。

その通り道。その車線上に2人が居た。それだけなのだ。

すべてがはじけ飛ぶ衝撃波。

世界が歪み、骨が悲鳴をあげる。レミアアには脳が無いが、咲夜には人間としての脳がある。それが揺さぶられ、音を破る衝撃が生み出す爆音に耳が痛む。金属音が直接鳴り響く。

そして、それがやってくる。

まるで風間に吸い込まれるかのように2人は引き寄せられた。

刺のある波に掬われ全身にその刺を刺しながら。

「風符『螺旋丸』」

静かに呟くそのスペルは確実に力を持つ。ソニックブームによって運ばれたその風が一瞬にして掌に集まる。

あれは、風間の代名詞！

一番厄介でヤバイスペルだと聞いてあるあのスペル。あれを喰らって無事なわけがない。

「くっ 時よ！」

故に咲夜は最速で時を止めた。少しでも時間を稼ぐ。せめて間合  
いから離れなければならない。

だが。

風間はその時を引き裂く。

「悪いね  
」

止まった時の中で風間が動く。驚愕に顔を驚かせる。

そんな、馬鹿な事が。

ここは私の世界だ。

誰にも入れない。

誰にもわからない。

私だけのたった1つの世界  
。

貴方って人は  
！

「神に不可能はない」

螺旋丸が2人を合わせて吹き飛ばす。螺旋の風は伸びて、博麗神社の地に落ちる。

「なんちゃってね」

レミリア・咲夜 対 風間

結果 風間の勝利

### 33話「異変八の風」(後書き)

さて、次で異変は終わりですね。

咲夜に関して、時が止まった場合その実体にナイフを指すことができないう理由についてってなんですかね？

時が止まったら固くなるのか？

さてさて、最近オリジナル作品を書いてみようかと思ひまして。

二次創作を多々書いてきた私ではありますが、オリジナルを書いてみても良いかなと思ひ始めたこのごろ。

でも、結局どっかの作品と類似しちゃうと思ひますけどw

### 34話「異変九の風」

神にはそれぞれ能力がある。

神奈子なら戦いの力を広げる能力。これは軍神として、戦いの神としての能力だ。自分の力を相手に譲渡することもできるし自分の力を拡大することもできる。力を有効活用できる能力だ。

諏訪子であるなら、祟を操る能力を持ち合わせている。祟神としての能力である。対象者を呪うこともできるし、また迷いも断ち切ることができる神だ。

「乾」は八卦で「天」を表し「坤」とは八卦で「地」を表す。

相対する天と地。古来より古くから祀られた神。風間なんて神として比べるならまず勝てない。

天を創造し、支配する神奈子。地を創造し、支配する諏訪子。

風だけを司る神である風間は　ましてや半妖半神である彼が勝てるわけがないのだ。

だから、必死こいて風間は神としての力を探して、そうしてあの業を見付け出した。

神聖化。それが満開。

そうして神となって風間の能力、それは【あらゆる事を保つ程度の能力】これで他人に干渉できる。それが風間の神としての能力であった。

ただし、またこれも気まぐれで生命力、老化、妖力、霊力、神力。これらは干渉できないし、変に保とうとすると力が逆流して自らが破裂するという、使えるのか使えないのかよくわからない能力であった。



満開は本当に疲れる……。

風間は息を吐いて地に降り立つ。できるだけ手加減していたためか、地に堕ちたレミリアと咲夜が悲鳴を上げながら体を起こした。

「おい、大丈夫かー」

「全然、大丈夫じゃないわよ……」

言いながらも体を起こし膝を着いた。

「んじゃ、まあ試合も終わったし返すもんはすぐ返すよ」

言いながら札を何枚か投げつけた。

途端に光輝く。

文達が使ったモノと同じ転移符である。皆それぞれが手元に自分のモノを取り戻し、息を吐く。その状態は前のままと変わらない。

「風間ああ！」

と、次の瞬間衝撃が風間を襲った。

何事かと思い、気がついたら宙を舞っている。霊夢の渾身の一撃が風間を襲ったのだ。

「な、なにゆえ！？ちゃんと返したじゃん！」

涙を流し、頬を抑えて霊夢を見る。

「あースッキリした」

手を叩いて、そうして風間を見下ろす。

「お賽銭の恨み」

「だ、だからちゃんと返したと（ry）」

「あ、じゃ私も」

「あら楽しそうね。私も一撃行っておきましょうか」

バコツ。バキ！

言葉にしないうちに妹紅と幽香がそれぞれ殴る、蹴るを行いさらに風間が飛ぶ。

地に伏してさらに涙を見せながら口を開く。

「ちょっと！何すんだよ！」

「お花の恨み……と、趣味」

「服の恨み」

「今、俺は満開切れて、しかも腹から血流してんだだけど！しかも幽香に関しては趣味かよ！人を殴るの趣味かよ！」

訴えながらも頬をさする。彼とて先ほどまで戦いを行っていた体であり、それぞれが容赦なく殴る蹴るを行うので体が悲鳴を上げていた。

「なら、私はカップの恨みね」

「私も一発殴らせろ」

咲夜に関して殴るといふより刺すのほうが正しいのかもしれない。それぞれが思いに一撃を加えて、完全に風間は沈む。

これ、もう刺してるよね……？殴ってないよね……？

呟きながら、悶えた。

「ひ、酷い。まるで容赦がないわ……」

文もそんな光景に旋律する。自分の師がボコられているのを見届けるあたり、彼女も幻想郷の住人であろう。

「……んで」

一悶着。終わって霊夢が息を吐いた。肩を竦めて地に伏す風間を

見下ろす。

「なんでこんな異変起こしたのよ」

この異変。

霊夢、妹紅、幽香、咲夜、レミリアのそれぞれが大事なモノを盗み、そして対決することで起こった異変。明らかに無意味で有ることがわかる。なにせ、風間に取ってどれもどうでもよいモノであるし、そしてなによりやけに風間は戦いがって いや霊夢たちを戦わせているのだから。

風間は息を吐いた。

「紫」

「はいはい。紫ちゃんですよー」

風間の呟きに答えてスキマから現れる。その姿に皆一斉にため息を吐いた。

ああ、またこいつが関わっているのか。

「……ちゃんって歳でも」

グア！？

生々しい声と共にさらに風間が沈む。仰向けに倒れる風間の上に紫がおもいつきり乗ったのである。

「あら、なにか言ったかしら？」

「い……え、なんでも……ありません……」

苦しそつに呻く風間。

あらそう、と呟いて紫は風間から離れる。

「……またアンタが関わってるのか」

霊夢が心底ため息吐いて面倒臭そつに肩をすくめた。

「まあねー。今回の異変。私が彼に頼んで起こさせたのよ」

「なんのためによ」

幽香が少し不機嫌に呟く。

「幻想郷の戦力を計っていたのよ」

言いながら辺りを見回す。

「戦力？ 私たちのか？」

妹紅の質問に風間が答えた。

「紅魔館、永遠亭、向日葵の畑、そして博麗神社。これらの強者1  
人と対峙してその戦力を図る。紫からの依頼だ」

「なんのためによ。態々こんな面倒な事までして」

レミリアが盛大に息を吐き、そうして口を開いた。

「あら、幻想郷の管理者が住人の力を計って可笑しい？」

扇を口元に当ててかすかに紫は晒った。

幻想郷の管理者か。

紫に頼まれたのは本当に戦力を図るために決闘を申し込んで欲しいというものである。風間も教えていた文達の満開について試したいと思っていたし、その依頼を受けた。

幻想郷の戦力を計る？

霊夢達は首を傾げたがやがて息を吐く。紫に対して何を考えているか模索してもこちらが逆に疲れるだけである。そう皆思いやれやれとため息を吐いた。

戦力を計る。

その言葉の裏に隠された意味。薄々に風間は感じ取っている。

幻想郷で何かが起こる。

そのために戦力を計っているのだと。

その日。風間の奢り（強制）で宴会が開かれ、この異変は終わりを告げる。

そして、幻想郷を混沌に落とす、新たな異変はすぐに起こるの  
であった。





### 34話「異変九の風」(後書き)

ここから一話。さつきゆんの外伝を挟んで異変へ。

超スピーディーに行きます。

番外記「メイドさんのお友達」

十六夜咲夜。完全で瀟洒なメイド。時を操り、幻想郷内でもその能力はピカ一。容姿に優れて男が誰しも振り向く。吸血鬼を主にその仕事は文句の付け所がない。そんな彼女には1つの悩みがあった。

友達が居ないこと。

番外記「メイドの友達定義」

ある昼下がり。フランドール・スカーレットは安定した感情を持ったために地下から出て私室を設けられた。その私室の中で少し遅い昼ごはんのサンドイッチをほづばる。

「ねえ、咲夜ー」

隣で紅茶を注ぐ従者にフランは何気なしに訪ねた。

「咲夜は、お友達居る？」

突如の言葉。咲夜は首を傾げた。

「お友達………でしょうか」

「うん。咲夜つてばいつもお仕事ばかりして。たまにはお友達と一緒にねお話したり、遊んだりすれば良いのに」

これは、気を使って頂いたのか。

咲夜は微笑む。

「私は、お嬢様やフラン様のお側でお仕えするこの仕事を楽しくやっているので、大丈夫ですよ」

「嘘だっ！」

ビクリと咲夜は肩を震わせる。

「お仕事が楽しいわけないよー。お友達、本当に居ないの？私はたくさん居るよー。美鈴でしよーこあでしよーそれに、チルノちゃんや大ちゃん。それで、パチュリーと、魔理沙に風間！」

可愛らしく指を折って数えるフラン。

……。

安定しているとは言え、時々不安定になるのか。

「お友達は……居ませんね」

咲夜は考えて言葉にする。

最初に浮かんだのはよく話す、霊夢達であった。だが、あいつとは異変での仲である。魔理沙に至っては紅魔館の図書館の本を盗む程だ。これを友達と言うのならこの世の友達の定義を変えなければならぬ。

「えー友達居ないの。ダサイし悲しいよー」

「だ、ダサイですか……」

手についたマヨネーズを舐めてフランは頷く。

「うん。あのねー友達の居ないのって『根暗』とか『陰きやら』とか『ちゅうに』って呼ばれるんだって」

グサグサ。

純粹な笑顔が深く刺さる。

「これじゃ、咲夜は完全に瀟洒な『陰キャラ厨』『メイドって呼ばれるね』」

目眩がした。

十六夜咲夜。 19歳（永遠の）。 友達を作ることにした。

だが、友達とは一体なんだろう。今までに作ったこともないので  
咲夜は作るうにも作り方を知らなかった。

なら、他に聞いてみるしかない。

紅魔館。図書館前。今日も今日とて美鈴によって捕まった白黒魔  
法使い。せっかくなので訪ねてみた。

「友達の定義？」

すると、突然笑い出した。

なぜ、笑うのかしら？

「あーいや悪い悪い。友達だよな。うーん。死線を共にくぐり抜け  
ることじゃないかな？」

なるほど、確かにフランと美鈴は風間相手に弾幕の死線をくぐり  
抜けていた。



証言その1。白黒魔法使い。

友達は死線を共にくぐり抜けるらしい。

「友達の定義？」

永遠亭。薬を買いに出かけたついでに薬師に聞いてみた。彼女は天才と呼ばれているらしいし。何かわかるかもしれない。

すると、何故だろう。彼女も突然と笑い出したのだ。

一体何が可笑しいのかしら？

「ふふ……いえ、なんでもないわ。そうねー。お互いの秘密を暴露する仲の事じゃないかしら？信頼し合っているからこそ、抱えている秘密を打ち明ける。それが友達じゃない？」

なるほど、確かに大妖精が泊りに来ていたとき、フランとそんな話をしていた気がする。

証言その2。月の頭脳。

友達とは秘密を打ち明けるモノらしい。

「友達の定義？」

人里へ買い物途中。ばったりと人里の守護者と会ったので咲夜は友達について尋ねた。彼女は寺子屋の教師をやっているので何か知

っているのかもしれない。

だが、彼女もまた笑い出したのだ。

なぜ、皆私がこの事を口にするのと笑い出すのかしら？

「いや。すまん。悪気があったわけじゃない。……ふむ。友達の定義……難しいな」

「……難しい？」

「改めて考えるとな。……友達とは同じ釜飯を食べて、同じ布団で寝ることじゃないのか？」

なるほど、確かにフランとチルノは同じ釜の飯を食べて同じベットで寝ていた。

証言その3。人里の守護者。

友達とは同じ釜飯を食べ、同じベットで寝るらしい。

聞いてわかった友達の定理。

「友達とは凄いわね。ここまで他人と共に過ごすなんて……」

しかし、これに意味があるのだろうか。

わからない。

結局、友達とは実際に作って見ないとわからないということなのだろうか。

しかし、どうやって友達を作る？

だれが友達に成ってくれるのだろうか。

「おい十六夜！ フランたちが外で遊ぶからレミリアにも伝えておいて……くれ……って？」

……。

丁度良いところに。

「風間さん？」

「な、なんだよ？」

「私のお友達に成りなさい。」

「……………は？」

お友達に成りなさいって。

突如のお友達宣言。しかも命令形。

何を言っているのか、この娘は。

あまりの唐突な出来事に風間は軽い混乱状態に陥る。

「と、言うわけですか、そくお友達として始めるわ」

「お、おい。十六夜。いきなりどうした」

「友達の定義その1。友達は死線を一緒にくぐり抜けるらしい」

「聞いちゃいねえ……てか、なんだよ、その定義！」

「今から共にフラン様と弾幕ごっこして死線をくぐり抜けるわよ」

「はあ!？」

「フラン様。よろしくお願いします」

「はいはい。なんだかよくわからないけど、久しぶりに弾幕で遊べるなら私は大歓迎！手加減もいらないよね！」

「ちよ、ま（ピチューン）」

よくわからないけどフラン相手に2人で弾幕ごっこをやった。結果？勝ちましたよ。ええ、ガチでしたとも。一度死にかけたけど。

「その2。友達は秘密を打ち明けるらしい」

誰の定義だよ。誰の。

なぜ、こんな風になっているのかよくわからない。取り敢えず、十六夜にお友達宣言（命令形）されて、これから秘密を打ち明けるらしい。

十六夜の秘密かぁ……。未だに状況をつかめてないけど。ちょっとドキドキするな。

「私の秘密を打ち明けるわ」

ゴクリ。

「私は実は……お嬢様の事が大好きなのよ」



……。

「あーはいはい。凄いねー」

「さあ、貴方の秘密も打ち明けなさい」

「え、ええ？俺？」

「友達だもの。打ち明けなさい」

なんか、変な気がするけど。しょうがないなあ。

「俺は実は、足フエチなんだ」

「……」  
「……」

なんだか、大事なモノを無くした気がする。

「その3。友達とは同じ釜飯を食べるらしい」

そんな言葉と共に出されたのはそのまま、釜飯。そのまま無言のままです。食事完了。この後レミリア達の食事があるので、先に部屋に行って待っていて欲しいとのこと。

フランから聞いたが、なんでも十六夜はお友達を作ることにしたという。そこに白羽の矢が立ったのが風間ということらしい。

「待たせたわね」

「……」

深夜。夜遅くまで部屋に待たされた風間は絶句する。

十六夜がそこに立っていた。

寝間着姿で。

「友達とは同じベッドで一緒に寝るらしいわ」

「え、ちょ、ちょっとまってください」

思わず敬語になってしまふ。

「ほら、何をしているの。一緒に寝るわよ」

「いや、あの、俺は男で貴方は女で」

「？何を言っているの？友達に男も女も関係ないでしょう？早くしなさい」

ベッドの上に座って手招きする十六夜。

「いや、あのですね」

「一緒に寝なきゃ友達じゃないじゃない。早くしなさいよ」

ため息を吐く。仕方がない（内心ちょっとうれしい）。

「お、お邪魔します」

「友達なんだから遠慮はいらないわ。どうぞ」

フカフカのシングルベッドの上に寝て、互いが背中合わせになる形になる。

なんだこれっ、ものすごく気まずい！

空気が重いのは自分だけだろうか。変な汗が出る。

しばらく経って、十六夜が呟いた。

「これが、友達というモノなのかしら」

風間は十六夜をチラリと見る。

盛大に間違っております。

「だとしたら、なんて意味のないことね」

何か、腑に落ちない言葉。

十六夜が体を起こして天井を見上げた。

「友達がいたほうが良いってフラン様に言われて、それが普通なのかしらって思ったけど、私には無理みたい」

風間も体を起こす。そうして、十六夜を見て、まっすぐに言葉にする。

「意味なくていいじゃないか」

「え……？」

十六夜の視線がこちらに向かれた。

「意味もなく、一緒に笑って、話して、時には喧嘩したり、時には支え合ったり、無駄な時間を一緒に過ごして、無駄なことを一緒にやる。他人から見たら意味なく見えて、でも実は大切な時間を過ごしているんだ」

それが友達。

「まあお前のやっていたことは間違いだけど。俺が本当の友達の定義を教えてあげるよ。十六夜咲夜」

そう言って風間は手を差し伸べる。月明かりが彼を照らし、吸い込まれるように、十六夜はその手を取った。

「バルコニー？」

出たのはバルコニーだった。

そこにあるテーブルに座った風間は咲夜に向けて言う。

「咲夜。お前の最高の紅茶を『友達』の俺に淹れてくれ」

咲夜は一瞬呆けた。

「なんてことはないんだ。ただ、お前が好きな、お前が淹れる紅茶を飲みながら、毎晩さ、愚痴言ったり、世間話をしたり。時には言葉がなくなっただけいい。無駄な時間を、一緒に有意義に過ごす。これが俺の友達の定義だよ」

いつの間にか下の名前で呼んで、そして友達なんて軽く言葉にして。

そうして彼は微笑むのだ。

肩に入った力を抜いた。

「なんて無駄な時間ね」

「でも、またそれもいいだろう？」

ゆったりとした時間の中で紅茶を嗜む時間。それを一緒に過ごす友達。そんなモノでもいいかもしれない。



「最高の紅茶を淹れてあげるわ。風間」

「楽しみに待っているよ。咲夜」

後日。

「へえーそれじゃ、風間とお友達になっただんだ！」

「ええ、今では毎晩と紅茶を飲みながら有意義な時間を過ごさせてもらっておりますわ」

「いいじゃん！いいじゃん！んじゃさ、次はステップアップして恋人だね！」

「こ、こいつ　！？」

友達に関しては疎かった咲夜も、恋人と聞いて顔を赤らめる。そんな彼女にフランはニヤニヤと笑い、楽しむ。

いつか、訪れるだろうか。

「私の恋人に成りなさい」

そう言う日が。

凜として言葉を濁さず、表情も変わらない。容易く想像できて、フランの乙女回路の想像は膨れ上がる。

「咲夜ー美鈴がまた魔理沙捕まえたってさー」

「今行くわ」

「でも、まあ。」

「今日はフレンドを変えてみよっと思っの」

「へえ、どんなのだ」

「霸王漢方って言って薬師からもらったものなんだけど」

「それ、茶じゃなくて漢方じゃん！茶でもなんでもないよ！しかも永林のところって！俺を実験台にするきか！」

「あら、でもこの前は大丈夫だったじゃない」

「いつだよ！いつそんな危険な薬を入れたんだよ！」

「1週間前くらいかしら」

「ちい！だからあの時やけに下痢がひどかったわけだよ！美味しかったから問題なかったから、気にしてなかったけどさ！」

今のこの風景も、悪くないよね。



番外記「メイドさんのお友達」(後書き)

こななお話

35話「幻想危機」序章」(前書き)

ここから新たな異変。

### 35話「幻想危機」序章」

陰陽師。それは古代、日本の律令制下に於いて中務省陰陽寮に属した官僚の1つで、陰陽五行の思想に基づいていた陰陽道によって占筮お呼び地相などを行う技官として配置される。その後は本来の律令規定を超えて、占術・呪術・祭祀を司るようになった、職掌のことを言う。

だが、それだけではなく、平安の世に於いての魑魅魍魎を退治、封印する事に優れ、妖怪の世とも言われた平安ではその職は重視されていた。

事実、貴族社会であった平安でも陰陽師が通れば避けて通ると言われるほどにその力は偉大である。

中世後は主に各地で民間相手に占術などを行っていたようであるが、今現在。神職として扱われ、私的祈祷などを行うのが仕事である。

古代では偉大力と権力を持ちあわせていた陰陽師も今となってはその力の影すらみえない。

何故か？

それは妖怪が存在しないからである。

今の世でも妖怪は居るし、時折見かける。だが、現代社会に於い



ては存在しないと認識されているためにその力を試すこともその力を頼ってくる事もなく、ただの信仰として、神職としてみなされる意味のない祈祷 形だけの祈祷を行い、そして時には祭事のためだけに動かされる。最悪に至ってはコスプレかなんかとして見られるのだ。

古来より陰陽師としての家を持つ陰陽師達は今の現状を憂い、そしてため息を吐いている。

だが、幾分仕方がないと思う者も居る。

何故って妖怪が少ないのは事実であるし、その存在が認められていないのも事実。

だが、この現状を打破すべく動く男が居た。

名を土御門光晴。

有名な安倍氏を先祖と置く今でも現代に影響力を残す土御門家長男だ。

その男の才は驚く程よく、持って生まれてしてあの安倍晴明をも超えるような霊力と才能を持ちあわせていた。

頭も大変良く、運動神経も抜群。

5歳にて陰陽道を熟知するほどの才を持ちながらも、この力が無意味だと知ったのは20歳の頃。

自分は他とは違い、陰陽師として天才の存在である。生まれた時代が違えば何もかも支配できただろう。そう聞かされた時は唾然とした。

妖怪は少なからず居る。だが、その事実は無。世界が妖怪というものを認識せず、認めないからだ。

今は妖怪ブームだなんだと言っているが、所詮は絵の中の創造物。そう認識している。

絶望した。

なら、なんでこんな力を持って生まれたのだ。不思議な力は皆に気味悪がれ、学業に於いて友達は少ない。寄ってくるのは臭い女共だけ。

なんのために陰陽道を極めたと言うのだ。

ただ、少なくなり、誰にも認識されない妖怪を退治するだけのため？

自分たちのやったことは誰にもわからない。誰にも褒められない。

本当に、どうでもよくなったある日。

遠征に出かけた陰陽師からその存在を聞かされる。

現世から追いやられ、自らの楽園を作り妖怪どもはそこで暮らしている。

名を幻想郷という。

そこに、光晴はある考えが生まれる。

陰陽師としての、本来の権力を取り戻す。

気がつけば全国の陰陽師を土御門の権力で集めて説いていた。

幻想郷と呼ばれる妖怪の溜まり場を解いて現世に出す。そして、再び魑魅魍魎の世界を創り上げて、それを支配すれば、この世は皆我らが陰陽師のモノだ。

古豪の陰陽師達は皆賛成し、若い陰陽師たちもそれに続いた。

血筋もすべて関係なしに、その世界に夢を見た。

反対する者も多くいたが、関係がなかった。ほとんどの陰陽師が賛同したのだ。それを率いて幻想郷に殴りこめばこの世界を支配できる。

だが、幻想郷を隔てる結界は強力で光晴を合わせたとしてもそれを破く事は不可能であった。なにか方法はないかと、光晴は考える。

そして、光晴はとっておきを見つける。

土御門の禁書の中。絶対に触れても見てもいけない禁書。その中に封印されていた者の情報が入っていた。

なんでも、昔の陰陽師たちは自らを大樹に納めてのちに祠を作らせてその土地を護ったと言われている。

その中で光晴は見つける。

安倍晴明と卑弥呼の文字を。

この2人は学校の教科書にも出てくる超有名人。それだけではない。陰陽師に取ってこの2人は神的存在なのだ。

陰陽道を作ったとも言われる卑弥呼と、陰陽師を確立し、世に広げた安倍晴明。

その2人が封印されている。

思わず盛大に晒った。

これを解いて、束縛し、自分の従者にすればなんと素晴らしい事か。あの結界もすぐに破れるだろう。

すぐに光晴は実行した。

陰陽師たちを集めてその束縛の術式と封印解除の術式を学ぶ。

そして、いよいよ封印解除をする。

そこには反対する者たちを集めた。より強力な束縛術式と封印解除の術式には犠牲が必要だ。これを機会に一掃できれば良い。

反対派には父も居たが、別になんとも思わなかった。なにせ、母を過労でしなせたクズだ。これで自分が現当主となればさらに動きやすいだろう。

そして、封印解除を行う。

総勢200人を犠牲に。

安倍晴明と卑弥呼の封印された祠を同じ場所に置き、さらに呪縛の呪文を行う。

総勢200人の人の命を引換に。

罪悪感？そんなものはない。たった200人の陰陽師の命を犠牲にするだけで陰陽師のための世界が手に入るんだ。

なんてことはない。

これもまた運命だ。

さあ、行こうか。

妖怪<sup>クッス</sup>の郷に。

「紫様」

「紫」

「ええ、わかっているわ。ついに来たのね」

幻想郷の境界線。八雲家の家にて立ち上がるのは3人。

「藍。貴方は結界のカバーをお願い。かなり辛い役目だけど。貴方ならできるはず」

「わかりました」

スキマと共に消える九尾。

「……辛くなるわよ」

「確か、陰陽師だったか。お前1人でも十分いけるんじゃないの？」

その問いに首を振る。

「ただの陰陽師ならまだ良いわ。大介。貴方も覚悟決めなさい」

甘く見てるよ。

死ぬわ。

さあ、来るなら来なさい。私たちの樂園を壊させはしないわ。

### 36話「幻想危機」1章」

迷いの竹林。霧と共にどこまでも続く竹林。緩やかな坂を描くその森は妹紅にとっては慣れ親しんだものであり、今日も日課である永遠亭の馬鹿姫に喧嘩を売りに行くところである。

風間が来てからというものの、殺すような業は控えてはいるが、それでも勝負を売りにいくのはほぼ毎日だ。

なにせ、それが体についた習慣であり、日課なのだ。

「おい輝夜ー今日も来てやったわよー。さっさと出てきなさいー」  
永遠亭の前に着き、言葉を投げかけるが返事はない。その事に妹紅は首を傾げた。

おかしいな。いつもならブツブツ文句を垂れながら出てくるのに。

出かけているのか？

戸をノックしようとその扉に手をかけた時。

永遠亭が震えた。

文字通り。激しい煙と音を立てる。そして感じる凄まじい靈力。ゾクリと体が震え、慌てて永遠亭の中に入った。



何かがあった。

そう体が感ずき、そして、妹紅は見る。

「……え」

そこに倒れているのだ。血を流しながらその畳みを朱に染め上げ  
伏すのは黒い髪 of 少女。

輝夜。

そして、美しい銀髪の女。

永林。

それを見下ろす。輝夜にも引けを劣らない綺麗な黒髪と、後ろを  
1つに結ぶ黒い髪。そして男。

両者ともそこそこ背が高く、1人は陰陽師の服を着て、1人は巫  
女服を着て、男もまた陰陽師に格好をしている。

「……か、輝夜……？」

思わず言葉にして3人が振り向いた。

女だ。陰陽師と巫女服の女。それがゆっくりと振り返る。容姿端  
麗。その言葉がすぐに出るほど2人は容姿に優れている。

また、男の方も顔立ちが整っている。

「なんだ、まだ居たのか」

男が声を上げる。驚くほど冷たく、張り詰めた声だ。

「晴明、卑弥呼。さっさと片付けろ。俺は折角なので噂の輝夜姫と御対談を楽しみたい」

「……も……にげ」

なんだ、なんだこれは。

何が、何が起きて……！

「破道『不知火』」

ッ！

陰陽師の女から閃光が飛び出す。その速度。まるで見えずに本能だけが体を動かす。

「がア………！」

強力な一閃は体の半分を吹き飛ばし、粉碎した。

強烈な痛みというよりは熱さ。体が焼かれたように熱い。咄嗟の障壁も意味を無くして貫通していた。

すぐに、蓬菜のおかげで体が再生する。

一撃だ。

一撃喰らっただけで気力がほぼ持つてかれた。

まるで見えない一閃。即席とは言え風間からもらった護符の障壁も意味もなし、そして再生する気すら起こせない攻撃。

晴明……。

あの男の言葉。まさか、まさか安倍晴明……？

「ほう。あのかぐや姫と同じ再生能力か。厄介じゃのう」

「ガア……！はあ……！この……！」

蓬萊「凱風快晴・フジヤマヴォルケイノ」

スペルを叩き込む。炎が集められて晴明に対して狙いを定まる。

だが。

「あまり、晴明君だけ注目しないでいただきたいな」

真後ろ。まるで気がつかなかった。巫女装束の女がその手に靈力を集めてそう呟いた。

「鬼道『六芒星鬼神滅亡』」

ヤバッ……！

自身が不死身であることを忘れて本能がそれを告げる。あれは避

けなければならぬものだ。絶対喰らったら駄目だ。

風間に叩きこまれた言葉。

いくら不死身であることに慣れれば回避本能が薄れる。だから、絶対それになれてはいけない。

考えるより、体が勝手に動く。

瞬間の時間。避けながらにしてスペルを放つ。

不死「火の鳥 - 鳳翼天翔 -」

「さてさて、お初にお目に掛かります。かぐや姫。まさかお伽話の貴方とお会いできるとは思っていませんでした。本当にお美しいものですね」

そう話しかけてきたのは金髪の男であった。懐かしい、陰陽師の服を着たそいつ。今すぐにでも殺してやりたいが、まるで体が動かない。

「おっと。あまり動かないほうがいいですよ。いくら貴方が不死身とはいえ、あの2人の攻撃をモロに喰らったのですから」

あの2人。安倍晴明と卑弥呼か。

「何故……安倍晴明が……！それに卑弥呼って……」

「何、ただ封印を解除して自分の従者にしただけですよ。いやー驚きましたね。実はね安倍晴明って女らしんですね。本当に美人でスタイルも良い方で。思わず犯しちゃうところでした」

不気味に笑うこいつ。気持ち悪い。吐き気がする。

「残念ながら、かなり拒絶されまして、返り討ちにされましたけど

ね

八八八。

「いやいや。でも貴方は本当に綺麗なお方だ」

そう言いながら、頬にいやらしく手を触れてきた。体が拒絶する。まだ平安の世に婚約を迫られた爺共のほうが100倍ました。

「いいですねえ……その表情。興奮してきましたよ」

その手が下がり、髪を触れて気持ち悪い。

「貴方……！もし輝夜に手を出して御覧なさい。その髓まで切り刻んでやるわよ！！」

永林が叫ぶ。輝夜よりもその傷は酷く、蓬菜の薬を持ってしてその回復力は遅い。

「おお、怖い怖い。俺もまだ死にたくないですけど。残念ながら、それは出来ませんよ。貴方たちはあの2人によって封印されるのですから」

封印……？

確かに、蓬菜の薬を飲んでいる輝夜達は死ぬことはない。でもなんのために。

こんなことをしてあの賢者が黙っているわけがない。

「その前に一発ってね……」

その手がいやらしく下に動く。

やめてっ！

触らないで！その穢れた手で触れるな！

「輝夜！」

永林の悲痛に似た叫びが耳に残る。だが、それ以上に男のネットネトした声が耳元にこびりつく。

「実は俺。無理やりするの、大好きなんだよ」

一気に体の体温が下がった。

その手が服にかけた。

その時。

「悪いけど。そいつ、一応私の『友達』なんだ。手を出さないでく

れる？」

炎が翔けた。

男が舌打ちをして下がる。

その前に庇うように立つのは見慣れた白い髪。そして広がる朱の翼。灼熱の熱気。

「よう、輝夜。危ないところだったわね」

ぶっきらぼうなその口調。所々怪我をして血を流すが、その顔は笑顔に満ち溢れている。

「妹紅……！」

輝夜は、その名を呼ぶ。

思わず涙ぐんでしまった。

いつも、喧嘩ばかり。



時には殺し合い。

でも、とても、とてもかけがえの無い人だ。

「よくもまあ、私の友達に手えかけようとしたね！」

虚人「ウー」

炎の弾幕が男を覆い隠し、襲う。その密度は凄まじく、輝夜が見たこともない量だ。

だが、それに割り込むような光が男を護った。

「冷めた……。清明。卑弥呼。お前のおかげでやりそこねたぞ」

男の冷たい言葉。その言葉を投げかけるのは2人の前に立つ清明と卑弥呼。妹紅は思わず舌打ちをした。

「ふん。腐れ外道が。お主は腰を振るだけの猿か」

「相も変わらず、君は性欲しかないのか？」

清明と卑弥呼が呆れて言葉にする。

「まったく、私もつくづく運がないな。まさかこんな下衆野郎の従者になってまで現世に復活するとは」

「我もじゃよ。こんなの、死んだほうがマシじゃ」

「黙れ！さつさと片付けろ！」

声を荒げて、男は手を翳す。その手が光り、2人は苦しそうに呻く。そして、しっかりと妹紅を見据えた。

「悪いのう、生憎、手加減できそうないようじゃ」

霊力が膨れ上がる。

突風が駆け抜け、威圧が襲う。

無理だ。

絶対に勝てない。無理。無理だ。

足が震える。

だが。

だが、ここで引くわけにはいかない。

だって

「妹紅……！逃げなさい！ここは私たちが」

「そいつはできない相談だ」

一枚のスペルを取り出す。

炎の翼を上げて妹紅は笑う。

「私だって守りたいもんとかあるんだよ」

だって、譲れないモノがあるから。

「な、なによ……」  
「ね」

鈴仙が、永遠亭に帰ると、すべてが滅茶苦茶にされていた。

自分の家がまるで戦場のように壊され、汚されている。

そして、啞然とする。

「鈴仙……」

「てゐ！無事だったのね！一体これは……！」

何もかも壊された家の中で呆然と立つてゐの姿を見つめる。まるで放心していて、本当にこんなてゐは見たことがない。

「私が、帰ってきたら……もう……」

そして、てゐは指を指す。

鈴仙もまた啞然とした。

声すら出ない。何か壊れる音。狂気が心の中を侵食する。

「……ひめ……さま……？ししよっ？」

なんとか声に出したのは、そんな言葉。

永遠亭の中の一室。

血の海の中。

それはあった。

四方を囲み、怪しく光る。まるで結晶のような輝きの中には輝夜、永林。そして妹紅の姿もあった。

「なによ、これ……」

一体全体、何が。何が起ったというのよ……!!



### 36話「幻想危機」1章」(後書き)

咲夜さんに関するコメントありがとうございます。

参考にしますね。

さてさていいよいよ出ました卑弥呼と晴明。

皆のかませ犬言われてます光晴くん。ちょっとしたキャラクターデー  
ータです。

土御門光晴。

特徴。金髪イケメン。

特技 女に困らない事。

陰陽道を使う程度の能力。



### 37話「幻想危機」2章」

永遠亭への襲撃。その報は少し遅れて幻想郷全土へと伝わった。幻想郷の一角を担う永遠亭。その力は強大であり、それが崩れたというのは幻想郷すべてに衝撃を与えた。

唯一生き残ったのは鈴仙とてみだけである。2人は人里への置き薬の回収に向っていて、てみは迷いの竹林にて兎達の世話をしていたと言っ。

「異変ね。それもこれまで以上だわ」

鈴仙の悲痛を聞き届けて霊夢は立ち上がる。その袂い棒を用いて、針を懐にしまい陰陽玉を手取る。長い髪を1つに結んで霊符を取り出す。

「何者が知らないけど、これ以上は黙ってられないわ今すぐにでも」

「その必要はないわ。霊夢」

霊夢の声を引き裂くように現れる紫。その金髪の長い髪を後ろに大きくまとめ、いつになく緊張の面持ちで博麗神社に降り立つ。そしてその後ろに続くのは風間。

いつも脳天気そうにしている面構えも鋭く眼光を照らして帯びている。

「その必要がないって。どういふ事よ」

「そのうちわかるわ。それよりも招集よ。敵は各地を潰してもうすぐここにやってくるわ。その前に招集を掛けるわ」

封印される前。少しでも多くの戦力を。

パチンと、指を鳴らすと、大きく博麗神社を中心に鈴の音が弾き渡る。凜と澄んだ音色。やがて反響し、その残響が残る中で博麗神社に多くのスキマが現れる。

紅魔館。レミリア、フラン、美鈴、咲夜。

湖上。チルノ。

妖怪の山。文、椛、早苗、諏訪子、神奈子。

向日葵の畑。幽香。

そして、魔理沙。

皆一様に緊張に固まり、その表情には微かな憤りを見せていた。

「集められたのはこれだけね……」

悔しそうに唇を噛み、紫は息を吐いた。

「紫……一体どうなっているの？永遠亭が潰れたって聞いたけど」

幽香の問いに鈴仙は微かに顔を伏せる。紫は神妙な面持ちで周りを見渡す。皆、永遠亭が潰れた事は知っている。文の号外新聞のおかげだ。

幻想郷の中の情報伝達は文のような新聞しか行き届かない。少し脚色されていることを除けば貴重な情報資源なのだ。文の新聞が各自行き届き、そしてその事の重要さを知った時にはこれがもはや博麗霊夢だけの異変解決では対処し切れないことを悟る。

「今、外の連中がこの幻想郷を潰しに掛かっているわ」

絶句した。

幻想郷と外は博麗神社の結界を隔てて完全に孤立している。それを破って内に入ったという。

「だから、違和感があったのね……」

今朝から感じた首に感じる違和感。だれかに穴を掘られているよ  
うな、そんな感覚。

「今、ここに居る奴らだけじゃない。外の奴らも面を構えてじきに  
幻想郷を突撃してくるわ。そのために」

と、その時。空気を裂くような音が1つ。

転がり落ちるように誰かが博麗神社の地に転がる。

帽子を落として、綺麗な銀のような髪。少し青みが掛かったその長髪と、誰かを抱えている。

「慧音！？それと阿求じゃないか！」

魔理沙が声を上げた。だが、すぐに息を飲む。

お世辞にも無事とは言えない。多くの血を流してその服を汚している。阿求も目立った怪我は見えないけれども、衰弱しきっている。

「どうしたんだよ、慧音！」

肩で息をして、慧音は周りを見渡す。そして、安堵の息を上げてようやく言葉にした。

「3人組みの奴らが、いきなり人里に来て次々と人里の人間も、妖怪もすべて結晶に閉じ込めたんだっ！」

結晶。鈴仙の肩がビクリと動く。

永遠亭と同じ。

「私も応戦したが、まるで手が出なかった。萃香がなんとか抑えているが、たぶん、もう……」

人里。

まさか人にも手を出してくると思っていなかった。紫はきつく唇を噛み締める。

私の幻想郷を……！ここまで……！

「もう、もたもたとしている暇はないわ！」

紫の怒声が響き渡った。ここまで紫が怒りに燃える姿は見たことがない。それほどまでに今回の異変は最悪であり、そして幻想郷の危機であると言つこと。

「もうじき、ここに博麗神社の結界を壊しにやってくる！貴方たちができることをやりなさい！」

そうして、紫は指示を出す。幻想郷の管理者として。この幻想郷の守護者として。

「いい！今から言つ事を」

その瞬間、博麗神社が揺れた。

霊圧だ。限らない霊圧が博麗神社を揺らすのだ。戦いを知らないモノはその霊圧に震える。霊力を嫌う妖怪は動けなくなり、戦いを良く知るものは心を引き締める。

そして

この霊力を知る者は、驚愕の表情を顔をに貼り付ける。

風間は、知っている。

この靈力。

この威圧。

思わず口を綻ばせて、そして盛大に晒った。

そして、姿を見せた時。

知らずに眩いた。

「よりによつてあんたらかよ……マジで死ぬぞ、これ」

その姿、忘れはしない。

安倍晴明と卑弥呼。

遠い昔、共に時間を過ごした大切な人。

「久しいのう……風間。封印が解かれたか。また会えて嬉しいぞい！」

「久しぶりだな、風間。まさか、あの時の事。忘れたとは言わせないよ？馬鹿弟子」

微かに、見える光。涙の後。

嬉しさに表情を緩ませる彼女らは、しかしやがて修羅の顔に変貌を遂げる。

「悪いのう風間。生憎と手加減できそうもないわ」

「生憎と、現世に蘇って、いきなり糞野郎の従者にさせられたものでね」

その後ろに控えて、顔をニヤつかせる男。

アイツか。

「なに、この身は自由は聞かんが、殺しはせんよ。……我が拒絶する」

「そう、本気だすだけ。なに、幻想郷が滅んだらまた一緒に暮らせばいいわ」

ハハハ……冗談キツイって。



威圧する霊力が、濃さを増した。

息を吐く。

震える。体が震える。あんな事。冗談で言っているのか、本気なのか定かではない。

でも、確実にあの2人は本気で幻想郷を滅ぼそうとしている。どういった経緯でここに　この世にいるか知らないが、今はあの男の従者だと言う。

こちらも、手加減する義理もない。

一步踏み出した。ペンダントを外して、解放する。

「ほう……うれしいの！まだあの玉を着けてくれておったか！」

「お前さんの形見だからな」

「今は生きているかの」

歩く。一步一步。その重圧に負けじと踏み出す。

しかし、その前。瞬時に動くのは8つの影。

「師匠！一緒に戦いますよ！」

「アンタは別に引つ込んでもいいのよ。異変解決は巫女の仕事だから」

「風間さん！お手伝いしますよ！」

それぞれが、言葉にする。共戦の声。

だが、それすらも鬱陶しく感じられた。

違うんだ、みんな。

これは、異変なんかじゃない。

戦争なんだよ。

「お前らが遊ぶお遊戯じゃないんだ。」

殺し合いなんだ。

風間は前に出る。

「紫」

「なにかしら？」

手元の扇を仕舞い、紫が言葉を返す。

「頼む。手伝ってくれ。俺1人じゃ無理だ」

肩を竦み、そして顔立ちを凜として紫もまた前にでた。

啞然とするのは7つの影。

霊夢、魔理沙、早苗、美鈴、文、チルノ、咲夜、レミリア。スぺルカードを構えた彼女らではなく、紫1人に頼む風間に啞然。

「遠回しの戦力外通告。」

「幽香、諏訪子、神奈子。……最後の砦。任せた」

「ふう……仕方ないわね」

傘を畳んで、幽香が息を吐いた。諏訪子、神奈子は頷いて、結界を作りだす。

「ちょっと！風間！私たちが」

靈夢の言葉。それを遮る。

はつきりと言わないと駄目か？靈夢。

風間は残酷とも言える言葉を放つ。

「邪魔だ。足手まといなんだよ」

濃い殺気。

押し出されるようにして、靈夢達は下がった。レミリアでさえもその殺気に押されて後退る。

「し、師匠」

「まだ、わからねえのか。文。足手まといだ。俺はお前らを護る余裕なんて微塵の無いんだよ。わかったら早く下がれ」

死ぬぞ。

「式柱靈力結界」

諏訪子と神奈子による、結界が貼られる。それを尻目に紫は声を放った。

「靈夢！早苗！役に立ちたいと思うならその結界を維持しなさい！それが貴方たちに今出来ることよ！」

そうして、紫は前に進んだ。

神妙な面持ちで2人と対峙する。相手は安倍晴明と卑弥呼である。その力の凄さは風間を見ればわかる。あの彼がここまで気持ちを追い込むなんてよっぼどな事だ。

見れば手元が微かに震えている。

そんな様子な彼が珍しく、紫はこの異様な殺伐として空気を飽和すべく、軽い口調で語りかけた。

「あら、大介大丈夫？手元が震えているわよ？」

「へ、お前も足元震えてるじゃねーか」

ガクガクと震えるのは自分も同じ。死という随分とご無沙汰だったモノが近くにある。その事に震えた。

「失礼ね。武者震いよ」

「ああ、俺も武者震いだ」

お互い息を吐く。洗い息を整えて風間は構えた。

「息、合わせろよ。死ぬぞ」

「ええ、久しぶりだわ。この感覚本当に戦場ね」

スペルカードルールに基づいた、戦いではない。

死をかけた決闘だ。

体が震える、心が張り詰める。

だが、反対に妖力が研ぎ澄まされていく。隣に居る彼の妖力も敏感に感じられる。

そして、その時は迎える。

今まで生きていた中で、最も死に近い日。





37話「幻想危機」2章」（後書き）

最近スランプだわあ……。

なんか、私の描写ってなにか物足りない気がするんですね。

全体的に薄いというかなんというか。

### 38話「幻想危機」3章」

人は考え、行動しようとする思考が脳を刺激してその手を動かす。ようは見えて、考えて、動く。と言うことだ。

銃で言うなら起こして、構えて、撃つ。必要な3つ動作が人間にもあるのだ。

戦いの中で、それらは勿論関わってくる。相手の攻撃を見て、考えて、避ける。そして、絶対に失ってはいけないものもある。

それは恐怖。本能だ。

熱に触れば人は考えるよりも先に手を離す。その速さは明らかに、見て、考えて、動くという3つの必要動作よりも早い。

なぜなら、考えるよりも先に動くのだ。

それは人の本能であり、脳を持つ者の必要動作でもある。

だから、2人は動いた。

それは考えるよりも、体が動いた。

圧倒的殺気と恐怖。常人なら完璧に足が震えて動かないようなモノ。だが、くぐり抜けてきた修羅は数知れず、味わった死という恐

怖は数多。

故に動いたのは必然。

爆発的な霊力がそのまま叩きつけられる。紫が一步遅れてその場を退避してバランスを崩すが、風間はそのまま翔けた。

狙うは晴明。陰陽道は神には効かない。妖力を保持しているが、  
応神の部類だ。

「螺旋丸」

スペルカードは確かに、この場に於いては瞬間的に放てるが、威力がその分制限されている。使う場はない。

一瞬の形成にも慣れた。そのまま突撃する。

だが、割って入ったのは卑弥呼。

巫女装束がふわりと動いてそれはまるで舞のよう。意図も簡単に風間の腕に纏い着き、そのままクルリと回転。

そして、掌底。

負けじと動いて風間はワンステップ横にズラす。

「ほっ」

感心したように声が溢れる。

それに答える余裕もない。螺旋丸を開放し、暴風を生み出す。風速40メートル近い風が駆け抜けて卑弥呼が浮いた。

再度収集。

風を吸い込み、浮いた卑弥呼の体がまるで風間に吸い込まれるような形で動く。

螺旋丸

そのまま突き出す。

「神滅『無信の神』」

眩く詠唱。

陰陽道でもない、この殺気。マズイ。

晴明から放たれた霊力の塊は卑弥呼と風間の間を割って入り、螺旋丸を防ぐ。

それで終わらず、そのまま風間を包み込むようなそんな形を作り出す。

## 境界のスキマ

風間を包んで、それは現れた。

そのまま境界の中から別のスキマで外に出る。

「サンキユ」

「礼はいらないわ。それよりも、アレ。陰陽道でもないから気を付けたほうがいいわ。きっと神でも効く」

「了解」

瞬動ですぐに前に出た。

「相も変わらず、お主はとことんインファイト近接格闘が好きじゃのっ……」

「それが、『俺』だ」

## 突風「風槍」

槍の雨を2人に浴びせる。

その速さは風間のスperl以上。勿論、手加減もなし。2人の生命を気にしていたら確実に負ける。

そう簡単に殺されないということを知っているから全力を出せる。だが、逆に全力でやっても届かないという事も知っている。

1人なら確実に負けている。

だが、2人ならいける。

風槍の雨が真上から降る。それを意図も簡単に避け切って再度詠唱を唱えようとして　それはできない。

## 境界のスキマ

スキマから風槍が出てきたのだ。それも複数。

驚く清明であるが、それを冷静に叩く、卑弥呼に至ってはすべて避けきっている。

だが、今のでわかった。

清明の懐、槍の中に風間は現れる。

「螺旋丸」

「靈気障壁」

壁が螺旋丸を防ぐ。

いくら即席の壁とは言えども、天才の清明だ。その防御力は折り紙つき。

「清明君ばかり目がいくとは、酷いじゃないか、馬鹿弟子」

卑弥呼が動く。瞬動で後ろを取る。

生憎、俺の背は

「あら、そちらも大介ばかりに気を取られてるじゃない」

頼もしい奴が援護<sup>カバ</sup>してくれから、心配してねえよ。

「そんなんで俺の螺旋丸防ぎきれると思ってんのか！」

「っ！」

腰を落として、ステップ。そのまま回転して風を生む。さらに、一撃。

その障壁が、耐え切れずに割れる。

「無道『神気滅亡』」

また、か。

晴明を中心にして生み出せる爆発的な霊力。陰陽道でもない、何か。確実にヤバイものだと感じ取り、瞬動で後ろにさがった。

前に出るのは分が悪い。

そのまま紫を巻き込んで下がる。

風槍で晴明に常置展開する近接用の障壁がないことはわかった。だが、どうしてもあと一歩が出ない。それに卑弥呼がすぐにカバーに入るから攻めづらい。紫が相手にしても卑弥呼は近接戦闘と呪術のエキスパートだ。

紫は案山子ではないとしても、風間以上に張れる格闘者相手は分が悪い。

「紫、おれは師匠を殺る。お前は晴明を殺れ」

「了解」

「なるべく互いがカバーに入るような陣形が好ましい。あまり離れすぎるな」



しばらく頼む。

その言葉にして風間は妖力と神力を貯めた。

風が、集まり暴風を作り出す。風間を目にしてその掌に風が集まる。

「あれは……！卑弥呼！」

「わかってるさ！」

鬼道「駆ける不知火」

鬼道「怪奇滅亡六芒星」

襲うのは白火のレーザーと六芒星の術式。

「あら、そんな業で私を止められると思ってるの？」

数多のスキマが彼女ら2人の攻撃を受け止め、そして消え失せる。

「あのスキマ妖怪……！」

「ふふ……変わってないわねえ晴明さん？」

スキマでいくら攻撃を受けきれるといってもその展開には当然妖力を使う。

弾数は無限ではない。その受けきる攻撃が大きいほど、それに比

例して妖力を消費するのだ。

だが、彼女は何もないように奮ってみせる。

いくらでも業は受け消えるぞ、という姿勢を見せて。

元々、彼女の能力で2人の従者のラインを弄ればそれで終わりなのだが、それが如何せん無理だ。ただでさえ、風間の封印解除のさえその能力が届かなかつたのだ。前とは確実に成長している紫であるが、頑固としてその術者共鳴線は切れない。

よほど、強力なものか、それともあの男の能力か。

あれだけの2人を従者にするだけでは飽き足らず、さらには霊力供給を行っているのだ。なんという無限の霊力か。

兎も角、こちらの能力は相手には届かない。なら、純粹に戦って勝つしかない。

一応、こちらも秘策は用意してある。そのタイミンさえ誤らなければ、勝てる。

「待たせた」

言いながら、風間が掌を抑える。

味方ながら、恐ろしい。

掌に集めたその神力と風。その量は膨大で今まで見たこともない。

「コネクト  
掌握」

その妖力と風を内包して、そして風間は風を纏う。

威圧に震えた。

「これは……君も随分と成長したね。私に会ったときはただの妖怪だったのに」

感嘆の声を上げる卑弥呼。まるで昔を懐かしむような言葉に風間は首を振る。

「喋っている暇があったら、体を動かしたほうがいい。師匠」

気がつけば、風間は卑弥呼の裏を取っていた。

すぐさま振り返り、その掌底を風間に当てる。

だが、残像を残して風間は消え、卑弥呼の裏を再度取る。そして、其の背に掌底を当てる。

吹き飛び、風を残しながら卑弥呼は後ろに下がった。

「余裕こいていると、負けるよ?」

冷静に言葉にして、風間は再度翔ける。

「卑弥呼!」

「あら、お友達の事ばかり気にして、随分と余裕ですわね?」

紫のスキマが開かれて、クナイのようなものが散る。慌てて避けて晴明も札を構えて放つ。

「……八雲紫か。お主が風間の封印を解いてのじゃな？」

「ええ、そうよ『大介』の封印を解いたのは私。それがどうしたのかしら？」

「一応、礼を言っておこうかと思つての」

言いながら、札を放つ。それを余裕を持って避けて紫は笑つた。

「貴方にお礼を言われる筋合はないけど。一応受け取っておくわ」

「ああ、そうしてくれ。ところで 風間とはどういう関係じゃ？」

その言葉。またもや笑いながらも紫は答えた。

「ふふ………どういう関係？そうねえ、私と大介は『名前で呼び合う程の関係』ってところかしら」

「っ！………そうか、それじゃあ 遠慮はいらんな」

不機嫌な顔を丸出しに晴明は札をばらまく。

「鬼道『炎歌陰陽』」

燃える札。そして舞う札。

炎が舞い、札が駆け抜けそして紫を襲撃する。スキマを開いて避けるには数が多すぎる。印を即興で結んで結界を作る。

「ほう。そちらにも道が通ずるか」

「誰が結界解いたと思ってるのよ」

結界を凝縮して襲撃する炎を防ぐ。そして、札を晴明に投げつけた。

霊撃。

衝撃に吹き飛ぶ。そこからスキマが動いた。

妖弾の弾幕がスキマを通して晴明に襲いかかった。息を吐かせない猛攻に晴明は唇を噛む。なんとか障壁を張るがいつ壊れてもおかしくない。

なら。散らす！

「翔破霊撃！」

拡散する霊撃を放つ。弾幕が爆散するが、視野が逆に悪くなり、濃い煙を残した。

「しまっ！」

そして、煙を裂くのはスキマ。そこから出てくるなにか。

声でもない。

晴明の前。

スキマを破ったのは巨大な箱だった。

それは何個も連なり、車のような車輪を持ち、そしてそれは向かってくる。

突如として虚空に現れてた箱　電車に体が固まる。

激しい音を立てて、電車は晴明を巻き込み地にめり込んだ。

「あら、ごめんなさい。少々やりすぎてしまいましたわ」

不気味に、紫は晒う。

「晴明！」

「余所見している暇あるんだな？」

轟音が駆け抜けて頬を掠る。そして風間はすぐに回転した。腰を深く落として右足を軸に左足で上段蹴りを放つ。

それを右腕で受け止めたが、わずかに体が浮いた。そこに掌底を打ち込まれた。その衝撃、痛みに体をくの字に折れ曲がる。

だが、離れ行く体は巻き戻ったみたいに戻っていく。

風が卑弥呼を捉えたのだ。

その手には螺旋丸が。

「くっ……！神滅夜光」

唱えようとした詠唱を裂くような一撃が襲った。

「しまっ……！」

風間に吸い込まれるという形であるために、無意識に距離が空いていると思ってしまうのだ。

吸い込まれているのは卑弥呼のほうであって、自由に動けるのは風間だ。その空いている距離からして詠唱が間に合うと判断させたのだ。

そこを突いて逆に風間が前に動く。

よって誤った間が出来て、詠唱は勿論間に合わず、防御も間に合



わない。

風間の螺旋丸が体に喰い込んだ。

激しい螺旋を描くそれは体を回して風を生み出す。

風間の手から竜巻が横に伸び、卑弥呼は吹き飛んだ。

「意外と呆気ないわね」

息を吐いて紫は扇子で口を覆う。安倍晴明、卑弥呼といえはその実力はトップクラスである。それなのに動きにキレがない。確かに感じられる霊力は馬鹿にならないほどにデカイがこれじゃ宝の持ち腐れである。

「何か隠してる？いや 手加減されてる？」

「だろうね」

横に風間が並んだ。

「今はアイツらは従者だ。霊力の供給を行っていると見え、その本来の力は取り戻していない。アイツらは今の倍は確実にあるぜ」

「……」

煙が立つ中、それを睨みつけるように見る風間。その表情はひとつの油断もない。なるほど。

扇子を畳んで紫も構える。油断はするべきじゃない。相手が全力が出せないのであれば、こちらとしては好都合。全力で潰しにかかるべきだ。

「晴明！卑弥呼！貴様ら何やってる！」

怒声が響いた。あの男 確か名前は土御門であったか。それが声を荒げて何か喚いている。

「あんな妖怪ごときに何を手間取っているか！」

「そうは言っても……」

電車のカレキの中から晴明がひょこつと顔を出す。

「コレが今の我らの本気なんじゃて」

「そうそう。誰かさんに縛られてるおかげで碌な霊力も出せないよ」

肩を竦める卑弥呼。その言葉は完全に土御門に対するあてつけ。このままでは勝てないぞ。縛られているうちは本気もないぞ、と。

その言葉に土御門は震えた。こんなところでこの妖怪たちによって2人を失うわけにはいかない。

唇を噛み締める。そして息を吐いて自分の最大の霊力を練る。手に持った増幅剤を3錠程噛んでその霊力を保ち、供給する。

「命令だ！本気である2人を潰せ！」

「ほう……これはこれは」

「まあ、猿にしては頑張ったほうじゃないか」

2人の霊力 いや威圧が膨れ上がった。

震える。

こんなにも体が震える。

先ほどとは比べものにならない何か。腹の底から沸き上がって全部吐いてしまいそうだ。胸が締め付けられて、そしてそれはゆっくりと浸透する。

今までの本気とは違う。確かな本気。

前に出る。

体を動かさせ。

視線を外すな。

息を止めろ。

生死の境はすぐそこ。

体を動かす。筋肉1つ1つが動くのがわかる。繊維を動かし、肉を動かし、地を蹴って浮遊する。

爆発音。真下。

大きなクレーターを残すその爆風は荒い風を残す。その軌道に乗って風間はさらに視線を上げた。

眼の前には巫女の裾。

顔を覆われ、視野が暗くなる。そして衝撃。掌底が腹に入るのがわかる。まるで腹をえぐれ取られるような感覚。下から何かか沸き上がってそれを咳と共にきだした。

視野がグラリと傾く。何かの衝撃。まるでトラックに跳ねられたような強い衝撃に身を預けた。世界が遠ざかり、そして地に叩きつけられる。

立て。

寝るな。

起き上がり風間は見上げる。居ない。

感じられる気。真後ろ

「ぐあー！」

声に出す。その痛みを、吐き出す。

地を擦って風間は体勢を整える。そして構えた。

豪。

文字に表したらこんな感じだろうか。

速さが違う。威力が違う。トラックを持って叩きつけられている。そんな感覚に身が揺れた。

だが、風間は再び構える。

コンマの世界を見極めて、入る掌底は円を描いていなす。衝撃の反動が真横を翔け抜ける。

腕を絡めてそしてそれを抑える。

そのまま、掌底を撃つ。

全身全霊の掌底。それを受けて卑弥呼は吹き飛んだ。

だが、それすら手応えがなく、風間は震えた。

「まさか」

幻影。

幻術に掛かって風間は声を上げた。

腕が溶ける。脳が溶ける。顔が溶ける。

すべてが熱く、溶けてなくなるような感覚。

激痛という言葉。これを何回繰り返して叫べばこの痛みがわかって貰えるのだろうか。延々と続くかと思うような痛み。頭が割れそうになる。

ついに足すらも溶けて風間は膝まずく。だが、折れてはいけない。微かに感じ取れる霊力を頼りに大袈裟に大きく下がった。

何かが掠める。だが、それが何かはわからない。ただ真っ暗の中で自分が次第に溶けていく感覚を味わいながらも意識を保とうとする。

それはまさに地獄であった。

自分の意思を外せば深く墮ちる。それがわかっているからこそ、この激痛に耐えなければいけない。

もうやめろ。

やめてくれ……！

足が燃え、腕が燃え、そして腹が切り裂かれる。

臓器から何かが割って出てくる。

わかる。

蟲だ。

大量の蟲が何かが体中を駆け巡った。

口に入り、鼻に入り、そしてその息を止める。

必死で首を押さえる。

きつく握りしめる。

イケナイ。これじゃ、息ができない。

喉を切り裂いて蟲を出さなければ。そう思って慌てて喉に爪を当てた。

喉に穴を開けなければ。

穴をあける？

慌てて手を緩めて、そして叫ぶ。

怒涛の音が響くと共に蟲が吐きでた。イヤな感覚が残って風間は咳き込んだ。

落ち着け！



落ち着け！違う。これは違う！

風間は手を伸ばした。

思い出せ、久しぶりに喰らったから感覚を忘れたか？

感じ取るのは風。

ここの風じゃない。

研ぎ澄ませ。これは痛みじゃない。これは幻術。幻痛。幻影だ。

思い出せ、向こうの風を。

「はあ……！はあ……！」

戻った。

すべてが現実に戻り、風間は息を出した。

そして、地に倒れる。

衝撃が襲う。光と共に何かが駆け抜けて爆ぜた。

現実の痛み。何もかもが吹き飛ばような感覚に思わず悲鳴をあげる。

骨が、肉がちぎれる。折れる。吹き飛ば。

それでも立ち上がって、見る。

「まだ立つか」

卑弥呼。

巫女装束で君臨するその姿は昔の卑弥呼ではない。

全力で潰しにかかる化け物だ。

「寝てる。君のためだ」

何かが翔けた。

それを横にズラすが突き刺さった。

見れば槍。それが深く腹に突き刺さる。地に縫いつけるようなその槍を風間は無理矢理に抜き取る。

痛いと言うより、熱い。

どうやらとつくに痛覚は通り過ぎたようであった。

「あい……にく、俺は諦めの……わるい、男で」

「知ってる。だが寝ろ」

再び衝撃。血が目を覆ってボケてしかみえない。回避行動すらもままならず、そして何かが完全に折れた。

「ぐあああああああああああ……!!」

悲痛の叫び。

折れた。

完全に折れた。

腕がおかしな方向に曲がってる。ありえないくらいに曲がっているのを確認できた。痛覚が、再び意識を取り戻して体の痛みを正常に脳に届ける。

今さら起きてるんじゃないよ……！

痛覚を恨む。

こんな時ばかりだ。

でも、まだ立てる。

折れた右腕を下げて左腕で構える。足がガクガクと震えてそれでも立つ。痛覚が戻って全身の痛みを脳に届ける。痛すぎて、脳がパニックするのではなからうか？そんな事さえ思う。

「利き腕を折って私に敵うわけあるまい」

「やって、みなきゃ、わからないだろっ！」

翔ける。

瞬動で翔けてその懐に飛び込んだ。

筋肉がブチブチと、切れる音がしつかりと耳に残る。それでも、もはや気合だけで踏ん張り左腕で掌底を放つ。

「では、足が折れたらどうだ？」

卑弥呼が通り過ぎた。

それだけで風間は崩れて折れる。完全に足の器が砕けた。

わかる。なにせ耳に砕けるような音がこびりついているのだ。

「もう、動くな。寝ている。頼む」

悲痛な、声。

卑弥呼が泣きそうな程小さな声で風間を見下ろし、呟いた。

「寝ていればすぐに終わる。殺しはしないんだ。私たちが全力で拒絶する。また一緒に暮らそう。あいつの従者は癩だが。3人で力を合わせれば」

「止まらな、い、口だなああ！」

足を蹴って、掌底を叩き込んだ。

だが、小さな衝撃。掌底というものは足腰が大事だ。踏ん張り、しっかりと気を伝えなければ意味をなさない。だから、小さな衝撃しか起こせない。

それでも、卑弥呼は悲しそうな顔で下がった。

「なぜだ。何故立ち上がる」

「し、師匠。何を言ってる。俺、が、この幻想郷が、好きだからに決まってる、だろ……！」

ガクガクと顎が震えた。

血が溜まりきって、吐き出しながらも風間が答えた。

俺は、この幻想郷が好きだ。

お師匠お師匠と、俺みたいな奴を慕ってくれる弟子が好きだ。

いつも一緒に格闘術について花を咲かせ、たまに料理を作ってくれる門番が好きだ。

アニキと慕ってくれる妖精が好きだ。

馬鹿みたいに本に埋もれて籠る、図書館も好きだ。

友達というものを、外の世界を知ってその花を咲かせる吸血鬼が好きだ。

その妹を大事に思える姉も好きだ。

毎晩と静かな愚痴を漏らすメイドが好きだ。

山に住む2柱が好きだ。

その信仰を得ようと頑張る巫女も好きだ。

人里に住む子供を楽しく教える先生が好きだ。

幻想郷を束ねる貧乏でぶっきらぼうで、でも人一倍優しい巫女も好きだ。

物ばっか盗んでいる魔法使いも好きだ。

変な薬ばっかつくってる薬師も好きだ。

働かない阿呆も好きだ。

月が嫌いなその弟子も好きだ。

ぶっきらぼうで、気持ちに素直じゃない阿呆鳥も好きだ。

この幻想郷で胡散臭い奴の式になって頑張っている九尾が好きだ。

それで、この幻想郷を愛してやまない女も好きだ。

この幻想郷が好きだ。

だから、俺が大切に思ってきた2人が潰しにかかるのが、それを  
全力で護るのが男ってものだろう。

それが、俺って奴だろう。

「幻想郷。小さな場所でも必要としている奴らが居る。そいつらが、  
好きだから、俺も好きだから、俺は幻想郷を護るんだっ！」

開かれた目。



そして、きつく唇を噛み締める卑弥呼。

「そうか……」

呟いて、卑弥呼は札を出した。

「今も昔も変わらないな。風間」

でも、護りたくとも。力がなければ護れないんだ。

「神滅夜光」

札が光る。

恐らく神をも滅する夜光。

喰らったら確実にもう立てない。

だが、それを割って入るモノが居る。

靡く金髪。

「靈撃！」

その衝撃に卑弥呼が吹き飛んで、距離が離れた。

風間は、その名を呼ぶ。

「……ゆかり」

「あらあら、ボロボロね。大介」

風間は笑った。

「おまえが、いえるかよ」

血が服にこびりつき、あちこちと血を流している。服は擦れて、帽子は無くなっていた。

「しっかりとしなさいよ。」

幻想郷。護るんでしょう？」「

聞いていたのか。

「はは……恥ずかしいぜおい」

この様じゃ笑いものだな。

「そうね。笑っちゃうわ 素敵過ぎて」

いい笑顔が返ってきて、風間は呆けた。

こんなにも笑顔が綺麗な奴だったっけ？

「ありがとう」

そう呟いて紫は正面を見た。

ふう……。

息を吐く。

まったく、急にしおらしくなっちゃって。

本当にまったくもって。

「紫」

「何？」

「術者共鳴線を断つ」

「っ………！可能なの？」

驚いたように声を上げた。

やっぱり、境界ではきれなかったのだろう。

「ああ、俺の予想が正しければいける」

だから、協力してくれ。

終わらせるぞ。

ラインを絶って、あの糞野郎を叩いて、殺す。

それで終わりだ。

「援護<sup>カバ</sup>。頼んだ」

息を吐く。

痛覚が、風間の限界を知らせる。

だが、どうでもいい。

そんな痛み。今は意味を成さない。

一枚のスペルカード。

それを取り出して風間は額にそれを押し付ける。

この戦いに於いて、意味も無いカードであるが、確実な切り札。

言うならば、トランプの切り札。ジョーカー

すべてをひっくり返す、大勝負。



小さく言葉にして風間は手を翳す。

圧縮。

風が一瞬の速さで圧縮されて妖力が膨れ上がる。そこにあるのは風ではない

真空。

空気圧縮されてやがてその空気は無くなり、微かな真空を生み出す。妖力で外を覆い、光すらも閉ざすその真空は黒く濁る。

『真空丸』

真空を生み出す力が腕にかかる。ボキボキと折られ、筋肉が千切れるが、まるで蓬莱のように急激に回復していく。

「妖怪化の……満開……？」

紫が小さく呟いた。

彼の満開は二種類あった。妖力と神力を持ち合わせる彼だからこそできる業。

妖怪化と神聖化。

その2つは似ているようで違う。

神聖化は神としての能力を進化させて、その身体能力を向上させる。

妖怪化はその能力を向上させて、その身体能力を向上させる。  
そのどちらかが強いか、と問われれば、わからないと答える。  
どちらも彼で、どちらも間違いなく最強なのだから。

そして、彼が翔け抜けた。

黒い残像を残して。





38話「幻想危機」3章」（後書き）

昔の投稿小説を見て、昔のほうが描写も上手かった気がする今日この頃。

さて、最近二次創作を読みあさっているのですが、中々面白い小説とか見つけるのが密かな楽しみ。

私が見つけて面白かった小説を幾つかご紹介します。

東方 絡人繰形店 只今営業中 小説家になろう。 オルト様。

からくり形店を構え、「ありとあらゆるものを再生する程度の能力」を持つ主人公の物語。

ここの文が可愛くて、あとこういったなんかミステリアスな不思議なお話って私、大好物なんですよね！。

銀の狐と幻想の少女たち 小説家になろう 雨宮雪色様

500年振りくらいに幻想郷に戻ってきた狐さんが、幻想郷の少女たちと、ほのぼのしたり、キャツキャウフしたり、時にはシリアスしあったりするお話。

紫が可愛いすぎる〜( ^o^ ) /

大好物者なんで、ハマっちゃいました。

東方関係ないですけど。

実況パワフルプロ野球9、恋恋高校編アナザー、向日 葵様。

、猪狩世代。その猪狩世代を牽引する猪狩守と、あかつき中学時代バッテリーを組んだ男、葉波風路、あだ名はパワプロ。ライバル達と違うチームでの対決を望む彼は、設備と頼れる人が居ながら野球部がないという彼の望む最高の環境である恋恋高校へと進学する。

私自身、野球をずっとやってきたため（勿論パワプロくんもやってます）読ませてもらいました。

あおいが可愛すぎる（\*、、）

とまあ、こんな感じですかね。

やっぱり他人に評価されて、良い評価されるとがんばろうと想いま

すよね！

一時期更新が止まった時期あったじゃないですか。あれから連続更新まで行ったのはとあるサイト（東方風神記　ssでググったらできました）に自分の評価がかかれています、意外と高評価で更新する気になったんですよねえ、

見てくれる人にもがんばらなきゃって！

こつこつ気持ちに成れるってすごく幸せですよね。

ただの設定集2（前書き）

ただの繋ぎ止め。生存報告もかねて

## ただの設定集2

ただの設定集。主の妄想。

風間大介。

あらゆる風を司る程度の能力  
あらゆる事を保つ程度の能力

男

好きなもの らーめん

嫌いなもの 特になし

好きなタイプ 一緒にいて楽しい子。

嫌いなタイプ 人格が終わってる子。

概要

前世が人間。妖怪から時を経て神にランクアップ。ただし妖怪の力が合わさっているために中途半端。

性格は極めて温厚。ただし、怒ると凄い。冷徹な部分もあるためによくクールだと言われるが本人自覚なし。

人からも妖怪からも好かれる体質。こっぴどく見えて熱い男。

鈍感。女たらし。爆発しろ。

安倍晴明。

この世の理を把握する程度の能力  
陰陽道を司る程度の能力

女

好きなもの 茶菓子 風間

嫌いなもの ピーマン

好きなタイプ 風間

嫌いなタイプ 人として終ってる奴

概要

陰陽師。男として育ったが、風間にバレて以来それなりの振る舞いをするようになった。

風間を封印してから養子を取って安倍家を継がせ、自らは民のために陰陽道を使い、その陰陽師を確立させる。その後自らを封印して神木を作り霊力を京都に供給させる。

性格は極めて温厚。少し他人に冷めた感じであるが基本いいやつ。

たまに女の子口調に戻る。

卑弥呼

あらゆる術を司る程度の能力

女

好きなもの 米

嫌いなもの あんましない

好きなタイプ 風間

嫌いなタイプ 風間以外

概要



祈祷師。引き籠って居たが風間に背を押されて外の世界へ。以降村を治めながら邪馬台国を築きあげていく。風間が村を出て以降また引き籠もり、遂に自らを封印する。

その後信仰を集めたために神として昇格。

神力を始めとするあらゆる力を扱えることが可能。

チート乙。

性格。クールで達者でとことん他人に興味がない。風間とは師弟関係であるが本人はそれ以上を望んでいる。

何かにつけて風間を食べようとする。

怒ると地球が崩壊する。

土御門光晴

陰陽道を扱う程度の能力  
禁術を覚える程度の能力

男

好きなもの 女

嫌いなもの 妖怪

好きなタイプ 美人 ぼんきゅぼーん

嫌いなタイプ ブス

概要 イケメン自己中。でもちょっとだけやさしい。

性格 オワコン

ただの設定集2（後書き）

<http://com.nicovideo.jp/community/co1295927>

ニコ生始めました。

この枠では雑談やまあ雑談。それと雑談やります。

なんか面白いゲームがあったら。それもやろうかなー。

あと皆様の意見を取り入れたり。

まあボチボチやっていこうかな？

たぶん人こないと思うけど

39話「幻想危機」4章」

駆け抜ける黒い風は空気を裂いて2人に接近した。すべての飲み込むような黒い風に卑弥呼と晴明は構えを取ってその衝撃に備えるべく防護の術式を展開する。

お札による防護と瞬間の術式。並であればある程度の衝撃で崩れてしまいそうなモノであるがその一瞬の形成も最高級の術式を組める2人にとって、その時間と言うのは意味をなさない。

風間の真空丸が晴明を襲い、防護に反する力で晴明を押す。

「くっ……！」

その圧力に腕が軋み、そして震える。

『爆ぜろ！』

無理やりに妖力をかませて爆ぜた真空丸は周りを吹き飛ばし、そして決りながら散る。

晴明が瞬間の判断で距離を取って離れるが衝撃に耐え切れず体勢を崩しながら宙を舞った。

依然と標的を変えずに晴明に飛ぶかかろうとする風間であるが、そこへ卑弥呼が割り込む。

腰を落として一回転。掌底を打ち込むが瞬時に風間が消える。

スキマである。

スキマによって移動したのは清明の前。

コンマの動き。息の合った連携。止まらない動きは清明が体勢を整える時間を許さなかった。

すぐさま援護に向かおうとする卑弥呼と対したのは紫。風間と入れ替わるように前へ出てその腕を大きく振るう。

風間も足を大きくあげて、同時に振り下ろす。

地に叩きつけられる清明と後ろに吹き飛ぶ卑弥呼が交じ合い、そして地に伏せた。

「くっ……！」

痛みに顔を歪ませて2人は立ち上がろうと腕に力を込めるがそれすらも成さずに宙へ上がった。

風間が2人を蹴り上げたのだ。

すぐに視野を動かしてみるのは黒い風と紫色の弾幕。

「調子に……！乗るなあ！」

卑弥呼が体勢を整えて力に任せて無理やり拡散させる。濃い力が

周りを支配して風間と紫を弾き飛ばさんと動く。

だが、風間と紫はそれを超えた。

風間がその霊撃のような波を無理やりかませて押さえ込み、紫が風間を踏み台にするようにして舞う。

「堕ちなさいっ！」

境界が開かれる。

幾つかの境界。それが開かれて現れたのは無数の弾幕である。

まるで最初から溜め込んだかのような、その弾幕の数。それは形を成して1つとなり卑弥呼と晴明に襲いかかる。

蹴散らすために力を拡散させた卑弥呼はその反動で動かず、晴明がカバーに踊り出て札を投げ放つ。

## 六重境界

頑固としてその防御力を魅せつける結果。勿論、弾幕は通らず無残にも爆ぜただけ。

だが、風間は待っていた。

この時、この瞬間。大きな力を消費し、そして一瞬の間生まれる隙を。

「紫い！」

だから風間は声を上げた。

この一瞬の間。それを埋める声。

この声が紫の体を反射的に動かす。風間の考えている事。それを肌で感じとりもはや本能だけでそのボロボロの体と妖力を動かして指を結んで組む。

#### 四重結界

4つで作られた結界。重なり、そして束縛する。

結界とは本来聖なる領域と俗なる領域を分け、秩序を維持するために区域を限ることである。

故にそれは対象を孤立させて束縛することも可能である。対象者の領域を分ける事。紫の四重結界は清明と卑弥呼を孤立させ、束縛させた。

幾ら陰陽道を司る清明や卑弥呼であろうとも、結界をそう容易く破る事は不可能である。即席の結界なら無理やりにも破れたのかもしれない。

だが、この四重結界はスペルカードの力を借りて出来たものである。初めから作られた術式の上に妖力をかぶせた強化された結界。それを破るには内側から術式を解除しなければならない。

その時間は2人なら1分程度。いや、もしや30秒も掛からないかもしれない。

それでも、それでもこの戦いに置いてそれだけの時間を無条件で稼げるのは決定的である。



風間は妖怪の満開を解く。一気に脱力感が襲って思わず倒れそうになる。

だが、唇をかみしめ、そして懐から札を取り出す。

集めるのは神力。外すのは妖力。

2度目の満開。

満開はこうして連続で使えるものではない。ハイリスクハイリターンで成り立つのが風間の満開。妖力を外して神聖化する満開と神力を外して妖怪化する満開。

どちらも強力で、言えばどちらかの力を完全に消滅させる。

1つの力を完全に酷使用する事がどれだけの負担になるのか。

精神と体は1つであり、その精神力の1つとしてある力を使うということとは体力を使うということ。

それを風間は無理やりにも、さらにすり減らすように酷使用する。

この腐った戦いを終わらせるために。

あの糞野郎を殺すために。

この大好きな大事な場所を守るために。

満開「東方風神記」

震える手で札を取り、額に押し付ける。光が身を包むと同時に激しい激痛が襲ってきた。

まるで体を上下で引っ張られているかのような感覚。吐き気が襲い胃が逆流する。精神がすり減るといった感覚は、思った以上にキツイ。

晴明たちの結界が持つのはあと持って数十秒。満開が切れる時間もそう遅くない。

なら、この一瞬でケリをつける。

「紫い！」

再度投げかける言葉。その声はもはや悲鳴に近く、紫自身も切羽

詰まった様子で頷く。

そして境界を開く。

「大介え！」

紫の音が響く。声が反響する。スキマが現れる。一瞬の間、すべてを理解した紫がスキマを通じて風間の元に送り出す。

それは、傘だった。

長く彼女が愛用した傘。それがスキマから現れる。

それは見ればただの西洋の日傘。だが、彼女が長年親しんだこの傘に紫はただある能力を添えた。

境界を操る程度の能力は言い換えればすべての境界を、自在に操り、そして手中に収めることができる最強の能力である。

故にこの傘の境界を弄り、『境界』を弄ることができる傘を作りだすことができる。

風間はあらゆる事を保つ能力を神聖化する事でその能力を相手に干渉できる。この場合術者共鳴線が異分子として正常に保つために戻す事ができる。

だが、それを断ち切るためには境界を一緒に弄らなければならぬ。

それほど、強力なものであり、それほど規模がでかい代物であることなのだ。禁術と呼ばれた術式故に、術者と従者を強く結びつける厄介なモノ。

風間は傘を取り出し、そしてそれを引きぬいた。

白い神力によって傘が形を変えて1つの刀を創りだす。

これはただのイメージだ。一番自分が線を切りやすいように型どったもの。

それにしても、こちらの意図がすぐにわかる辺り、本当に助かる。さすが紫ってところかな？

まあ、いい。

「後は、断ち切るだけだ」

お師匠、晴明。

待ってる。

今、楽にしてやる。

大きく腕を広げる。そして、走りだす。

四重結界に縛られた2人を横一閃。

すべてを断ち切るその一閃は閃光を描いて、白き残像を残す。

境界・斬

「なんてね」

術者共鳴線が、断ち切られる。

39話「幻想危機」4章」(後書き)

<http://com.nicovideo.jp/community/co1295927>

ニコ生始めました。とても良い雰囲気です。雑談させてもらってます。





獣のような雄叫びを上げていた。

何かを引き裂かるような叫び声。それはもはや人間の声ではなく、獣のような雄叫び。

顔をひきつらせて、ヨダレをぶちまけて、指を忙しく動かして野垂れ回る。胃液が流れ、涙を垂らしながらそうしてやがて光晴は膝を折ってもはや光を見ない虚ろな目で膝を折って地に跪いた。

先ほどまでの殺し合いが嘘みたいな静寂が訪れる。

今までの戦い。結界の内に繰り広げられていた戦い。それは確実にスペルカードルールを無視した正真正銘の殺し合い。

結界を維持していた霊夢を始めその繰り広げられる戦いを傍観していた者達は啞然とする。戦いを知るものはその戦いの高さに唇を噛み、そして戦いを知らない者はその戦いにただ呆然とする。

スペルカードルール？そんなものは遊びだ。

殺し合いとは命を掛けて相手を壊すためにただ業を出しあう。そこに一切の情もなく、そして一切の油断も、妥協もない。

『足手まとい』

風間がそう言い放った理由。それは本物の戦いと遊びとの違いを決定的に表したモノであった。

霊夢が、早苗が、咲夜が、美鈴が、文が、チルノが、魔理沙が、それぞれがそうして自分の認識の甘さを思い知らされ、レミリアは不愉快に拳を固める。

今までに確かに命の掛け合いというものは味わった事がある者も居る。だが、それでも他と比べれば圧倒的な経験不足なのだ。

古くから生きている文やレミリアでさえ、戦力外通告を言い渡されたのは長く幻想郷のルールに慣れたせいか。

それとも、単なる信用のなさか。

「……はぁ……はぁ！が、がぁ！」

荒く息を上げる風間。何度もふらつき、だが、しっかりと歩む。

肩で息をして呼吸が詰まり咳をこむ。

「今……らく、にしてやる……！」

そう言い放ち、風の槍を形成させる。そうして光晴に歩み寄った。

よだれを垂らし、そして膝を折って地に付く光晴。そして風の槍を持って近寄る風間。

霊夢が、早苗がその意味に気がついて、慌てて走りそうして光晴の前に立ち庇うようにして立つ。

「……………なんの、マネだ……………！」

疲れきった目を2人に向けて風間は声を上げた。

「あんた……………こいつを殺すつもり？」

霊夢の問いに勿論だろうと即答する。

「俺はこいつを殺す。間違いなくな」

「そ、そこまでしなくてもいいじゃないですか！」

「……………何を言っているんだ？」

早苗の言葉にピクリと風間は動いた。

「アンタにこいつを殺させないって言っているのよ」

その言葉に、風間はキック目を釣り上げた。

「どけ、どかないとお前らごとく殺るぞ」

殺気。

濃い殺気がうごめいて2人に圧力をかけた。死という概念がすぐそばにある。少し動いただけで首を持ってかれるような、そんな感覚。

ここに知っている風間はいない。

いつも陽気に笑って愛想よくする顔はここになく、目の前に立つのは歴戦をくぐりぬけた神　いや猛獣。牙をこちらの首に立てて呻く獣。

膝が晒う。

早苗は、霊夢は今にも崩れ落ちそうな感覚が襲ったが、だが已然と風間を睨んだ。それは遊びとはいえども死線をくぐった経験が生きた証か。

「こいつが、と言う奴かわからない。興味もないわ。ただ、同じ人間が目の前で殺されるのは夢見が悪いのよ」

声が震えていた。冗談みたいに露骨に、それでもはつきりと霊夢は言葉に放つ。

より一層濃くなる殺気。

しばらく沈黙が続いたが、やがて声が横から入りだた。

「……大介。そいつは私たちが処分するわ。私に免じて引いて頂戴」

紫の声であった。疲れたように地面に座り込み、そうしてこちらを嘆息しながら見ている。

やがて、殺気が萎む。

風間は槍を分散させると、息を吐いてクルリと背を向けた。

倒れこむ卑弥呼と清明の2人を抱えて、少しふらついた足で紫に歩みよる。

「……紫、ありがとう。マジで助かった」

「礼には及ばないわ。私は私の場所を護っただけよ」

そう言っつて扇子を広げる。風間は傘を渡してそうして、紫が開いた境界に入り込む。

「紫」

最後に振り返って紫を見た。

「あとは、頼む」

「ええ。後は任せて、ゆっくり休みなさい」

「悪いな、お前も疲れてるのに」

「私は援護にまわっただけよ」

そんなわけがない。ずっと隣で一緒に戦って、コレほどの戦いの中で疲れていないというのはありえないのだ。

風間はそつとため息をついて、紫の頭に触れる。

「お前も、ゆつくり休め。そうしたら茶でも飲もう」

風間がふつと微笑んでスキマに消えていった。

「……………」

スキマに消えた彼。触れられた頭を少し触って、微笑む。

「あらあら、私もまだ若いわねえ」

少し火照った頬を撫でて、そうして紫は周りを見渡し、そして光晴を見る。

「それで、貴方達はこのつをどうしたいのかしら？」

少しキツメの視線で2人を見る。

「どうするも…………外に出すのよ。それ以外はないわ」

「ええ、私もそうしたほうがいいかと。幻想郷に攻め込む事に失敗してあの2人を従えることが無くなった今なら安全かと思いますが」

「…………どっちみち、この男は死ぬ　いや死より辛い事になるでしょうけどね」

紫の言葉。その言葉に霊夢は眉を潜めた。

「…………どういう意味よ」

「そのままよ。彼はもう人間ではない。ラインを無理やり切られた術者は心が壊れるの。いわゆる植物人間ってやつね。言い換えれば極度のうつ病。狂気に蝕まれたかわいそうな人間ってどこかしら」

「……」

「そんな状態で生かされるくらいなら一層のこと殺したほうがまだ幸せだろうと大介は思ったんでしょけど。貴方たちに止められたわけだからね」

早苗は、顔面を蒼白としてそうして光晴を見た。

虚ろな目。突如として不気味に笑い、ヨダレを垂らして地面を見据える。

こんな状態で彼は生きていけるか？いや無理だろう。

だから、風間は言ったのだ。楽にしてやる、と。

「まあ、望み通り外には出してやるわ。頭がこういう状態になって帰ってきたって所を陰陽師の奴らに見せつけければもう2度と馬鹿な考えはないでしょうね」

再び静寂とした空気となり、紫は息を吐いた。

「貴方達が何を思うかはわからないし、興味はないわ。だけれどもこれだけは覚えておきなさい。先ほどまで幻想郷は危機に陥っていた。戦わなければすべてが無くなるの。そういう時も必ずある。スperlカードールに縛られた戦い方が全てではないことを覚えておくといいわ」

スキマを形成し、紫は消える。

幻想郷の危機。

それが去って静寂な空気が残る中。

それぞれが、それぞれの複雑な気持ちが変わる。



40話「幻想危機」最終章」(後書き)

<http://com.nicovideo.jp/community/co1295927>

ニコ生やっています

雑談熱すぎワロタ

みんな俺に作業させてくれw

#### 41話「宴会！」

幻想郷では異変の終わりに必ず宴会をやる。

それは異変を起こしたのも、異変を解決したのも、どんちゃん騒ぎで皆仲良く。という習わしらしい。

それが幻想郷というものであり、外で忘れられたモノが内に溶け込むための一種の歓迎会でもある。酒を飲み、騒いで騒いで仲を深める。

晴明と卑弥呼もまた例外なく幻想郷の連中に揉まれる。

それは新しい仲間を迎える儀式。

「ほらほら、遠慮せずにじゃんじゃん飲めって！」

「いや、私はあまりそんなガツガツと飲む性格たちでは……」

「なーに言ってるんだぜ！そんなチマチマとした飲み方じゃ酔えるものも酔えないって！」

魔理沙に絡まれて瓶の酒を飲まされる卑弥呼。当初ここに来たときはそんな乗り気ではなかったが今じゃすっかりこの雰囲気きに飲まれている。

「晴明ねー平安の世では散々噂になっていたけど、まさか女なんて」

「我もまさかかぐや姫がここに居るとは思ってたぞい。てつきり月に帰ったかと」

こっちはこっちで昔の談笑をしている。

かぐや姫、妹紅、永林を縛っていた封印の結晶は元は光晴の術式だ。光晴の精神が死んだ時点でその封印は開放される。実際、あの3人は死なないので事実上無傷と言っていいだろう。

宴会に参加するにあたってこの3人について少し敵愾心というものをあるのかと思っていた2人はその好意的な接触到最初は戸惑っていたがアルコールも手伝ってたせいもあるのか、すっかりと溶けこんでしまった。

幻想郷の宴会とはこういうものだ。終わってみて、酒を飲めば敵も味方も関係なしに飲む。

それがどんな異変でどのような事が起きようが。

人であるものと人でないもの。その2つが共存する幻想郷ではなくてはならない暗黙のルール。これが崩れてしまえば、幻想郷という存在があやふやになる。

「……」

風間は楽しそうに酒を飲む2人を見て微笑む。

2人とも実はこうして馬鹿みたいに騒いで酒を飲むのは初めてなのではないだろうか？

思えば、卑弥呼は引き籠っていたし、晴明に関しては風間としか酒を飲んだことがないだろう。男としているために女を隠している晴明が酒でも飲んで醜態を晒したら大変な事になるために人とは酒を飲まなかったらしい。

「おらあああああ！飲め！飲め！」

神奈子が騒いで樽を振り回している。あれで神なのかと問われれば今の風間なら即効で首を横に振るだろう。

神は酒をわざわざ樽に淹れて振り回したりしない。

「神奈子様！落ち着いてください！」

早苗が必死に止めるがあれば止まらんだろう。

「風間ああああ！飲めええええ！」

「ちょ！お前酒臭い！近寄んなよ！」

どんだけ飲めばこれだけベロベロに酔えるんだ。

「ああん？私の　神の酒が飲めないっての？」

俺も神です。

「私の方が神格上なんだよっ」

「うるせえ！俺は酒は静かに飲む派なんだよ！てか、くっつき過ぎ  
！」

「あゝん？いいじゃない。女の子と触れ合って風間も嬉しいだろう  
？」

肩を組んでくる神奈子。酔っぱらいの激しいスキンシップはかな  
りウザい。例え弾けんばかりの胸が当たろうがウザいもんはウザい。

「女の子って歳でも……」

ボコッ　ドガッ　ゴギッ　バゴッ　ドゴッ

「……………！？……………！？」

あ、れ？あれ？今一瞬5人くらいの拳が飛んできたぞ？

一気に崩れ落ちて地に倒れる。

思ったが、なんでこんなに女って歳に拘るのだろうか？さらに言えば妖怪や不老不死だって歳はかなり喰っているわけだしいまさら気にしたって。

ポコッ ドガッ ゴギッ バゴッ ドゴッ ピチューン。

「……」

もう疲れたよパトラッシュ……。

「風間さん、邪魔」

更には霊夢に蹴られる始末。案外、皆俺の事嫌いなんじゃないのかなあ。

「……」

立ち上がり、酒を持って縁側へと移動する。いいもん、1人で飲んでやるもん。

火照った体を更に熱くするような酒を喉に通す。苦味と辛味が心地よい。

風が体を翔け抜ける。

火照った体を冷やすような風。暑いからだと冷たい風。

凄い心地よい。後ろの喧騒も、吐くような嫌な音も気にせず風間は縁側で一人飲み続けた。

「もしもし、貴方が噂の風神？」

声を掛けられて見て、思わずハツとした。

それは、桜だった。

桃色のウエーブ。整った顔立ち。美しく形取られた顔つきは恐ろしい程白い。寝間着のような、着物のような、フリルのような。そ

んな曖昧としたヒラヒラとした着物を身につけ、そして、すべてを覗き込まれるような赤い瞳。鈴仙のような狂気の目ではない。」

あれはまるで 死の瞳 。

「……貴方は？」

「あら、まずは自分の名前から名乗るべきではないのかしら？」

ふわふわと浮くような話し方。掴みにくくて、まるで紫みただな。

「風間大介。風神」

「西行寺幽々子。亡霊よ」

宴会のとある夜の日。

風間は人生初の亡霊に会った。



西行寺幽々子。

それが彼女の名前だと言う。

そして、亡霊だと言う。

実体のある亡霊とは亡霊なのだろうか。

「細かい事は気にしないの」

ふわりと笑う彼女はとても大人びていて、そしてとても美しい。思わず息を飲んでしまった。

「あら？何か顔に付いている？」

「いや、ただ単に美しいな、と」

素直な言葉だ。下心もお世辞でもない。純粹な言葉。

「あらあら、褒めたって何もでないわよ？」

微笑して顔に頬を当てる彼女。風間は小さく視線を落として酒を飲む。

聞けば彼女は冥界と呼ばれる場所で霊の管理を行っているらしい。今回の件が起きてやけに霊が活発し、そして大量の人間の魂が押し寄せてきた。つまり大量の死に人が出たらしく少なからずこの異変に関わっていた。

死に人、清明と卑弥呼から聞いていた。

光晴が生贄を出して2人を開放したと。

「貴方ならどう思う?」

言われて風間は即座に答えた。

「どうも思わないし、興味もない」

驚いたように幽々子はこちらを見る。そんなに意外であったらろうか。

もし、自分が封印されてその開放に人の命が使われていたとしても自分はどうも思わない。自分の事しか考えられないのではない。

本当に興味がないのだ。

いつから、人の命というのが最優先に考えられたか?

なら、犠牲になるのは家畜ならいいのか、牛なら、馬なら、豚ならいいのか?

命というものは常に公平であり、常に大切なのか?

「例え、犠牲になった人がいて、でも俺にとつちや名も顔も知らない奴だ。知り合いならまだしも。だから、興味もない。ただ、救われた命があるのなら、俺は一生懸命生きるだけだ」

あーなんかしんみりしてるなー。

「西行寺さん、今宴会！パーとやないと！」

「……ふふ、そうね。意地悪な事言つてごめんなさい」

それと、と付け加える。

「幽々子でいいわ『大介』」

扇子を口元にやって微かにわらった。

紫みたいな人だな、とつくづくそう思った。



41話「宴会！」（後書き）

最近、本当にダメなんです。ワードを立ち上げても文字しか打てないんです。ああどうしよう

## 42話「宴会！そして」

宴会は順調に、そして愉快的な雰囲気となる。酒を飲み過ぎて暴れる奴もいない。弾幕をはったらめったら吹っ飛ばす者もいない。

卑弥呼も晴明もこの雰囲気確実に慣れて今ではほとんどの人と仲良くなっているのが現状である。

やはり幻想郷の宴会は偉大だ。

風間は小さく笑う。

「どう？あの2人は」

声を掛けられて風間は酒を喉に通す。

「ああ、問題ないよ。紫」

隣で同じく酒を飲む紫はそう、と答えてまた小さく笑った。

彼女には今回の件で色々と助けられた。どうも最初は胡散臭く信用がならないと思っていたが、この評価を改めなければならぬ。

「それにしても、いつ見てもいつ来ても賑やかだよなあ」

目の前で飛び交う喧騒。

弾幕は飛ばないが酒は飛んでいる。見知った顔もいくつか、地に伏したり、吐いてまた立ち上がっている。

「そうね、それが宴会ですもの」

それが宴会。楽しくやらなきゃ宴会じゃない、か。

「貴方もこんな隅っこでチマチマ飲んでいるより、皆と飲んだほうがいいんじゃない？」

「そう……だな」

偶には騒いで飲むのも悪くない。

「で、何故か買い物に駆り出されると」

もう少しで夕日が沈むような時間。食材が足りなくなっただからと買い物に行かされる風間は深くため息を吐く。

「君もお使いという名の使い走りかい？」

隣で並空する白髪の少女。名は魂魄妖夢というらしく、幽々子の従者らしい。

「あ、はい。幽々子様が風間様についていきなさい、と」

「風間様、なんてやめてくれ風間でいいよ」

手を振って笑う。様、なんて付けられたのは久しぶりだ。

卑弥呼の村以来か。

「では、風間さんと」

なんと礼儀正しい少女なのか。皆もこれくらい常識があったらいいのに。



「それじゃ、まあさっさと買い物を買わせて俺たちもパーツとやる  
うか！」

「はい」

宴会会場。博麗神社。微かに戦いの後が残るこの神社の本殿の一  
室で酒を浴びるように飲む少女達。最初は確かに、素晴らしい宴会  
であった。

だが、事の発端はとある少女の一言から始まる。

『お2人のどちらかは、風間さんと付き合っているんですか？』

その一言が宴会の空気を変えた。

何故、その話を、そして何故この時を。

風間を好いている者。面白そうに見る者。または興味があるもの。様々が様々の反応を示し、そしてその視線が注がれる。

清明と卑弥呼に。

2人は顔を見合わせた後、口をそろえて答える。

『勿論、私（我）と付き合ってる（おる）』

見事までの口合わせ。そして、俊足の速さで交差する。

「ほほう……卑弥呼殿。貴方もやはりあやつと関わりがあるとは聞かされておったが、生憎とあやつは我と契りを交わしておってな」

「ふふ……清明君も冗談が悪い。そんな証拠もなしに勝手にあいつを取らないでほしいなあ」

噴出す瘴気と殺気。

そんな2人の修羅場に皆が顔を見合わせる。

（結局どっちもそんなに進展していないんじゃないか……）

勿論、風間自身、彼女らとそんな関係になつた覚えはない。清明

に至つてはキスまでされたが返事はまだ出していないし、本人自身一時期な迷いの部類だと決めつけて純粋な乙女心を破裂させているのである。(双方自覚なし)

卑弥呼に至つては何十年と一緒に過ごしたために彼自身にホの字というわけでもあるし、また彼女自身の性格で師匠という立場からもはや風間を自分の物と勘違いしているのである。

「ああ、なるほど、結局2人は師匠とそんなうまくいってないんですねっ」

本来ならば、酒の入ったこの場でこの2人をなだめて自然と別の方の会話にもっていき、楽しくまた宴会を再開するところであつた。

だがしかし、師匠と慕う文に取つて風間を言いようにする2人が面白くないのか、ドスの効いた笑顔をぶちまけはつきりとその言葉を口にした。

「ほほう……小娘、我とあやつが上手くいってないじゃと……？」

「ええ、だつてそうでしょう？風間さんは貴方達を大切な『お友達』としか見ていないと思えますしね」

「ふん、それを言う君も彼の弟子とか言っているが所詮弟子程度だろ？人の事を云えまい」

修羅場だ。

早苗は思った。こいつ話の類が大好きな元女子高校生はすぐさま臨時体勢を取る。

修羅場だつ。リアル修羅場だつ。

結論から言うと、こういう類が大好きなのである。

「あらあら、3人ともお盛んね……あの『大介』がそんなすぐに尻尾を振るわけがないじゃない」

そこに介入したのが紫である。ある種、面倒くさい事になってしまったと霊夢は嘆く。

『大介え……？』

「あら、何か問題でも？」

実のところ、下の名前で呼ぶのは紫が初めてだったりする。風間は自身がその名前を大変気に入っており、紹介の時も名前だけしか明かさなかったりする。

故に師匠と呼ぶ文は兎も角、卑弥呼と晴明はまだ一度も大介と下の名前で呼んだことがない。

「お、お主は前から思っていたことじゃが、もしや誂うだけにあやつを」

「あら、心外だわ清明さん。私も本気よ」

最初は興味だけだった。強い妖怪が居る。あわよくば式にしよう。だが、気がついていたら、何故か彼に惹かれていたのだ。

これは恋なのか？と問われればそうだと確信できるものはない。

ただ、彼を他の女に取られたくない。ただそれだけ。

「私は欲しいと思った物は手に入れる性格なの」

「うぐぐ……」

晴明がうなり、そして卑弥呼が睨みつけ、文が静かに紫を睨む。

「でも、あいつってすんげー鈍感じゃないか？」

魔理沙が面白そうに声を上げた。

「あいつが誰かにホの字になるなんて想像できないぜ」

その言葉に皆が一斉に想像する。

風間が誰かに惚れ、ピタリと隣に付き添い甘い言葉を告げる姿。

咲夜が、文が、晴明が、卑弥呼が、藍が、幽香が、紫が、自分と彼を思い描いてそうして首を振る。

まったくもって想像ができない。

そして、つい想像してしまった彼女らは何を馬鹿な事と勝手に赤くなつて悶える。

特に咲夜と藍、そして幽香までもが想像して、悶えるとは自分は一体何をやっているのだろうか。

「あら、なら試してみる？」

その凜と響く悪魔のような声に一斉に注目が集まった。永林である。薬師、月の頭脳とまで謳われた彼女が口にする。

「彼がホの字になるところ」

一体何故持ち歩いているのかと、思いたくなるようであるが、何処からか1つの瓶を取り出す。

「これ、惚れ薬」

再度空気が変わり、そしてこの場は戦場と化した。

もしかしくとも、これはチャンス機会なのではないかと。

「ただいまー」

風間が魂魄と共に買い出しを終えてその類を台所に置いて戻ってきた。

魂魄はこれから料理をまたつくらないといけならしい。1人暮らしが長い風間も手伝おうかと思ったがやんわりと断れた。

『貴方が幻想郷に対して行った功績は聞いています。今はただ楽しんでいただけたら、と』

ああ、なんて良い娘なのだろうか。こっ、なでなでしたいっ！

『お帰りっ』

「……な、なんだ」

宴会会場に戻ると総出でお出迎えされた。どうした。何か悪い物

でも食べたか。

「ささっ、ほら疲れたでしょう！師匠ここはグイッと！」

「お、おう」

なんだろう。凄く嫌な予感がする。

文にコップを渡されそこに酒を注ぐ。

「ささっ、グイッと」

……………。

怪しい。とてつもなく怪しい。

だが、ここは宴会の場だ。何も変な薬を淹れるほど、馬鹿なやつらではないだろう。

馬鹿な奴ら、ではないだろう。



風間はそのままグイッと飲む。濃度が高いのか瞬時に辛みと熱気が体を襲った。なんとも体が火照る。いい感じに酔いが回ってそのまま風間は大きく息を吐いた。

「うっ……！」



「も、もしかしてあらゆる事を保つ程度の能力が原因……？」

「あ、あり得るかも……」

肩を落とし、あからさまに落ち込む者が数名。

「あれ？皆どうした？」

『なんでもない……』

肩を落とす者を知り目に霊夢も静かに立ち上がる。

「あれ？どこいくんだ？」

「火照った体を覚ましによ」

手を上げてダルそうに言う霊夢は宴会場を後にする。風間は適当に相槌を打って再度酒を飲んだ。

「皆さーん。料理出来上がりましたよー」

魂魄の声が響いて台所から料理が運ばれる。

「ま、まあ改めて、宴会を楽しみましょう」

誰かの声が虚しく響く。

しばらく気まずい雰囲気の流れたが結局いつもの宴会に戻った。

なんだかんだ言っただけで騒ぐことが本当に好きらしい。

「ちょっと風にあたってくる」

霊夢が出て、気まずい雰囲気も少し解れて、風間は風に当たるといつ口実で宴会を出た。

「……」

そうして風間は宴会から離れた本殿外の縁側に柱を背に息を整える。

「はあ……はあ……くそっ、あいつら……！」

熱く、激しく鼓動する動悸は抑えられず風間は頭を抑える。

「畜生……これ、惚れ薬か……？」

本当に、嫌な連中である。

これで俺を逃しつつもりだったのだろうか、生憎と理性は保てた。

ただ、抑えられる程度にも時間がありまたあの便利のようでは便利じゃない不安定な能力『あらゆる事を保つ程度の能力』が発動しない。

「まったく……勘弁、してくれ」

畜生、いい加減にしろよ……。

惚れ薬とはいわゆる理性の塊だ。

女の子を触りたい、イチヤイチャした、ヤリたい。

女の子を見るだけで動悸が激しくなり、体が、頭が勝手に動く。

それだけしか見えず、それは洗脳と言っているほどである。これがどれだけ危険なモノなのか、わかっているのか。

……わかっていないんだろうなあ。

「ともかく……この薬が切れるまで……どこかに……！」

ハアハアと荒い息遣いをしながら本殿を離れようと歩く。

「あいたっ」

だが、体勢が崩れ、こちらに近づく人にぶつかってしまふ。角での交差。よろけて一緒に倒れる。

「あいたたた……つて風間さん？」

霊夢であった。

風にあたっていた霊夢が何故こんなところにいるのだろうか。見れば何かの酒瓶がある。倉庫から取ってきのか？

いや、それよりも。

霊夢の顔がすぐそこにある。

黒い瞳。整った顔立ち。微かに匂う花のような透き通った香り。

その瞳が大きく開かれて、そうしてこちらを見ている。



この体勢はまるで、押し倒しているような……。

「か、風間さん……？」

戸惑ったような、驚いたような、そうして不安そうな。

いつものぶっきらぼうな顔ではなく、こうした状況にドキマキしている彼女。

「霊夢……」

小さくその名を呼ぶ。

びっくりした。自分でもこんな声が出ている事に。

だが、それ以上に意識が、ヤヴァい。

くそっ、畜生。惚れ薬のせい……なのか……。

意識が。

駄目だ。

「か、風間さん……？」

角を曲がり、そうして倒れ押し出されたら風間さんが上に覆いかぶさっていた。

いつも見せるあの陽気な顔ではなく、まるであの時の戦いのような真剣な顔がそこにあり、霊夢はドキマギする。

本来ならば、つきだしていたのにも関わらず、霊夢にはそれができない。

思っていた以上の力が覆いかぶさっていたし、なによりあの瞳で見つめられてまるで金縛りのように動けないのだ。

そして。

「ひゃー！」

風間が完全に覆いかぶさった。

包みこむように、ピタリとくっつく風間に霊夢の心臓はいよいよ馬鹿になる。

頬が熱くなるのを感じながら、何をするかと蹴り飛ばしてやろうかと思い、そうして見る。

「……………」

見れば、目を閉じて眠っているのだ。

「なによ……………寝ているのね……………」

本当に、なんなのだ。ため息を吐いて、そうして風間をどかさうと手にかけて。





## 42話「宴会！そして」（後書き）

コミュの方が200人を突破いたしましたして、楽しくやらせてもらっています。

そこで200人記念になにやろうってことになって。

リスナーの皆様には短編小説を書いてもらい、それで私が入ったのがあればここに投稿したいと思います。

5000文字以内でお題は「花火だ！恋だ！宴会だ！」です。

お題にそった話をお願いします。

風神記にでてくるキャラをつかってもおkです。ただしキャラは崩壊しないでください。

またオリジナルキャラでもおkです。

期間はこの投稿から3週間以内です。文はこちらのメールで @ に変えてください。

takatyann217@yahoo.co.jp

件名 名前を必ず書いて送ってください。では

#### 43話「宴会！死屍累々」

雛鳥というものは、生まれた時に目の前にある大きく動いたものを親と見る。

永琳が作った惚れ薬というものはそれを応用したようなものだ。

最初に見た異性を嫁　つまり好くという傾向だ。

だが、如何せん風間の抵抗力が強く中々に薬本来の効果が発生しなかった。これは風間が薬の正体を惚れ薬だと認識しているために無理やりに抑えたためである。

それでも、その薬は強力であった。

風間の抑えていた理性が、本能が、薬によって湧き上がる。

抑えていた分の反発が襲い、風間は意識を手放す。



そして、風間の黒歴史が始まった。

後に風間は言う。

もつやだ……お婿にいけない……。

「……」

重い、空気が、果てしなく重い。

息苦しさを感じて、思わず唾を飲む。その音すら反響して響いているのではないかと、錯覚するほどに大きく音になる。

その沈黙。

博麗神社にて対面する乙女達。

困い、円形で座る彼女らの円卓会議が始まってからもつ30分以上が経つ。

だが、誰もしゃべらないし、誰も言葉を発しない。

魔理沙はその空気に身を縮ませて、深く息を吐こうとして、それすらも響く事に気がついて口を閉じる。

「結論から言っわ」

紫　この会議の首謀者でもある彼女は大きく息を吐いて言葉を放つ。

「わかっていると思うけど、由々しき事態よ」

真剣に声を放つ紫の顔は真面目。それどころか焦っているように見える。

「予想もしてなかった結果に皆、戸惑っているかもしれないけど」のままでは確実にヤバイと思ったほうがいい」

ちゃぶ台に肘を寄せ、口元に手を持ってあわせる。

「めでたく風間が卒業してしまうわ。霊夢も一緒にね」

『!?!』

電流が走ったような各自がビクリと肩を震わせた。

「そ、そこまで酷いのか？私はアレから見てないからわからないのだが……」

魔理沙の言葉に紫はそつと手を上げる。

そして、紫がパチリと指を鳴らすとスキマが開かれた。覗くとそこは博麗神社を映していた。各個の部屋、外の風景。まるでそれは監視カメラのよう。

そこに映るのは2つの影。

風間と霊夢だ。

外で元気に走りまわっている。



「これは酷い」

思わず地に手を付く。

「『アレ』をどうにかしなければならぬ。でも、隔離すると暴走するという厄介なモノがあるわ」

「じゃ、じゃあどうすればいいんですか」

文が尋ねると静かに首を振る。

「『アレ』が元に戻るの話によれば24時間。こちらがアレと霊夢を隔離すれば確実に暴れる。なら、霊夢を信じて24時間すぎるのを待つしかないわ」

「それ、しかないじゃろ。もし危なくなったら我らが押さえれば良い」

悔しく唇を噛んで晴明は呻く。

「永琳が新しく解除薬みたいのを作ればいいんじゃないのか？」

「少なくとも、24時間以上はかかるって言っていたわ。なら、薬が切れるのを待ったほうが得策よ」

紫は息を吐く。

そうして皆を見渡した。

それぞれが顔に真剣さを帯びており、事の重要さがそれに物語っている。

「私たちにできることは、信じて待つだけよ」

かくして静かなる戦いは始まった。約2名を置いて。



「か、風間さん。近いつて！」

「いいじゃないか、霊夢。君と俺の仲だろ。ほら、あーん」

正午。風間が惚れ薬に目覚めてから、執拗に霊夢にピタリと付き、時折激しくスキンシップしたり、静かに見つめたり、色々な反応を霊夢に見せつつ片時も霊夢から離れずにいた。

「じ、自分で食べれるわよ……」

「ほら、俺がお前に食べさせたいんだ。……言わせんなよ、恥ずかしい」

『パルパルパル……』

スキマからそんな全貌が見られていたとも知らずに、2人はピタリとくっつく。

「じゃ、じゃあいただくわね」

「おう、俺が作ったから間違いなく美味いぜ」

箸を口元へ持っていき、それを霊夢に食べさせてやる。ちゃんとこぼれないように手も添えて。

「どうだ？美味しいだろ？」

「お、おいしい……！」

その味に霊夢は驚く。料理は出来ると聞かされていたがまさかここまで美味しいとは思っていなかった。不意打ちのようなモノを食べさせられてつい本音を出してしまう。

「そうか、よかったよ」

微笑み霊夢を見る。

思わず、その笑顔に呆け、霊夢は慌てて首を振った。

「ふ、ふん！まあまあね！」

『ぐおおおお！おのれっ！風間の手料理をつ！』

『くっ、彼の料理は確かに美味しいが、アレは私だけのっ！』

『てか、なんで霊夢はまんざらでもないのよ！』

『……………いいな』

晴明が悶え、卑弥呼が怒り、紫が立ち上がる。そして咲夜がぼそりと呟く。

「俺さ、最近考えたんだけどさ」

「なに？」

食事も終わり縁側で風間が飲むお茶を飲んでいると静かに風間が語り始めた。

訝しげに見ると、空を仰いでいる。

そして、ポツリと呟く。

「幻想郷で結婚する場合ってさ、なんかの婚姻届とか必要なのかな？ 籍とかも入れるのかな、と……」

ブツ！

思いつきりお茶を吹き飛ばした。中身と共に。

「あ、あんたねえ！何言ってるのよー！」

「……何をそんなに怒っているんだい？」

「な、何をつて……！そ、そんなのまだ早いつて言うか、だ、誰がアンタなんかと……！！」

風間はニヤリと笑ってみせて霊夢に顔を近づかせる。

「誰も、お前と、なんて言っていないぜ？」

「……！！」

『ぐおおおおおおおおおおおおお……！！』

バンバンっ！

地を叩く者、傘を振り回す者、壁を叩き壊す者。

まさに死屍累々

魔理沙は思った。風間より、お前らのほうが危ないんじゃないのかと。

「あ、アンタねえ！いい加減に……っ！」

霊夢が札を取り出し、そうして腕を振り上げる。だが、それが振り下ろす前に風間が動いた。

まるで見えない、瞬間の速さ。腕を抑え、あっという間に押し倒す。

「素直になれよ。お前はもう俺のモノだぜ？」

「あ……………」



魔理沙は再び思う。

やっぱり、お前の方が怖いぜ……。





43話「宴会！死屍累々」（後書き）

もうすぐ300万！

300万いったら皆さんとスカイプで話しながら飲みながら、放送しようと思います。

#### 44話「ジャッカル」

異変も終わり、宴会も終わり、そうしてまた平和的な日常が訪れた幻想郷は酷くのんびりとした雰囲気の流れていた。

だが、何時、何処で、誰がまた騒ぎ立てるかわからないこのご時世。

落ち着く雰囲気はまるでない者も存在する。

言う事なかれ、風間である。

彼が住む家　と小屋と言ったほうが正しいのかもしれないような、小さな家。

森の中にあり、ちょっとしたツリーハウス状態までに改良したこの家を訪れる者によってそれは発見された。

家の名前に札が張っており、こう書かれている。

妙に達筆な字で、少し悲しいような形を取って。

『探さないでください』、と。

「そう……今日の俺はジャツカル。群れを知らない一匹狼……ジャツカル・ザ・風間だ……」

言葉にして虚無。虚無にして無心。無心にして、虚空を見つめる  
双眸は酷く疲れた目をしていた。

月夜の夜で、大量に積み上がった妖怪たち（スペルカードルールでボコボコされた者たち）の上で片膝を立てて一人呟く風間は疲れた目で周りを見渡した。

ここは何処だろうか。気がついたら此処にいた。

幻想郷の何処か、ナノだろうけれども。

「ふ……今の俺には関係のないこと」

孤高の狼を演じて彼は手に持つ酒をクイツと傾ける。

「ああ……月見酒が美味い。君もそう思わないかい？妖精たちよ……」

何事かと様子を見に来た妖精は言葉を投げかけられて顔を引きつらせて怯える。そして皆一様に思う。

うわぁ……こいつ頭、可らしいぞ……。

「そう、そうだ。俺に近づかないほうがいい。今宵の俺はジャッカル。獲物を喰らう狼。女の子は大人しく」

女の子。

「お、大人しく」

女の子。

「おとなしく」

歯切れ悪く、そうして思考が勝手にあの光景を思い出させる。

霊夢の顔が近くに。

……。



怪が風間を襲うとするのだがソニックブームによって撃沈。彼が通った後には死体しか残さない。

大分奥地を翔んでいるのが幸いしているのか、人里など幻想郷の要所を破壊されていないだけまだマシか。

だがしかし、危険な事には代わりないようで。

当然、それを止めようとするものが現れる。

風間が神速で翔けるその体に何か絡みついた。

気がついたのは一瞬。その一瞬肉が食い込むような感覚が襲って風間は円を描いて停止した。

「あら、利口ね」

言葉が降って、何かが空を翔けた。その数は4。小さい人形が3に女が1。手際良く囲んで糸が絡む。

気がつけば、一瞬で束縛されていた。

「周りを考えずに走り回るから、どんな馬鹿かと思っただけれども。思ったより頭が回るのね」

声がして、そいつを目視する。

金髪にカチューシャ。短いポンチヨのようなものに青のロングスカート。両手には操り人形。マリオネットの道具をはめてそこから糸が垂れている。

つまり、周りを囲んだこの人形たちを操っているのはこの娘か。

だが、ただの人形ではない。魔力が通っていてその手にはランスや剣など様々。

「ピアノ線だから、そのまま進めば貴方の体はバラバラだったわよ」  
やはり、か。

「何があつたか知らないけど、アンタがあんな飛び方するから私の試作品が」

「ふふ……そんなモノで俺を縛り上げる事できるか？」

彼女は眉を顰めた。そうして、その目が驚愕の瞳に変わる。

風が、彼の周りに風が集まった。見るからに荒々しい風は人形を吹き飛ばし、そしてピアノ線を引きちぎる。

そんな馬鹿な事があるだろうか。

ピアノ線は線の中ではかなり強度が高い方である。

慌てて変えの糸を人形たちに繋げて金髪の少女は下がった。

この風　まさか！

「俺は縛らなれない、縛ることができない男だ。よく覚えておけ」



「貴方、もしや」

その言葉に風間はニヒルに笑う。

「俺の名前は風間……ジャッカル・ザ・風間だ！」

「……」

「……」

「風間大介です。はい。ただの風神です」

……俺もいよいよ末期らしい。



います！日にちはそつだなあ 9月23日夜の9時！

<http://nicovideo.jp/community/co1295927>

ニコ生

スカイプID huge\_tu217

このためにつくった別垢なのでよろしく！

追記：コンタクトについての質問ができました。いつでも送って結構です

番外「花火だ！恋だ！宴会だ！」（前書き）

入賞作品2つ

番外「花火だ！恋だ！宴会だ！」

幻想郷では宴会が頻繁に開かれる。

なにせ、鬼を始めとした騒ぐ事を大好物とする妖怪たちが、事あるごとに博麗神社に集結するのだ。

異変が終われば

満月になれば

年が終われば

年が始まれば

特に何も無いけどそういう気分だから

それはもう頻繁に集まる妖怪たちに比例して、もはやこじ付けと言つていい理由で宴会は開かれる。

そんな宴会に幻想郷で唯一の花火職人である俺は仕事で呼ばれることが多い。

正直、出席者の8割が幻想郷に名を轟かせる妖怪で占められているこの宴会に、ただの人間である俺が行くのは少々荷が重い話だ。

火薬に靈力を混ぜて作るという独特の製法を受け継いでるため俺は多少靈力を扱うことが出来るが、それでも彼女たちから自然と漏れ出す妖力は一緒にいるだけでも俺を息苦しくさせるには十分。

俺がそれを我慢してまで必ず宴会に出席するのは、この宴会が俺の最大の収入源になるから、というのもあるが一番の理由は別にある。かなり俗な理由になるが、俺が必ず出席する理由。それはとある女性に会いたいからだ。

花を操る程度の能力 を持つ花妖怪。名前を風見幽香さん。

幻想郷に住む者なら殆どが知っている大妖怪。そんな風見さんに、俺は恋をしている。

始めて出会ったのは俺がまだ修行時代の頃、花の明確なイメージを

掴むために、幻想郷で最も美しいとされる彼女の花畑に足を運んだことがきっかけ。

花火を作る程度の能力 と 花を操る程度の能力  
『方法こそ違うが、花を咲かせることには変わりない』

そう言っただけで風見さんは花を見に来た俺を迷惑そうに見ることはあつたが、他の妖怪たち対してする様に有無も言わずに力尽くで追い返すような事はせず、それを都合よく無言の了承と勝手に解釈した俺は、これ幸いと毎日の様に花畑に通った。

たったこれだけの事だ。風見さんからしても、恋をした張本人である俺自身としても些細な事。

風見さんは俺を居ないものように振る舞い、花火の事しか考えていなかった当時の俺は、風見さんなんて眼中に無いとばかりに花の観察だけをしていたものだ。

何度も通ううちにどの花が花火に一番合うのかと議論することはあったが、それを除くと彼女と会話したことなんて殆ど無かった。

ただどいつからか、ふと気付けば花に水をやる彼女を目で追うようになっていた

いつの間にか花を見に行くよりも、彼女に会うことを目的にしている事に気づいた

彼女が俺の花火を初めて見て『まるでなっていない』と酷評した時、いつか彼女に笑顔を浮かばせてやろうと心に決めた。

念願叶って彼女が初めて『悪くは無いわね』と笑顔で言ってくれた時、俺は彼女のためだけに花火を上げたいと思った。

いつからだろうか、彼女が花に向けるときの微笑みを自分にも向けて欲しいと願ったのは

いつからだろうか、俺がこの感情が恋だということに気づいたのは恋をしたきっかけなんて分からない。言うなれば、彼女に会ったこ

とがきっかけだ。

彼女のどこに恋をしたのかも分からない。でも彼女に恋していることだけははっきりと分かった。

そして、自分の恋心に気づいた時、俺は気づいてしまった。

俺と彼女の間にある大きな壁を。

種族も違えば寿命も違う。何もかもが違う。僅かに似通っているところがあるとすれば、それは肉体の構造くらい。

彼女は強く、美しかったが、それに比べ俺はどこまでも凡庸で平凡な人間だった。

そんな、何もかもが違う俺に彼女が振り向くわけがないのだ、とどうせ叶わないのなら、と

他の参加者と酒を飲みながら楽しげに話す風見さんを見るだけで満足なのだ、と

臆病な俺は彼女に想いを伝える事を諦め、胸に仕舞った。

しかし、この想いは俺の矮小な胸に仕舞って置けるほど小さな物ではなく、大人しい物でもなかった。

彼女を想う度に心は荒れ、顔を見るたびに想いは募っていく。

彼女にこの気持ちを伝えたいという思いと、伝えることを恐怖する矛盾した心が俺の胸をきつく締め上げる。

それでも結局、彼女に直接想いを伝える事は出来なかった。

その代わりに俺は、気持ちを抑えつけるためにこの想いを花火に載せて打ち上げた。

俺の想いは夜空を埋め尽くすほど大きいものだということを彼女に伝えるために。

俺の想いが山を越えても聞こえる程轟いている事を知らせるため。

想いを靈力に込め、想いを火薬に混ぜ、想いを玉に載せて打ち上げ



る。想いを伝え、抑えるために

俺は今日も打ち上げる。花火ではなく想いを。気づく筈の無いこの  
遠回りな方法で。何十何百何千と

故に俺は打ち上げる。遠回りでもこの想いが彼女に届くまで。何百  
何千何万と

届かなくても打ち上げる。これ 花 が、俺と彼女との間にある唯  
一の繋がりなのだから

叶わなくても打ち上げる。それが臆病で不器用な俺に出来る、たっ  
た一つの伝達手段なのだから

俺は今日も打ち上げる

俺の想い 花 を見た時に、彼女が笑ってくれるように。

自分で考え作った花に、愛しい彼女の名前を付けて、花言葉まで考  
えて

今日も夜空に花を咲かす

『貴方は誰より美しい』と

作者名 クロ様

（；、（ ゆづかりん可愛いよゆづかりん。

「明日、祭りをやるわよ！」

突拍子もなしにそう言われ面食らってしまったのは、つい昨日の出来事だ。

私、伝統の幻想ブン屋こと射命丸文は、只今妖怪の山上空を滑空中だ。

何故かと問われれば、出来の悪い部下を訪ねに、と答えようか。

昨日のことを改めて思い出してみる。

昨日私は文々。新聞のネタに困っていた。締め切りも近づきこのままでは拙いと思い、藁にもすがる思いで博麗神社の巫女を訪ねることにした。

あそこは神社のくせして妖怪の溜まり場となりつつあるので、何か

面白いネタの一つでも持っているだろうと思いついた為だ。それと、最近行ってなかったし自分の顔を忘れられても困るから、というのも理由に加えておこう。

そんなことを考えながら巫女の下に訪れるや否や、先ほどの言葉を言われたのだ。

どうということなのか聞いてみると、巫女曰く先日妖怪の賢者に外の世界の祭りについて聞かされたそうだ。

その内容に酷く関心を持った巫女はそれに参加したいと思ったが、仮にも博麗の巫女という立場でホイホイと結界の外に出て行くわけにもいかない。

ならば逆転の発想で幻想郷内で行えばいいではないか。そう考えての先ほどの発言というわけだ。

明日とは少々急すぎやしませんか？ と問い質してみると、既に人里の人間や主な妖怪たちには連絡済であるとのこと。そして、もう準備も完了して後は明日を待つだけだと言うことも聞いた。

何故妖怪の山には連絡してくれないのかと問い詰めれば、妖怪の山自体には連絡はしたが天狗にだけはしなかったそうだ。

その言葉に非常に遺憾を感じたので抗議したら『天狗が祭りみたいな浮ついた行事に参加する訳ないでしょうが』と言われ、何も言えなくなってしまうた。

せめて私にだけでも先に言っておいてくれたら良かったのに。

まあそんな訳で、祭りのことと新聞のネタについて粗方聞き終えた後神社を飛び立った後、私は自宅で新聞づくりに励んでいた。

そして先ほどようやく新聞を作り終えた所で祭りの話を思い出し、たまには純粹な『楽しむ側』として参加するのもいいかな、と思い今に至るといふわけだ。

何故椛を誘おうとするのか？ まあ出来の悪いあの子ですが、仕事自体には真面目に取り組んでいるのでたまにはこういう行事に誘ってあげるのも上司の役目と思ったわけですよ。私ったら本当に上司の鑑ですね。

決して一人で行くのが寂しかった訳じゃありませんよ。ええ。

家を飛び立って数分、眼下に広がる樹海の中にポツンと開けている場所が見えてきた。

そこに降り立った私を出迎えたのは、哨戒天狗如きには過ぎたものと言える、立派なコテージだ。

家の外観から中までほぼ全てが木材で作られた家こそが、私の部下である犬走椛の宅である。

ちなみにこの宅は親友の河童に作ってもらったそうだ。羨ましい奴め。

生意気にも来訪者を玄関まで案内するように取り付けられている階段を上り、扉を拳でコンコンと2回ノックする。

椛は今日哨戒の任務は休みのはずだから、居るとしたら自宅か人間を盟友と呼ぶ河童の少女の所だろう。

私はそうアタリをつけ、まず先に距離的に近いここにやってきたのだ。

「はい、今開けます！」

少し待つと、家の中から声が聞こえる。

良かった。今日は運良くこちらにいてくれたようだ。

ギィイ、と軋む音を響かせながら扉を開けた椛は、私の顔を見て呆けるような表情になる。

「…文様？ これはまた珍しい、どうされたのですか？」

「いえ、ちよつとね。椛、貴女今日非番でしょう？」

「はぁ……」

話が見えてこない、と首を傾げる椛に、小動物的な愛らしさを感じてしまった自分を内心で諫めながら、口を開いた。

「一緒にお祭りに行きませんか？」

日は既に落ち夜が周囲を包んでいるが、人里はいつも通りの、いや

それ以上の熱気に包まれていた。

人里の真ん中をぶち抜く大通りの両端には出店がズラツと並んでいて、その一つ一つに人間や妖怪がこった返していた。

出店の種類や質は外の世界のそれと何ら遜色はなく、お面屋には外の世界のキャラクターを模したお面が売られているほどであった。

そんな熱気と人氣が飽和状態のここに、烏天狗特有の黒い羽をたなびかせながら降り立つ。

私が地面に足をつけて数秒もしない内に、横に椀が降り立った。

「ほえ……。随分と賑やかですねえ」

「これでも外の世界と比べたらまだ小さい規模な方らしいですけどね」

キラキラと目を輝かせる椀に、巫女づてに聞いた情報を披露しながら嘆息。

私が誘ったときはあまり乗り気じゃなかった癖して、いざ来てみればブンブンと尻尾振って……全く調子の良いことで。

まあだけど、その気持ちが分からないわけでもない。私だって今日ぐらいはハメを外したいと思っっている。

今日は伝統の幻想ブン屋ではなく、射命丸文としてただ純粹に遊びに来ただけなのだから。

そういうわけで、ここで突っ立って時間を浪費するのも惜しいので、早速行動を開始することにしよう。

「さて、それじゃあ何処から回りましようか？」

「あ、文様！ あの『りんご飴』というものを食べてみたいです！」

間髪いれずそう返す椀に、少しばかり驚いてしまう。

椀はお祭りごととか、そういう行事に対して余り積極的ではない印象を持っていたのだ。

現に、前に天狗総員参加の酒宴にも渋々出席していたようだったし。酒好きの天狗にしては、椀のようなタイプはハッキリ言ってかなり珍しいため、けっこう強く印象に残っていた。

しかし今の椀はどうだろう。目を期待で輝かせながら私の服をグイグイ引つ張って早く早くと促す様子を見ると、今日という日を心待ちにしていた子供にしか見えない。

そんな部下のギャップに苦笑しながら、椀に引つ張られ屋台へと連れて行かれる。

「店主！ りんご飴を一つください！」

「はいよ！ 300円ね！」

値段を聞いて、財布を出そうと懐をゴソゴソと探る椀だが「あつ」と声を漏らした。どうしたのだろうか。

「……………財布、持ってきてなかった……………」

あああ……………と肩を落とす椀。そんなにりんご飴が欲しかったのだろうか。

……………まあ、私だって人並みの良心は持ち合わせているつもりですし、たまにはいいでしょう。

状況が飲み込めず頭上にハテナマークを浮かべる店主に椀は謝罪の言葉を言おうとするが、それを遮る。

「300円ですね？」

自分の財布を取り出し、硬貨を三枚店主の手のひらに。

「毎度！」という声とともに差し出されるりんご飴を受け取って、それを椀に渡してやる。

「あ、あの、文様……………」

「皆まで言わないでください。何時もならツケにして後で返してもらうところですが、今日ぐらいは金銭沙汰で気分を悪くしたくないでしょう。」



わたふたと慌てる椀の弁明を途中で遮る。この子は何事も真面目に捉えすぎる節があるから、今の貸しも明日辺りには必ず返そうとするだろう。

だがこんな祭りという楽しむべき日に、金絡みのことで椀の内心を煩わせることもないし、私自身そのことを気にしてしまうだろうし、そうなるともう今日という日を心から楽しめなくなってしまうだろう。

私としてもそんなことは望んでないし、一応上司として椀にも祭りをしっかり楽しんでほしいという気持ちも少なからずある。だから今日ぐらいは、模範的な上司を演じてもいいだろう。

「で、でも……」

「いいですか椀。これは決して貴女のためではなく、私自身がやりたくてやってることです。貴女は全く、全然気にする必要はありません。いいですね」

「……………はい」

少し強目の口調で、椀に言い聞かせる。これぐらい言っておかないと、頑として譲らなそうだから。

私がそう言った後の、間を置いてからの椀の微笑みが、少しだけ気に食わなかったけど。

「さ、次は私が行きたいところに付き合ってもらいますよ。まずは射的というものをしてみたいですね」

「あ、待ってください文様！」

何だかその場にいられなくなって、早々に次の場所に移動する。  
ずっとあそこにいると、椀にからかわれそうだったし、射的という  
ものをしてみたいのも事実だし。

「……………ありがとうございます、文様」

だから、その声を私は聞かなかったことにした。

「わふー、楽しかったですねー！」

「……ええ、そうですね」

あれから数時間が経ち、大体の出店を回り終えて妖怪の山の麓  
ふもと

に帰ってきての第一声がこれだ。

大層ご満悦そうな椀の手首には水風船と金魚の入った袋、手には「  
祭」と書かれた団扇  
うちわ

とわたあめが握られていた。

頭には外で流行っているキャラクターのお面をつけている。

もう見た目は初めての祭りで浮かれすぎた子供にしか見えない。こ  
れが実はウン十年生きた気高き白狼天狗だと思つと、何だか泣けて  
くる。

「あれ、文様どうしたのですか？」

「……いや、なんでもないです」

対して私自身は射的と輪投げをやったぐらい。

一応商品である饅頭と団扇は手に入れられたのだが、両方とも別に  
欲しいと思えるものでは無かったから椀にあげた。

それでもかなり喜んでいたので、まあ良かったかなとは思つ。

だが椀が色々な物を買って重くなった分、私の財布は結構軽くなっ  
てしまった。

しばらくは茶屋には通えないなあ、とほろり。

「さて文様、もう帰りましょうか？」

そんな私の事情も知らず、そんな私の事情を作り上げたにも関わら  
ずそう問いかける部下にふつふつと怒りが沸く。

…まあ今日の金銭問題は私が受け持つと言ってしまった手前、その  
怒りは理不尽なものだけけれど。

「いえ、まだ帰ってはいけませんよ椀。今から祭りの最後を彩るビ  
ッグイベントがあるそうですから」

「最後を彩る…ですか？」

自信満々にそう言ったものの、実は私も何をするのかは知らない。  
巫女に聞いてみたが「その時までのお楽しみよ」とかわされてし  
まったし。

正直今の心境は、期待半分不安半分と言ったところだ。

「そのびっぐいべんとって、何処でやるんですか？」

「さあ…。私も『空が見えるところにいればいい』と言われただけ  
ですし…」

今私たちがいる妖怪の麓には木が少ないので、空の見渡しは抜群だ。

「空……ですか？」

「そうらしいけど……」

と、私の言葉を遮りいきなり響いてきた発砲音らしき音に、思わず肩を震わせる。

「な、なんですか？」

「あ、文様あれ！」

椀の指差す方を見ると、何か煙の尾を引きながら空へと舞い上がっていくのが見えた。  
それが完全に見えなくなっただかと思うと

空に、大きい花が咲いた。

「綺麗……」

意図せず口から漏れた言葉が、全てを物語っていた。

次々と空に咲く、色とりどりの花を表現する言葉を、私はそれ以外  
思いつかなかった。

赤く咲く花、青く咲く花、緑と黄が交じりあった花、ただ輝く花。  
そのどれもが一つ一つ違う魅力を持っていて、私の心を満たしてい  
く。

幻想郷の空を美しく彩る花火の様子は、まさに幻想的と呼ぶに相応  
しかった。

何も喋らずにそれに見惚れていると、ふと右手に感触が。

視線を下げれば、誰かに手を握られているではないか。……まあ、  
ここには二人しか居ないわけだが。

今度は視線を上にと上げると、そっぽ向いて顔を真っ赤にする部下の  
姿が。

……なんというか、自分から手を握ったのにその反応はどうなのだ  
ろうか？

だがまあ、そんな反応をすれば悪戯し返したくなるのは当然な反応なわけで。

お返しだと言わんばかりに手にギュッと力を込めてやれば、耳と尻尾をピンと立たせて、湯気が出るんじゃないかというぐらいに顔を真っ赤にさせる愛しの部下。

なんて可愛いんだろう、この子は。

自分でも意図せず更にギュッと、強く手を握り締める。

どうか、この時間が永遠に続きますように

空を埋め尽くす花火を見ながら、そう願った。

作者名 木下文様

( \* ' 、 ) ハアハア

百合だとお……

どれも良い作品でした、今回はこの2作品を紹介させてもらいました。

投稿していただいた皆様ありがとうございました。



番外「花火だ！恋だ！宴会だ！」（後書き）

300万記念放送。皆でスカイプ繋いでワイワイやる予定です。

そこで、合計2枠やる予定ですが、その枠の1コメを取った人に何かしたいと思います。

1 WM1000円

2 ご希望の短編執筆。

どちらになるかは私の気分次第。では、皆様よろしくお願いします。

以下URL

<http://com.nicovideo.jp/community/co1295927>

45話「アリス・マーガトロイド」(前書き)

遅れて申し訳ない！

## 45話「アリス・マーガトロイド」

「……なるほど、だからあんな奇行をしていたと」

「……」

魔法の森。その場所に彼女家があった。小さな家であるが、しっかりとしたものであり家の中もキッチンと整理されていた。大量の人数がキッチンと整理されて置かれている所に不気味さを感じるが。

いつの間にか魔法の森の上空を通過していたのか。

金髪の彼女の名前はアリス・マーガリンというらしい。

「マーガトロイドよ」

……。

「それにしても、惚れ薬ねえ」

「ああ、困ったもんだよ」

惚れ薬に関しては一種の悪魔の薬とも言われるだろう。人の事を強制的にホレさせる薬というのは洗脳のそれに正しく、最も危険な薬の1つ。

誰かが惚れ薬がほしいと言った事がある。

昔の話。まだ転生する前、人間だった話の事だ。

惚れ薬があれば、女に苦勞することは無いのに。でも、よく考えて欲しい。人の事が好きになる惚れ薬で相手を洗脳したとしてその後の事を考えた事はあるだろうか？

その人だけしか考えずそれ意外のことはにどうでもよくなる。毎日、ピタリとくっついて誰もがそれでも良いと考えるか？

いつ、どんな時、どんな場所でもピタリとくっついて愛の言葉を囁くとしてその人を好きになれるか？

大概がウザイと感じられるだろう。

「薬師も何を作っているんだか」

「幻想郷の連中は常識というものが無いのか」

だから、風間はため息をつくしか無い。なにせ相手としては面白半分　つまり暇を潰す事しか考えないのだから。

暇ほど毒なものはない。

ことわざの1つにもあるように、妖怪として、或いは長く生きてきた者にとっての暇というのは一種の拷問なのだ。

風間がそうしてきたように、彼女たちもまたその暇を潰そうとあらゆる事をする。

だから幻想郷では異変が起こるし、誰かが事を起こすのだ。

「まあ、連中も悪気はないからな、なんとも言えないし。そもそも薬程度に負ける俺が悪い」

その言葉にアリスは呆れたようにため息を吐いた。

「薬程度って……相手は天才の薬師なんだからね」

薬師　八意永琳の能力はあらゆる薬を作る程度の能力。どんな薬でも創りだしてしまう恐ろしい能力の筈だ。

もちろん、それなりに材料も必要になるし作る時間を必要だ。

「八意永琳……か。確かにアイツの作る薬なら負けても仕方ないかな？」

ちよつと微笑む彼にアリスは心底阿呆だとため息を吐いた。

「仕方ないって……まあいいわ。折角きたのだからお茶くらい飲んで話相手でもしていきなさい」

そう言うつとアリスの手が動いて人形が動きだした。

話相手でもしていきなさいって……。

なんだかあまり聞かない日本語に風間は苦笑する。

どうして、幻想郷の女の人って基本マイペースって言うか、自由奔放というか。

「私も丁度暇しているのよ。誰かさんに人形を吹っ飛ばされたせいでね」

「……す、すいません」

結局頭を下げることはできなかった。

「へえ、それで現況に……」

面白い話を聞かせろと言うものだから、自身が体験してきた事を聞かせた。自分の体験談なんてあまり面白くもなさそうであるが、案外気に入ってくれたようで興味津々と言った感じで聞いてくれた。

時折挟まれる質問を返しながら昔を語る。こういつふうに誰かに昔を語るのは咲夜以来だったか。

「ふう……」

一息を吐く。

紅茶を喉に通して風間は改めて周りを見渡した。

数多の人形の数々。日本人形から西洋のモノまで、はたまた手作り人形の類いのモノもあるし、パペットの器具やその人形もある。

「アンタは 魔法使いなんだよな？」

「ええ、そうよ」

「魔理沙とは、違うのか？」

「……私は種族が魔法使いなの。アイツは種族が人間で職業が魔法使い」

魔法使いが種族？

聞かない言葉に風間は少し首を傾げた。

「魔族、なんて言われた事もあるわね。まあ呼び方なんてそれぞれよ」

魔族……。

ああ、『魔法を使う種族』で魔族か。

やっぱりこの幻想郷には色々なモノが居るのか、と再認識した時でもあった。概ね幻想郷には妖怪と人しかいないとものだと思っていた。

いや、彼女も大きく分ければ妖怪の部類なのか。

「しかし、魔法使いつて者はもっとこう……怪しげな薬品やら人を殺せそうな分厚い本に囲まれているものかと……」

再度周りを見渡す。

人形が大量に置かれている他は普通である。本棚は1つしかなくシンプルな部屋造りになっている。

人形が大量に置いてある事に関しては確かに不気味というモノがあるが、それでも魔理沙のように青く不気味に光りブツブツと沸騰する薬が置いてあるわけでもなし、紅魔館の図書館に住む魔法使いのように本に囲まれて生きているわけでもない。

人らしく、人ではない。

魔法使いらしく、魔法使ではない。

人形使いと言われればああなるほどと納得できるような。

「魔理沙やパチュリーと一緒にしないで」

何処か疲れたようなため息を吐くアリスは紅茶を喉に通してから口を開く。



「私は、魔法使い。だけでも人形について研究しているのよ」

「研究？」

「完全に自立する人形を作りたいの」

自立人形。

自分の意志で動き、考え行動する人形って事か。人形には魂が宿ると言われている事もあるように不可能ではないだろう。だが、それを造るといふことになるのと些か難しい。

「ああやって家事をする人形は自立人形ではないのか？」

風間が指をさすのは紅茶を運ぶ人形の姿。アリスと同じ金髪に服装までもが酷似している。器用に紅茶を運んで風間の手前にあるカップに注ぐ。

「ええ、これはある程度操ってるの」

これを操っている？

信じられないように見る風間はアリスはクスリと笑った。

「あら、信じられない？」

「……とてもじゃないが、君の指先だって微妙にしか動いていないじゃないか」

微々たる動きでこれを細かく操る？そんな事本当に可能なのか？

「ふふ……お陰で随分と器用になったわ」

アリスが人形を細かく操る事ができることを、面識のある妖怪、人は知っている。人里だつて人形劇をしているモノだからこんな動作は今更なのである。

だが、この男は一々と驚き詳しく人形について尋ねてくれる。

それが面白くてアリスは笑う。

「まるで子供ね……」

「ん？」

「いえ、何でもないわ」

しばらく談笑をし、紅茶を飲みながらゆっくりとした時間を過ごす。そうしてふと窓を除くと辺りはすっかり暗くなっていた。

そろそろお暇しようか。

「あら、もう帰るの？」

「ああ、そつだな夜遅いしいい加減家に帰るとしようかと」

席を立ち、アリスが操る人形に頭をそつと撫でて風間は礼を口にした。

「紅茶、ごちそうさまだったよ」

「こちらこそ、久しぶりに楽しく話が出来たわ」

「んじゃ、『またな』」

「ええ、『またね』」

いつかまた、こうして話でもしましょうか。

「……」

探さないでくださいの張り紙を若干恥ずかしがりながら外す。こんなもんを張ってたんだな。

くしゃくしゃと丸めてポケットに突っ込み風間は流れる動作でドアノブに手を掛けて中に入る。

「ただいまー」

さて、今日はもう遅いし軽く飯を食べて咲夜の所でも。

この後の予定を考えていた思考がピタリと止まった。

『おかえり』

風間は1人暮らしである。人里の外れにある小屋を改造して家にしたものであるが当然中からこうして返事が返ってくることはまずない。

ただいま、と口にしたのは長年の習慣であるし、いつもは静かで自分の音しか鳴らさない。

そう、返事が返ってくる筈がない。

「……」

そうして歩みを進めて、風間は息を吐いた。もちろん、ため息である。

「なんでお前らが此処にいるんだよ……」

10畳の部屋にテーブルを囲んで座っていたのは紫、幽々子、幽香の3人であった。

45話「アリス・マーガトロイド」(後書き)

これはもうジャンピング焼き土下座をするしかないな。

46話「異変の朝」(前書き)

ソロモンよ、私は返ってきたあああああ！

## 46話「異変の朝」

ああ、つまらない。全く持ってつまらない。

少女がつぶやいて跳ねる。蒼天のような髪がヒラリと舞う。

毎日が退屈。私はこんなにも刺激を求めているのに、何故誰も私と遊んでくれないのかしら？

スカートが回り、少女も回る。その手に桃を携え、もう片方の手には光る剣を携えて。

唄も踊りも良いけれど、もっと刺激あるものが欲しい、この体を存分に使いたい。

そして少女はピタリと止まって見下ろす。

誰かが言った、下界には低能な妖怪と人間が暮らし、そして【異変】を起こしてその暇を潰している。

誰かが言った、この幻想郷には弾幕ごっこなるものがあって、それに沿って人間と妖怪は暇を潰しているのだと。

死神を追い払うために使う力ではなく、遊ぶために使う力。



あら、楽しそう。

クスクスと笑って、少女はその剣を突き立てて右手に持つ桃をかじる。いつも変わらぬ味。だけど、微かに甘い。

「私を、楽しませてくれるかしら？」

蒼天の髪少女は緋に染まる剣を手にし、想い、天から見下ろす。

頭がガンガンする。

風間は人里へと降りる道を歩きながら頭を叩いた。

昨夜、アポもなしにいきなり自分の家に乱入してきたと思ったらそのまま徹夜でどんちゃん騒ぎ。途中で卑弥呼と晴明も乱入するものだから、もう大変だった。

幽々子は蓄えた飯を食い尽くし、晴明は酔って泣き続け、卑弥呼は鬱陶しく絡み、幽香は何故か蹴りを入れてくる。紫は秘蔵の酒を飲

みつくす。

何か、俺に恨みでもあるのだろうか。

お陰で大量に買い出しに出かけなければいけないハメに。

ちなみに嫌がらせにきた女衆は帰らせた。飲んだくれだろうが家に泊める気などさらさらない。

酒は決して弱い方ではない、むしろ強いほうだと自分で思う程である。だが、アレだけ飲まされれば二日酔いにならないほうがおかしい。人間であるならば、致死量を超えているだろう。

急性アルコール中毒にかかっても文句を言えないレベルである。

さて、頭の頭痛に悩まされながらも仕事はしないといけない。

買い出しに出かけるのと同時に運搬業の仕事をこなそうとする風間は途中、奇妙な光景を目にした。

……。

先程までお天道様がその輝かしい顔を見せていたのに、いつの間にか雨が降っているのである。

雲の1つもない快晴であるのに、いつの間にか空は鉛色に染まっていた。

「……あ、あれ？」

これほどまでに急激な天候の変化はあり得ない。それだけに風間は驚いた。

そして、同時に思う。

これは異変ではないのかと。

幻想郷に来てからまだ日も浅い。であるがその環境に慣れるのは良い事なのか、幻想郷に至ってはこの異変を【慣れる】事自体間違っているような気がするが。

しかし、急激に天気が変わる異変か。

紅い霧、終わらない夜、神の乱入、咲き続ける花。これまで怒った異変と比べてみてもさほど規模は変わらない。

さて、今回は誰が起こしたのかな？

なんて、軽く考えていざ人里へ降りる。やはり天気は快晴。天気予報として知られる龍の目を見てもそれは変わらず。

しかし、二日酔いの頭が一気に冷めるような出来事を風間は人里の住人から聞く。

博麗神社が倒壊したらしい。

頭痛が引いて、血の気も引く。

「霊夢と紫がマジでキレるぞ。」

あの事件の後なので少し気が引けるが、博麗神社に向かう事にした。

博麗神社の倒壊。それは紫を筆頭とする幻想郷をよく知る妖怪や人からしてみれば事の重大さが大きい事が解る。

幻想郷にはその楽園を保つために大きな結界が施されている。それを支え、そして管理するのが博麗の巫女たちであり、博麗神社はその管理職の住まいと同時に柱であるのだ。

それが倒壊した、ということは幻想郷に軽い危機である事を示す。

案の定、博麗神社に着くと憤怒の表彰を隠しもせず声上げる霊夢がそこに居た。その側に魔理沙が伏している所を見るに一悶着

あつたのだろう。

「よう、霊夢。無事のようだな」

「か、風間さん」

やはり、例の件を引きずっているのか、風間の姿を見た途端に身を引いた。ちよつと傷つくが風間自身それは忘れる事にした。

忘れる事で幸せになる事もあるのだ。

一層のこと、慧音に食ってもらおうかな、俺のダークオブスメモリー黒歴史。

「博麗神社が倒壊したって聞いたのだが……これは酷いな」

見る影もない。無残な残骸を知り目に風間はため息を吐いた。

「え、ええ。コレは異変ね、私の勘がそう告げているわ。犯人を見つけて吊るしあげてやる」

「勘というか、経験だな。んで、早速魔理沙はそのとぼっちりを食らったのか」

「か、風間。すまんが手を貸してくれ」

地に伏す魔理沙に手を貸してやる。相当激しくボコつたらしい。

「会っていきなり弾幕ごっこを挑まれたものだから、私も乗ったがひどい目にあつたぜ」

「自分の物が壊されればそりゃイラつくよな、んで魔理沙に気持ちよく苛立ちをぶつけたわけだ」

「あら、八つ当たりだなんて失礼ね。私は魔理沙を今回の異変の犯人かと思つて挑んだのよ」

犯人は戦つて確かめる。それが相手の都合関係なく。

『斬れば分かります（キリ）』

誰かが頭によぎるが、すぐに散った。あんなに良い子なのに、なぜ通り魔の癖が抜けないのだろうか妖夢は。

「んで、紫は？ここが壊されて黙っていないのは霊夢だけじゃないだろう」

「ああ、なんでもあいつ二日酔いでダウンしてるらしいわよ？式神が態々【やって来て】今回の事は私に任すつて伝言を告げてきたけど」

「……………」

秘蔵の酒は勿論の事、アルコール濃度は高い。それを何十本も開ければそうなるだろう。鬼じゃあるまいし。

だが、妙である。紫の事だアルコール酔いの境界をいじればそれまでなのに。

「裏があるな……………」

「え？」

「いや、なんでもない。それより犯人探しはどうするんだ？」

「勿論、怪しそうな奴を吊るして吐かせるのよ」

「相も変わらずお前は……」

それで何回も異変を解決してるのだから何も云えまい。

#### 46話「異変の朝」(後書き)

気がつけばこのSSも今日で一周年。気楽に始めた小説がこんなにも評価されて1年も経つとは。

一周年だと気がついたのは昨日。慌てて描き上げて今日に投稿。

こんな自己満の作品を最初から応援してくれた人に感謝。  
読んでくれた人に感謝。  
感想をくれた人に感謝。

ありがとう、そしてこれからもよろしく



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4148p/>

---

東方風神記

2011年12月9日02時07分発行